

JUMP

ALTERNATIVE
OFFICE
BOOK 5

MOTOE LABORATORY, TOHOKU UNIVERSITY + OKAMURA WORK DESIGN INSTITUTE.2022

JUMP



TOHOKU UNIVERSITY +
OKAMURA WORK DESIGN
INSTITUTE.2022
MOTOE LABORATORY
ALTERNATIVE OFFICE BOOK 5 JUMP

ALTERNATIVE
OFFICE
BOOK 5

MOTOE LABORATORY, TOHOKU UNIVERSITY + OKAMURA WORK DESIGN INSTITUTE.2022

陸上競技の跳躍種目は4つある。

2022年7月現在、その世界記録は以下の通りである。

走高跳 ハビエル・ソトマヨル 2m45cm 1993年

棒高跳 アルマンド・デュプランティス 6m18cm 2020年

走幅跳 マイク・パウエル 8m95cm 1991年

三段跳 ジョナサン・エドワーズ 18m29cm 1995年

2014年に破られるまで、棒高跳の世界記録は1994年のセルゲイ・ブブカによる6m14cmであった。

いずれの種目も、1990年代の前半から約30年にわたって、更新されることがなかったのである。

この間、身体能力を発揮するメカニズムへの理解が進み、士気管理など競技時の心理的側面への介入手法が開発され、靴やウェアなどの道具の技術革新も劇的に進んだ。だから同じ陸上競技でも、競走種目の世界記録のほとんどは、短距離も長距離も、21世紀に入って更新されている。にもかかわらず、跳躍種目の世界記録は高止まりしたまま更新されないでいる。跳躍種目の世界記録はそれだけ、ヒトという種の究極の状態に迫っているということなのだろう。

跳躍の方向は、前方への助走と上方への踏切の合成によって決まる。1回の踏切で決する走幅跳と、3回踏み切る三段跳とでは、異なるイメージをもって踏み切る必要があるという。三段跳で、最初のホップを走幅跳のように高く上に跳んでしまうと、ステップで「潰れて」しまい、最後にまともなジャンプができなくなるのだそう。だからまず、ホップは低く前に大きく跳ぶように指導される。ステップは速度が落ちないように同じ足で続けて跳ぶ。ジャンプは

J U M P

本江正茂

Masashige Motoe

編集責任者
東北大学大学院
准教授

Executive Editor
Associate Professor
Tohoku University

先の2歩とは違う角度で跳び上がる。

勢いよく走ってきて、タイミング良く踏み切って、運動の方向を一瞬で変化させ、なるべく高く、遠くまで行く。今年は飛躍の年だとか、清水の舞台から跳びおりるとか、結果の変化を求めて大胆に行動様式を変化させることを、私たちは「跳躍」のイメージで捉えている。

ICTが技術的に可能にし、COVID-19が社会的に緊急要請し、全世界で数年間の共通体験として実践し得たりリモートワーク。

政策合意への市民参加から、政策実行のための市民協働を経て、政策立案のための市民共創へ向かうシティーホール。

働き方に急激な変化が起きている。

一回の跳躍だけでできることには限界がある。

連続する、しかし異なる跳躍を、ふさわしい形で踏み切り続けること。

いつもと違うオフィスを考える。テーマは"Jump"である。

序論 令和 OS に向けて跳べ

文：池田晃一

今年は今和 4 年。元号を使うことも少なくなったが、振り返ってみれば令和が始まったのは 2019 年 5 月だから、令和の時代のほとんどは新型コロナウイルス感染症対策下で過ぎていったといえる。外出が制限されたり、公共の場でのマスクの着用が義務付けられたり、飲み会を最後に開いたのはいつだかも分からなくなるような生活。その中で確実に変化したことがある。私たちは分散して生きていく習慣を身につけたのだ。

エッセンシャルワーカーと呼ばれる、現場にいないと行かない職種の人を除き、多くのワーカーがリモートワークで働くことを経験した。大学をはじめとする学校においてもリモート授業が実施された。「リアルでやる？それともリモート？」なんて会話がごく自然なものになり、私たちはモバイルツールやコミュニケーションの手段を手に入れた。完全にリアルではなく、かといって完全にリモートでもない、ハイブリッドな環境に私たちは生きている。

感染症対策というネガティブな要素が原因であったとしても、この変化は不可逆的であり、以前のようなスタイルに戻ることはないだろう。自分の研究の話題に寄せてみれば、オフィスの座席運用に関して特徴的な変化があらわれてきている。

私が働き方の研究を始めてから 20 年、さまざまな場面でオフィスに自席（固定席）は必要か問うアンケートを実施してきた。世間的には ABW(Activity Based Working) といったオフィス内外の多様な場所を使って働くスタイルがトレンドとされていたが、実際にそ

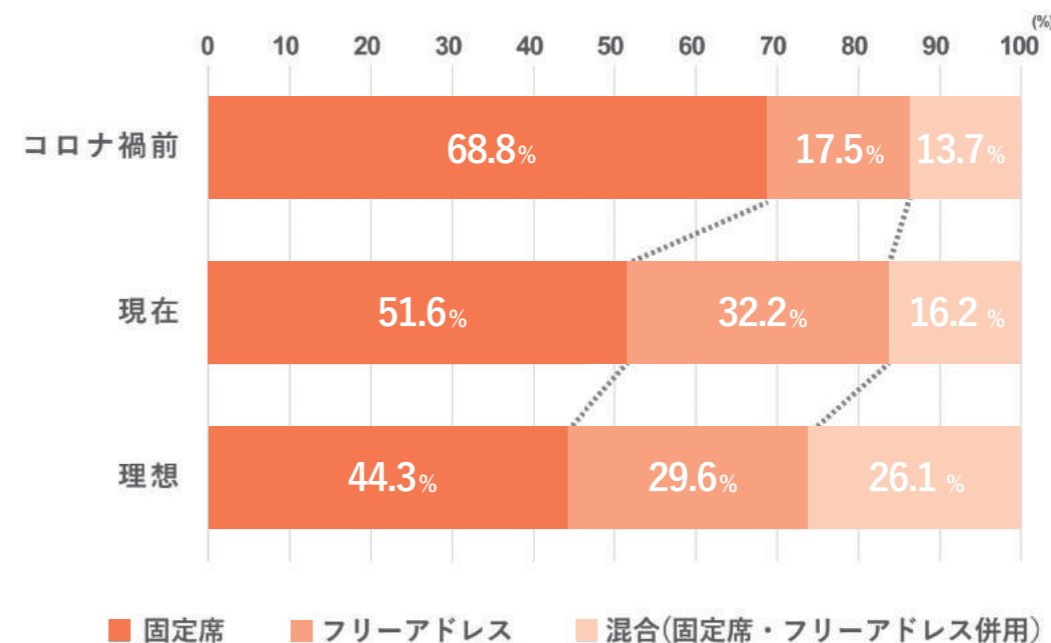
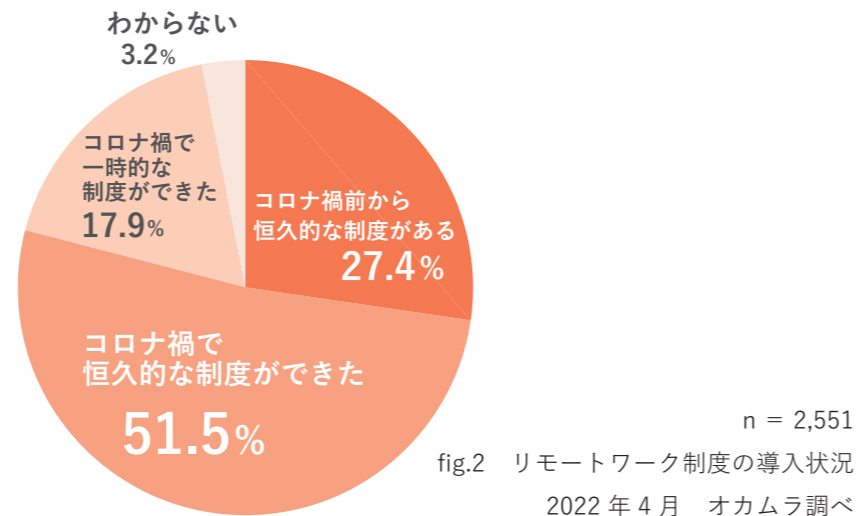


fig.1 オフィスにおける座席運用の過去、現在、理想 2022 年 4 月 オカムラ調べ

うした働き方を採用している企業は 2 割にも満たず、フリーアドレスを採用している企業を合わせても全体の 3 割程度だった。実に 7 割の会社は固定席のオフィスを採用しており、依然その習慣は変化しないだろうという予想を立てていた。

しかし、fig.1 の「現在」をご覧くださいとわかるように、現在は約半数の企業でフリーアドレスを採用、または一部採用するようになってきている。さらに、コロナ禍後の理想の座席運用を聞いたところ、半数以上の人フリーアドレス、もしくは一部フリーアドレスを希望している。これはコロナ禍前では考えられないような大きな変化である。

出典：fig.1 オフィスにおける座席運用の過去、現在、理想 2022 年 4 月 オカムラ調べ



リモートワーク制度の導入状況 (fig.2) について見てみても、コロナ禍を機に恒久的な制度ができたという企業が半数以上となっている。コロナ禍以前から恒久的な制度があった企業と合わせると約8割の企業がリモートワークの制度を備えている。これは実に大きな変化であり、実際に感染症の恐怖が去った後により戻しはあるかもしれないが、リモートワークを禁止するという事には至らないだろう。

この大きな転換点に際し、テクノロジーは私たちにもものすごい力を与えてくれる。離れて働く、離れて学ぶ、それを実現するためのツールが次々と開発され、アップデートされている（最近は知らないうちにアップデートされていることも多い）。インターネットそのものが離れたところにいる人たちと一緒に活動することを目的に開発されたし、その基盤を使いこなすことによって多様な人が多様な状態のまま存在し、交流することができる世界に近づいて行っている。世界は分散する方向に動き出したのだ。

そんな生活の中、いまだに違和感を覚えることがある。「毎日必ず出社しなさい」「リアルな授業でないと伝わらないことがある」「顔が見えている部下の方が評価しやすい」と

いった意見は間違いではないのだろうが古さを感じてしまう。フレックスタイムでラッシュを避けて出社する体験をすると、なんで今まで激混みの電車に乗って普通に通勤していたのかわからなくなる。在宅勤務をすると食事を作ったり、子供の宿題をみたりと勤務時間内に家事や育児が入ってくる。それを厳密に禁止することはナンセンスではないのか。いまだ残る古い価値観とコロナ禍で身につけた新しい価値観が共存している感覚だ。

本書ではそうした価値観の変化や摩擦に対して「跳べ！」と叫ぶ。ちょっとずつすり合わせて、時間が解決するだろうというスタンスではない。大きな変化をとらえて、自分のなりたいたい姿に、自分がやりたいことに、汚く言えば、自分の利益になる方に「跳べ！」と。

コンテンツは2つの柱からなる。ひとつ目は居住地決定に際しての価値観変化に関する研究である。コロナ禍でリモートワークやオンライン授業を経験することで、必ずしも会社や学校の近くに住まなくても働ける / 学べるという意識が生まれたのではないか。会社や学校に縛られないのなら、次に転居するときには今までと違った価値観で居住地を決定するのではないかというのが、その仮説である。

本書では加藤和暢の「空間組織化」論のモデルを下敷きとし、「所得機会」「消費機会」「共同生活機会」という3つの活動バランスによって人は居場所を決定すると仮定。それぞれの活動に対する価値観がコロナ禍前後で変化していないか調査した。

本来であれば、通勤圏内、通学圏内といった条件に縛られず、人は住みたい場所に住むというのが正常な状態だ。もちろん、会社に通いやすいからとか大学に近いからという「通勤」「通学」の価値を重視し、居住地を決定するということもあり得る。ただ、会社や学校に縛られている状況には変化が起こっていないか、それを明らかにするのが目的である。

出典：fig.2 テレワーク制度の導入状況 2022年4月 オカムラ調べ

前後には2本のインタビューを配置してある。1本目では、漫画家の靴下ぬぎ子さんに世界を転々とする人生についてうかがった。ふらっとベルリンに移り住み、アムステルダムに転居、そして次の場所へ。軽快に住む場所を変えていく生き方には憧れを覚える一方、不安や困難はないのかと心配になる。漫画家という職業と合わせて、世界を転々としながら生きてきた今まで、そしてこれからについて語ってもらった。

2本目のインタビューでは、宮城県鳴子でいくつもの仕事を持ちながら暮らしている3名の方にお話をうかがった。自然に恵まれた鳴子で複数の仕事を手掛ける。どれが本業でどれが副業といった感覚でなく、それぞれに一生懸命取り組む。さらに、地域の仕事だけでなく、インターネットを介して都市の仕事を受ける。決して地域に閉じこもらないが、かといって地域をおろそかにしない。「田舎か」「都会か」といった二択では語れない人生がそこにはある。そうしたバランスのととり方はこれから仕事をしていこう、あるいは定年に近づいてきて、新たな生業を探そうとしている人たちのヒントになるはずだ。

もう一つの柱は自治体の庁舎に関する分析である。今までの話の流れからすると若干唐突な気がするが、今、自治体庁舎に大きな変化が求められている。電子化が進み、さまざまな手続きがオンラインで行えるようになってきた際に、自治体庁舎のもつ役割は大きく変化する。銀行のATMが次々と消えていっているように、事務的な窓口業務は機械化され、さらにはオンラインに置き換わる。

しかし、その代わりに自治体に相談しなければ解決しないようなこと、住民が街に対して抱いている思い、地域をよくするためのアイデアなどをくみ上げるといふ本来やらなければいけない業務を減らすわけにはいかないし、そういった業務を増やす方向に変えていかなければいけない。ここには大きな意識の変革「JUMP」が必要だ。

それは自治体の方も十分察知しており、庁舎を新築する、改築する際のプロポーザルにおいては「市民に開かれた」「市民交流空間としての」といった文言が多く盛り込まれて

いる。設計要件に対する回答はどのようにプランに盛り込まれるのだろうか。そして、プランの変遷を受けて竣工した庁舎にはどのような空間が出現しているのだろうか。一番気になるのは、実際に市民交流は起こっているのか。コロナ禍で人が集まりにくい中、全国のプロポーザル内容を分析し、実際に現地調査を行ったうえで自治体庁舎における市民交流の意味と実態を明らかにした。

本書の編集は東北大学（仙台）とオカムラ（東京）で完全リモートの状態で行った。昨年の4号もオンラインで編集したが、だいぶその時よりスムーズに作業ができるようになったと思う。以前から感じてはいたが、出張は大がかりだ。旅行のように行った先でおいしい物を食べたり、土産を買ったりというのは楽しいが、どうしても移動に時間がかかるし、疲れる。この編集作業もリアルで行っていた時は月一、半日かけて仙台で行っていた。それがオンラインになることで毎週1時間半程度行えるようになり、頻度が上がった分、レスポンスも早くなった。ただ、一回もリアルに顔を合わせていない人と「熱気」を感じることができないのには本当に苦勞する。やる気を引き出す、あるいは周りのやる気に促される。頑張っている姿を見る。悩んでいる姿を見る。そういうところからチーム意識が生まれてくるのは間違いない。

まだ、コロナ禍でリモートでの作業が続くのだろうが、私たち自身も新しいコミュニケーション、研究の進め方をつくり出していかなければいけないと思う。それは今までをちょっと変えるだけではなく、ハイブリッドを前提とした新しい研究の在り方、つまり「令和OS」に向けてのジャンプに他ならない。

第1部 暮らしに浸透するリモートワーク	4
1 人生の年表を楽しくする 漫画家 靴下ぬぎ子先生インタビュー	6
2 リモートワークによる価値観変化への議論と分析	21
.1 暮らしの組み立て方 - 住まいと仕事、そして -	22
.2 価値観変化の分析	30
3 働く場所と生業 鳴子温泉もりたびの会 加賀道さん・加賀浩嗣さん・齋藤理さんインタビュー	54
#COLUMN1 私の母はオフィスワーカー時々リモートワーカー	69

contents

1

人生の年表を楽しくする

漫画家 靴下ぬぎ子先生インタビュー

聞き手：濱地峰史

仕事をリモートワークで完結できれば、どこに住んだっていい。東京での仕事を地方の実家からこなしてもいいし、軽井沢の別荘で自然に親しみながらこなしてもいい。

ここ数年でワーケーションという言葉もだいぶ浸透した気がする。だとしたら、長期休暇をもらって海外旅行をしながら、最低限の仕事だけやるのもいいのではないか。ちょっと前は考えもしなかった選択肢が、ちらっと頭をよぎる。

漫画家・靴下ぬぎ子先生は、こんな我々の想像を超える生活をされている。簡単に言うと、超遠隔リモートワーカー。海外を拠点に、リモートワークで日本に向けて漫画を発信されているのだ。

デビュー作の連載終了後に、ふらっとベルリンに移住する。そして再び、ベルリンから日本に向けて、漫画を描く。そして次はアムステルダムへ。周りから見ると、軽やかに、物事に縛られず人生を歩んでいっている気がする。本当にそうだろうか。インタビューでは、海外から日本の仕事をこなすこと、価値観、移住先での体験など、固定観念にとられない、魅力あふれる生活のあり方を先生に語っていただいた。



ふらっと行ったベルリンに住み、
日本に向けて漫画を描く

— 『思えば遠くにオブスクラ』の主人公達は、身軽に海外に移住し、ビザが切れそうになったら、また次の場所に行くといった生活をしていますよね。これは先生ご自身の経験から生み出されているのかと推察します。どこに住むのかは、仕事があるかとか、言葉が通じるかなど様々な条件によって決まると思うのですが、先生の中でそのあたりの価値観はどうなっているのかを知りたくて、お声がけさせていただきました。

この作品は先生の周りの幾人かの体験をもとに描かれている、というインタビューを拝見したのですが、そういった意味では純粋なエッセイ漫画ではなく、あくまで創作物（フィクション）として描かれたんですよね。

靴下 この作品はエッセイと言われることが多くて、確かに私が現地に滞在して経験した内容も多く入ってはいるんですけど、併せて、人から聞いた話や人が見たものから膨らませた話題も多く入っています。

私もこの主人公と一緒に、そんなに確固たる理由なくベルリンに移り住んだんですね。

そんな「気軽に移住する」というスタンスで描かれている、エッセイみたいな海外旅行記、漫画は少ないですし、そんな行動を起こすくらいの雰囲気の人たちを描いてみたかったです。

— 先生がベルリンに移住したきっかけを伺いたいです。

靴下 海外に行く時、例えば駐在員や留学で行くというきっかけがありますよね。でも、それはすごく目標が高いし、「気合い入れて行く」「責任を背負って行く」という人たちが選ぶ理由だと思うんです。

私がベルリンに行くきっかけになったのはそういった強い目的ではありませんでした。当時、フリーランスの人が海外に行くブログの小さなブームがあり、ワーキングホリデーの範囲で行ってみて、そこから考えるという方が多かったんです。

行き先でちゃんとした職業に就くとか、最初から決めなくても、いくつかの小さなハードルさえ乗り越えられれば、自分にもできるんじゃないか、そんな気持ちがありました。たとえ、現地でちゃんと稼がなくても、何も為さない、為すつもりもないでふらっと行っ

て、ふらっと帰ってくるっていうことが、わりとフランクにできるのではないかという思いを抱いていて。

— 他の方の作品になりますが『ニューヨークで考え中』^(*)という作品があって、留学をして、そのままニューヨークに住み続けるという、作者の実体験をつづったエッセイとして描かれています。

それと比べて、『思えば遠くにオブスクラ』は純粋なエッセイではなく、創作物として作られているため、漫画らしく、キャラクターの個性が強まっているように感じました。

靴下 連載の話が進んでいる時にエッセイにしてはどうかという提案もあったけれど、私はストーリー漫画が描きかったんです。主人公のキャラクターを次第に作りこんでいって、その上で相反する性格を持った同居人、また主人公と経歴は似ているけれど、実は性質が真逆の後輩を登場させようとか。ストーリーを考える上でキャラづくりを進めていきました。

— ベルリンには「漫画を描こう」と目的をもって行かれたのですか。

(*)「ニューヨークで考え中」

近藤聡乃著のエッセイ漫画。

著者のニューヨーク在住経験が描かれる。

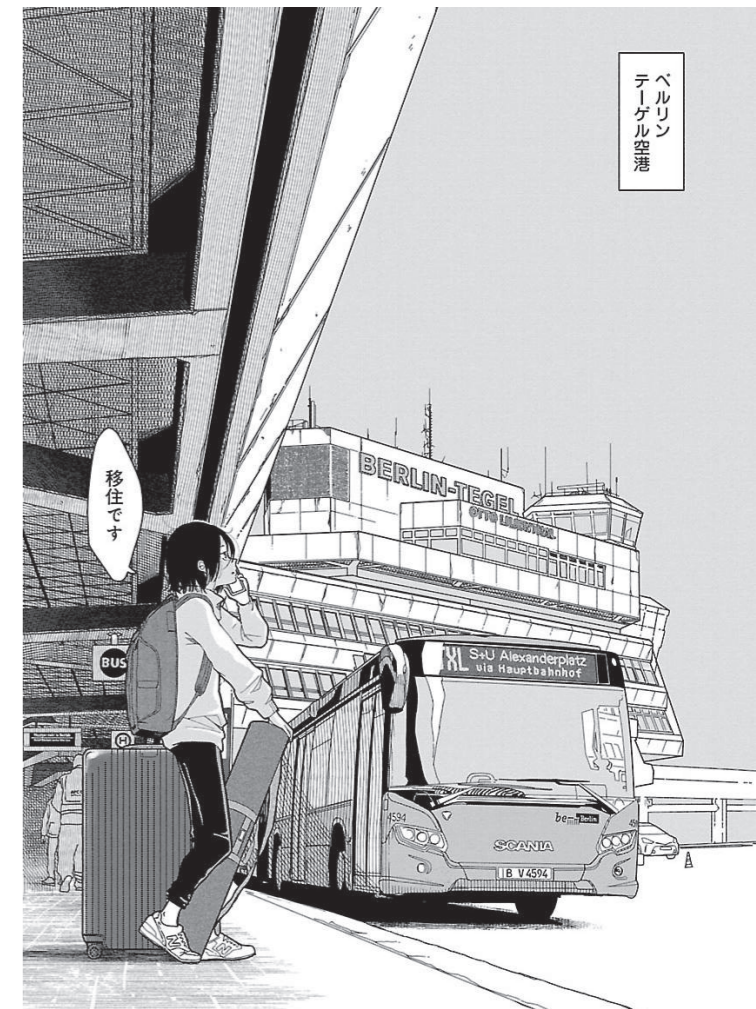


fig.1 『思えば遠くにオブスクラ』より、主人公が移住のため空港に降り立った描写
©靴下ぬぎ子（秋田書店）2021

靴下 ベルリンに移住した当時は、ちょうど前作である『ソワレ学級』の連載が終わったタイミングで、まだ次の作品の話は出ていませんでした。絵コンテの描き起こしをしたり、フリーランスとして収入が得られる仕事をポツポツ受けてという状況で。だから「絶対漫画を描くぞ」って決めて移住したわけではないですね。「まあ、描けたらいいな」っていうくらいの気持ちは持っていましたけど。

— 仕事があるかわからない状態で海外に移住する。少々不安ではありませんでしたか。

靴下 ダメだったら帰ってきてもいいかなと思っていたんで、そんなに不安ではなかったですね。今でもそう思いますし。

— 先生がベルリンへ移り住んだ時は、コロナ禍前なので、今ほどリモートワークは普及していなかったと思うのですが、日本の仕事を海外で行うにあたって、不便さは感じなかったのでしょうか。

靴下 多分、漫画家という職業が特殊なんだと思います。ほかのクリエイターの方は、いろいろな案件ごとにそれぞれの人と打ち合わ

せが発生するみたいですが、漫画家は基本的に、連載を始めたら特定の編集者とガッツリ年単位で仕事をしていくものなので、それほど不便は感じなかったです。元々家でひきこもって描いているので、慣れないところに行っても大丈夫で、移り住んでしまえば外の環境はそんなに関係ないという、そんな職業です。

— 編集者とやりとりをされていて、苦勞したエピソードはありますか。

靴下 苦勞したのは編集さんの方だったのではないかと…。やりとりが深夜や早朝になったり、打ち合わせの時間が限られたりする中で、こちら側の事情を編集さんがくんでくださって。ですので、私がストレスというよりは編集さんが苦勞されたと思います。

居住地選択の理由と都市の印象

— 海外の都市として、ほかにも選択肢がある中で、ベルリンを選ばれた理由はどのあたりにありますか。

靴下 ワーキングホリデービザ^{(*)2}があった

のは大きかったですね。もちろん現地へ行ってからアーティストビザ^{(*)3}を取るという選択肢もあったんですけど、手始めにという意味ではすごく敷居が低いビザでした。

ワーキングホリデービザで行ける国は限られているのですが、その中で、フランスはすでに旅行で行ったことがあるし、イギリスはビザを取るための倍率がめちゃくちゃ高い。そうやって消去法で都市を選んでいく中で、ドイツは旅行で行ったことがなかったので、どんなところなんだろうなと思いました。

ベルリンは2010年代頭くらいから世界的に注目されている都市で、スタートアップしやすい場所であったり、物価が安かったり、アーティストがいっぱいいたり、さらにテクノミュージックに代表されるクラブカルチャーがあったりと、文化の土壌がしっかりある街だと感じていました。

あと、旅行で旧共産圏^{(*)4}の国に行ったことがなかったんですよね。いわゆる東側^{(*)5}の雰囲気を知ってみたいという好奇心がありました。

— ベルリンというと、街のスケールが大きい印象があります。第二次世界大戦で破壊されて、復興で街ができたというのも一つの理

(*)2 ワーキングホリデービザ

— ワーキングホリデー制度を利用し海外に行くためのビザ。ワーキングホリデー制度は、日本と協定を結んでいる国や地域の文化や一般的な生活様式を理解するため、その国に長期滞在する事ができる制度のこと。

(*)3 アーティストビザ

— 芸術家を対象とした就労ビザ。

(*)4 旧共産圏

— 共産党政権のもとにあった諸国の総称。共産圏は、社会主義圏とも呼ばれる。

(*)5 東側

— 東ドイツ。東西ドイツ時代の東側で、社会主義国であった。



fig.2 ベルリンの街並み
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

由としてあると思うんですけど、道がズバーンとあって、大きい建物があって、空が広いイメージがあります。

ヨーロッパでも、例えばパリはバロック^(*6)的な都市計画で、旧市街的でこじんまりしたところもあるので、街の印象がだいぶ違いますよね。

靴下 私もパリには旅行で何度も行ったのですが、小路があって、いわゆる日本人が想像する「ザ・ヨーロッパ」みたいな印象がある。イタリアもそんな感じがしますね。それと比べてベルリンは、道が本当に大きくて、直線で整備されていて、とっても機械的というか。そういう印象を持つ人が多いと思います。

でも、ベルリンが発展した街かと聞かれると、今もまだ発展中みたいな、凄く不思議な街です。住んでみて分かったんですけど、それがベルリンの特長で、凄く魅力的だと思います。道が広くて風景としては開けているけれど、ヨーロッパらしい古典的な建物はあるし、バウハウス^(*7)をはじめとした近代的な建物もあるっていう。

— ベルリンをとっても気に入られたんですね。

靴下 ただ、今はベルリンからアムステルダムに住まいを移しました。ベルリンで私のワーキングホリデービザが1年で終わった後に、夫がアーティストビザを取りまして、私はその配偶者用のビザにしてもらったんですね。ビザが2年取れて、それもいよいよ終わるという時に「さて次はどこに住もうか」と。ビザを更新する方法はあるし、違う場所に行くという選択肢もあります。後者だと、移住先の選択肢はいっぱいあって、ヨーロッパに居続けることもできるし、日本に戻ることもできる。

その時に、せっかくヨーロッパに住んでいて、陸続きで別の国に移動できて、引っ越しも楽だという利点を使わない手はないということになりました。候補としてフランス、スペイン、イタリアもあったのですが、比較的ビザが取りやすい点と、旅行でアムステルダムに行った時の印象もあって、ここに住むことにしました。ベルリンが嫌だと言うわけではなく、飽きたというのも違うのですが、楽しむところは充分楽しんだかなという気持ちでした。

— ベルリンとアムステルダムの違いはどんなところですか。

靴下 アムステルダムはどちらかというとパリに似た、道が狭くて、建物が込み入った街並みです。一方、ベルリンは建物が「ピシッ」と正確に建っているんですよ。「ピシッ」と建っているというのは、日本だと当たり前のことですが、パリやアムステルダムの建物はちょっと歪んでいたりと、立て付けがすごく悪かったりするんですよ。

ベルリンで住んでいたのは、ノイバウという東ドイツの時に建てられた、団地のようなアパートメントでした。アムステルダムでは、家を探すにあたり、せっかくだから古い物件に住んでみたいなと思って。今住んでいるのは、築100年以上経っている物件です。どんなトラブルが起きるのか想像がつかないですし、実際に住んだ際の雰囲気はどんな感じなんだろうって。それと、海拔0mのところに住んだことがないから、住んでみたいなと。

アムステルダムの建物がグラグラしているのは、地盤が沼地で建物の下20mくらいが泥になっていて、杭を刺しても経年でどんどん歪んでいくためです。頻繁に地震がある日本では考えられないじゃないですか。こんなに歪んだ家に住めるのは(暮らしにくいけど)ちょっと面白いと考えました。

(*6) バロック

— 16世紀末から18世紀初めまで世紀ヨーロッパの美的概念。都市の他にも建築、彫刻、絵画、音楽など、影響は多岐に渡った。

(*7) バウハウス

— 1919年設立の芸術学校。検討された諸問題は、近代芸術に多大な影響を与えた。1933年に閉校。1996年に、バウハウスの作品群が世界文化遺産に登録される。



fig.3 アムステルダムの街並み 1
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

— ベルリンもアムステルダムも人種のとつばのようなイメージがありますが、実際どうでしたか。

靴下 ごった煮感はベルリンの方が割と強くあって、住んでいる人たちも、それをすごくポジティブなものとして受け止めている印象が強いです。クラブカルチャーが根底にあるのではないかと予想していますけど。

ただ、ベルリンはドイツの中でも特別な存在なんですよ。「それはドイツではなくベルリンの話だ」みたいなことはよく言われて、ドイツの基準では動いてない国、それがベルリンという雰囲気です。移民が多いというのが、ほかの街と違った文化を生み出しているのはあると思います。

お金のない若者が多いからか、落書きもめちゃくちゃ多いし、街はビール瓶の割れたものばかりみたいな感じでした。でも、その人達が新しく作りだす文化みたいなものを、わりと許容していこうという雰囲気があったような気がして。それはいいところだなと思って住んでいましたね。



fig.4 アムステルダムの街並み2
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

夫婦でリモートワークをする

— 旦那様はどんなお仕事をされているんですか。

靴下 彼は映像関係の仕事をしていて、ベルリンにいる頃に友人と会社を立ち上げて、経営しています。同時にクリエイターとしても作品も作っています。

— 旦那様もリモートで働ける職業ということですね。

靴下 コロナの前は、私よりは撮影などで日本に帰ったりはしていましたが、基本は家で完結する仕事をしていますね。この生活ができるのはクリエイター同士だからだと思います。

言語の壁

— 言語的な壁はあまり感じませんか。

靴下 それはめちゃくちゃあります。私はドイツ語もオランダ語も英語も全然頑張れなくて、夫の方が少し英語を喋れるという状況ですね。夫も現地語はあまり習得する気がなくて、英語をベースにコミュニケーションをとるという感じです。

— 役所での手続きなど、作中で言語的な壁について描かれていましたが、あれは実体験なんですね。ベルリンからアムステルダムに移るにあたり、ドイツ語圏内の移動だったら楽かもしれないとは考えませんでしたか。

靴下 ドイツ語圏から選ぶということは全くなかったです。正直、移民が多い国であれば、それだけ英語が通じたり、言葉が通じなくて



fig.5 チェコ、プラハの街並み
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

も何とかなるようなシステムが備わっていたりするんですよ。手続きもWEBで完結するようになっていたり。そういう風に言語に縛られない仕組みがあるかどうかは事前に調べましたね。

現地語が使えないと不便さを感じることはいっぱいあります。役所で門前払いされたりしますが、「今日は天気が悪いからかな。天気が良い日にまた来よう」^(*8)みたいな感じでやりすごしていますね。

作品の温度感と、移住先との距離感

— 『思えば遠くにオブスクラ』では主人公たちが生活する中で、現地の人とちょっとずつ関わりながら新しいことを発見したりして、平熱というか、程よい温度感が作品を通じ提示されている感じがしました。

靴下 何かもっと、現地にコミットしていく移住者もいると思うし、言語をしっかり学んで社会と関わりを持って生活する人たちには凄く敬意を持っています。でも、私はベルリンに移り住んだ時、そこにずっと住むとは全然思っていなくて、気が向いたらまた違うところに行こうと思っていました。「良くも悪

くも自分はお客さんのままいて、お客さんのまま出て行くのだろうな」という感覚でしたね。

だから「ドイツとはこういうもの」とか「ベルリンのことを理解した」といった風に決めつけない、言い切らない雰囲気描きたいという気持ちがあります。もちろん、ちょっと住んだくらいでは、言い切れる自信もないですしね。「お客さんに何が分かるんだ」と現地の人は思うだろうなって。

— なんか友達と接しているかのように国や都市と接しているなと感じました。親や兄弟のように、切れない絆でつながっているのも、赤の他人を観察するのでもなく、互いの距離感を探りながら、仲良くなれば一定期間一緒にいるし、でも、何らかの理由で疎遠になるしといった意味です。

靴下 確かに、温度感低めに接しているというのはあります。その根底には、先ほどからお伝えしているように、私はあくまでただの移住者で、お客さんで、その国のインフラにおんぶに抱っこ状態にいるという自覚があるからだだと思います。でも、そういう存在を受け入れて、許してくれるのであれば、私は

いろいろな所を周るのは面白いなと思うし、迷惑をかけない範囲で、楽しい生活を送りたいなという気持ちがあるんですね。

学生時代から、漫画家になるまで

— 漫画家という職業はどうやって決められたのですか。

靴下 私は大学に入るにあたって浪人したので、他の人より年齢が高い状態で大学を出ました。その後、何年かフリーターをやっていて。アルバイトから始めて、最終的にはパートタイム勤務で仕事をしていました。その時、友達にCOMITIA^(*9)（コミティア）に出てみないかと誘われて、漫画が好きだったので、一緒にノリで出てみようと思って。

そこから1、2年くらい経って、出版社の編集さんにアドバイスをもらおうと思って漫画を見せに行きました。見せに行った先で、編集さんに今度のコンペで1位を獲れたら連載権が得られるという話を聞いたので、コンペに応募しました。そうしたら運良く1位を獲れて、『ソワレ学級』の連載が始まったという流れです。

(*8)「今日は天気が悪いからかな。天気が良い日にまた来よう」

— 冬季うつという言葉があるように、日照時間の短い日や季節には、現地の人は気分が落ち込んだり、不機嫌だったりする

(*9)COMITIA

— プロ・アマを問わないマンガ描きたちが自主出版した本を発表・販売する展示即売会



fig.6 コミュニケーションで苦戦する様子
©靴下ぬぎ子（秋田書店）2021

— 漫画を描いて1、2年でコンペに応募したというお話でしたが、高校と大学では漫画や芸術に関することは行っていなかったのですか。

靴下 実は私は美大出身者で、武蔵野美術大学のデザイン学科を出ています。当然、そこに入学する前に美大予備校でデッサンを一通りやっていたので絵を描くというのはずっとやってきています。高校は『ソワレ学級』のモデルになった都立新宿山吹高校という定時制高校を卒業しています。

— 大学に入学した時から、漫画家に限らず美術に関する仕事に興味を持っていたのでしょうか。

靴下 小さい頃から絵を描いたり、工作するのがすごい好きだったんです。我が家は結構早い段階でパソコンを導入して、3Dの作品を作ってみたり、ホームページを作ってみたりと、小さいころからデジタルで制作するのに慣れていました。

だから、漠然と私は手を動かす職業に就くんだろうなあと、小さい頃から思っていましたね。でも美大に入っても、絶対にこの仕事

に就くという意思を持ってなくて。空間演出デザイン学科に在籍して、舞台美術やったり、ファッションやったり、店舗内装のデザインやったり、衣食住に関わるデザインを網羅的にやる学科だったんですよ。

最終的にゼミは舞台美術を選択しました。ゼミの学生でも最初からデザイナーになるとか、店舗のデザインをやると決めている人もいましたが、私はまだそこまでは考えていなくて、大学の勉強が面白かったらそれでいいやっていう感じです。

都市、建物描写へのこだわり

— 作品は、都市描写がきめ細やかで、街並みが丁寧に再現されていると感じます。描く前に取材したりするんですか。

靴下 連載が決まるまでベルリンに1年半ぐらい住んでいたんで、その間にいろいろなところに出かけて、写真をたくさん撮りました。主人公をカメラマンにしたという別の理由から、背景描写を緻密にやろうと思ったのもあります。あと、主人公の性格を考えると、街を密に描くのがいいんじゃないのかなと思いました。キャラクターが理由になって描い

ているというのも大きいですね。

— インテリアの描写もしっかりされていますよね。

靴下 主人公たちの家は完全に自分たちが住んでいた家をモチーフに、3Dに起こして、アングルを変えて描きだしたものを背景にしていました。なぜなら、コンセントの位置や形をとった細かい描写が、その部屋を異国情緒たらしめている決定的な要因だと思うからです。

建物の高さとか広さというのは部屋に特徴を持たせるにはすごくわかりやすいパラメーターだと思うんですけど、もっと細かなところ、例えば配管がちょっと出ていることによって建てられた時代がわかるとか、ノイバウがもっている雰囲気はどう伝えるのかとか、そのためになるべく忠実に再現しました。

これが日本の家だったら、屋内に梁があって、床の間があってと想像で描ける部分が多いと思います。でも、私はドイツにそこまで詳しくはないから、写真から忠実に、ここは建具がこうついでいて、この窓はどうやって開くのかというのを再現しました。そのために室内の写真もたくさん撮りました。



fig.7 室内レイアウト
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

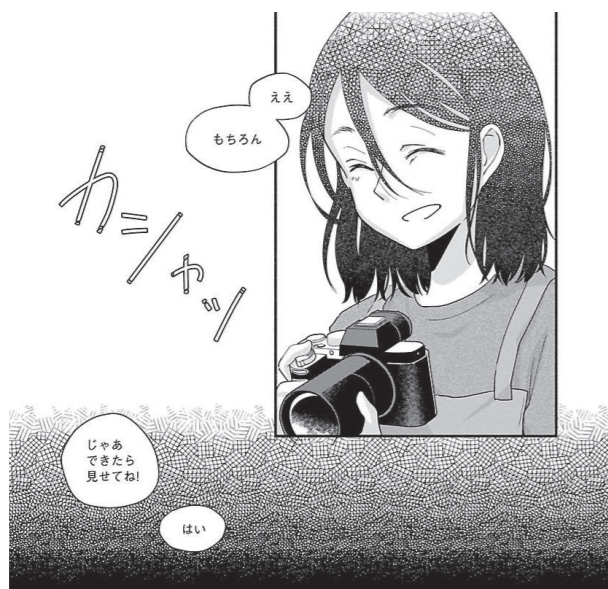


fig.8 カメラマンの主人公 1
©靴下ぬぎ子 (秋田書店) 2021

居住地を変える中での「ホーム」の意識

— 『思えば遠くにオブスクラ』の中で、主人公が出張先からベルリンに帰ってきた時に、帰属意識を感じたというシーンがありました。同様の帰属意識を靴下先生自身もベルリンやアムステルダムに感じる瞬間はあるのでしょうか。

靴下 作品では少し大げさに描いてしまったかなと感じているのですが、小さな帰属意識は私自身住んでいる街に対して持っています。それはその街に「馴染みがあるな」とか「肌

が合うな」という感覚に近いものだと思います。でも、それが「ホーム」と思えるまで強い感情かと聞かれると、「ホーム」ではないかなと良くも悪くも思います。

「ホーム」を決めたくないという生き方をしているからっていうのもありますけど、そういう意味では日本の方がまだ「ホーム」という感覚はあるし、短期間住んだ国にも肌馴染みの良さはあるという感じですね。

結局、最後の最後はどこかに落ち着かないといけないと思うんです。そして、そこはおそらく日本だろうと。自分が80歳でヨボヨボになって、持病を抱えながら外国語を喋っている姿はちょっと考えにくい。日本にも、まだ住んだことがない街がたくさんあって、最後の最後にいるところが東京である必要はどこにもないと思っています。

これは夫と話していたことなのですが、「自分たちの人生を年表にしたときに面白いほうがいいね」と。年表を見返した時に「この期間はアムステルダム」「この期間はベルリン」みたいにいっぱい出来事が書かれていたほうが年表としては強い。そんな人生がいいかなと思っています。

— お話を伺っていると単身赴任というケースはなくて、常にご夫婦で動いていく感覚でおられるように感じます。

靴下 そう、夫婦で一緒に動いていくイメージです。二人の間であまりにも目的地に齟齬が出たら、お互い別々の場所に住むということはある得るかもしれないですけども、現状は目的地が一緒だから、一緒に行動しています。

— 次に住む場所を決めるときに夫婦で大事にされていることはなんですか。

靴下 特にこれという基準はないですが、自分たちが若いうちに行ったほうが面白い街かどうかというのはあります。別に40代、50代で行くことも考えられますが、30代のうちに行っておいた方がいい街。自分の年齢で一番エンジョイできる街はどこだろうと考えます。

— 趣向を変えて、若いうちにアフリカに行くみたいな、そういう発想にはならないのですか。



fig.9 カメラマンの主人公 2
©靴下ぬぎ子 (秋田書店) 2021

靴下 アフリカ…、まずは旅行で行ってみたい。南アフリカだったら結構発展していると聞くのでありだなと思いつつ、ビザに追われて生活するのは意外と大変なんです。

だから、もうちょっとイージーに動けるように、拠点は日本において、そこを中心に、最近流行りのテレワークビザで1年間だけ行くという方法も考えています。拠点には荷物だけ置ければいいので、小さなアパートの部屋を借りて、1年間どこかに行ってまた戻ってくるのを繰り返すというのも悪くないと思いますね。

— 移住先の国籍を取得して、その国に骨を埋める覚悟を決めるというよりは、場所をいろいろと移していく生き方に関心がある感じでしょうか。

靴下 永住権を取るという選択肢は正直あまりないですね。次、どこにも住めなくなっちゃうのは残念ですから。

職業への価値観

— 住む場所を変えていくと同様に、職業に対して変化させていく感覚はお持ちですか。

それとも、ずっと漫画家でありたいという思いなのでしょうか。

靴下 とりあえず向こう10年ぐらいは漫画家の仕事を続けたいと思っています。でも、漫画しか描かないという感覚でもないです。漫画に隣接するイラストの仕事も受けますし、他のことにも興味があります。漫画は好きです。漫画は好きで、漫画家はすごく面白い職業だと思っているし、プロとしてやれていることは本当に感謝なんですけれども、それだけではないという感覚はあります。でも「具体的にこれ」というのは現状決めていません。

— 次に向けて何か準備を始めようとか、そういう動きもないですか。

靴下 私は漫画家の中で、どちらかというとコンピュータを駆使して描く方だと自覚していて、3Dで家を起こしたり、ブレンダー^(*10)を触ってみたり、写真も自分で現像するようにしているし、映像も作ってみたりといったことはやっています。それをキャリアにするとか、スキルを身に着けるといった意識は、良くも悪くも全然持っていないくて、ただやっ

てみたいなと思って始めることが多いです。たぶんそんな風にチョロチョロといろいろなものに手を出しているうちに、隣接する何かで食べていくことになるんだらうと思います。

— 美大出身といっても、バリバリのファイナート^(*11)出身ではなく、さまざまなデザインを横断的に学んだ経験から、アーティストというよりもデザイナー的な思考が強いのでしょうか。

靴下 ひとつのことを突き詰めていく職人的なタイプではないと思います。すぐに目移りするし、ちょっとやってみて「あ、やっぱダメだった」みたいに辞めてしまったことがたくさんあります。これを極めていくっていう精神性みたいなのは割と少ない方で。

ただ、漫画に関しては、例えば同じ絵を描き続けるとか、大量の白いページを埋める作業など、性質としてもともと得意なんだと思います。それをやっている時には職人的というか、集中してそれだけを仕上げるところにスイッチすることはできる感じですね。

イラストレーターと言えるほどイラストで

(*10) ブレンダー

— 3DCGアニメーションを作成するための統合環境アプリケーション。

(*11) ファインアート

— 絵画・彫刻・建築などの造形美術。また、文学・音楽なども含めて広く芸術全般をもいう。

食べているわけではないですが、漫画以外の軸足もいずれ欲しいなあと思いながら、動いています。でも、本当にこれって決めていることはなくて、流れのままにというか。

— いろんなところでいろんな経験をされているから、エッセイストなど文章を書く仕事も考えられますね。

靴下 エッセイストに関して言えば、向いていないという自覚があって。エッセイを書くとすると、私というキャラクターがもっと面白くないといけないと思うんです。

他人がどう思うかはわからないですけど、私からみた私は、ちょっとキャラとしては弱いかなと。元々コミュニケーション能力が高いわけでもなく、友人が多いわけでもないですし、目標がすごく高いタイプでもないとなると、キャラとして弱いから「私が語り部になったとしても話は面白くはならないよなあ」という感じがします。

エッセイストは自分の生活を切り売りするというリスクを背負ってやられているから、すごく尊敬はしますが、私はそこまではないなあと思います。

移住した先で生まれた価値観

— 海外で日本の仕事をしていて、違和感というか、気を付けていることはありますか。

靴下 海外に住んでいて日本にいた時の感覚がわからなくなる時があるんですね。例えばコロナ禍一つとっても、国によって対策が全然違ったじゃないですか。私は日本でとられている対策をニュースではわかっているけれど、肌身では全くわかっていない。

一方ヨーロッパではハードロックダウンを体験して、それによって全然取材に行けなくなったとか、スーパーも品薄になって、全然食材を買いに行けないから漫画を描くための素材がないという、そういう状況というか肌感を共有できないというのは感じます。

あと、私はヴィーガン^(*11)ではないんですが、ヨーロッパはヴィーガンの人が多くて、レストランにヴィーガンメニューがあったり、宗教上のハラールフード^(*12)があったりする。そういうのが自然に街、スーパーに入っている感覚があります。

こちらでは自然に、10年後、20年後を見た時に肉食、特に牛肉を食べることがどんどんギルティ（違法）寄りになっていき、若

者が次第に食べなくなるかもねという話をしますが、日本人に話してもあまり理解してもらえないですね。

ヨーロッパで起きている流れを感じるようになってきたなという変化もありますし、反対に日本で起きている流れがわからなくなってくることもあります。作中でヨーロッパの感覚を伝えるときに、日本でその感覚は共有されないかもしれないと言われてしまう。そのギャップは、最近気になるところです。

社会参画への姿勢と国民性

— 移住者という立場が影響して参画できないこともあると思います。例えば政治。選挙は国籍を持っていたり、一定期間以上その国に住んでいないと投票権が得られない。社会保障や教育についても移住者はいろいろとハードルが高かったりします。

靴下 移住した国の国籍を取られる方は、社会参加がしたいという動機が強いと思います。ちゃんと選挙に行きたい。その国に住んでいるのに、社会参加ができないことにストレスを感じて国籍を取る人は多いです。そういう意味では、社会参加ができないで、お客

(*12) ヴィーガン

—ベジタリアン（菜食主義者）のうち、畜肉・鶏肉・魚介類などの肉類に加え、卵や乳・チーズ・ラードなど動物由来の食品を一切とらない人。

(*13) ハラルフード

—イスラム教の教義において食べることが禁止されていない食材や料理のこと。ハラールと認められた食品。

さんのままでいるのは、正直何かにフリーライドしているような気持ちがあるし、社会の一員としてどうなのかという視線が自分の中にもあります。

だからといって永住するかと言われると、自分はふらふら生きていきたいです。そういう生き方をするのであれば、社会参加ができないことはある程度飲み込まなきゃいけない条件かなと思います。

ふらふら生きて、住んでいる地域に貢献できていないけれど、居させてくれてありがたいなと。私たちが住んでもいいという制度があってありがたいなという気持ちですごくあるんですね。だから、住んだ街を特別美化するつもりもないですが、読んだ人、特にドイツやオランダの方が嫌な気持ちにならないように、ちゃんと敬意を払いたいなと思いつつ（漫画を）描いています。

— 住んでいて、嫌なこともありますよね。

靴下 ヨーロッパあるあるだとは思いますが、いろいろなものが決まった時間に来ないです。家のインフラにトラブルがあった時に、日本だったらその場で電話してすぐ来てくれてすぐ解決するのが当たり前ですが、ヨー

ロッパでは、何も解決しないから諦めなきゃなって思うことがあります。水道管は何度も壊れたし、でも、自分で何とかするしかない。インフラが壊れているのに、業者が来るのが2週間後だったりするのは普通です。

業者も、来ると言っていて遅れて来るのならいいんですけど、朝9時に来ると言っていて、朝7時にピンポン鳴らされたりするのとか。ドイツの人は早起きな方が多いのか、朝早くから働くんですけど、ちゃんと決めた時間に来ないんですね。

ベルリン、オランダの労働観

— 作中に、ベルリンの労働観の話がありました。そこではベルリンは怠け者の街と描かれていましたが、住んでいてドイツ人の労働観について感じたことはありましたか。

靴下 私はフリーランスの人ばかりと関わっていたので、一般的なドイツのサラリーマンについては分からないことが多いです。でも、正直この人は何をしている人なんだろうっていう人がすごい多かったのがベルリンの面白いところで、本当にお昼から大の大人がふらふらビールを抱えていて、かといって

彼らはホームレスではないんです。そういう人たちがふらふら、ふらふら歩いていて。何かそういう、いい意味で一生懸命仕事をしないみたいなところは感じました。

またドイツでは、衣食住にあまりお金をかけず、趣味に生きる人が多かったです。お金をたくさん稼がないけどすごく楽しそうにしている人がいっぱいいて、空いた時間で何をしているかっていうと、公園で寝ているみたいな感じで、すごくいいなと思ったんですね。休みの日に公園で寝るって、日本だとあまりないなと。

— オランダも、そんな感じですか。

靴下 オランダの方がちゃんと働いている人が多めですね。ちゃんとスーツを着ている人がいっぱいいて。ベルリンではそういう人は全然見たことなかったです。

— 作中で、日本にはないバカンスの話が出てきましたが、ヨーロッパのバカンス文化にはびっくりされたんじゃないですか。

靴下 バカンスにも驚きましたが、私がおっと驚いたのはクリスマス休暇ですね。休暇が



fig.10 平日昼、ベルリン、トルコマーケットの描写
©靴下ぬぎ子（秋田書店）2021

長くていろいろなことがストップするのに巻き込まれてしまって。休みの感覚がかなり違ったのはカルチャーショックでしたね。

— ヨーロッパでは、顧客が働いている人にそこまで期待しないという感覚があります。何かやってくれたらありがたいくらいに考えている。何にでも高いサービスを求める日本に慣れていると違和感がありますが、そちらの方が人間味があるとも感じます。

靴下 スーパーの店員さんには、これくらいのサービスでいいんだよなって思う一方、工事の業者が来ないと「時間通り来てよ」と思ったりするのは、自分にまだ日本っぽさが残っているからなんだなと感じますね。

移住先で、日本食を食べる

— さきほど、東京に帰りたい気持ちはないとお話されていましたが、作中では日本料理を再現されているなど、日本への愛着を感じます。食に関しては懐かしいという感覚は強いですか。

靴下 食に関してはありました。でも、この

感覚は人それぞれみたいで、全然日本食なんて食べたくないよという人もいましたし、日本食がとても恋しいという人もいて。私は、お米は週に一回は食べたいと思いますね。

— 作中では、現地にある材料を組み合わせで再現するシーンが多いですけども、安易に日本食レストランに食べに行くよりは、自分で作ることの方が多いのでしょうか。

靴下 全部を自作するのではなく、お醤油とか調味料など、自分で作れないものは買います。もちろん、日本食レストランには行きたいんですけど、高いんですよ。美味しく食べられるお店は本当に高く、そこそこ払える金額のレベルに落とすと、料理自体が美味しくないんです。だったら普段は自炊で頑張っておいて、お金を貯めたらすごく高いお店に行く。そういう暮らしをしています。

居住地選択の理由 2

— 実際に街に住む際は、その街の行政やインフラがしっかりしていて、手続きがスマートなのが重要という認識は間違いないですか。

靴下 正直、日本とやり取りをするためにインターネットがなかったら住めないですよ。それはマストで必要。停電が多いとかインフラが不安定だと、仕事が成り立たなくなってしまおうでしょうし、そういった意味で、「住める」「住めない」の基準としては重要です。

— 一方で、リゾート地を選ぶという選択肢もあります。

靴下 リゾート地…、そういえば、選んでないな。

すごくワガママな話になってしまうんですけど、リゾート地はお客さんとして行って、お客さんとしてずっともてなされて、いい思いをして帰ってくるというサイクルで訪れる場所だと思うんですよ。そのサイクルを破綻なく回すために整備されたサービスがたくさんある。そこでの体験はすごく楽しいんですけど、一方でお客様扱いされすぎて居心地が悪い感覚もあって。あくまで想像の話ですが、住めば観光客とは違った意味でお客様扱いされてしまいそうです。さらには他の日本人がリゾートに来ているのを傍目に見て暮らすのも、居心地悪そうだなと思ってしまいますね。

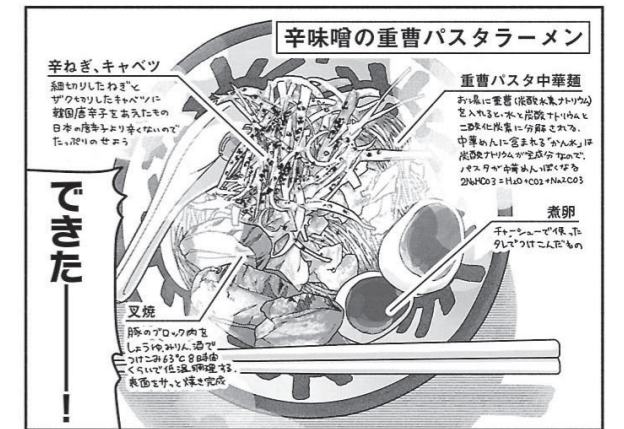
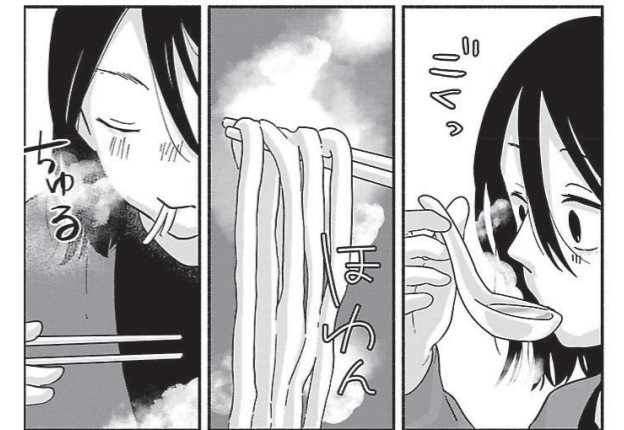
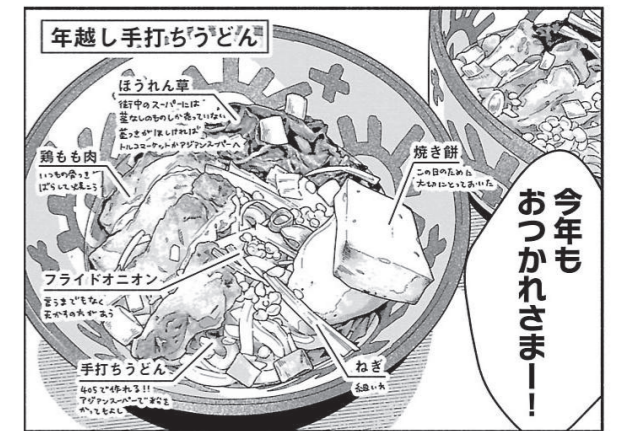


fig.11.12 描写される日本食
©靴下ぬぎ子(秋田書店)2021

そもそも観光っていくつかパターンがあって、完全にデザインされたリゾートのように、お客様に何のストレスもかけないことを目的とするものがある一方で、私はふらっと町のスーパーに行って棚に何がおかれているのかを見るレベルの観光がしたい。街歩きの視点で旅行したいという欲求が本当に強いんです。

移住先で、仕事を発信する

— 仕事は基本日本から受けているというお話でしたが、住んでいる国や都市の仕事を受けることは考えられないんですか。

靴下 きたら断る気はないけれども、積極的に募集する予定はないかな、くらいですね。日本でも積極的に仕事の募集をしてなかったから、住んでいる場所を変えたことを理由に始めようっていう気にはならないですね。

最近では SNS で作家を知って仕事を発注するという人が増えているじゃないですか。だから私ももうちょっとちゃんと SNS をやらなきゃいけないなと思います。それを日本語だけでなく英語でもやること。自分で負担なくできることを続けていく。好奇心とい

うか、なにか新しいことを始める姿勢を持ち続ける。先ほど体温くらいの温度感という話がありましたが、住む場所を変えながらも、自分なりの視線で、温度感で作品を作っていたらと考えています。

出典

fig1. 『思えば遠くにオブスクラ』(上) p.5

fig2. 同上(上) p.24,25

fig3. 同上(下) p.164

fig4. 同上(下) p.118

fig5. 同上(上) p.68

fig6. 同上(上) p.21

fig7. 同上(上) p.114

fig8. 同上(下) p.146

fig9. 同上(下) p.94

fig10. 同上(上) p.86

fig11. 同上(下) p.104

fig12. 同上(上) p.143

本記事で言及のあった靴下ぬぎ子先生の著作

『ソワレ学級』

1 (徳間書店) 2016

2 (徳間書店) 2017



©靴下ぬぎ子 (徳間書店) 2016



©靴下ぬぎ子 (徳間書店) 2017

『思えば遠くにオブスクラ』

上 (秋田書店) 2021

下 (秋田書店) 2021



©靴下ぬぎ子 (秋田書店) 2021



©靴下ぬぎ子 (秋田書店) 2021

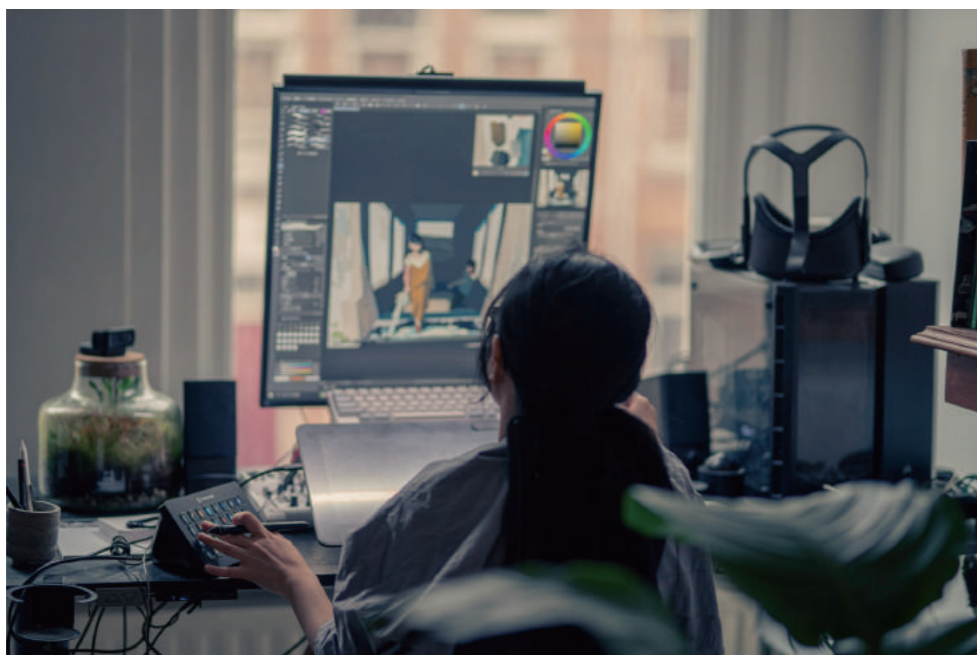
受賞

『思えば遠くにオブスクラ』

第25回文化庁メディア芸術祭マンガ部門

審査委員会推薦作品

1. 人生の年表を楽しくする



靴下ぬぎ子 Nugiko Kutsushita

漫画『恋のおわりに』が、投稿型新人発掘企画<登龍門5>に掲載される。そこで連載権を獲得し、『ソワレ学級』がスタート。次作『思えば遠くにオブスクラ』では、海外移住を始めた自身の経験を踏まえつつ、物語を描く。

インタビューを終えて

本文に書ききれなかったインタビュー内容の一つに、靴下先生の幼少期からの海外体験がある。靴下先生は物心ついたころから海外旅行で数カ国に行かれていた。また、大学では学生だけで2,3週間の貧乏旅行に行かれたそう。様々な国に行った経験から、靴下先生の海外移住への心理的ハードルは、世間一般のそれよりも低かったのだろう。

さて、私がインタビューの中で印象的だったことは、会話の中で垣間見える靴下先生独自の価値観だ。靴下先生はさまざまな国を訪れて、夫婦で他にない人生の年表を作っておられる。また、海外移住をされているが、定住はせずにあくまで自らはお客さんとしての立場を選択しておられる。

様々な国を訪れて人や文化に触れ、その記録を積み重ねること。そして海外移住をするが、国籍は取らずにその国をある種傍観する立場を選択すること。こんな靴下先生の一面は、現代における旅人として位置付けられるものではないだろうか。

人の行動原理には必ず何か目的がある。それが留学や駐在員という明確なものであれば、金銭的な制約や、新天地への不安といった心理的制約を超えて行動できるかもしれない。一方で、なんとなく楽しいのではないかと、ふわっとした目的で海外に赴くことは、私にとって自由の体現であり、非常に魅力的である。より自由な働き方ができるようになった今、テレワークの普及は現代の旅人を増やす結果となるのだろうか。

<濱地峰史>

2

リモートワークによる価値観変化への議論と分析

文：佐々木 央 濱地 峰史

暮らしの組み立て方 - 住まいと仕事、そして -

文：佐々木 央

1

住まいにおける、職の引力

感染症の流行は、私たちが「当たり前」を見直すきっかけとなった。「通勤」もその当たり前の一つである。

産業革命以降、人々は高密度で不衛生な都心を避け、居住地に良好な環境を求めるようになった。仕事をする場所は都心のままで、しかし良好な暮らしをしたいという欲求から、「職住近接」から「職住分離」へと生活様式を変えていった。

ただ、「分離」と言いつつも、職と住は近くに置かれなくなっただけで完全に切り離される訳ではない。人間が生身である限り、これらは空間を介して連続し、物理的な制限の中で配置しなくてはならない。そこで人々は、「通勤」という手段をとることで、職住を糸で繋いだまま距離をとることを実現させたのだ。さらに公共交通網が整備されたことで、繋いだ糸をさらに引き伸ばし、郊外の快適な住まいを手に入れてきた。現代日本の「満員電車で週5通勤」という働き方は、その延長線上にある。

しかし、2020年4月、感染症流行によって緊急事態宣言が発令された。これにより多くの都市部のワーカーは、半ば強制的にリモートワークをすることとなった。これまで動かすことができないと思っていたオフィスが、突然自宅に飛び込んできたのだ。前述した職住分離の文脈から逸脱し、通勤できる範囲内に居住する意義が宙に浮いてしまったといえる。

今回、多くの人々がリモートワークを経験することにより、今まで通勤に費やしていたコスト（時間・労力）について考えるようになったのではないだろうか。「通勤が週1回で済むのであればもう少しオフィスから離れた場所に住んでも良い」と思うようになった人もいれば、逆に、「感染症対策などBCPの観点からも、より職場の近くに住むべきだ」と考え始めた人もいるかもしれない。

楽観的か悲観的か、捉え方は人それぞれにしても、パンデミックが私たちの職と住に関する価値観を揺るがしたことは確かである。

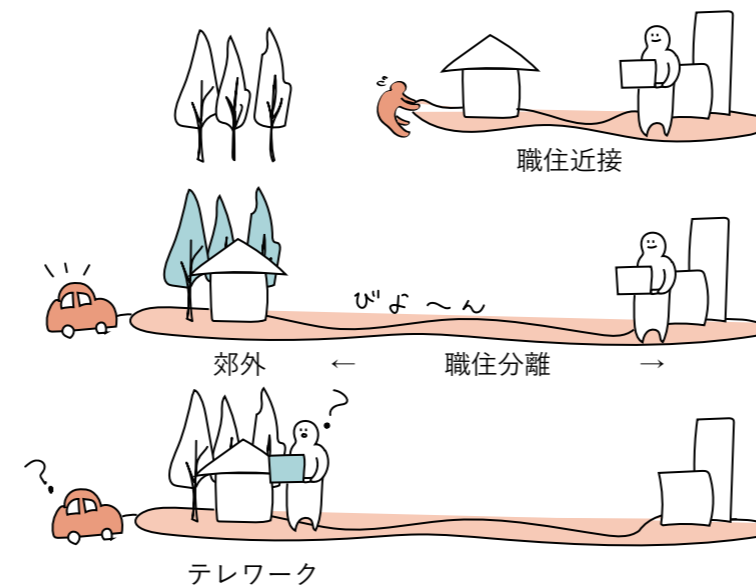


fig.1-1 職住の関係

数値で見られる社会の動き

とはいえ、こういった変化を人口動態といった「数値」で捉えようとするのは、時期尚早である。確かに、コロナウイルスが流行してから2年目の2021年には、都心から転出する人の動きが目立ち始め、「リモートワークで、地方への関心が高まっているのだ!」と話題になった。子育て世代を中心に移住者を獲得している、いわゆる「うまくいっている街」もいくつか例に挙げられる。

しかし、ここで見られるのはあくまで「アーリーアダプター」の動きである。時代の流れに敏感で、行動に移せるだけの余裕がある集団の動向にすぎない。社会全体の傾向を語るのであれば、この数値を鵜呑みにせずもう少し慎重になる必要がある。おそらく大半は、「田舎暮らしに憧れはするけど…」「お金さえあればこんな暮らしがしてみたい…」と、気持ちはあるが動けずにいる人々なのではないだろうか。

今回私たちは、アーリーアダプターによる華々しい地方移住を調査するのではなく、敢えてそうではない、「動けてはいないけれどもなんとなくソワソワしているワーカー」のリアルを捉えたいと考えた。コロナ禍によるリモートワーク（主に在宅勤務）を経験したワーカーは「居住地」の決定に対する考えを変えたのだろうか。変わったのであれば、「居住地」に何を求めるようになったのだろうか。このような疑問を念頭に、具体的な調査の準備へと話を進めていく。

空間的組織化論の導入

そもそも、人々はどのように居住地を決めているのだろうか。

職場の近く、生まれ育った街、子育てのしやすい街・・・思い浮かべるだけでも条件となるパラメーターが次々と出てくるので、かなり複雑で重要な意思決定であることは言うまでもなさそうだ。居住地は一つのパラメーターだけで決定されるものではないのだ。

人々は、さまざまな制約がある中で社会や自身のニーズを持続的に満たすように生活圏を組み立てている。このような営みを、地理学者の加藤和暢^(*1)は「空間的組織化」と名付け空間と社会の関係性を論じている。加藤はまず、暮らしにおけるニーズを「所得機会」「消費機会」「共同生活機会」の3つに分けた。

労働者にとってまず第一に重要なのは、仕事を見つけること、つまり「所得機会」を得ることである。そしてそこで得た所得は、生活に必要なモノやサービスとの交換に使われる。こういったお金を使ったやりとりが、「消費機会」である。一方、生活は経済を介した活動だけでなく、家族や友人などのコミュニティ、町が持つ歴史や文化、自治体による公共サービスによっても支えられている。これが3つ目の機会、「共同生活機会」である。時代によって3つの機会の関係性は異なるが、人々はこれらを必要十分に得

られるように暮らしを組み立てているという。

.....

(*1) 加藤和暢

専門は経済政策(含経済事情)、人文地理学。

1978年北海学園大学大学院修士課程修了、経済学修士

1983年北海道大学大学院農学研究科博士後期課程単位取得退学。日本学術振興会奨励研究員。

1984年北海学園北見大学商学部専任講師。

1986年同助教授。

1988年釧路公立大学経済学部助教授(地域開発論・経済地理)。

1995年同教授

主な著書

『地域構造の理論』(分担執筆)ミネルヴァ書房、1990年

『立地論入門』(分担執筆)古今書院、2005年

『地域構造論の軌跡と展望』(分担執筆)ミネルヴァ書房、2005年

個人レベルでの居住地選択

空間的組織化論では、これらの機会の編成が時代と共にどのように変遷し、生活圏が形成されていったのか、資本主義の変容と関連づけて論じている(P28参照)。そのため、モデルは抽象度が高く、3つの機会の関係性は各機会の社会的な位置づけというマクロな視点で語られる。しかし、わたしたちはコロナ禍を経験した人々の、まだ顕在化していない「内なる僅かな変化」を見たいのだ。そのためには3つの機会の関係性をミクロな視点へとスケールダウンさせる必要がある。そこで、対象を社会的集団ではなく、その集団を形成する一人ひとりとし、個人レベルでの空間的組織化モデルの再設定を試みる。つまり、個人の生活圏、そしてその中心である居住地の決定のモデルを考えるために、空間組織化のモデルを用いるのである。

個人レベルで考えた時、3つの機会のバランスは個人の「価値観」によって編成されると言えないだろうか。例えば、以下のような暮らしをするAさんを例に考えてみよう。

Aさんは、都内のオフィスに週5日勤務する。子供が1人いて、休日は家族3人でショッピングに出かけるのが楽しみだ。別居中の母親が高齢のため、隙間時間を利用して病院へ送り迎えをしている。

Aさんの暮らしの中心はフルタイムで働く「所得機会」にあるが、一方で家族との時間もできる限り確保したいという価値観も見て取れる。1日が24時間であることは変えられないので、3機会のうちどれにどのくらいの時間と労力を充てるかは、そういった個人の価値観そして行動の制約に基づいて決定される。これが、空間的組織化論のモデルにおける機会の「丸の大きさ」にあたる。

しかし、3機会を1日に収まるように設定すればそのまま理想の生活が実行できるかというところではない。例えば日本の最北端においてはAさんの暮らしを実現させることは困難だろう。各機会へ、どこからどのように接続するかまで考慮する必要がある。

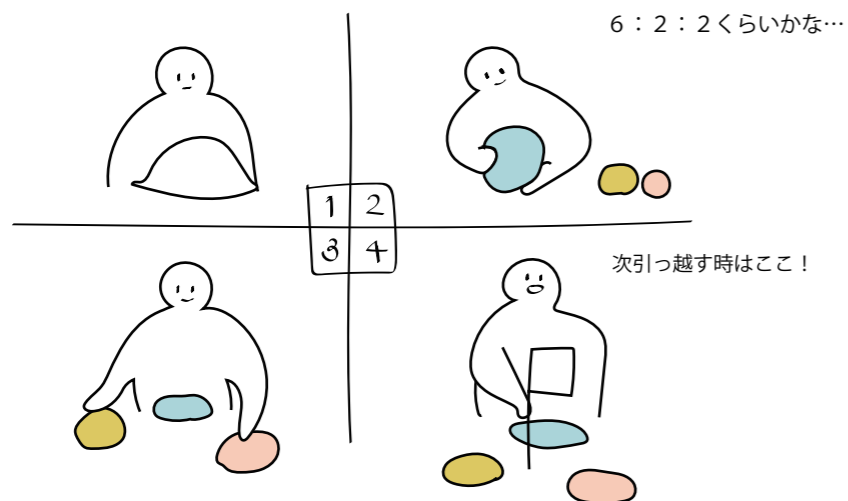
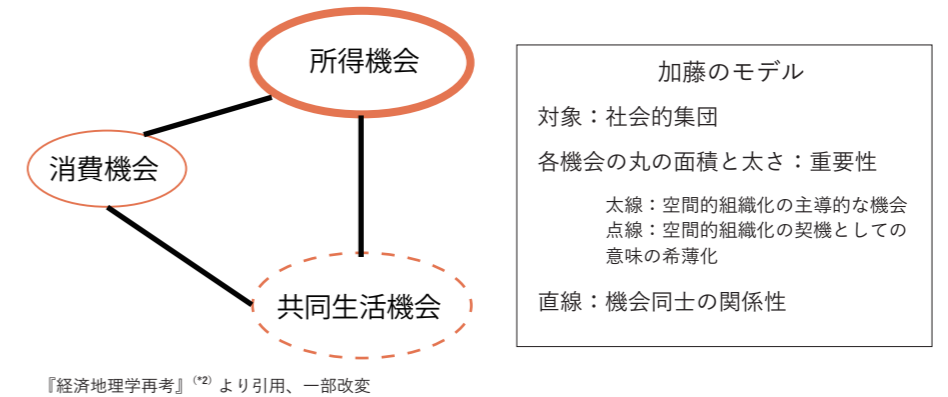


fig.1-2 居住地決定に至るまでのAさんの頭の中

Aさんは、「せいぜい1時間通勤圏内で、近所でなくてもアクセスしやすい場所に商業地域があって、実家とはなるべく近い方が良い」など思考を巡らせて、3機会の重要度に応じたバランスで空間を組織（居住地を決定）していく。人間は、実態を伴う存在である限り、物理的な制約からは切り離すことはできない。「暮らしを組み立てる」ことが、この理論の名前の通り「空間を組織する」と言い換えられるのはこの物理的制約が存在するからである。

一人一人が機会を確保するためには、ある程度の距離圏内に拠点が必要である。加藤のモデルには「居住地」というワードは使われていないが、個人レベルでの空間的組織化の中心には3つの機会の重心に拠点（=居住地）があるはずで、ここではそれを明示する。

また、加藤のモデルでは3機会のバランスを、機会同士を線で結ぶことで表現しているが、個人モデルでは、居住地と各機会を結ぶ表現に置き換える。そうすることで、「居住地に対する価値観の変化を捉える」という調査目的に応じつつ、各機会同士の関係も相対的に見ることができると考えた。加藤のオリジナルモデルと今回用いる我々のモデルを比較すると、fig.1-3のような関係となる。



『経済地理学再考』(2)より引用、一部改変

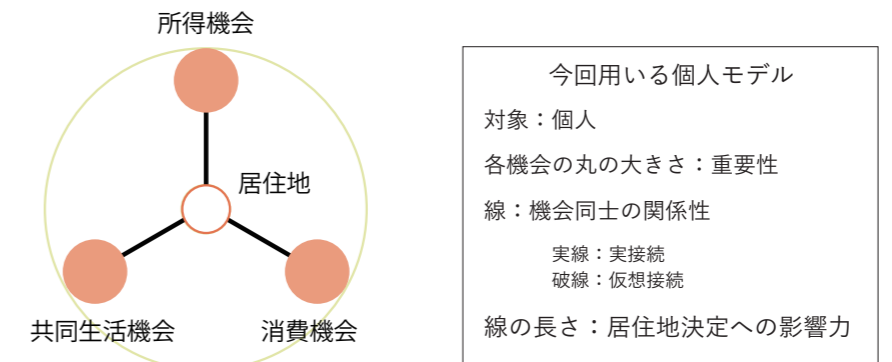


fig.1-3 空間的組織化モデルの比較

居住地と機会の接続方法

ここまで、空間的組織化には「物理的制約が伴う」ということを敢えて強調してきた。しかし、この前提条件を覆す存在として、突然全社会に浸透したのがリモートワークではないだろうか。ここでは、居住地と各機会を結ぶ「線」についてより詳細に設定し、空間的組織化論におけるリモートワークの影響を考えることとする。

居住地と機会を結ぶ線は、対象となる機会が、居住地を決める際に条件としてどの程度効いてくるかを示す。線が短ければその影響力は大きくなる。また、線の種類は機会への接続方法を表す。最も素朴には、「自らの足で機会を得られる場所へ行く」という方法で、このように実空間を介して接続する方法は、実線で表すこととする (fig.1-5)。

歩ける距離には限界があるので、その機会の重要度が高ければ居住地はある一定の範囲内に設定する必要があるし、重要度が低ければ機会の引力は弱まり、線を長くすることができる。線の長さとは丸の大きさはトレードオフの関係で、「線を短くすればその分だけ丸を大きくすることができる」と言い換えることもできる。

また、交通手段が発達し徒歩から車や電車へと乗り換えていくと、同じ労力でより遠くからアプローチすることができるようになるので、丸の大きさに対する線の長さの比率が緩和される。しかしあくまで物理的な関係性は切れずに残るため、実線で描く。

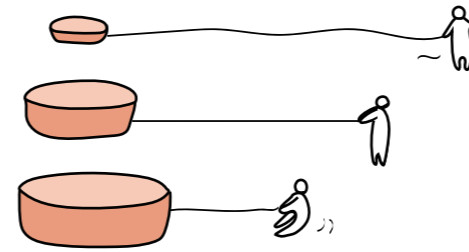


fig.1-4 丸の大きさと線の長さのイメージ

例えば、前節での A さんの暮らしは所得機会が主導する形で組み立てられていたので、fig.1-6-1 のような重心が所得機会にやや寄ったモデルが描ける。A さんに対して、「所得機会と同じくらい、消費機会も共同生活機会も充実させたいぞ」という欲張りな人がいたとしたら、fig.1-6-2 のように 3 機会が居住地にグッと引き寄せられたような

モデルが描ける。消費・共同生活機会を集約させた、都心に建つタワーマンションでの暮らしがイメージできる。

では、リモートワークはこのモデルにどのような変化を与えるだろうか。

行っている仕事が完全にリモートワークに置き換え可能な場合は、居住地からの距離を問わずに所得機会を得ることができる。居住地が重要度に応じて所得機会に引っ張られない、つまり所得機会の丸の大きさと線の長さとの関係が無効になると言える。実線は断ち切られるが、住まいと所得機会は仮想空間を介して再接続される。これを破線で表現することとする。

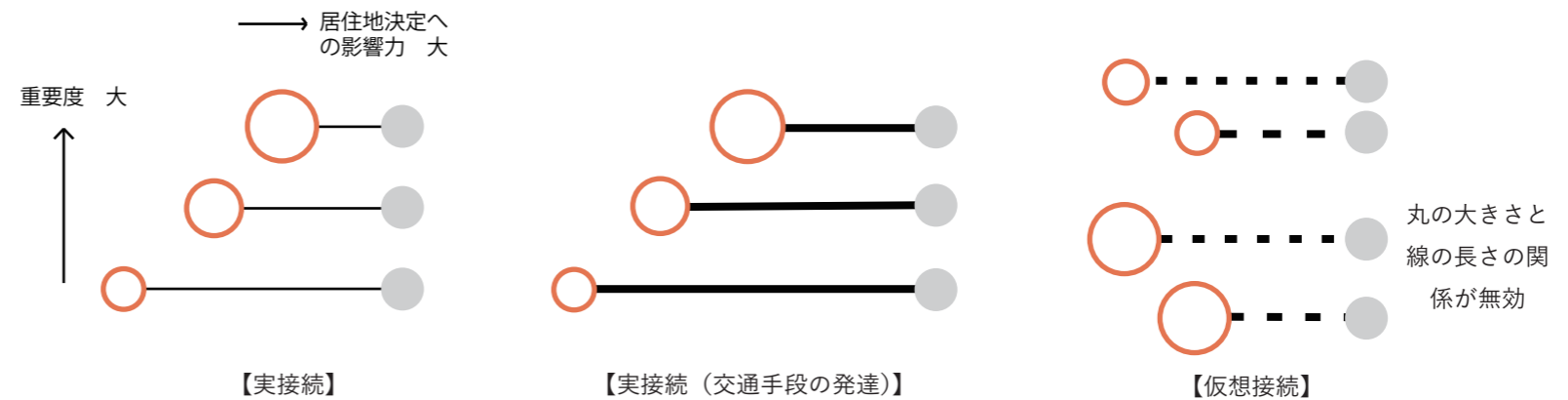


fig.1-5 各機会と接続線の関係性

居住地が所得機会との物理的制約から解放されると、その分消費機会や共同生活機会に接続する線を短くして、生活圏の重心をそれらに寄せることができるようになる。線を短くできるということは、その分だけ各機会に時間や労力を割いて丸を大きくすることができるということだ。

これの究極の実践が「フルリモートワーク×田舎暮らし」である (fig.1-6-3)。fig.1-6-4 で示す「地方で農業」

との決定的な違いは、所得機会が居住地決定に関わってくるかどうかである。農業をする場合は仕事ができる場所に住む必要があるため、居住地は所得機会に依存する。しかし、リモートワーカーは共同生活機会に振り切った、ライフを条件に地方を選ぶ。同じ田舎暮らしでも、空間的組織化論から見ると、全く異なった暮らしの組み立て方であることがわかる。

ちなみに、地方ではお金を使う機会が少ないということから fig.1-6-3、fig.1-6-4 の消費機会を小さくしているが、オンラインサービスをバリバリ使いこなすような人であれば、都会暮らしと大差ない大きさの丸に破線で接続したモデルを描くことができる (fig.1-6-5)。

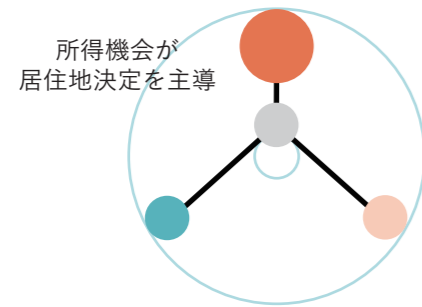


fig.1-6-1 Aさん



fig.1-6-2 タワマン

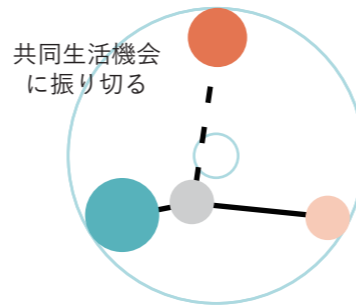


fig.1-6-3 田舎暮らし

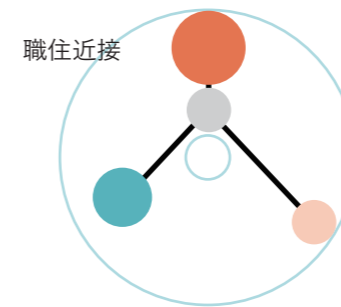


fig.1-6-4 地方で農業

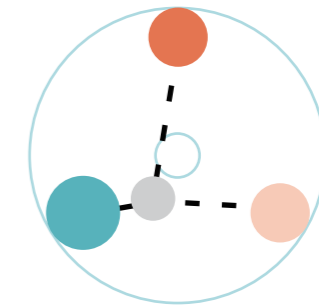


fig.1-6-5 通販の活用

● 所得機会 ● 消費機会 ● 共同生活機会

fig.1-6 モデルの変形パターン事例

調査に向けて

ここまで、居住地に対する価値観の揺らぎを捉えるための準備として、「そもそも人々は何に拠って居住地を選択しているのか」について、空間的組織化論をもとに整理してきた。

リモートワークは、居住地と所得機会をこれまでと異なる方法で接続する。これは、空間的組織化モデルを次なる形態へ展開させる重大な要素となるはずだ。その変化の兆しを、まずは「個人レベルの価値観変化」というミクロな視点で捉えることから始め、今後の展開可能性を考察していくこととする。

実際は仕事の全てがリモートワークに置き換わった人は少なく、週何日かをリモートでするハイブリット型の方が大多数を占めるだろう。その場合、実線は完全に切れるわけではないので物理的制約は受けつつも、通勤日数が減る分機会を得るための移動コストが減り、線をより長く伸ばせるようになる」と説明する。フルリモートほどではなくても、所得機会から遠ざかることができるようになる分、消費機会と共同生活機会へと重心がシフトしていくのではないだろうか (fig.1-7)。

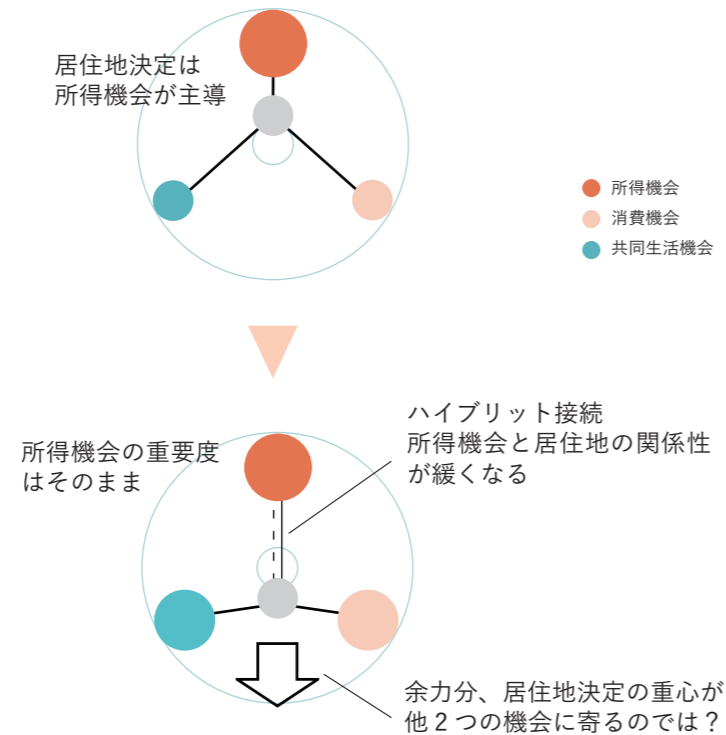


fig.1-7 仮説モデル

「空間的組織化論」を覗く

(*2) 『経済地理学再考』

著者の加藤和暢の言及する研究領域は、戦前の経済地理学史から経済学・経営学・社会科学にまで及ぶ。その幅広い領域における長年の研究成果がまとめられたのが本書である。加藤は、全く異なる地盤の上に成り立つ「経済学」と「地理学」の関係性を再考することで、経済地理学の理論研究を前進させようとした。新しい「地理的現実」の解明に向けた分析枠組みを提起する過程で、経済循環の空間的組織化が論じられていく。

経済循環の「空間的組織化」

社会経済システムは、時間的なリズムを刻みつつ空間的パターンを描きながら展開していく。その空間パターンの形成メカニズムを、経済循環の「空間的組織化」という枠組で説明している。互いに絡み合うアクター（所得機会・消費機会・共同生活機会）を特定の場所へと凝集させている（＝空間的まとまりとなって現象する）動力を明らかにすることが狙いで、人間社会の歴史的諸局面に対応した4つのモデルが提示されている。市場社会において拡大・複雑化した経済循環の円滑な運行を支えているのが、企業や家計といったマイクロ経済主体で、それらが繰り広げる経済取引が特定の場所へと牽引され凝集していく過程を組織化という。

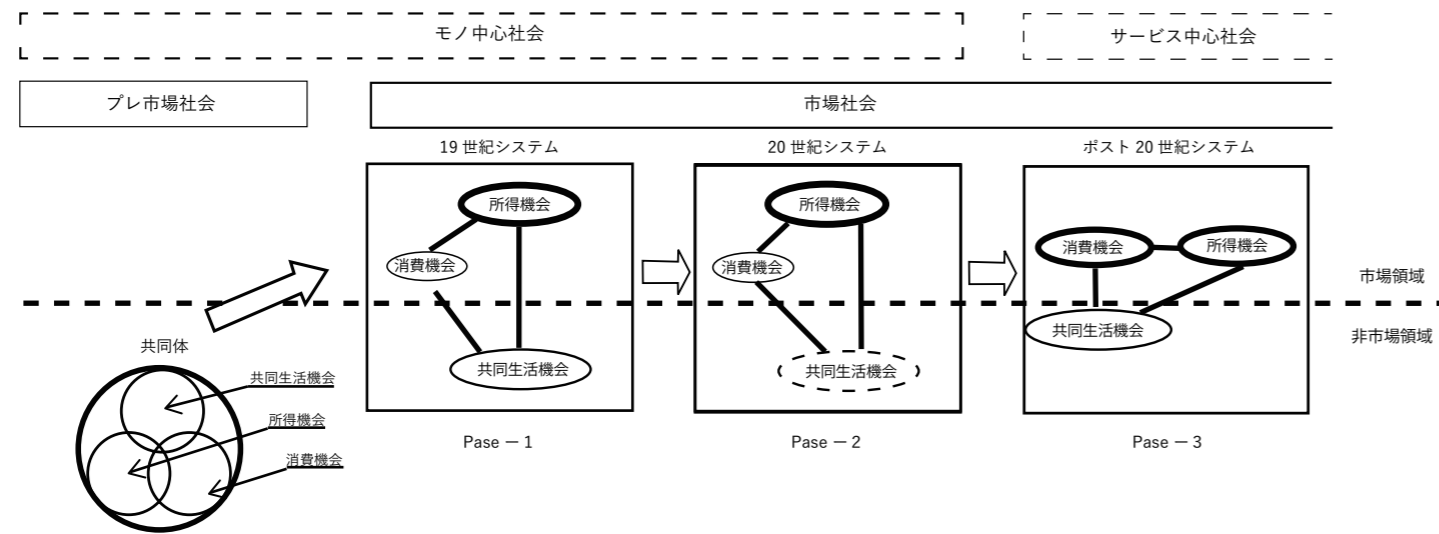


fig.1-8 空間的組織化の諸曲面（出典元：『経済地理学再考』）

プレ市場社会

伝統的な共同体に経済課程が埋め込まれている。

Phase-1 19世紀システム

市場社会の成立、社会的分業へ。所得機会が組織化の絶対的な推進契機で、輸送可能なモノを対象とする消費機会は空間を流動化させる要因として働く。

Phase-2 20世紀システム

耐久消費財の登場。セルフ・サービスによる共同生活機会の代替傾向が強まる。

Phase-3 ポスト20世紀システム

モノ中心社会からサービス中心社会へ。対人サービスが必要不可欠となり、流動化要因だった消費機会が空間的組織化要因として浮上。

— 関連書籍 —



加藤和暢 著
『経済地理学再考 経済循環の「空間的組織化」論による統合』
ミネルヴァ書房、2018



中澤高志 著
『住まいと仕事の地理学』
旬報社、2019

「空間的組織化論」に自らの解釈を加えつつ、ある時代・地域の生活様式と建造環境との関係を追求している。

リモートワークによる価値観変化の分析

文：濱地 峰史

.2

コロナ禍における価値観変化の動向

前章では、コロナ禍を経験した人々の「内なる僅かな変化」を探るために、マクロな視点で語られる空間組織化論をもとに、ミクロな視点から居住地決定のモデルについて論を展開した。空間組織化論では、暮らしのニーズは仕事に関する所得機会、お金を使ったやり取りに関する消費機会、コミュニティ・歴史・文化・公共サービスに関する共同生活機会の3つに分けられる。

我々は前章の議論を踏まえ、所得、消費、共同生活の3つの機会において、個々の価値観がどう変化したかをアンケートで調査した。調査はリモートワークを週1回以上行うオフィスワーカーを対象とし、2022年6月に行った。

アンケートでは、所得機会、消費機会、共同生活機会の具体的な構成要素を各機会10項目ずつ設定した。そして、回答者にそれぞれの項目を重視しているか、満足しているかをそれぞれ5段階評価で尋ねた。その際に、コロナ禍以前と現在とを区別して尋ねた (fig.2-1)。

このアンケート結果をもとに、所得、消費（コト消費、モノ消費）、共同生活の3機会において、四象限チャートを作成した。消費機会を性質の違うコト消費とモノ消費に分けたことで、より詳細な価値観変化を見出そうとした。

チャートでは、コロナ禍以前の数値と現在の数値を矢印で結ぶことで、価値観の変化を表した。チャートの見方は

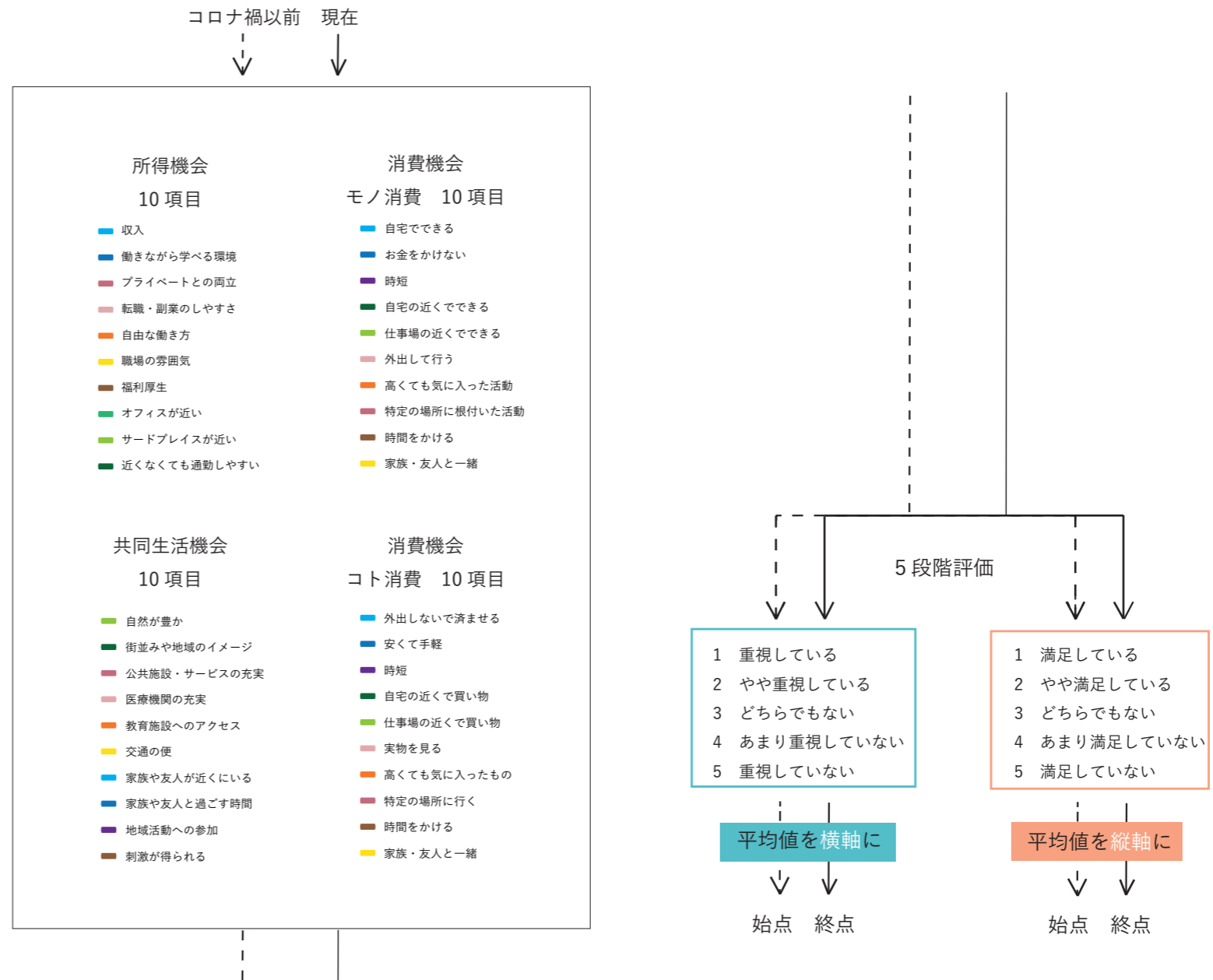


fig.2-1 チャートに用いる数値の算出フロー

fig.2-2 の通りだ。本章ではまず、アンケート回答者全体を平均した総合的な価値観変化を見た上で、具体的な属性に分け平均した、詳細な価値観変化を見ていく。

まず、4つのチャート全体について触れる (fig.2-3)。右のチャートでは、ほとんどの項目が第一象限に収まる値をとる。これは、3つの機会の価値観変化、計40項目の大半において、回答者がそれらを重視・満足する傾向があることを示す。所得機会のチャートでは重視・満足の程度が他の3つのチャート（モノ消費、コト消費、共同生活）と比べて強いことは、特筆すべき点だろう。その要因の一つとして、リモートワークがコロナ禍で急速に普及したことが考えられる。それを踏まえて以降データを分析していく。

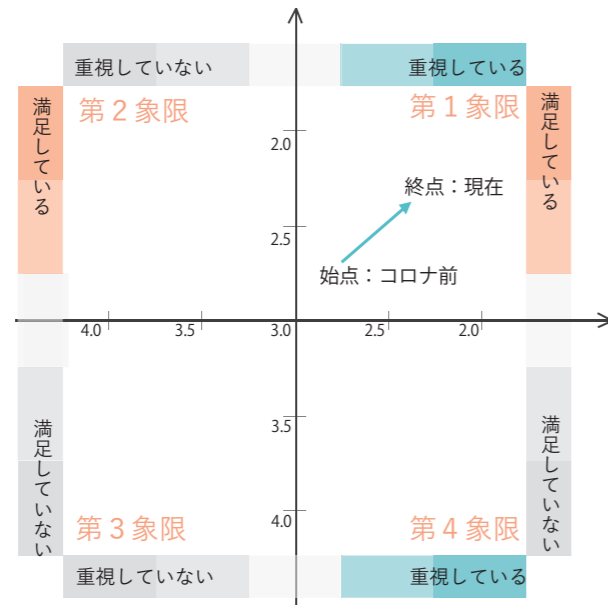


fig.2-2 価値観チャートの設定

所得機会

- 収入
- 働きながら学べる環境
- プライベートとの両立
- 転職・副業のしやすさ
- 自由な働き方
- 職場の雰囲気
- 福利厚生
- オフィスが近い
- サードプレイスが近い
- 近くなくても通勤しやすい

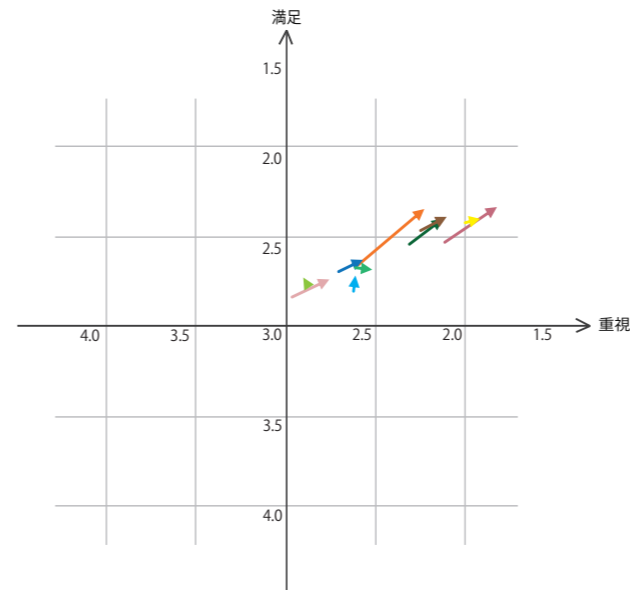


fig.2-3-1 所得機会

消費機会

モノ消費

- 外出しないで済ませる
- 安く手軽
- 時短
- 自宅の近くで買い物
- 職場の近くで買い物
- 実物を見る
- 高くても気に入ったもの
- 特定の場所に行く
- 時間をかける
- 家族・友人と一緒に

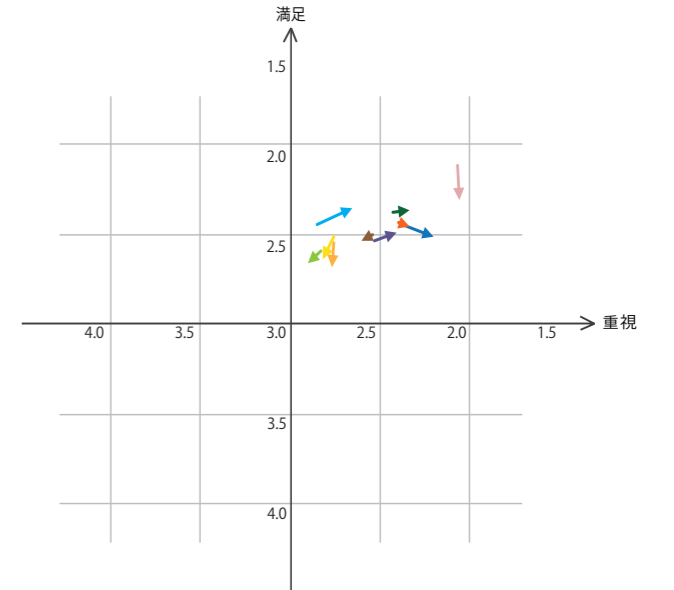


fig.2-3-2 消費機会 モノ消費

共同生活機会

- 自然が豊か
- 街並みや地域のイメージ
- 公共施設・サービスの充実
- 医療機関の充実
- 教育施設へのアクセス
- 交通の便
- 家族や友人が近くにいる
- 家族や友人と過ごす時間
- 地域活動への参加
- 刺激が得られる

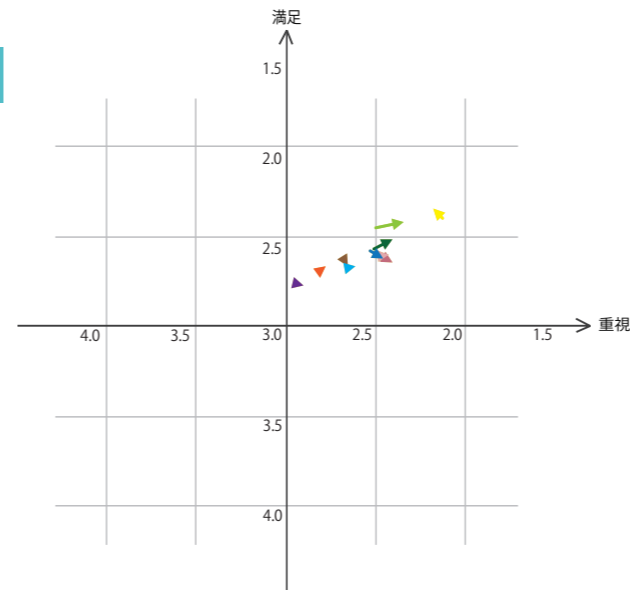


fig.2-3-4 共同生活機会

消費機会

コト消費

- 自宅ができる
- お金をかけない
- 時短
- 自宅の近くでできる
- 職場の近くでできる
- 外出して行う
- 高くても気に入った活動
- 特定の場所に根付いた活動
- 時間をかける
- 家族・友人と一緒に

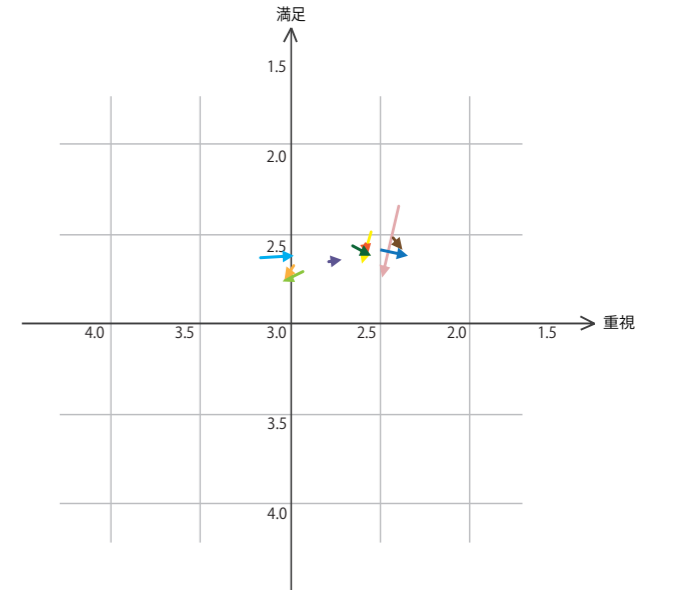


fig.2-3-3 消費機会 コト消費

fig.2-3 【全体】各機会の価値観

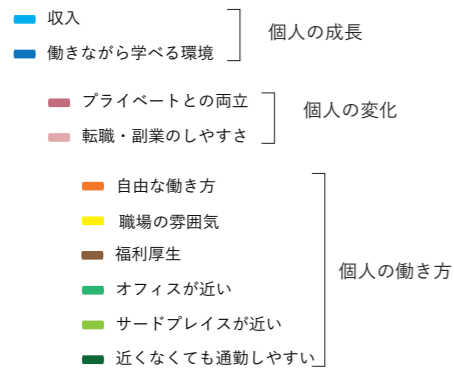


fig.2-4-1 項目の分類

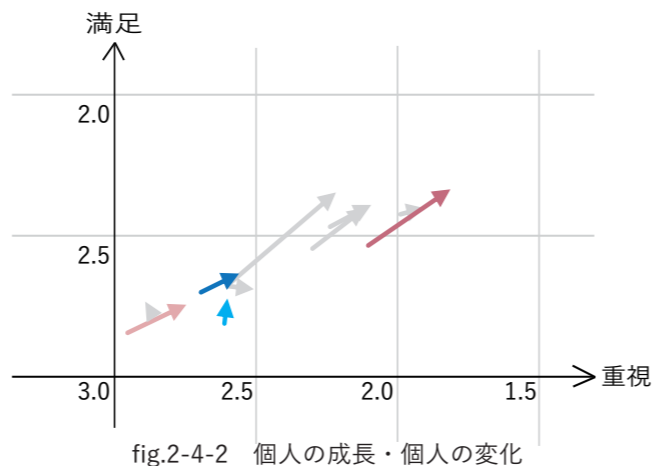


fig.2-4-2 個人の成長・個人の変化

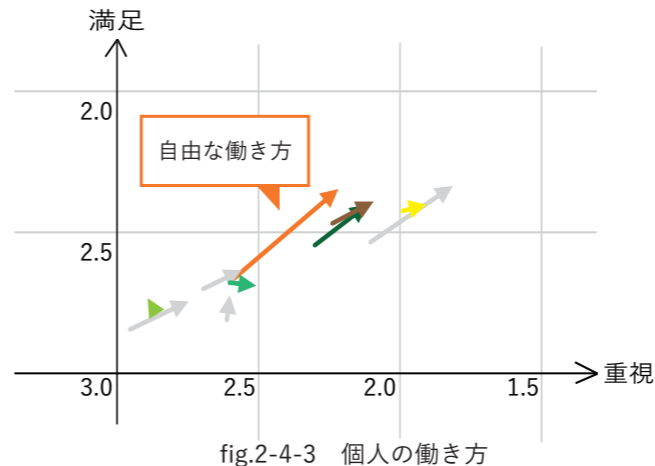


fig.2-4-3 個人の働き方

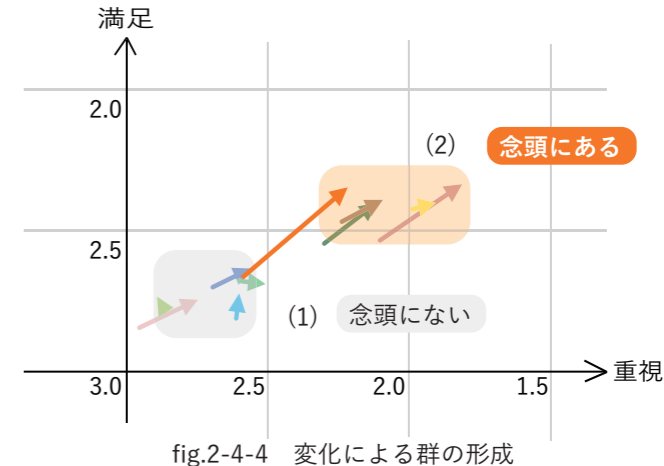


fig.2-4-4 変化による群の形成

fig.2-4 所得機会 詳細

table2-1 各機会における10項目の価値観変化量の平均

所得	モノ消費	コト消費	共同生活
0.195	0.131	0.148	0.0836

所得機会

table2-1には、各機会における10項目の価値観変化量の平均を示した。まずは、4つのチャートのうち価値観変化が顕著に現れた所得機会を詳述する(fig.2-4)。以後、重視・満足度(重視・満足の程度のことをこう表現する)のチャートにおける座標と、コロナ禍以前と現在での変化量^(*)をもとに、データを分析する。以降、座標で表す数値は断りがない限り現在のものとする。

所得機会の10項目を、個人の成長に関する項目、個人の変化に関する項目、働きやすさの項目の3つに大別した(fig.2-4-1)。個人の成長の項目は、他の項目に比べて現在における座標が「収入」:(2.60,2.71)、「働きながら学べる環境」:(2.56,2.63)と比較的原点(重視・満足度が3で、図で直線が交差する(3.00,3.00)の点を便宜上原点と呼ぶ)に近く、変化量(table2-2)も比較的小さい。個人の変化の項目は、「プライベートとの両立」で0.358の高い変化量を示し、次いで「転職・副業のしやすさ」において0.239の変化を示す。個人の働き方の項目は、「自由な働き方」の変化量が0.484と顕著で、「近くなくても通勤しやすい」に0.239の変化が、「福利厚生」に0.166の変化

がある。他の項目の変化量は小さい(fig2-4-2)。個人の働き方の項目の座標は、「職場の雰囲気」は(1.90,2.40)と原点から遠いが、「オフィスが近い」、「サードプレイスが近い」はそれぞれ(2.50,2.69)、(2.88,2.73)と、原点に近い値を取る(fig2-4-3)。

このチャートの結果は、各項目の座標に応じてfig.2-4-4のように位置関係を二分できると考える。一方は座標が原点に近く、皆の価値観の念頭にあるもの(1)、他方は座標が原点から遠く、皆の価値観の念頭にないもの(2)だ。(1)には個人の成長の2項目と、「転職・副業のしやすさ」、「オフィスが近い」、「サードプレイスが近い」が分類される。(2)には、「プライベートとの両立」、「職場の雰囲気」、「福

(*) 変化量 = $\sqrt{((\text{コロナ禍以前の重視度}) - (\text{現在の重視度}))^2 + ((\text{コロナ禍以前の満足度}) - (\text{現在の満足度}))^2}$ で算出

利厚生」、「近くなくても通勤しやすい」が分類される。(1)では成長と職場の近さに関する項目が、(2)ではプライベートや対人関係に関する項目が主に位置付けられる。

この分類からは、「自由な働き方」が(1)から(2)に遷移したことが窺える。コロナ禍を経て、個人が所得機会における価値観を大きく変えたのだ。

所得機会の価値観変化はなぜ起こったのだろうか。コロナ禍で皆が人との接触を避ける中、企業でリモートワークやフレックスタイム制度の導入が進み、自宅から仕事をするなど個人レベルで「自由な働き方」に対して関心が向いた。そういった周りの環境変化と、リモートワークの導入に伴うワークライフバランスのトレンドもあって「プライベート」や「転職・副業」、「近くなくても通勤しやすい」がより重視・満足される方向に遷移したからではないだろうか。他方で、「収入」、「働きながら学ぶこと」の個人の成長に関する項目は、低水準で変化がない。オフィスワーカーは職場の外に変化を求めている、自身が職場で価値を高めることにはさほど関心が向かないと考えられる。

table2-2 所得機会 10 項目の変化量

自由な働き方	0.484
プライベートとの両立	0.358
転職・副業のしやすさ	0.239
近くなくても通勤しやすい	0.231
福利厚生	0.166
働きながら学べる環境	0.145
オフィスが近い	0.089
収入	0.087
職場の雰囲気	0.085
サードプレイスが近い	0.063

消費機会 –モノ消費–

次に、消費機会をモノ消費とコト消費の2つの側面からみた (fig.2-5, fig.2-6)。そして、それぞれ10項目を効率とこだわりで2分した (fig.2-5-1, fig.2-6-1)。消費機会は所得機会と比べて全体的な変化は小さく (table2-1)、重視・満足をしない方向に価値観変化する項目が多い。モノ消費とコト消費で現在の座標における10項目の平均を比較すると、それぞれ(2.52,2.50)、(2.68,2.67)となり、モノ消費が重視・満足されやすいことがわかる。

まずは、モノ消費についてみる。効率の項目「外出しないで済ませる」、「安くて手軽」、「時短」、「自宅の近くで買い物」は、コロナ禍以前よりも重視される傾向にある (fig.2-5-2)。変化量はそれぞれ0.214、0.187、0.128、0.093だ (table2-3)。一方こだわりの項目では、3項目(「実物を見る」、「特定の場所に行く」、「家族・友人と一緒に」)における満足度の低下が見てとれる (fig.2-5-3)。こちらの変化量はそれぞれ0.187、0.132、0.136だ。また、「仕事場の近くで買い物」、「特定の場所に行く」、「家族・友人と一緒に」の項目は重視度が2.91~2.77、満足度が2.68~2.55のまとまった範囲に配置され、他の項目よりも重視されない。チャートを俯瞰すると、モノ消費では重視度が2.8~2.3の範囲で、ほとんどの項目が満足度2.5あたりに分布される。その枠の外の、座標でいうと(2.08,2.31)の原点から遠い位置に「実物を見る」がある。



fig.2-5-1 項目の分類

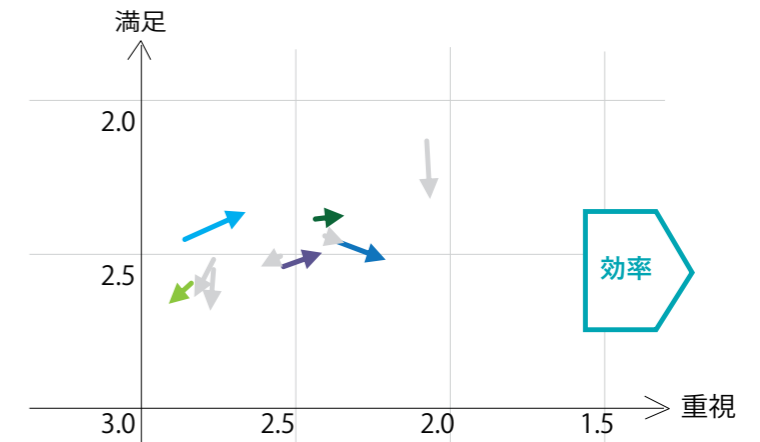


fig.2-5-2 効率に関する分類

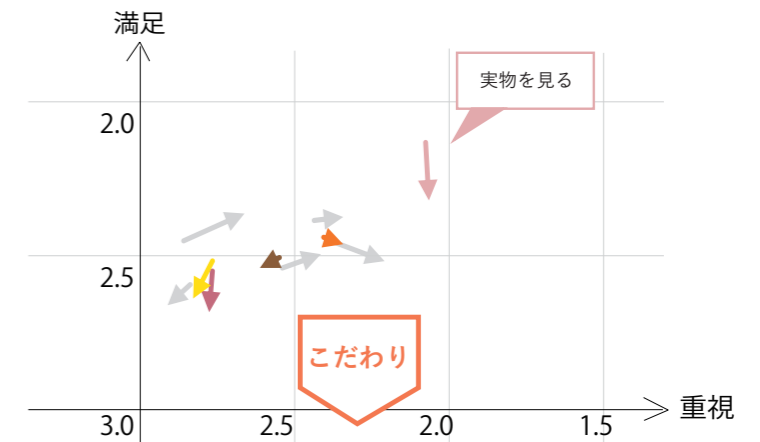


fig.2-5-3 こだわりに関する分類

fig.2-5 消費機会 –モノ消費– 詳細

「外出をしないですませる」消費に重点が置かれるようになったのは、コロナ禍の巣籠もり需要で、通販を利用する機会が増えたからだと推察する。翻って現在にかけて満足度が下がった「実物を見る」の重視・満足度は、なおも「外出をしないですませる」以上に強い。「実物を見る」の満足度が下がった要因は、コロナ禍での外出規制や店舗の時短営業が考えられる。同じ要因から、「特定の場所に行く」、「家族・友人と一緒に」の満足度も下がっているのだろう。モノ消費の価値観変化は、リモートワークの普及をはじめとした働き方の変化というよりは、コロナ禍という特異な状況下に起因するものが多い印象を受ける。

table2-3 消費機会 -モノ消費- 10項目の変化量

外出しないで済ませる	0.214
実物を見る	0.187
安くて手軽	0.184
家族・友人と一緒に	0.136
特定の場所に行く	0.132
時短	0.128
仕事場の近くで買い物	0.096
自宅の近くで買い物	0.093
時間をかける	0.074
高くても気に入ったもの	0.065

table2-4 消費機会 -コト消費- 10項目の変化量

外出して行く	0.397
家族・友人と一緒に	0.186
自宅ができる	0.184
お金をかけない	0.160
仕事場の近くでできる	0.120
自宅の近くでできる	0.111
特定の場所に根付いた活動	0.097
時間をかける	0.083
短時間でできる	0.074
高くても気に入った活動	0.071

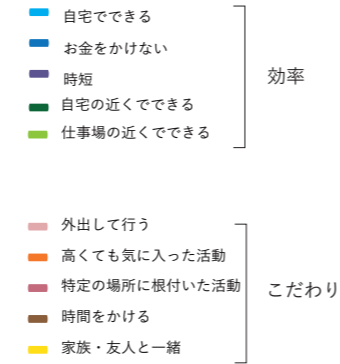


fig.2-6-1 項目の分類

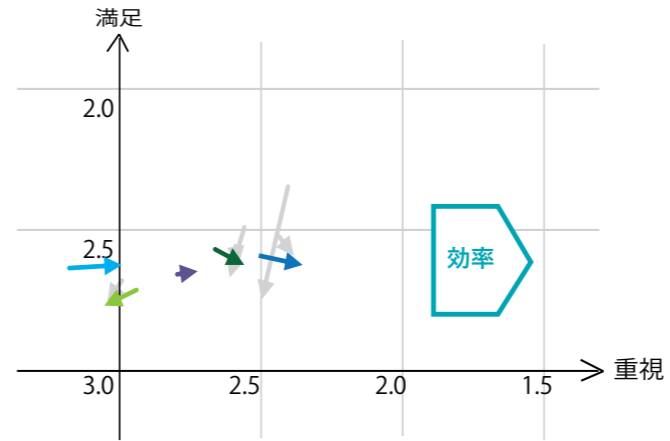


fig.2-6-2 効率に関する分類

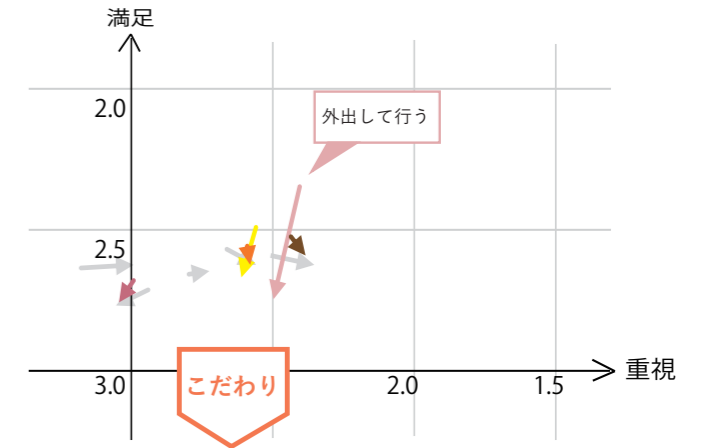


fig.2-6-3 こだわりに関する分類

fig.2-6 消費機会 -コト消費- 詳細

消費機会 -コト消費-

コト消費においては、効率の項目「自宅ができる」、「お金をかけない」、「短時間でできる」の変化量はそれぞれ0.184、0.160、0.074と微小だが（table2-4）、モノ消費と同様に重視される方に遷移した（fig.2-6-2）。こだわりの項目に関しては、「外出して行く」の満足度の低下が2.36 → 2.74と顕著で、次いで「家族、友人と一緒に」の満足度が2.50 → 2.67に低下している（fig.2-6-3）。

各項目の価値観は、重視度が3.18~2.36の範囲で、満足度が2.6あたりに配置され、平均的にモノ消費よりも原点に近い値を取る。コロナ禍以前では「外出して行くこと」が(2.41,2.36)と他項目より重視・満足されていて、「自宅ができる」は重視されていなかった。

「外出して行く」、「家族、友人と一緒に」など、外出して親しい人と消費活動をする事への満足度が低下し、自宅ですることが重視されるようになる傾向はモノ消費と同じだが、全体的にみるとコト消費はモノ消費よりも重視・満足度が低い。

モノ消費は食料などの生活に必須な消費を含むが、コト消費は個人の趣味的要素が強く、消費のほとんどが生活に必須でないものだ。そこに、重視・満足度の位置の違いが表れるのではないかと。ところで、「外出して行くこと」の満足度の減少はモノ消費の「実物を見ること」よりも顕著で、外出してコト消費をする事への自制・規制に対してフラストレーションが溜まっているようである。

共同生活機会

共同生活機会 (fig.2-7) は、他の3つのチャートと比べ、変化量の平均が0.084と価値観変化が小さい (table1)。

共同生活機会の10項目を、土地固有のもの、インフラ、コミュニティの3つに分類した (fig.2-7-1)。土地固有のものでは「自然が豊か」、「街並みや地域のイメージが良い」の2項目で、重視度がそれぞれ2.51→2.35、2.52→2.41と僅かに向上している (fig.2-7-2)。一方、インフラ、コミュニティでは価値観変化はほとんどない。座標ではインフラの4項目の、特に「交通」が(2.18,2.34)に位置し、重視・満足度が高い。コミュニティの3項目の中で「地域活動への参加」は(2.91,2.77)と重視・満足度が低い。

僅かだが土地固有のものを重視するようになる傾向は、消費機会の満足度低下と同じく、コロナ禍の巣籠もり需要によるものだろう。巣籠もり需要で皆の関心が住まいの周辺に向いたと推測する。一方で、インフラ、コミュニティの項目には変化がほとんどない。これも推測だが、インフラやコミュニティの項目は、所得機会や消費機会の項目とは違い、引越をしない限りは個人で操作できる範疇の外にあるものだ (例えば、病院が近くにあればいいなと思っても、自力で近くに病院を増やすことはできない)。個人がこれらの項目を変化の対象として意識しづらく、価値観変化に繋がりにくい部分があるのではないか。

ところで、チャートの座標において注目できるのは「交

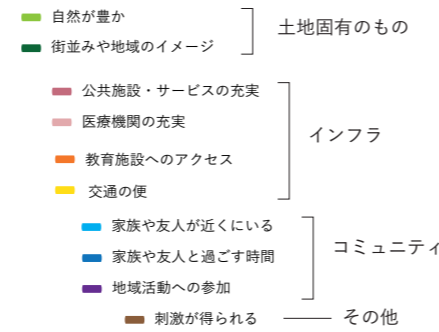


fig.2-7-1 項目の分類

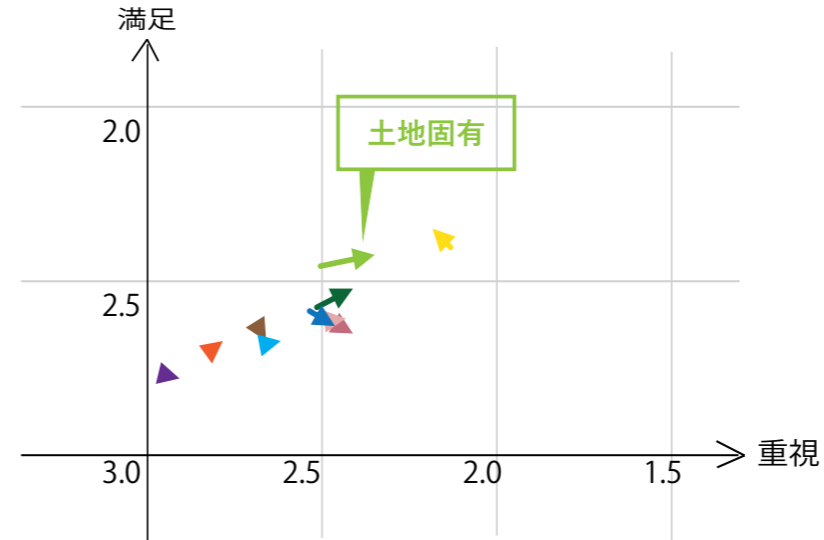


fig.2-7-2 共同生活機会 チャート

fig.2-7 共同生活機会 詳細

通」である。オフィスワーカーにとっては通勤に必須であるため、他の項目よりも「交通」を重視・満足することには合点が行く。価値観変化がほとんどないのは、先に述べた理由もあるが、オフィスに行く頻度が減ったとはいえ、「交通」に重点を置く生活様式は変わらないからだろう。

table2-5 共同生活機会 10項目の変化量

自然が豊か	0.161
街並みや地域のイメージが良い	0.121
公共施設・行政サービスの充実	0.108
家族や友人と過ごす時間	0.083
医療機関の充実	0.081
交通の便	0.076
刺激が得られる	0.060
教育施設への通いやすさ	0.055
家族や友人が近くにいる	0.053
地域活動への参加	0.039

コロナ禍における価値観変化の動向 まとめ

ここまでの内容をまとめる。コロナ禍を経て、所得機会に顕著な価値観変化がみられた。最も特徴的だったのは「自由な働き方」の項目で、変化の要因としては、コロナ禍におけるリモートワークやフレックスタイム制の導入など、複数考えられる。またコロナ禍での環境変化は、ワークライフバランスのトレンドも相まって、個人の成長の項目ではなく、個人の変化の項目の価値観変化に反映されると考えられる。

4つのチャートを総合的にみると、リモートワークによる消費機会、共同生活機会の変化は微小で、むしろコロナ禍の外出制限・自粛によって、特に消費機会における満足度が低下しているように見える。この点を次に掘り下げる。

リモートワークの頻度は価値観変化に影響したか

ここまでは、コロナ禍における価値観変化の動向をみた。先に記述した分析では、価値観変化がリモートワークに起因するものか、コロナ禍における自粛など、他の要因に起因するものか判別しにくい。

そこで、以降では、リモートワークする日数によって価値観変化のあり方に差が出ないかを分析し、リモートワークが個人の価値観変化に影響したかを探る。それを探るにあたり、アンケート回答者を属性ごとに分けた。具体的には、週にリモートワークする日数が1,2日、3,4日、5日以上の群ごとに、3機会の価値観変化のチャートを作成した。各日数の回答者の分布は次ページ fig.2-8 の通りだ。

リモートワークの日数ごとに全40項目における価値観の変化量の平均を出すと、1,2日：0.123、3,4日：0.167、5日以上：0.188と、リモートワークの日数が多い方が、価値観の変化量の平均が大きいことがわかる (table2-6)。つまり、リモートワーク日数が多い人はそうでない人に比べ、価値観変化が大きいといえる。

table2-6 日数ごとの各機会10項目変化量の平均

機会 \ リモートワーク日数	1,2日	3,4日	5日以上
所得	0.178	0.222	0.242
モノ消費	0.109	0.156	0.178
コト消費	0.123	0.200	0.199
共同生活	0.080	0.090	0.135
平均値	0.123	0.167	0.188

所得機会

リモートワークによる価値観変化が大きいのは、全10項目のうち、個人の変化から「プライベートとの両立」、働きやすさの項目から「自由な働き方」と「近くなくても通勤しやすい」の計3項目だ (fig.2-9-1)。

「自由な働き方」、「プライベートとの両立」は、リモートワークの日数の多い方が、価値観変化が顕著に表れる。特に「自由な働き方」においては、変化量が1,2日：0.352、3,4日：0.555、5日以上：0.659と、日数が多い方が大きい (table2-7)。また、「自由な働き方」の現在における座標は、1,2日：(2.33,2.46)、3,4日：(2.25,2.29)、5日以上：(1.92,2.21)で、日数が多いほど重視・満足度が高い (fig.2-9-2,fig.2-9-3,fig.2-9-4)。「プライベートとの両立」の項目は、5日以上の変化量が0.585と顕著だが、現在の座標をみると、日数の少ない方から順に(1.86,2.34)、(1.82,2.34)、(1.68,2.29)と3つのチャートで大差がない。「近くなくても通勤しやすい」は、変化量が1,2日では2.23、3,4日は3.63と大きい、5日以上では0.093と小さい。

3つのチャートで座標の値に違いが出た項目に触れる。「転職・副業のしやすさ」においては、リモートワーク5日以上での満足度が2.56で、1,2日の2.80、3,4日の2.76に比べ高い (数値は現在のもの)。また、「職場の雰囲気」は、テレワーク日数の少ない方から重視度が1.94、1.88、1.85と総じて高く、コロナ禍前後での変化量は順に0.117、

0.018、0.158と小さい。差があるのは満足度で、リモートワーク5日以上での群の満足度が2.51と、1,2日の2.36、3,4日の2.40に比べやや低い。

リモートワークの日数によって3項目に価値観変化がはっきりと開くことから、リモートワークは所得機会の価値観変化に寄与すると考えられる。それは、個人の成長の「収入」、「働きながら学ぶこと」をはじめとした今の所得機会を充実させる価値観変化というよりは、「自由な働き方」、「プライベートとの両立」、「近くなくても通勤しやすい」など消費機会、共同生活機会の充実にも関与すると思われる価値観変化に現れる。

table2-7 所得機会の各項目変化量

各項目 \ リモートワークのワーク日数	1,2日	3,4日	5日以上
収入	0.073	0.082	0.122
プライベートとの両立	0.281	0.326	0.585
自由な働き方	0.352	0.555	0.659
転職・副業のしやすさ	0.202	0.293	0.275
福利厚生	0.213	0.107	0.159
働きながら学べる環境	0.099	0.216	0.181
オフィスが近い	0.167	0.108	0.127
近くなくても通勤しやすい	0.229	0.363	0.093
サードプレイスが近い	0.050	0.157	0.057
職場の雰囲気	0.117	0.018	0.158

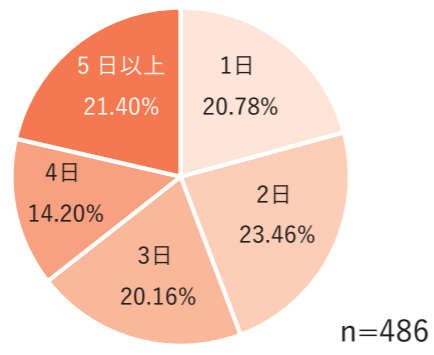


fig.2-8 テレワーク 日数 / 週

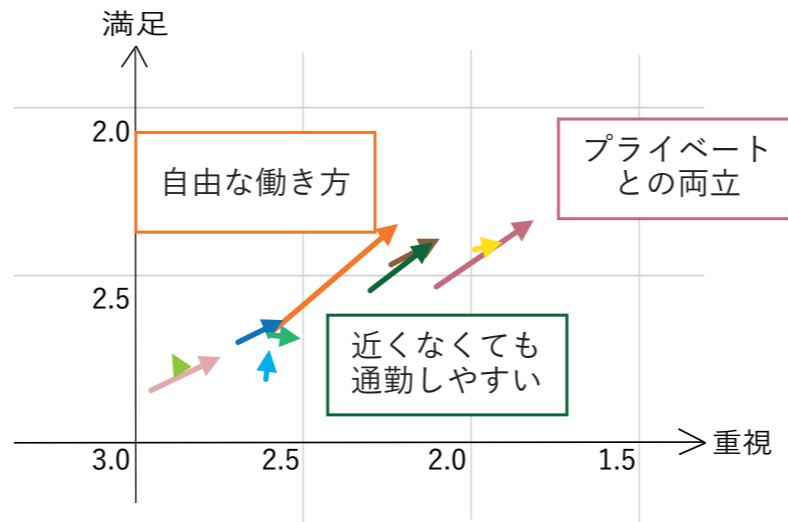


fig.2-9-1 全体

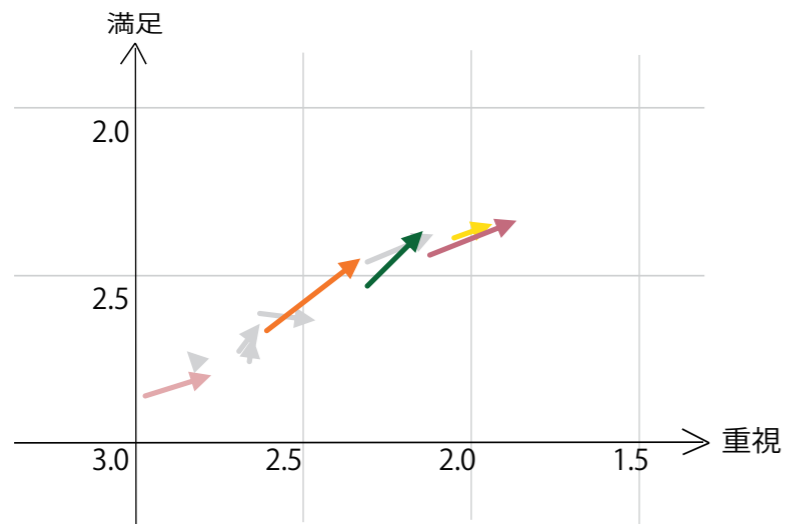


fig.2-9-2 1-2日

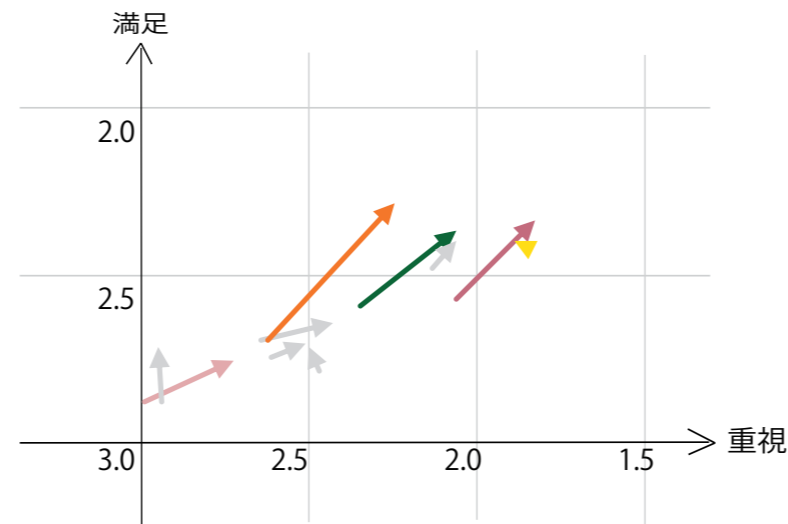


fig.2-9-3 3-4日

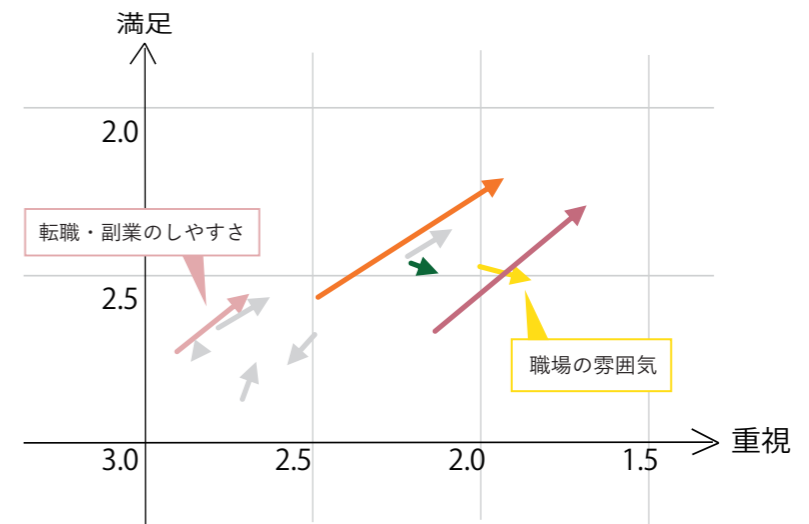


fig.2-9-4 5日以上

fig.2-9 【テレワーク 日数別】 所得機会の価値観

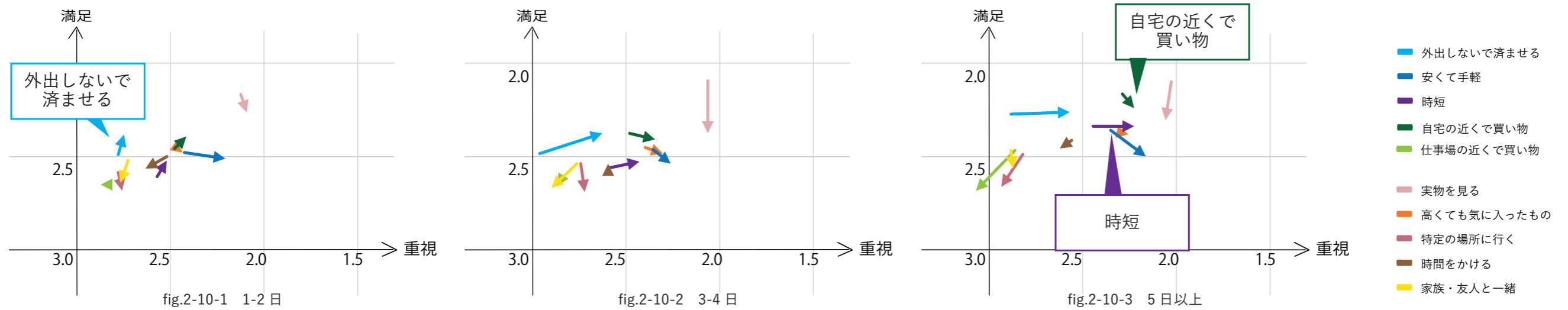


fig.2-10 【テレワーク 日数別】消費機会 -モノ消費- の価値観

消費機会 -モノ消費-

モノ消費 (fig.2-10) に関しては、リモートワークの日数が多い群ほど「外出しないで済ませる」、「時短」の2項目がより重視・満足される方に変化した (fig.2-10-1, fig.2-10-2, fig.2-10-3)。変化量は table2-8 の通りで、値はそれぞれ 0.118, 0.345, 0.308、0.094, 0.154, 0.212 である。この変化量の差に、少なからずリモートワークの影響を見出すことができる。リモートワークの日数が多く自宅にいる時間が長い分だけ、モノ消費を自宅で短い時間で済ませることを重視し、それに満足するのだろう。

他にもコロナ禍以前の「外出しないで済ませる」、「時短」、「自宅の近くで買い物」の満足度に着目すると、日数の少ない方から順に「外出しないで済ませる」: 2.50, 2.48, 2.28、「時短」: 2.61, 2.56, 2.35、「自宅の近くで買い物」: 2.46, 2.38, 2.17 となり、3項目ともリモートワーク5日以上の子の満足度が高い。

週5日以上の子は、以前から自宅やその周辺で効率よくモノ消費を行う傾向にあったと推察できる。

table2-8 消費機会 -モノ消費- の各項目変化量

各項目 \ リモートワークのワーク日数	1,2日	3,4日	5日以上
実物を見る	0.106	0.287	0.204
外出しないで済ませる	0.118	0.345	0.308
安くて手軽	0.230	0.115	0.227
高くても気に入ったもの	0.056	0.093	0.049
自宅の近くで買い物	0.092	0.141	0.095
仕事場の近くで買い物	0.037	0.062	0.299
特定の場所に行く	0.095	0.157	0.208
時短	0.094	0.154	0.212
時間をかける	0.133	0.018	0.083
家族・友人と一緒に	0.130	0.191	0.097

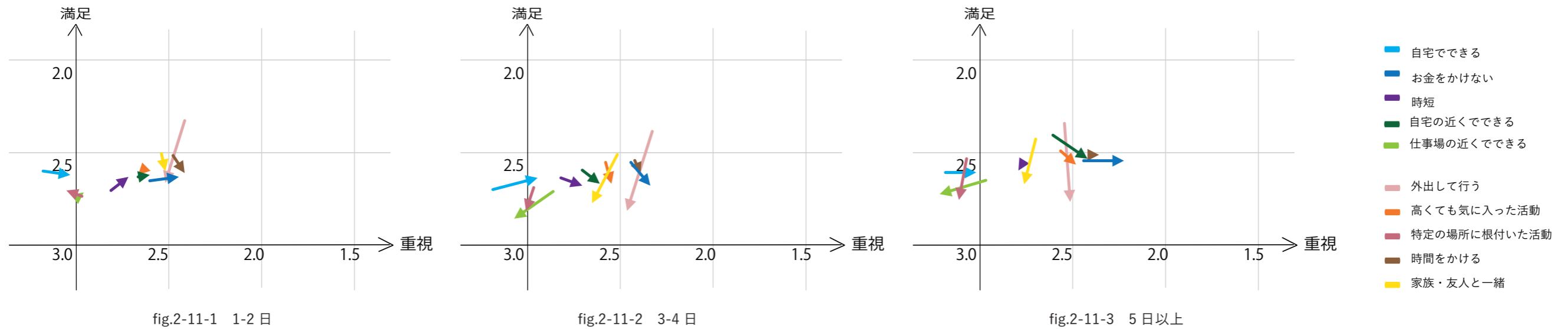


fig.2-11 【テレワーク日数別】消費機会 - コト消費 - の価値観

消費機会 - コト消費 -

コト消費のチャート (fig.2-11) に特徴的な、変化量と、満足度の低下について記述する。「外出して行く」では、1,2日の群の変化量は0.353と、他2群(順に0.457,0.414)に比べて小さい(table2-9)。「外出して行く」の変化は主に下方向で、それは満足度の低下に反映されるため、変化量の小さかった1,2日の群における現在の満足度は2.67と、他2群(順に2.82,2.76)に比べて高い(fig.2-11-1,fig.2-11-2,fig.2-11-3)。「家族・友人と一緒に」も同様で、変化量は順に0.090,0.289,0.250となり、リモートワークを1,2日行う群のものが小さい。こちらも変化は主に下

方向で、それは満足度の低下に反映されるため、1,2日の群における現在の満足度は2.60と、他2群(順に2.77,2.66)に比べて高い。「特定の場所に根付いた活動」は、5日以上の群で変化量が0.226と他2群(順に0.086,0.137)に比べ大きく、満足度は2.53 → 2.75に低下する。全体的にリモートワーク日数が多い方がコト消費の満足度が低下する傾向にあるのは、リモートワークを多く行うの方が外出自粛の意識が強いから、または仕事で外に行く機会が減り、仕事のついでにコト消費をするといった体験をしにくくなったからではないか。

table2-9 消費機会 - コト消費 - の各項目変化量

各項目 \ リモートワークのワーク日数	1,2日	3,4日	5日以上
外出して行く	0.353	0.457	0.414
自宅ができる	0.145	0.253	0.163
お金をかけない	0.164	0.166	0.221
高くても気に入った活動	0.049	0.125	0.110
自宅の近くでできる	0.061	0.119	0.229
職場の近くでできる	0.048	0.253	0.262
特定の場所に根付いた活動	0.086	0.137	0.226
短時間でできる	0.119	0.121	0.065
時間をかける	0.114	0.081	0.048
家族・友人と一緒に	0.090	0.289	0.250

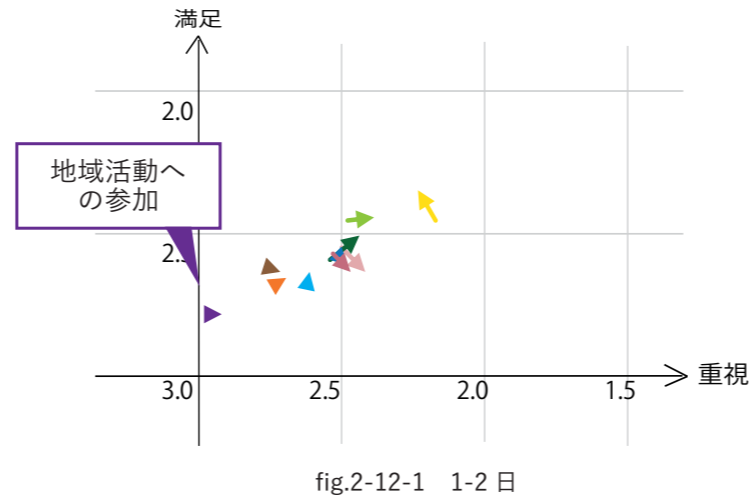
共同生活機会

共同生活機会 (fig.2-12) では、リモートワークを 1,2 日または 3,4 日行う群には大きな変化はないが、5 日以上行う群は他 2 群に比べ、「自然が豊か」、「街並みや地域のイメージが良い」の土地固有の項目をより重視し、インフラにおける「公共施設・行政サービスの充実」、コミュニティにおける「家族や友人と過ごす時間」をやや重視する (fig.2-12-1,fig.2-12-2,fig.2-12-3)。土地固有の項目の変化量に着目すると、日数の少ない方から順に「自然が豊か」: 0.089,0.218,0.245、「街並みや地域のイメージが良い」: 0.136,0.067,0.204 となり、5 日以上の変動量が大きいことがわかる。インフラ、コミュニティに関する項目にも、同じ傾向が窺える (table2-10)。5 日以上の変動量が大きい項目は、主に重視度の向上 (例えば、「自然が豊か」では 2.65 → 2.43 に向上している) に反映される。

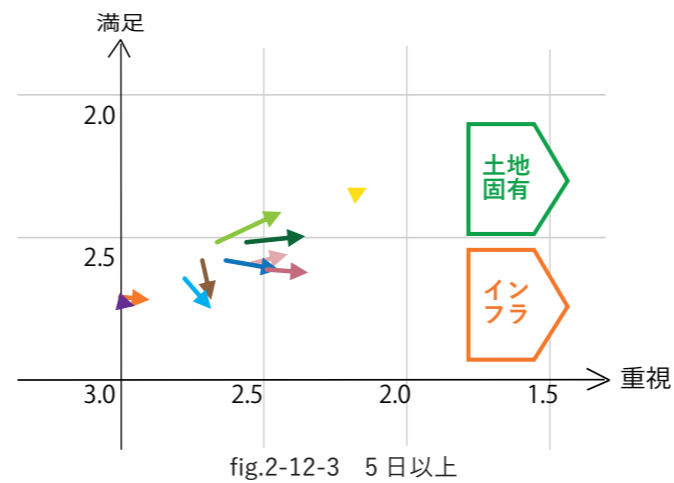
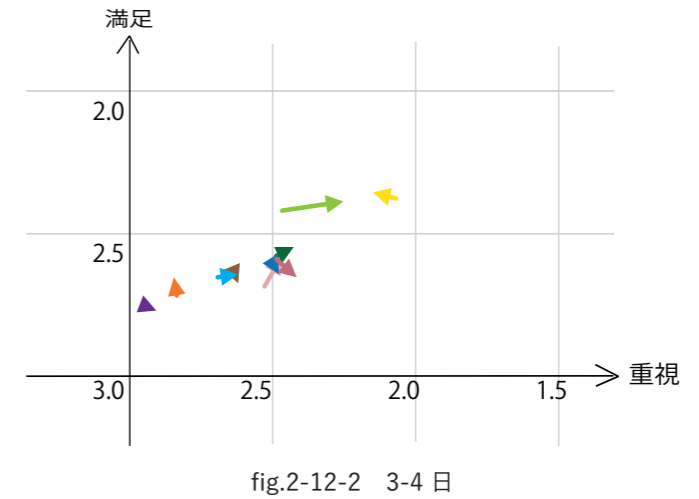
table2-10 共同生活機会の各項目変化量

各項目 \ リモートワークのワーク日数	1,2 日	3,4 日	5 日以上
自然が豊か	0.089	0.218	0.245
刺激が得られる	0.037	0.051	0.147
公共施設・行政サービスの充実	0.099	0.102	0.145
医療機関の充実	0.112	0.126	0.119
教育施設への通いやすさ	0.062	0.060	0.106
交通の便	0.121	0.081	0.022
家族や友人が近くにいる	0.056	0.080	0.143
街並みや地域のイメージが良い	0.136	0.067	0.204
家族や友人と過ごす時間	0.060	0.067	0.185
地域活動への参加	0.028	0.049	0.040

5 日以上の変動量が大きい項目は、主に重視度の向上 (例えば、「自然が豊か」では 2.65 → 2.43 に向上している) に反映される。



ところで、「地域活動への参加」の価値観が 3 つの群で一律に消極的なのは、現代社会において居住地に地域共同体としての役割が失われており、地域活動が皆の意識にないことの反映なのではないか。



- 自然が豊か
- 街並みや地域のイメージ
- 公共施設・サービスの充実
- 医療機関の充実
- 教育施設へのアクセス
- 交通の便
- 家族や友人が近くにいる
- 家族や友人と過ごす時間
- 地域活動への参加
- 刺激が得られる

fig.2-12 【テレワーク 日数別】共同生活機会の価値観

リモートワークの頻度は価値観変化に影響したか まとめ

ここでは、日数ごとに価値観変化を比較したことで、リモートワークが価値観変化に与える影響を探った。分析の結果、リモートワークの頻度は所得機会において特定の価値観変化に影響を及ぼすことがわかった。その影響は、リモートワークが個人の成長の「収入」、「働きながら学ぶこと」をはじめとした今の所得機会をより充実させる価値観変化というよりは、「自由な働き方」、「プライベートとの両立」、「近くなくても通勤しやすい」など消費機会、共同生活機会の充実にも関与すると思われる価値観変化に現れる。

消費機会、共同生活機会においては、所得機会ほどの価値観変化のインパクトはない。しかしながら、週5日以上のリモートワーカーは週1,2日のリモートワーカーよりも価値観変化が大きく、「外出しないで済ませる」、「時短」（モノ消費）や、土地固有のものをはじめとした周辺環境の充実（共同生活機会）をより重視するようになった。すなわち、自宅やその周辺に以前よりもこだわる価値観変化が起こったといえる。また、コト消費の「外出して行く」、「家族友人と一緒に」から、リモートワークの頻度が微小ながらも満足度の低下に寄与することがわかる。以上の分析から、リモートワークの頻度は所得機会における価値観変化のみならず、個人の消費のあり方、生活のあり方に影響を及ぼすことがみてとれる。

属性ごとの価値観変化

テレワークの頻度の他にも、属性ごとに群を分けるとそれぞれ特徴が表れる。属性ごとに価値観の分布、変化が特徴的だったものをいくつか記述する。例えば年齢では、3機会全般で満足度が30代をピークに、40代以降で低くなる傾向があることがわかる（table2-11）。

table2-11 世代ごと満足度の変化量

各機会満足度の10項目平均\年齢	20代	30代	40代	50代	60代
所得・現在	2.52	2.39	2.56	2.64	2.57
所得・コロナ禍以前	2.55	2.50	2.69	2.77	2.71
モノ消費・現在	2.47	2.36	2.53	2.66	2.66
モノ消費・コロナ禍以前	2.42	2.34	2.49	2.60	2.60
コト消費・現在	2.61	2.44	2.73	2.83	2.75
コト消費・コロナ禍以前	2.55	2.42	2.61	2.72	2.60
共同生活・現在	2.55	2.46	2.59	2.71	2.65
共同生活・コロナ禍以前	2.55	2.48	2.60	2.79	2.55

年齢による変化の差

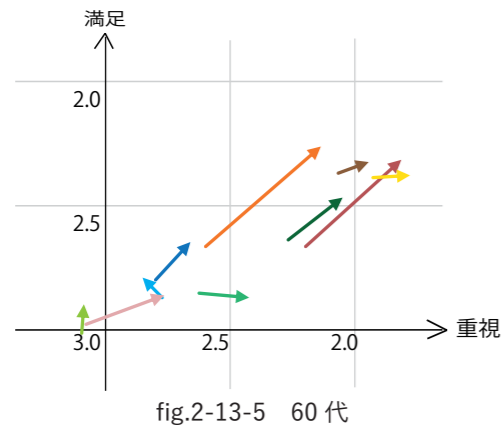
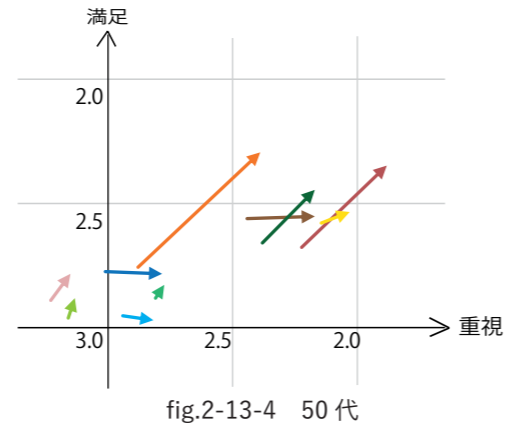
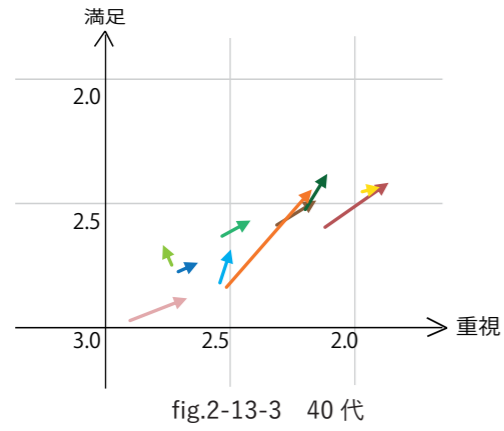
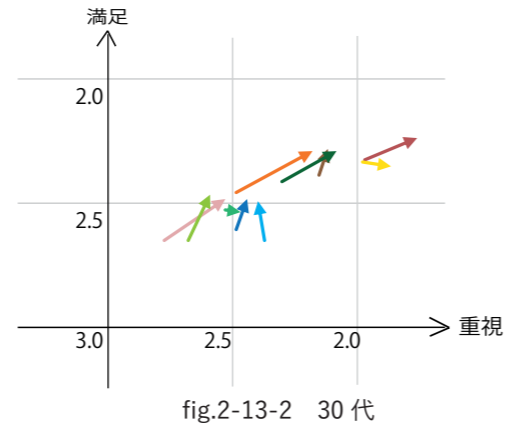
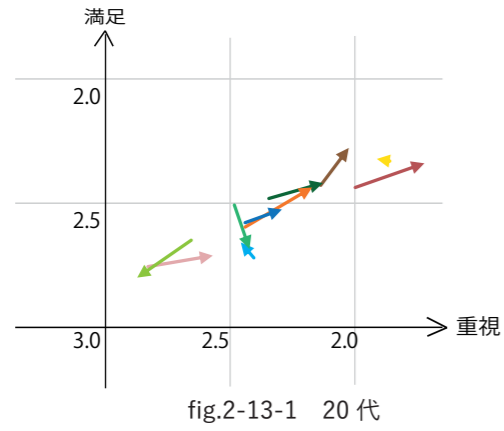
fig.2-13は、所得機会の価値観変化を年齢ごとに分けたものだ（次ページ以降に各機会の価値観変化のチャートを掲載している）。「自由な働き方」、「プライベートの充実」の変化は50代、60代が大きいですが、各年代での現在の位置関係には、大きな差はみられない。「プライベートの充実」、「転職・副業のしやすさ」、「近くなくても通勤しやすい」が重視・満足されるようになることから、各年代において所得機会から消費機会、共同生活機会の充実にも関与すると思われる価値観変化がみてとれる。

モノ消費（fig.2-14）において価値観変化を見ると、20代では効率の3項目「外出しないで済ませる」、「安くて手軽」、「時短」など、短い時間で済ませることが重視されるようになったが、60代では効率の項目のうち「外出しないで済ませる」、「自宅の近くで買い物」、「安くて手軽」など、自宅や、その周辺で消費することが重視されるようになった。30代、40代は価値観変化が少ない。

コト消費（fig2-15）は、「外出して行う」で各年代の満足度が低下する中で、特に60代のそれが顕著となる。要因として、60代はコロナウイルスでの重症化リスクが高く自粛の必要性が増すことと、体の衰えにより外出への意欲を失うことなどが考えられる。

共同生活機会（fig2-16）は、テレワーク日数ごとの分布では価値観に大きな変化がなかったが、年代で区切ると差が現れた。10項目のうち、「交通」が重視・満足され、「地域活動への参加」が重視・満足されないことは各年代で共通である。40代の子育て世代で「教育施設への通いやすさ」、「家族や友人が近くにいる」項目が重視されるなど、年代ごとの特徴は育児をはじめとしたライフステージの変化によるものだと考える。

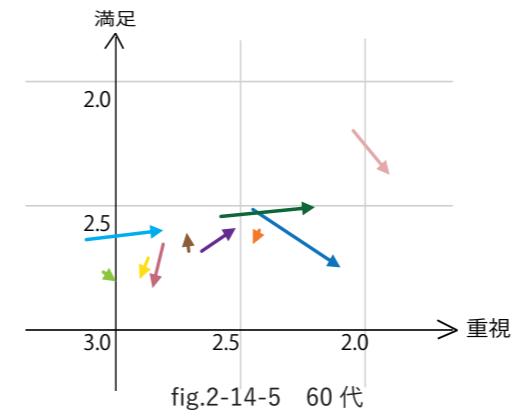
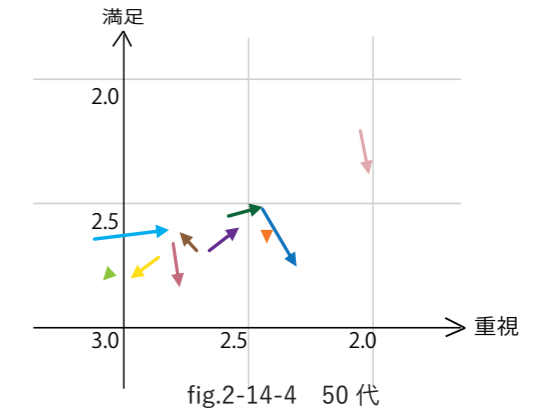
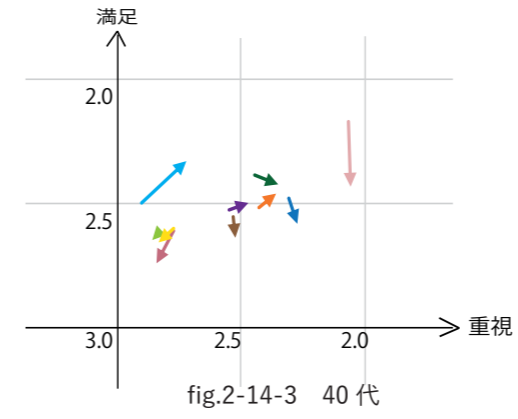
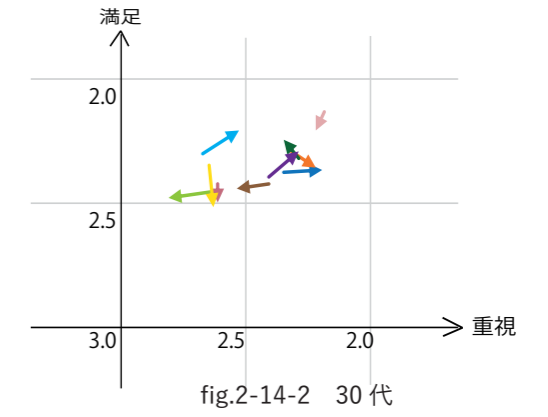
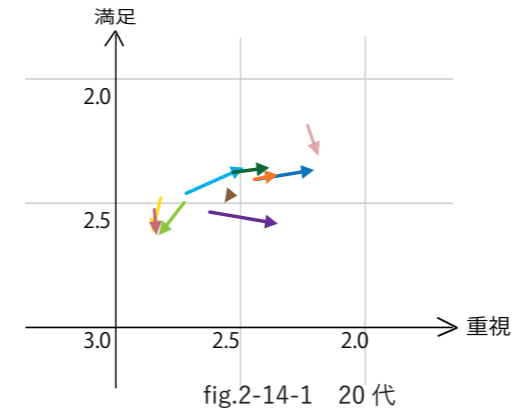
所得機会



- 収入
- 働きながら学べる環境
- プライベートとの両立
- 転職・副業のしやすさ
- 自由な働き方
- 職場の雰囲気
- 福利厚生
- オフィスが近い
- サードプレイスが近い
- 近くなくても通勤しやすい

fig.2-13 【世代別】所得機会の価値観

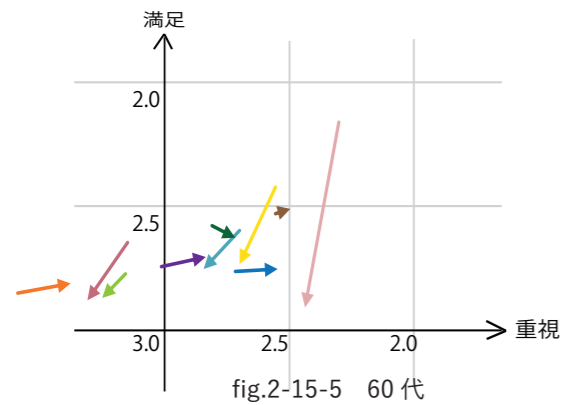
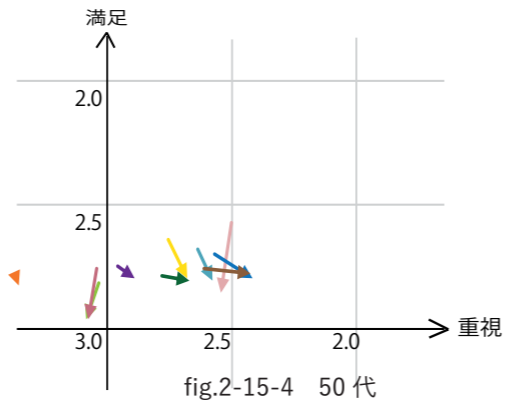
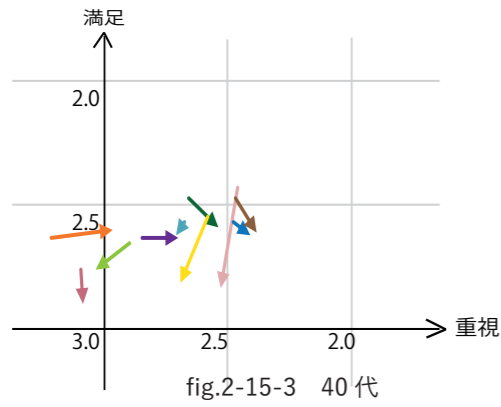
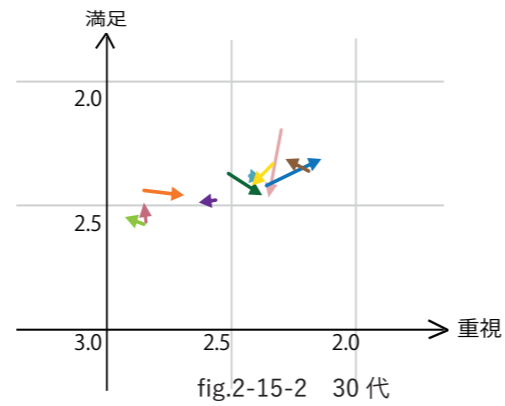
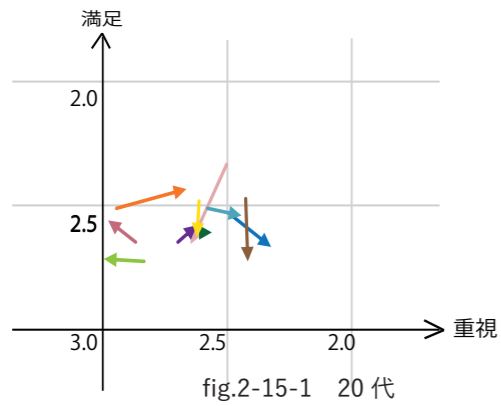
消費機会 モノ消費



- 外出しないで済ませる
- 安く手軽
- 時短
- 自宅の近くで買い物
- 職場の近くで買い物
- 実物を見る
- 高くても気に入ったもの
- 特定の場所に行く
- 時間をかける
- 家族・友人と一緒に

fig.2-14 【世代別】消費機会 -モノ消費- の価値観

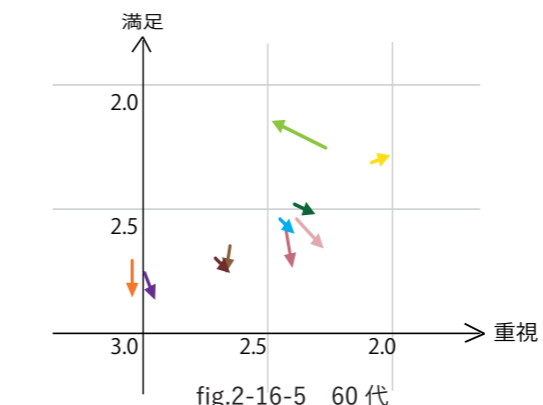
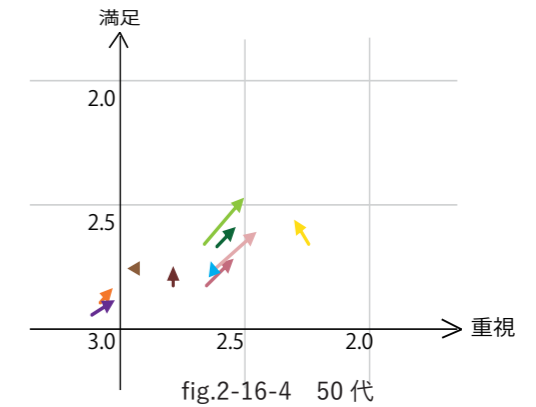
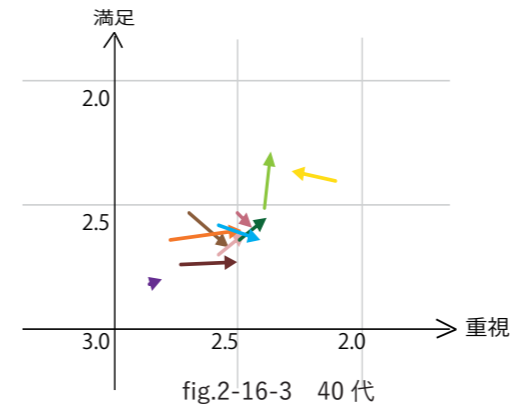
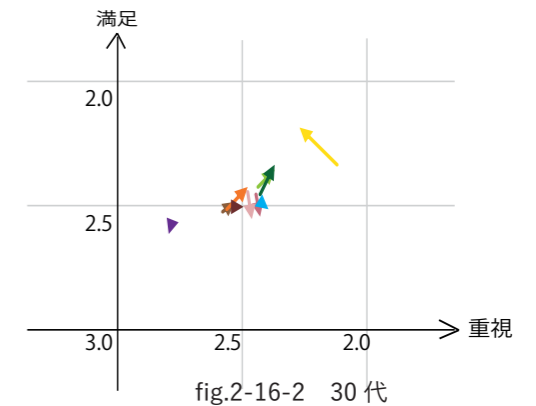
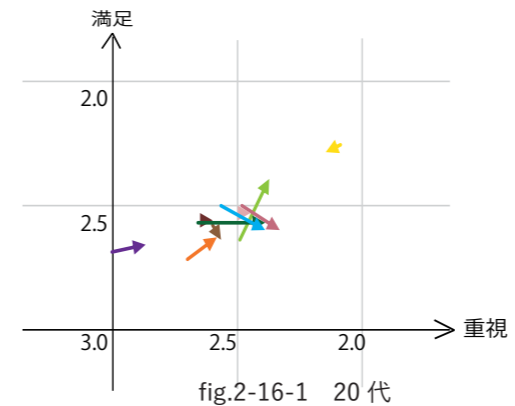
消費機会 コト消費



- 外出しないで済ませる
- 安くて手軽
- 時短
- 自宅の近くで買い物
- 職場の近くで買い物
- 実物を見る
- 高くても気に入ったもの
- 特定の場所に行く
- 時間をかける
- 家族・友人と一緒に

fig.2-15 【世代別】消費機会 -コト消費- の価値観

共同生活機会



- 自然が豊か
- 街並みや地域のイメージ
- 公共施設・サービスの充実
- 医療機関の充実
- 教育施設へのアクセス
- 交通の便
- 家族や友人が近くにいる
- 家族や友人と過ごす時間
- 地域活動への参加
- 刺激が得られる

fig.2-16 【世代別】共同生活機会の価値観

同居人数による変化の差

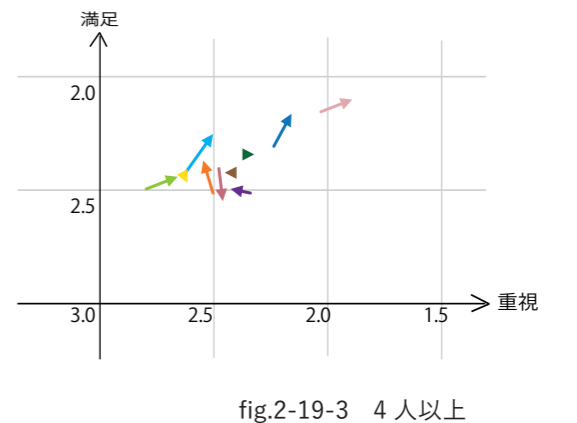
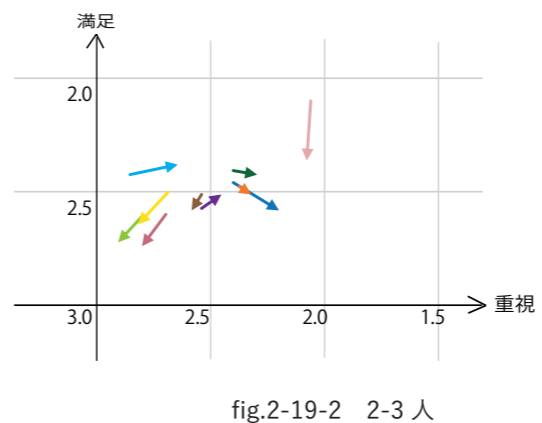
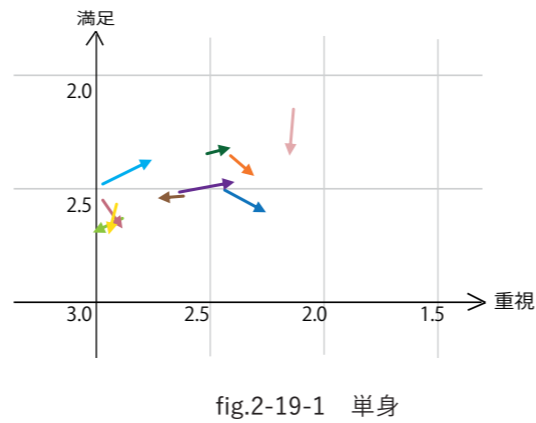
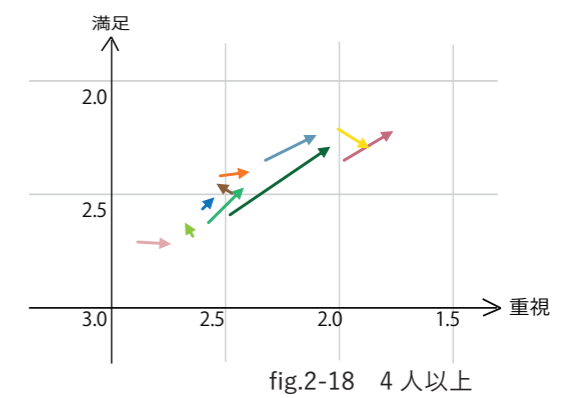
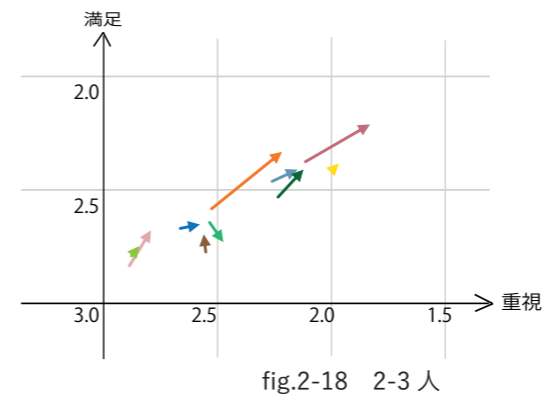
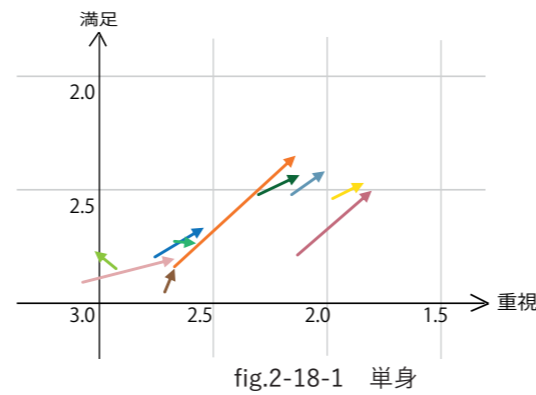
こちらでは、同居人数による価値観変化の違いをみた。内訳は fig.2-17 の通りだ。全体的に、同居する人数が多いほど所得機会を重視・満足する傾向がある (fig.2-18)。チャートで目立つのは、単身、2,3 人と比較した時に、4 人以上の同居において「自由な働き方」の価値観変化が小さく、「近くなくても通勤しやすい」が大きく重視・満足される点だ。「自由な働き方」は単身の価値観変化が最も大きい。コロナ禍以前の満足度が他より低い値であるため、現在の重視・満足度を比較すると他 2 つの群と大差ない。「プライベートとの両立」は、単身の満足度が低い。

「自由な働き方」は、単身の方が家でも同居人がいないため気を使わずに仕事ができる、逆に同居人がうるさく仕事に支障をきたすことがない、生活リズムを変えやすいなど、働き方を変化させる上での制約が少ないため、大きな価値観変化につながると考えられる。4 人以上の場合だと、「自由な働き方」といった、自らが働く上でより良い状態を求める価値観変化よりは、「近くなくても通勤しやすい」といった、自分以外にも同居人の生活のしやすさを考える価値観変化（例えば、自分の職場に近い場所に住むというよりは、子供が小学校に通いやすい場所に住み、職場までは遠くてもアクセスしやすければ良いと考えるようになること）につながりやすいのではないかと。

モノ消費 (fig.2-19) も人数が 4 人以上の群の満足度が高

く、コロナ禍以前と現在とを比較して、大きな満足度の低下も見受けられない。単身では、効率の項目を中心に、よ

り重視するようになる価値観変化が起こった。他の機会(コト消費、共同生活)には目立った特徴は現れなかった。

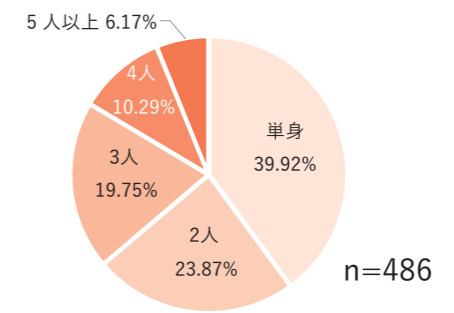


- 所得機会
- 収入
 - 働きながら学べる環境
 - プライベートとの両立
 - 転職・副業のしやすさ
 - 自由な働き方
 - 職場の雰囲気
 - 福利厚生
 - オフィスが近い
 - サードプレイスが近い
 - 近くなくても通勤しやすい

- 消費機会 - モノ消費 -
- 外出しないで済ませる
 - 安く手軽
 - 時短
 - 自宅の近くで買い物
 - 職場の近くで買い物
 - 実物を見る
 - 高くても気に入ったもの
 - 特定の場所に行く
 - 時間をかける
 - 家族・友人と一緒に

(上段) fig.2-18 【世帯人数別】 所得機会の価値観

(下段) fig.2-19 【世帯人数別】 消費機会 - モノ消費 - の価値観



IT リテラシーによる変化の差

IT リテラシーでは、リテラシーの高い低いで分け (fig.2-20)、価値観変化をみた。所得機会において IT リテラシーの高い群の方が「自由な働き方」、「プライベートとの両立」の価値観変化が大きい (fig.2-21)。これは、IT リテラシーが高い方がコンピュータありきの働き方ができるため、オフィスではなく、自宅やその周辺でリモートワークしやすいからだと考える。一方で、個人の成長の項目（「収入」、「働きながら学べる環境」）は IT リテラシーが低い群の満足度が高い。「転職・副業のしやすさ」、「サードプレイスが近い」にも同様の結果が現れる。

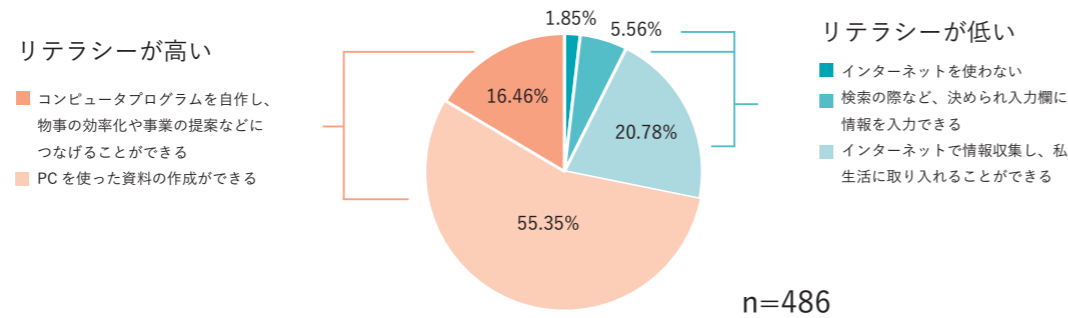


fig.2-20 IT リテラシー

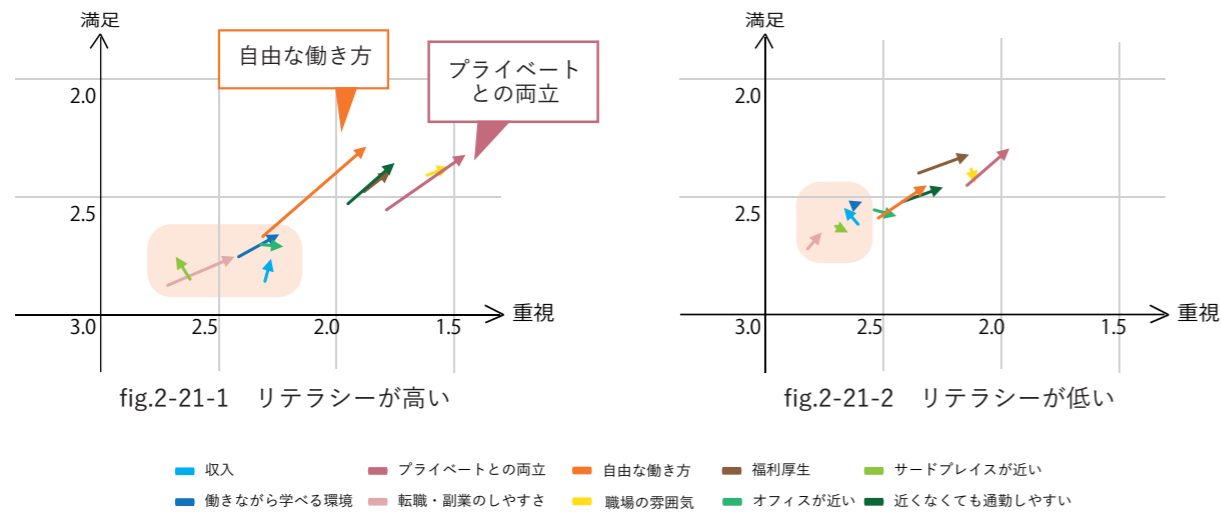


fig.2-21 【IT リテラシー別】所得機会の価値観

育児・介護への注力による変化の差

こちらでは、育児・介護に注力する群の価値観をみた (fig.2-22-1,2-22-2)。チャートから、これらの群は全体の価値観変化に比べ、共同生活機会をより重視・満足する傾向があることが分かる (fig.2-23)。育児に注力する群では、「自然が豊か」がより重視される価値観変化が起こった。また、「交通」の重視度が低下している。介護に注力する層では、コロナ禍以前より「公共施設・行政サービスの充実」が重視されなくなり、代わりに家族・友人が近くにいることが重視されるようになった。コロナ禍で介護世代の外出が一層厳しくなり、行政に頼るより自力でなんとかする価値観が表れたのではないかと推察される。

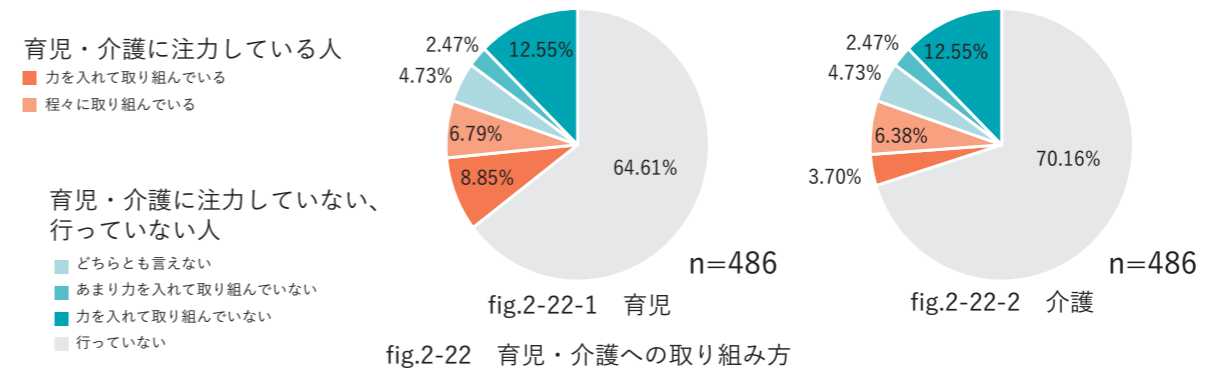


fig.2-22 育児・介護への取り組み方

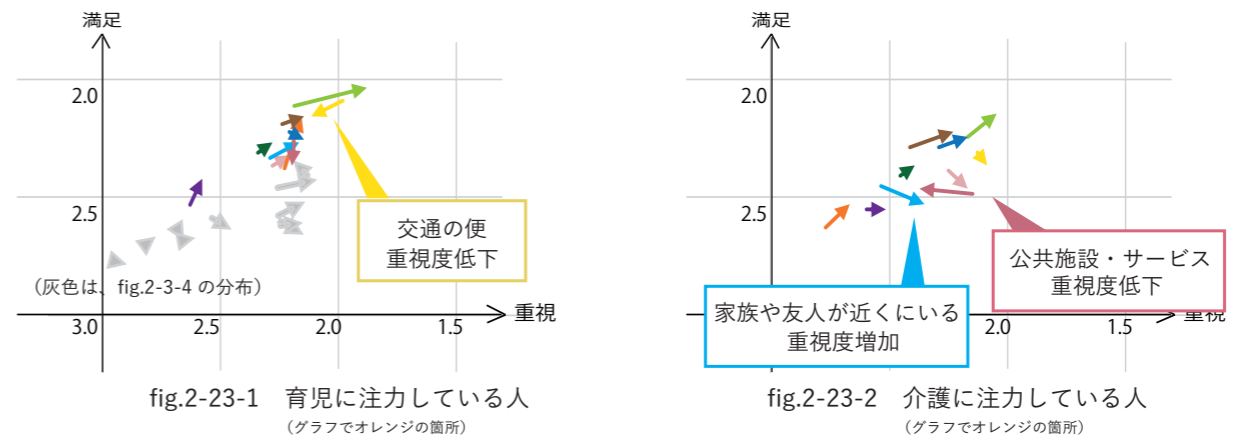


fig.2-23 【その他属性別】共同生活機会の価値観

まとめと考察

本章での各チャートに対する分析を整理し、全体の考察をする。

「コロナ禍における価値観変化の動向」では、アンケート回答者全体の価値観変化から、オフィスワーカーのコロナ禍以前と現在の価値観を比較、分析した。各機会10項目における価値観の変化量の平均は所得:0.195、モノ消費:0.131、コト消費:0.148、共同生活:0.0836 (table2-1 参照)で、価値観変化は主に所得機会に表れた。

所得機会の中でも特に「自由な働き方」、「プライベートの充実」の変化が顕著で、これはリモートワークの導入をはじめとした、コロナ禍における特異な環境変化が反映された結果だといえる。消費機会では「外出しないで済ませる」モノ消費がより重視・満足されるようになり、共同生活機会では「自然が豊か」が重視されるようになるなど、大きくないがそれぞれ一部項目に価値観変化がみられた。

「リモートワークの頻度は価値観変化に影響したか」では、属性を週にリモートワークする日数ごとに分け価値観変化をみることで、「コロナ禍における価値観変化の動向」では判断しづらかった、リモートワークがオフィスワーカーの価値観変化に与えた影響を分析した。全体をみると、リモートワーク日数が5日以上群は、他2群に比べて価値観変化が大きい。

日数ごとに分けた3つの群で同じ項目の変化量を比較すると、所得機会では「自由な働き方」、「プライベートとの両立」において顕著な差がみられた。他にも「近くなくても通勤しやすい」において差がみてとれる。これらリモートワークの日数の違いごとに差がみられたのは、所得機会の中でも個人の成長の「収入」、「働きながら学べること」といった今の所得機会を充実させる価値観変化というよりは、消費機会、共同生活機会の充実にも関与すると思われる価値観変化といえる。

しかしながら、消費機会、共同生活機会の価値観変化は所得機会ほどのインパクトはない。その中で項目ごとにみると、リモートワーク日数によっての価値観変化の差が現れるものがある。モノ消費は「外出しないで済ませる」、「時短」の変化量の差が大きく、5日以上だと、他2群よりもこれらがより重視・満足される。コト消費は「外出して行く」、「家族・友人と一緒に」の変化量の差が大きいが、こちらは3,4日、5日以上群の満足度が低下する。共同生活機会は5日以上群で「自然が豊か」、「街並みや地域のイメージ」、「公共施設・サービスの充実」、「家族や友人と過ごす時間」に変化があり、これらの項目がより重視される。5日以上群の消費、共同生活機会において、自宅やその周辺での活動により重点を置く価値観変化をみて取ることができる。それは、5日以上群は自宅近辺で過ごす時間が長いからだろう。

「属性ごとの価値観変化」からは、リモートワーク日数の他にも、年齢、同居人数、ITリテラシー、育児、介護の有無といった属性ごとに、価値観やその変化に開きがあることがわかる。

さて、リモートワークは個人レベルでの価値観変化にどう影響したのか。分析の結果をまとめる。コロナ禍以前と現在とを比較すると、所得機会における価値観変化が顕著であることがわかった。そしてその価値観変化はリモートワークの日数が多いほど大きく現れる (table2-6 参照)。変化量の差から個々の項目をみると、リモートワークによって価値観変化が現れたのは、所得機会の中でも今の所得機会を充実させる項目というよりは、消費機会、共同生活機会の充実にも関与する項目だとわかる。しかしながら、消費機会、共同生活機会をみると、全体的に所得機会の項目ほど目立った価値観変化はない。その中でリモートワークの日数が5日以上群に限ると、消費機会、共同生活機会において自宅やその周辺での活動により重点を置くような価値観変化をみて取ることができる。

以上の結果から、リモートワークの導入により個人は所得に関する特定の価値観が大きく変化したといえる。それは職場をより意識するようになる変化というよりも、職場以外をより意識するようになる変化だ。その意識は消費機

会、共同生活機会に向いているはずだが、リモートワークの頻度が多くないと、価値観変化にはさほど現れなかった。

その原因として、我々は2点考える。1点目は、今なお続くコロナ禍においてリモートワークがどう社会に浸透するかがまだ不透明であるため、オフィスと自宅などの場所2箇所以上を拠点とするハイブリットワーカーにとって、リモートワークと直接的な関係のない消費機会、共同生活機会には価値観変化が反映されないこと。2点目は、リモートワークは所得の場において導入されたので所得機会の価値観への反映は早い、消費機会、共同生活機会に反映されるには時間がかかることだ。また、そもそもリモートワークの影響は所得機会が主となり、消費機会、共同生活機会への影響力は限定的であるとの見方もできる。

いずれにせよ、リモートワークは社会や個々の生活に「浸透中」であり、我々の価値観は今なお刻々と変化する。この章の価値観変化のデータはコロナ禍における一時のものであり、将来的にはリモートワークは所得機会のみならず消費機会、共同生活機会の価値観変化にも大きく影響を与えるかもしれない。

我々は、前章（1. 暮らしの組み立て方－住まいと仕事、そして－）では、リモートワークの普及を経て3つの機会の重要度はそのまま、居住地の重心が消費機会、共同生活機会の方へとシフトしていくと予測した。この分析からは、その変化の兆しはリモートワークの頻度の多い群の価値観変化に見出せるかもしれない。少なくとも分析結果から言

えるのは、リモートワークは所得機会における個人の価値観変化に大きく影響したということだ。個人が次の居住地を決定する際には、今なお変化する新しい価値観に従って住まいを選ぶことは間違い無い。将来的に大多数が高頻度でリモートワークすることを前提とした居住地選択をするようになれば、居住地決定のモデルは新しい形態へと移り変わるだろう。

（調査概要）

対象：過去1週間のテレワーク日数が1日以上のおフィスワーカー

首都圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）在住

20-69歳の男女（年齢層は同率割付(*)）

従業員100人以上の企業に勤める

手法：インターネット経由のアンケート

実施日：2022年6月10日-15日

(*)「女性/60-69歳」のみ規定数を満たさず、36名を対象とした

調査からわかる基本データ

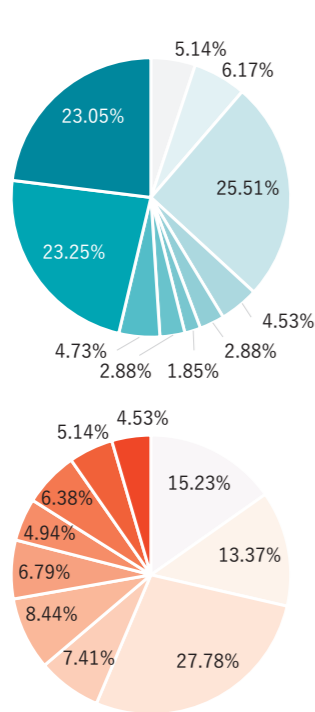


fig.2-24-1 オフィス

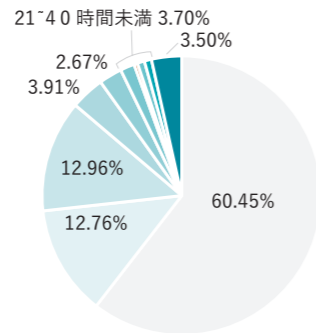


fig.2-24-2 自宅

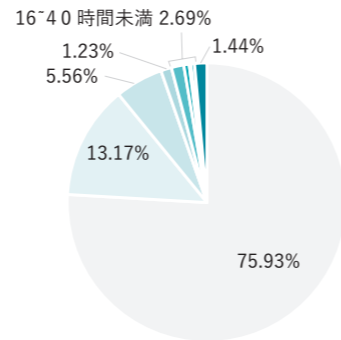
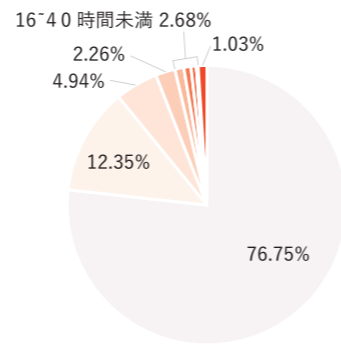
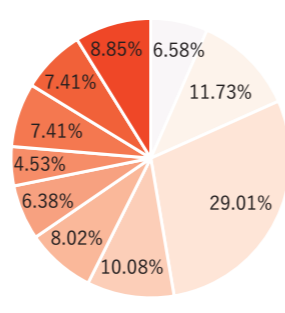
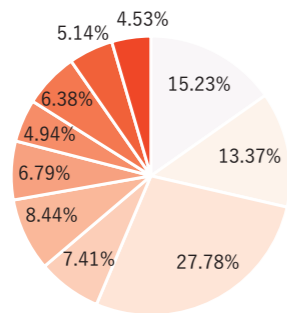


fig.2-24-3 その他

fig.2-24 【場所別】労働時間/週 (青はコロナ前、オレンジは現在)



- 0時間
- 1~6時間未満
- 6~11時間未満
- 11~16時間未満
- 16~21時間未満
- 21~26時間未満
- 26~31時間未満
- 31~36時間未満
- 36~40時間未満
- それ以上

- 0時間
- 1~6時間未満
- 6~11時間未満
- 11~16時間未満
- 16~21時間未満
- 21~26時間未満
- 26~31時間未満
- 31~36時間未満
- 36~40時間未満
- それ以上

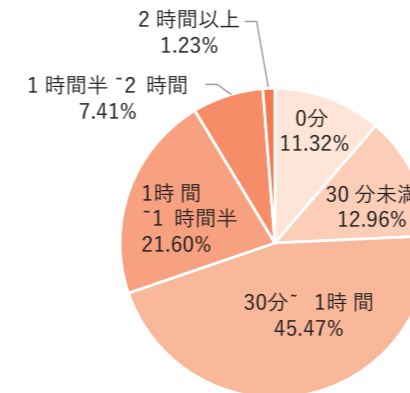


fig.2-25 通勤時間

fig.2-26-2 週1回出社

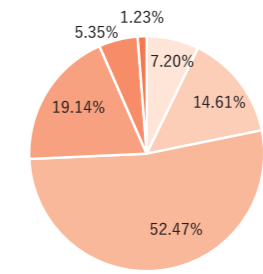


fig.2-26-1 現状のまま

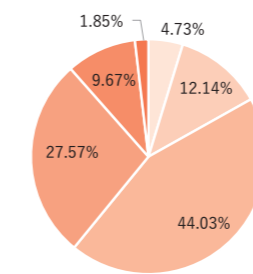


fig.2-26 【出社頻度別】通勤許容時間

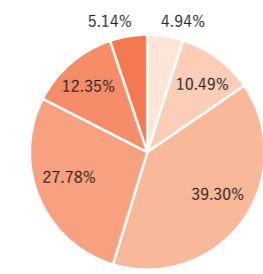


fig.2-26-3 月1回出社

- 0分 (通勤なし)
- 30分未満
- 30分~1時間未満
- 1時間~1時間半未満
- 1時間半~2時間未満
- 2時間以上

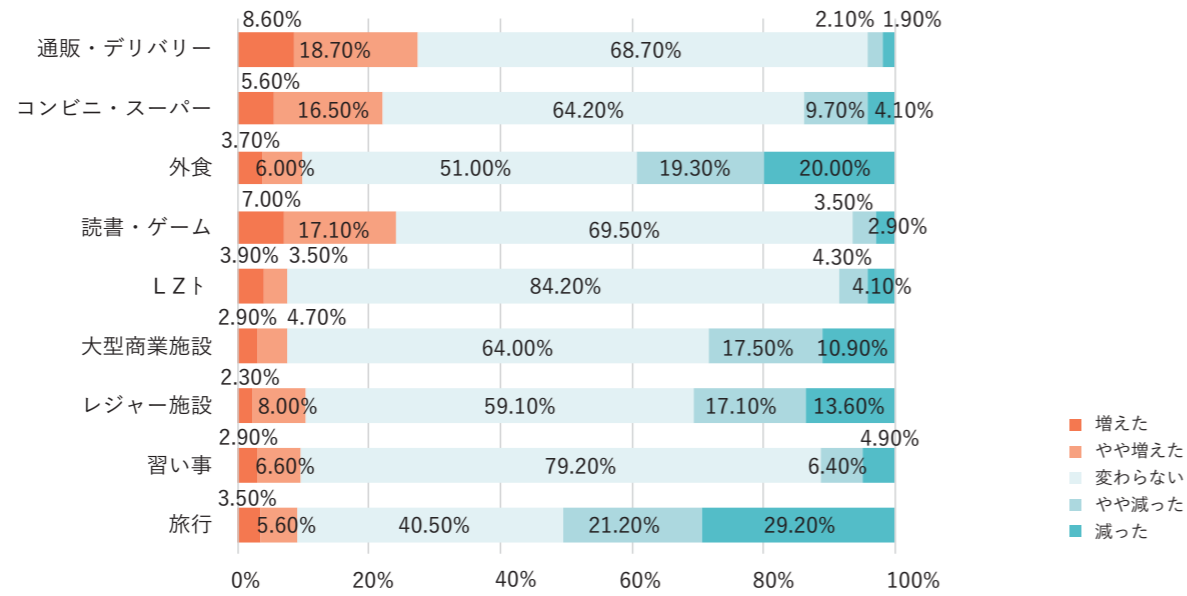


fig.2-27 利用頻度の増減

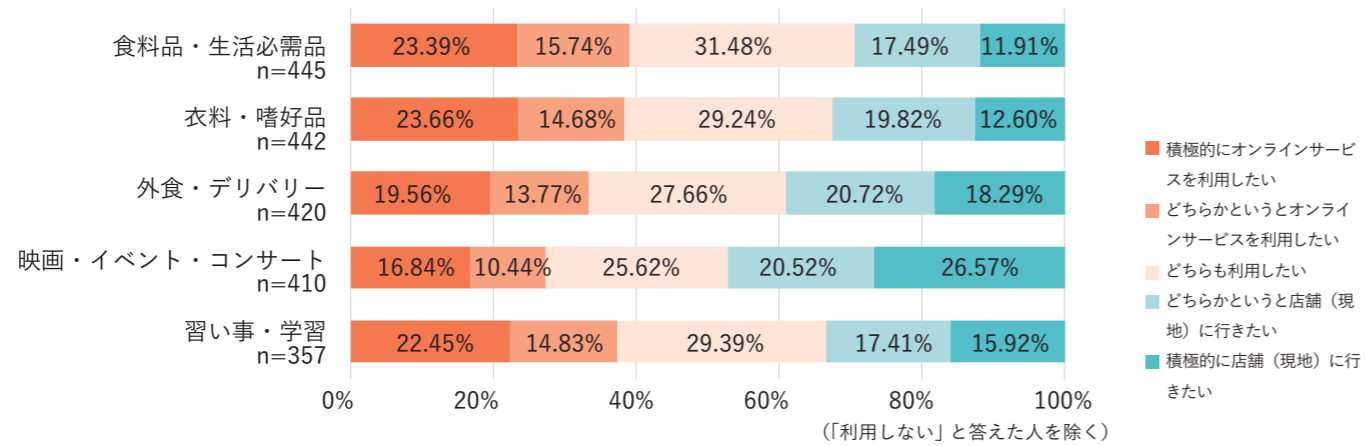


fig.2-29 消費機会のデジタル化に関する価値観

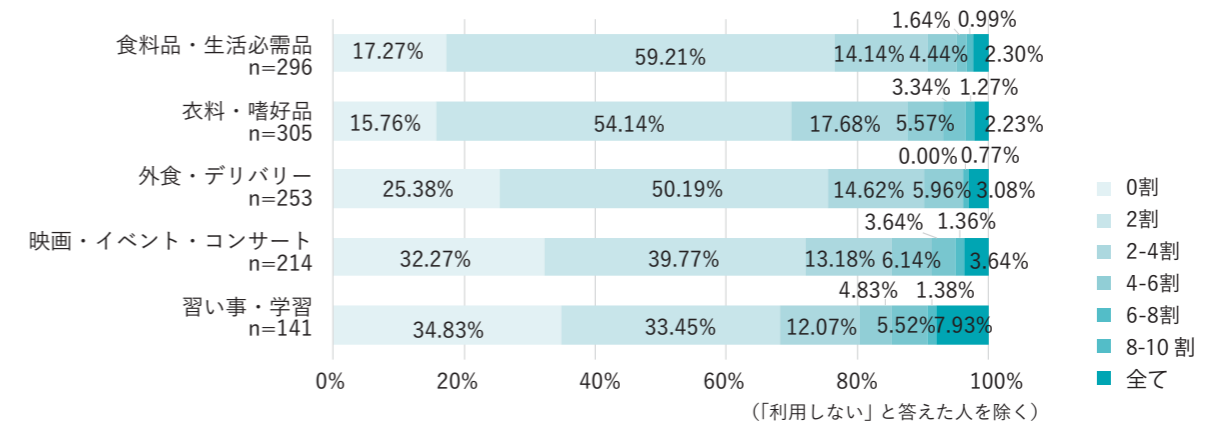
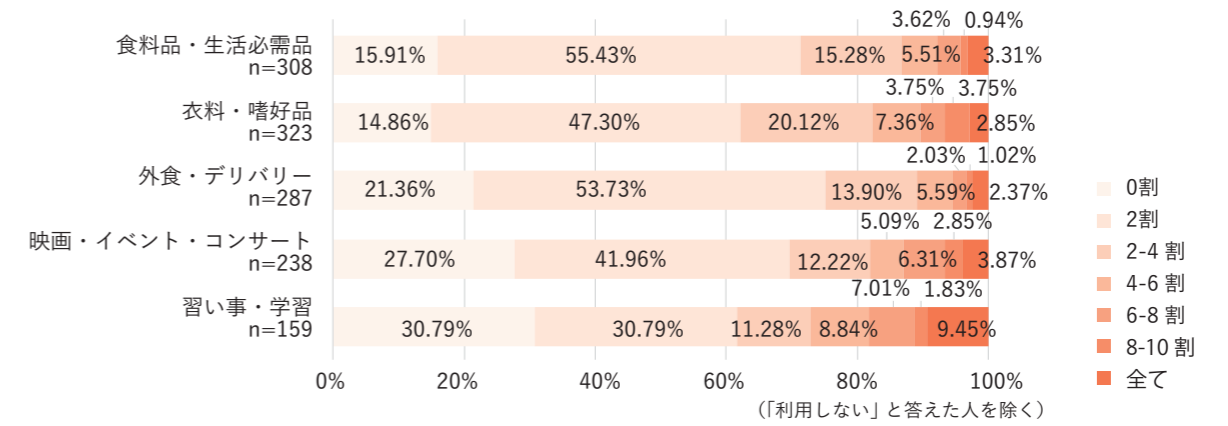


fig.2-28 オンラインサービスの利用率 (青はコロナ禍以前、オレンジは現在)



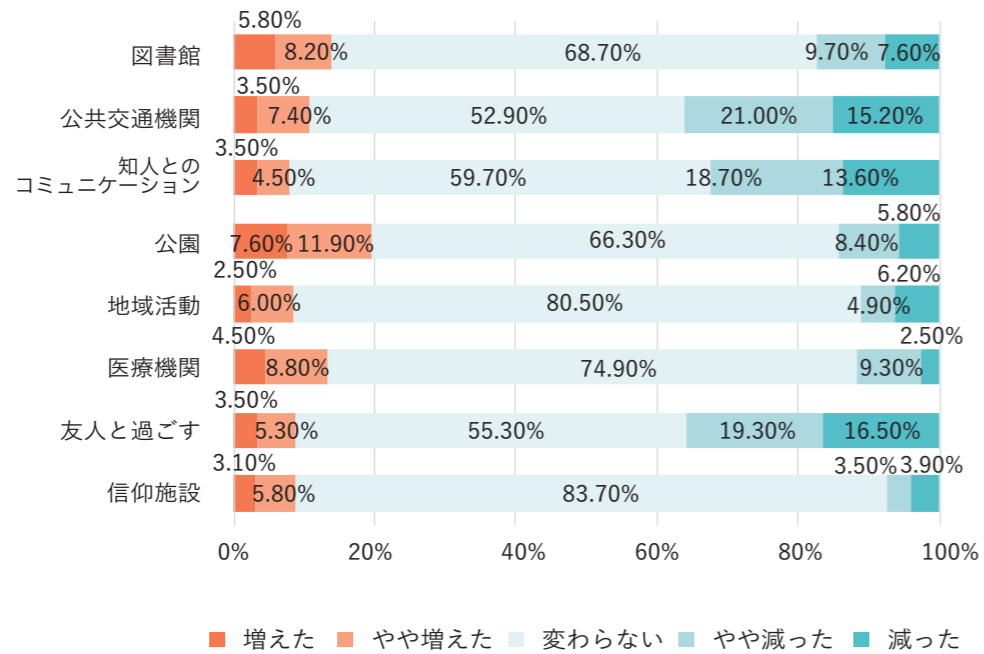
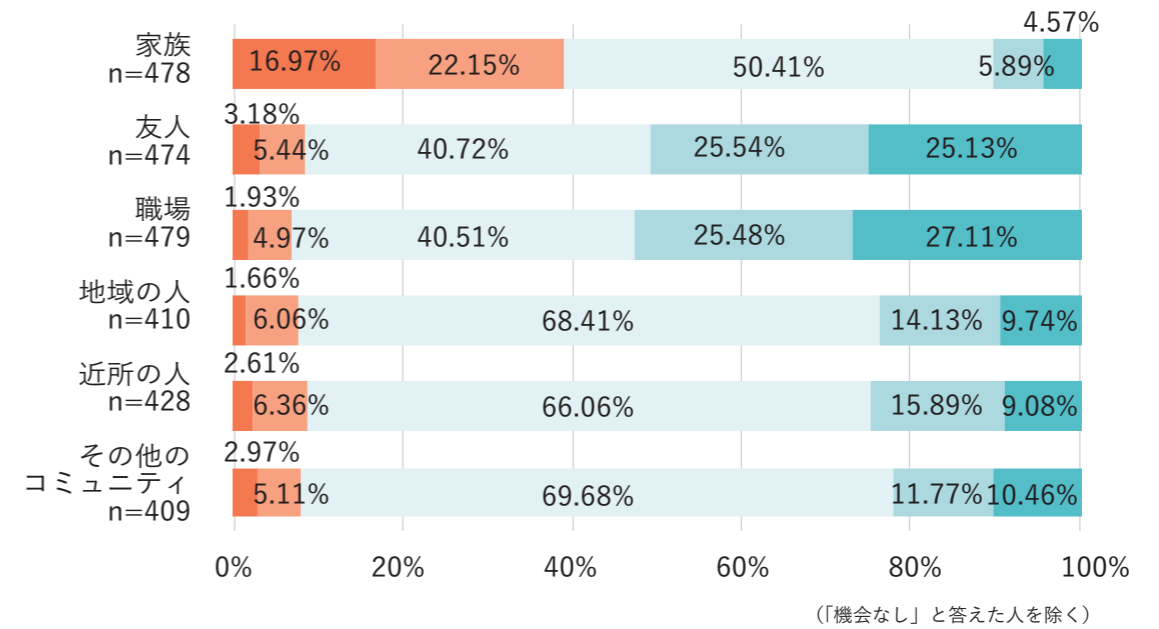


fig.2-30 利用頻度の増減



(「機会なし」と答えた人を除く)

■ 増えた ■ やや増えた ■ 変わらない ■ やや減った ■ 減った

fig.2-32 会話頻度の増減

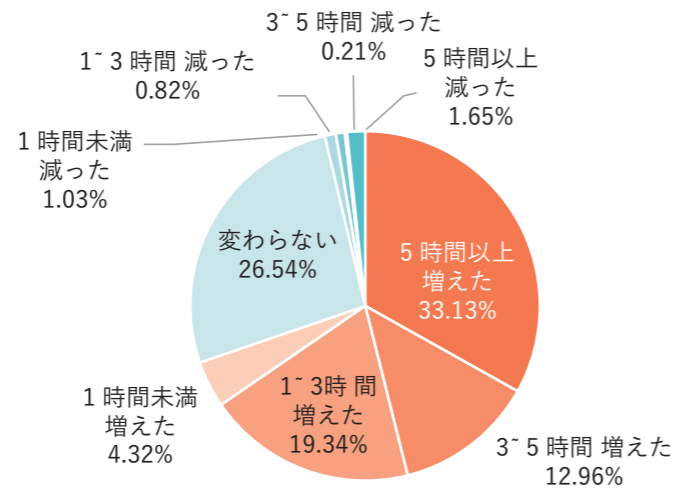


fig.2-31 自宅で過ごす時間

章末資料：価値観に関する設問 一覧

所得機会設問一覧	設問項目の分類
キャリアアップして高い収入を得ること	収入 個人の成長
働きながら学べる環境があること	働きながら学べる環境
周辺環境で雇用機会が充実しており、転職や副業がしやすいこと	転職・副業のしやすさ 個人の変化
プライベートとの両立ができること	プライベートとの両立
勤務時間や勤務形態が自由であること	自由な働き方 個人の働き方
職場の雰囲気が良いこと	職場の雰囲気
福利厚生が充実していること	福利厚生
オフィスが自宅の近くであること	オフィスが近い
オフィス・自宅以外の仕事場が自宅の近くであること	サードプレイスが近い
自宅の近くでなくても、交通の便がよく通勤しやすいこと	近くなくても通勤しやすい

モノ消費機会設問一覧	設問項目の分類
実際に店舗に行って実物を見ること	外出しないで済ませる 効率
安くて手軽であること	安くて手軽
時間をかけずに素早く済ませること	時短
自宅の近くで買い物ができること	自宅の近くで買い物
仕事場の近くで買い物ができること	仕事場の近くで買い物
実際に店舗に行って実物を見ること	実物を見る こだわり
高くても自分が気に入ったものであること	高くても気に入ったもの
新鮮な食材や、特産品を手に入れるために特定の地域に出向くこと	特定の場所に行く
買い物のための時間を十分に確保すること	時間をかける
家族や友人と一緒に買い物をすること	家族・友人と一緒に

共同生活機会設問一覧	設問項目の分類
公園など周辺の自然環境が豊かで、リフレッシュできること	自然が豊か 土地固有のもの
町並み、景観、地域のイメージが良いこと	街並みや地域のイメージが良い
公共施設・行政サービスが充実していること	公共施設・行政サービスの充実 インフラ
病院や福祉施設、介護サービスなどが充実していること	医療機関の充実
保育園や教育施設が充実していて、自宅から通いやすいこと	教育施設への通いやすさ
交通の便が良いこと	交通の便
家族や友人が自宅近くにいること	家族や友人が近くにいる コミュニティ
家族や友人と過ごす時間を十分に確保すること	家族や友人と過ごす時間
地域コミュニティの中心となって、地域活動に積極的に携わること	地域活動への参加
新しい情報や刺激が得られること	刺激が得られる その他

コト消費機会設問一覧	設問項目の分類
サブスクなどを利用して、自宅ですること	自宅ですること 効率
あまりお金をかけずにできること	お金をかけない
隙間時間を利用して短時間でできること	短時間でできる
自宅の近くですること	自宅の近くですること
仕事場の近くですること	仕事場の近くですること
スポーツや博物館・美術館見学、旅行など、外出して行うこと	外出して行う こだわり
高くても自分が気に入った活動であること	高くても気に入った活動
山登りやサーフィンなど、特定の地域に根付いた活動であること	特定の場所に根付いた活動
趣味のための時間を十分に確保すること	時間をかける
家族や友人と一緒に活動すること	家族・友人と一緒に

3

働く場所と生業

鳴子温泉もりたびの会 加賀道さん・加賀浩嗣さん・齋藤理さんにインタビュー

聞き手：伊藤雄飛 佐々木央

自分がどこに住み、どこで働くのかという価値観がコロナ禍の経験で変わりつつある一方で、いざ行動に移そうと思うと、そのハードルの高さに尻込みをする人も少なくないだろう。

宮城県大崎市鳴子には、そんな時代に示唆を与えるような、新しい働き方と住み方をスマートに実践する3人、加賀道さん・加賀浩嗣さん・齋藤理さんが暮らす。彼らはリモートワークで他県の仕事をしながら、地域のまちづくりの仕事も、カフェも、観光のこともする。

人々の暮らしの選択肢の一つとして、いくつかの仕事を組み合わせながら地方で働くことの可能性を、加賀夫妻の経営する「準喫茶カガモク」で聞いた。

鳴子での暮らしの背景

— まず身近な話からということで、日頃どんな風に時間を過ごしていて、どんな風に外との関わりを持っているのか。どんな風な活動をして今に至ったのか。そして、これからどうしていきたいのか、目論見を含めてうかがえるといいなと思っています。

加賀道・加賀浩嗣（以下、夫妻） そんな大それた話はできないかもしれませんが、よろしくをお願いします。

— あともう一つ、私たちの関心事があって、それは地域で活動するときの行政との距離感です。皆さんは大崎市や鳴子エリアの自治体だけではやりきれないプロジェクトをやっていますよね。そうしたことに、積極的に関わっていたのか、それとも頼まれたからやったのか。もちろん、自分たちのやりたいことと接続しているからだと思いますが、公共性や共通善といったことに接続すると思うんです。

夫妻 なるほど。すごいテーマですね。

— そもそもの皆さんと鳴子との関わりを教えてくださいいただけますか。

加賀道（以下、道） 私は7年前、35歳のときに夫と子供2人と、義理の母も連れて東京から鳴子にUターンしてきました。そのときは東京の、ある財団に勤めていました。その財団は地域作りに対しても助成を行っていたので、そこに就職するときに「鳴子に帰りたいけれど、今のままでは何の知識もないから、何か地域作りの最先端のことが知れるところで修行しよう」と思っていました。

— 最初から鳴子に帰ってくるつもりだった、目論見があったということですか。

道 そうです。そして、全国のいろいろな地域作りの事例を見て回ったりしながら、10年ぐらいそこで働いていました。いつ帰ろうかとタイミングを見計らっていたところ、第二子をたまたま超未熟児で出産したんです。そこで、いいタイミングだと思い、育休が明けるときに「まだ子供が小さいから復帰が難しいんですが、在宅勤務をしてもいいですか」と言って切り込みました。上司は多分、私が東京で在宅勤務すると思ったはずです。「仕

事をするのは自分の地元の鳴子でもいいですか」と相談したら、最初は「え？」っていう反応で。当然ですよ（笑）。でも、しぶしぶ「いいよ」ということになりました。ということで、そのタイミングでここに引っ越して来ました。その当時は週5日、フルタイムで在宅勤務をしていました。

— 9時から17時まで働いて、週休2日でリモートワークしていたということですか。

道 当時は、財団でも在宅勤務をする人じたいが初の事例で。まだ全然 Zoom^(*) や

(*) Zoom

- Zoom 社が提供する Web 会議システム。



fig.4-1 濁沼 鳴子はこの火山を熱源とした温泉郷

Teams^{(*)2} もなくて、すごく不便な時代でした。たった7年前なのに、ずいぶん環境は変わりましたね。そこからだんだん鳴子の地に足を付けはじめて、週5日だった仕事を週3日にし、週2日にしてといった風に絞っていきました。段々、鳴子での仕事が始まったり、喫茶店（準喫茶カガモク）を始めたりしたので、去年からは週1日まで減らしています。当然、週5日で働いていたときと比べれば収入は激減しますよ。今はもうお小遣い程度しか稼いでいません。勤務日数が減ると財団の社会保障からも外れてしまうんです。でも、自分で選んで、鳴子でいろいろなことをしたいという意思で減らしました。今は喫茶店を始めて5年目になりますが、週末、金土日と喫茶店をやりつつ、その他の平日に鳴子温泉もりたびの会^{(*)3}の事務仕事をしたり、アコーディオンを弾いたりしています。

— もりたびの会やアコーディオンは稼ぎを生み出す仕事ではないのですか。

道 今は稼ぎにはなっていませんが、いずれは稼げたらいいなって思っています。鳴子に住んでいると、山が近い、自然が近いので、ちょっと疲れたときに、山の中に山菜を取り

に行ったりできるじゃないですか。この間も、事務仕事をやりつつ、夕方になったら草刈りをするかと思い立って、近くにあるキャンプ場の草刈りをしました。近くに全部あるので、自然と気軽に触れ合えたりするのがすごくいいなと思っています。

— 東京にいらっしゃるときは、毎日通勤していたんですよね。

道 そうです。通勤時間も片道、小一時間かかっていました。今の通勤時間は、徒歩1、2分です。鳴子に移り住んでから、東京へは出張でよく行っていました。コロナになってからこの2年は一度も行っていない。でもZoomとかいろいろなツールが登場して便利になったので、本当に不便はないですね。

趣味の木工を職業に

加賀浩嗣（以下、浩嗣） 私は理学療法士の資格を取るために京都で学生をしていたときに（道さんと）出会って、4年間は病院に勤めていました。元々趣味で木工はやっていて、こけし^{(*)4}には興味もなかったんですけど。結婚を機に仕事を辞めて、妻のいる東京

に引っ越すことにしました。それがきっかけで、思い切って趣味の方で何かできないかなということになり、木工を目指すことにしました。ただの木工というよりも、妻がいつかは地域作りのために鳴子に帰りたいという思いを持っていたので、いつの間にか伝統こけしとは少し違う、お面白いものを作れないかなと、こけし雑貨を作るようになりました。東京にいる頃から、鳴子にあるこけし祭りに出店させてもらったりして。当時、都心部では第3次こけしブームというのがあって、結構都会の女性に需要があったんです。

道 「こけじょ」っていうね。



fig.4-2 「準喫茶カガモク」の窓際に飾られたこけし

(*)2 Teams

- Microsoft 社が提供するコラボレーションツール。

(*)3 鳴子温泉もりたびの会

- 鳴子温泉地域の旅館や飲食店、林業家、クラフト関係者、教育機関者等からなる協議会。自然体験、文化体験、環境体験という3つの軸で事業化へ向けて構築を進めている。齋藤さん、道さんは事務局に務める。

(*)4 こけし

- 鳴子はこけしで有名。鳴子こけしは200年以上の歴史を持ち、「宮城伝統こけし」の一つとして国の伝統工芸品に指定されている。現在では大人の趣味・観賞用としての人気も高く、土産品の定番となっている。

浩嗣 そんな中、妻も言っていたように、子供の出産がきっかけで、都会の狭いところよりは自然があるところで子育てをしたいという思いに至り、鳴子に帰ってこようとなりました。

鳴子に来てからは、こけしを作りつつ、人が集まる場所が欲しいなと思うようになりました。元々趣味でコーヒーを焙煎して飲んでいたので喫茶もいいな、木が好きだから喫茶店を自分で建てるか、とほぼセルフビルドで店を建てました。都会だと、土地を買ってお店を建てる。あるいは賃料を払って物件を借りることになると思います。でも、こういう場所だからこそ、自分でできるんじゃないかと感じてチャレンジしました。

今は、木工の仕事と、東北大学フィールドセンターの先生が週1で勤務してくれる技術補佐員を探していたので、そこに勤めています。もともと大学時代の専攻は農学部だったから、面白そうだなと。アルバイトというよりも好奇心から応募しました。大学では、実験の補助をしながら、論文にも共著で名前入れてもらったりして。田舎で暮らしながら学術的なところにも関われる。こういうことって、都会に暮らしていてもなかなか無いことだと思うんです。稼ぎは少ないですけど、

お金自体、あまり使わないので、支出も都会で暮らしていた頃と比べたら少ないです。自分としては、金銭的なプラスマイナス、収支はあまり変わっていないような気がしています。

ただ、人生のプラスマイナスは違って、都会にいと月～金曜日の5日間は、我慢して働いて、土日は楽しいことをするという生活だと思うんです。でも、それだと我慢している方が多いから損な気がして。鳴子での生活は2日我慢して5日好きなことをやれる、そこが逆転していることにすごく満足しています。

— ご自身に縁のない鳴子にいきなり移り住む。奥さんの出身地とはいえ、ハードルはあったのではないですか。

浩嗣 実際来てみるとわかるのは、こんなに面白い場所は他にないということなんです。妻が「いつか帰ってきたい」と言うのも納得できます。自然が豊かで、温泉もあって、こけしもあって紅葉は綺麗、それで冬は雪も降るし。これだけいろいろな特徴がある土地はそうそうないですよ。とりあえず自分の中では「面白そうだ」という感覚が勝った、と

いう感じです。

地方の暮らしと都会の暮らし

— 移住することに伴い、収入が減ることに心配はなかったですか。

浩嗣 妻に影響を受けて、何とかなるだろうって。つらい思いというか、お金を稼ぐためだけに何かを我慢してやるよりは、お金の心配はあっても、日々淡々とやってく方がマシだなという考えです。生きていくだけを考えれば、ここではそんなにお金はかからないんですよ。

道 生きていくためにかかる出費の基準が低いので。

— 何かを諦めた感覚はありますか。あるいは、何かを失った感じがしますか。これから、同じような人生を送ろうとする人が、恐れているであろうことなので、あれば教えてください。

道 ほぼないですけど、都会だと飲み屋に行ったり飲み会に参加するとか、そういうイベ

ントは減りましたね。

一 消費行為はお金を払うだけでなく、その対価として楽しさとかありがたさみたいなものを得ています。その機会が減るということですよね。都会の良さはそこで、本屋はある、映画館はある、デパートはあるといった具合に消費に接する機会が多い。そこから得られる快樂が多いから住むというのは都会暮らしの大きな理由だと思います。

道 その代わりとして、喫茶店を使って月に

1回カレーの会を開いています。人が集まってワイワイ飲み食いする場は自分で作る。

鳴子に新しい公民館が建つときには、ちゃんとした図書室を作ってほしいと、いろいろな活動をしました。公民館には、子供のスペースが広くとられています。何か自由に使える空間が欲しいと要望を出したら、それを聞き入れてくれました。

都会にいるときは、ただ会社と家、家族の関係があるだけで、自分の存在が何にも関係していないような感じがしていましたが、ここだと、自分たちが動いたこと1個1個が

すごく意味があるというか、効き目があるというか、何かそういう自己効力感みたいなものが感じられます。そういう意味で、満足度が高いというか、失ったものよりもずっと多くのものを得られている感じがします。

一 地方に移住するときに気になるのが、自分たちの問題以上に子供のことでよね。自然の中で子育てができるということと、現実問題として、地域に高校がなかったりするという問題が同時にあるわけで。

道 ちょっと強い言い方もかもしれませんが、子供を自分のコントロール下に置いて、良い学校に進学させたい、良い就職先に勤めさせたいと考える人は、田舎に移住しない方がいいと思います。反対に「何をしてでも生きていける子だから大丈夫」と信じて、子供の判断を尊重する、そういう姿勢の人には向いているはずです。もし行きたいなら進学校に行けばいいし、そうじゃなければ自分の好きなことやればいい。私たち自身、あまり自分で子供をコントロールしたいと思ってないので、その子がいっぱい自然の中で遊んだりした後、その経験から大人になって、人間として何か好きなことをしてくれればいいや位



fig.4-3 加賀さんらの意見が反映された鳴子公民館の図書室

に考えています。

浩嗣 こういう土地で育って、生きる力というか、クリエイティビティみたいなものを身につけていけば多分、自分で切り開ける。その力をつけてあげれば、多分自分で問題を解決できると思うので、都会に出た時も逆にそれを活かせるでしょう。ここに残るにしても、そのアドバンテージを活かした生き方ができれば良いだけだと思います。

地方移住のホップ・ステップ

ー では、続いて齋藤さんがどうしてここにいて、今の仕事をしているのかという流れを話していただけますか。

齋藤 僕は、地域おこし協力隊^(*5)として鳴子に移住しました。ここに来る前は、自動車のシステムを開発していました。5、6年前に協力隊としてきて、市役所の観光部門と、市の第3セクターの観光公社で、グリーンツーリズムや農家民泊を担当していました。その時は地域の観光をどうするかをミッションのひとつとして掲げ、教育旅行の受け入れを1年間やっていました。

移住にあたって、エネルギーの地産地消に取り組みたいと考えていました。すぐにその課題に関われなくても、関係者との出会いを求めて活動をしていたら、大場さん^(*6)と出会ったという感じです。そのきっかけになったのは、『里山資本主義』^(*7)という本を読んだというのもあったんですけど、元々僕の祖父が自分で畑を作り、風呂は薪で炊いて暮らしているのを見ていて、そういう暮らしができればと考えていました。システムエンジニアをやって、お金を得て暮らす生き方をしていたけれど、そうじゃないやり方もあるんじゃないかと思ったときに、協力隊の話があり、これを機に飛び込んでみようと思ってここに来ました。

ー 協力隊への参加を迷う期間はありましたか。

齋藤 協力隊の話を知ってからはすぐでしたね。それまでは、地方への移住をどうやって実現させたらいいんだろうかと手段をいろいろ探しました。公務員になろうかと思ったり、その地域でできる仕事って何なんだろうといういろいろ考えた時期はあったんですけど、その中でも協力隊が入口として一番いいんじゃない

いかと思ったんです。

ー 他にも地域の選択肢はあるなかで鳴子に来た理由は何ですか。

齋藤 鳴子の山並みに惹かれたのが一番の理由ですね。縁もゆかりもありませんでしたが、小さいときに遊びに来た場所だったので、ポジティブな印象はありました。協力隊の面接前に、自分の目で大崎市内を見て回った時に、「この景色で暮らしたい！」と。

道 齋藤さんは、3年任期がある協力隊を1年で卒業したんですね。

齋藤 そうですね。協力隊は最長3年まで働けるんですけど、もっと他のやり方があるんじゃないかと思って、1年目で早めに卒業しました。

協力隊で働いているときに、鳴子はモノの消費地なんだということに気づいたんですね。一方で、鳴子のお隣、岩出山という町には農家さんはじめ生産者さんがたくさんいて、日本一お客さんを集める道の駅^(*8)があります。季節を通じて作られるモノの種類がわかるし、なぜお客さんに選ばれて、売れて

(*5) 地域おこし協力隊

- 都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR等の地域おこし支援や、農林水産業への従事、住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。

(*6) 大場さん

- 大場隆博さん。NPO法人しんりん 代表理事、鳴子温泉もりたびの会 会長。

(*7) 『里山資本主義』

- 藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く』KADOKAWA（角川 one テーマ 21），2013年

(*8) 日本一お客さんを集める道の駅

- 道の駅「あ・ら・伊達な道の駅」。国道47号線沿いで大崎市の中心に位置する。旅行専門雑誌『じゃらん』の企画内で行われた「全国道の駅グランプリ」で、2020、2021年の利用満足度1位を獲得している。

いくのかがわかるんじゃないかと考えて、そこで働きました。おかげで、生産者さんともつながれたし、併せて鳴子の宿の仲居をしていたこともありまして、地元の中学生に受験勉強を教える、家庭教師も経験しました。

その1年で、自分はいろいろな手段で稼げるんだということに気づいたんですが、やはり地域で事業を始めようと思ったときに、視野を広げて経営を考える必要を感じました。稼いだお金をどう回すかとか、事業をどうやって作っていくのかが重要になってくる。そんなことを漠然と考えていました。

鳴子のとある宿で、湯治会という飲み会を毎月6の付く日にやっていて、そこで出会った仙台のIT会社の社長さんが、新しくスタートアップで会社を立ち上げようとしていました。この会社に勤めれば、起業をして資金調達をしながら事業成長させていくなかで、経営の観点とか、事業に関する資金の流れを身につけられるぞと。その会社は地方創生も手掛けていることが魅力で、会社に所属しながら鳴子にいる選択肢もありえるのではと考えて「働きたい！」と社長さんに直談判したんです。

道 彼は、一時期仙台のオフィスに勤めてい

て、週末だけ鳴子に帰ってくるっていう生活をしていました。

齋藤 鳴子に移り住んでから3年目に、2拠点生活を始めて、鳴子に家がありつつ、富谷^(*9)の実家から仙台まで通勤するという生活を送っていました。

— 2年目は直売所をやり、いろいろな手伝いをしていて、その間にIT系の社長との出会いがあり、仙台の会社に就職。鳴子での生活はいったんやめて、3年目からは2拠点をスタートという認識でいいですか。

齋藤 そうですね。直売所を辞めた後はフルタイムでITの仕事をしていました。平日は富谷の実家において、土日祝はこっちに帰ってきて。もりたびの会はそのときから準備が始まったので、もりたびの会のことをしたり、地域の活動をしたり、ガイドをしたりしていました。

鳴子の未来を語る拠点

— 3人はどこで出会ったんですか。

齋藤 協力隊でやってきて、地域の人たちに挨拶をして回った時が、最初の出会いでした。お店（準喫茶カガモク）に行くようになってから、一緒にカレーの会をやろうっていうことになって。

道 私がやりたいと言って、じゃあ一緒にやろうということで。

— カレーがきっかけだったんですね。地域で何かやりたいと言った時に、一緒にやりましょうっていう人が周りになると急に関係性が生まれますよね。

道 ちょうど準喫茶カガモクが建つてすぐの、人が集まる場を作ったので何かをやりたいたって思っていたときでした。カレーの会がきっかけで繋がった人は意外と多いです。

カレーの会の実態は何かというと、月1回、第2火曜日の夜に集まって会費1,000円を払ってカレーを食べながら、誰か1人が何かをプレゼンするんです。地域のこと、例えば「これからこんなことをしたいと思っているんだ」みたいなことをプレゼンして、みんながカレー食べながらそれを聞く。そんな会を何度かやっているうちにいろんなアイディ

(*9) 富谷
- 仙台市の北側に位置する郊外ベッドタウン。2016年に単独市制を施行し、黒川郡から独立して富谷市となった。

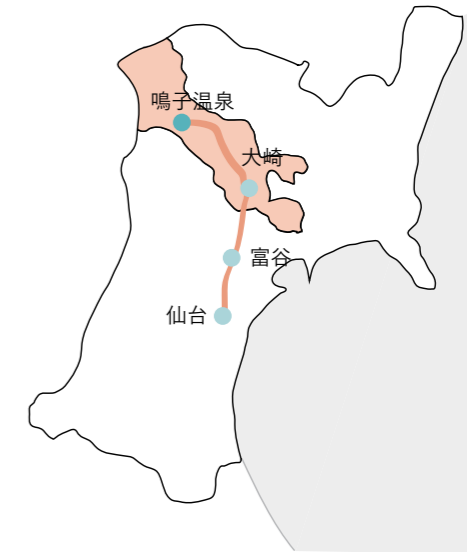


fig.4-4 各地域の位置関係

アが実ったりするようになりました。

例えば月1回、森遊びをしているんですが、それも「鳴子には貴重な資源がすごくいっぱいあるのに使われていないのはもったいない」というので、子供たちに自然教育をする場を提供できないかと思ったのが始まりでした。自然教育というとかっこいいですが、実際は森で遊びまくる。そういう場の提供を介して出会った人たちが結構いて、人脈がどんどん広がっていくんです。

マルチキャリアの形成

— 齋藤さんは地域での活動もしつつ、IT会社で働いていたわけですね…。個人的なイ

メージですが、IT系は勤務時間が長くて激務なのではないかと。

齋藤 必要な時には長くやってきましたけど、そこはバランスをとって、なんとか週5日で収まるように働いていました。出張だったり展示会に出展する際には鳴子から現場に飛んで行って。でも基本は鳴子で働いていました。ただ、自分の中で、いよいよ地方に戻ったことだし、地方創生の仕事に本腰を入れたいと思い、会社と話し合いました。

— ある種の社内ベンチャーのような形をとって、福利厚生とか保険とかはフルタイムの時と変わらないようにしているのですね。

齋藤 そうですね、去年から、そういう形で契約をするようにしました。

— 地方創生の仕事をする際に、肩書はどう使い分けていますか。鳴子で何かをやる時は仙台のIT会社の看板で仕事を受けるわけではないですよね。

齋藤 今、僕の所属と食い扶持としては、4つのチャンネルがあって、まずは「コー・ワークス」という仙台のITの会社。もう一つは個人事業主として「SomeSpice」という屋号で活動しています。そこではガイドをしたり、地域の事業を自分でやる委託調整をしたりしています。あとは「もりたびの会」があって、もう一つが「VESTA CHP」。みなさんに見ていただいたサスティナヴィレッジ^(*10)にエネルギーを供給している施設の管理をやっています。

— マルチキャリアと言うとかっこよく聞こえますが、ひとりの人が全然違うことをバラバラにできるわけではないので、仕事がオーバーラップすることがあると思います。「これはどっちの看板で受けるべき仕事か」とか「経費はどう処理したらいいんだ」とか。そ

(*10) サスティナヴィレッジ

- 川渡温泉地区の里山に建つ自然素材の賃貸アパート。災害時にはエネルギーや水を自給自足できる。

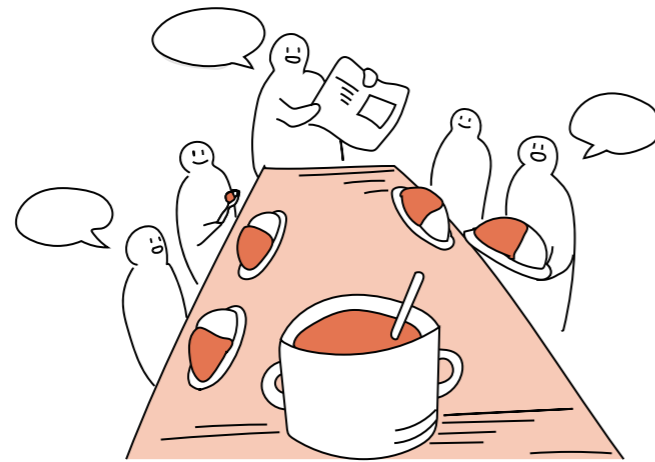


fig.4-5 鳴子の未来について語るカレーの会

ういったことが普通に起きてきますよね。そこはちゃんと説明をして、意識して言うのですか。

齋藤 確かに、マルチキャリアは華々しく見えますよね。いろいろな立場があって、いろいろな仕事ができるなど。実際にはそういった事態に直面して、どう透明性を確保して説明するか、関係者と調整するかということから経験を積んでいくものだと思います。割り振りとかバランスは本当に意識してやらないといけないですね。

地方の暮らしとITの相性

— 地方で働くこととITの仕事の接点というか、何か気づいたことはありますか。

齋藤 例えば、エネルギー施設の管理をする作業はほぼ完全にリモートで、遠隔で監視できるシステムを導入して行っています。地方に行くほど、リモートワークやIT、IoTは相性がいいんだなと感じているところです。

浩嗣 リモートで言うと、僕も「豆こけし」でワークショップ^(*11)をやったりしてたんで

すけれど、それをリモートでやることは全然想像していませんでした。以前、中国に生地や筆を送って、リモートで指導してくださいって言われたことがあって、今の時代ワークショップもリモートでできるんだと驚きました。

齋藤 現物は向こうにあるんだけど、技術はリモートで教える。

地方移住を実現させる条件

浩嗣 最初は多分「一般的」と言われるような暮らしをしていたけれど、もう少し違う生き方があるんじゃないかと少しずつシフトして行って今に至ります。これからの時代、大学を卒業してからそういう暮らしをする人たちが増えて行くんじゃないでしょうか。例えばインタビューの2人（伊藤・佐々木）もね、大学院を出てもしかしたらすぐに鳴子に（笑）。そういう先行事例が増えてくれば、若いうちから地方で働くことも選択肢のひとつになって、可能性が広がるんじゃないかなあと思いますね。

— 従来の地方暮らしでリモートワークをしようとする、その人にある種の高い専門性が備わっていて、離れていても仕事ができるし、どこにいても問題なく応えることもできる。そんなモデルが想定されたと思うんですよね。でも、皆さんの話を聞いていると、最初から地方でバリバリ仕事を受けますよという姿勢ではなく、何か自分ができることを探して、それをいくつか並行で行ったり、少しずつ移行しているイメージが強いなあと思いました。高い専門性を持っていなくても地域

(*11)「豆こけし」でワークショップ
- 準喫茶カガモクで行っている豆こけしの絵付け体験プログラム。



fig.4-6 齋藤さんらが手掛けるサスティナヴィレッジ

でやっていけるとしたら、ほかにどんな能力が必要だと思いますか。

齋藤 好奇心は大事なんじゃないかと思えますね。「百姓であれ」っていう好奇心みたいな。自分は百姓みたいなものだと思いはじめているんですけど、専門性を一つ持ってそれで完結するのではなくて、僕はスパイク^(*12)をいくつも伸ばして生活をしていて「いつか触手がどこかに刺さればいいな」というようなイメージを持って暮らしています。

— それは面白いですね。プロフェッショナルリズムというと、より能力を高めて、研いだという方向に向かう。それとはまた別な気がします。

齋藤 いろいろなことに興味があって、いろいろなことができることで参画できる舞台を広げているんだと思います。いろいろなことができるのと物事の見方も多角的になります。そうやって俯瞰的に物事を見られるようになると「あ、これとこれは近いな」とか「この人に頼もうかな」とその輪を広げることができる。それが強みなのではないのでしょうか。

浩嗣 プロフェッショナルリズムの原動力が違うのかもしれないですね。根底には好奇心とか、興味関心があって、それがゆえに掘り下げていく。人に言われてやるとか、稼ぎがいからやるという理由で専門家になるというよりは「すごく興味がある」「これが好きだ」というところから始めているので、気が付いたら仕事につながっていたというのが正直なところですね。

普通、趣味というと「趣味だから」と言って加減しちゃう。本業にはなりえないと。でも、そのハードルを取っ払って、とことんやってみたら、その先に仕事があったみたいな感覚ですかね。

道 私も似たような感じで、やっぱり好きなことをとことんやるというか。だから音楽も好きでやる。そしてそもそもの原動力は、ここ（鳴子）が好きだからここでやるっていう気持ちが一番です。毎年お祭りの時に子供たちがお囃子を演奏するんですね。でも、それがなくなりそうになったので、復活というか、立て直したいみたいなことをやりました。ここが好きなのでそういう活動もやる。全然収入は関係ないんですけど、そういう好きなことをやっていて、地域を作ったり継いでいく

ところもやりたくてやっています。

そういうことの一つで、温泉の浴衣の柄の手ぬぐいを作る活動をやったりだとか、自分の好きなことが次々と現れるんですね。出会ったら、まず、やる。その時に今まで持っていた自分のレーベルというか、なんの看板でやるかが役に立ちます。もりたびの顔だからできたり加賀道だからできたり、いろいろな肩書があるのでどこかにつなげてできる。だから、やりたい、好きだと思ったら即断できるんです。

浩嗣 仲間と好きなことを共感できることも大きいですね。仕事の契約的な仲間じゃないし、だからこそいろんなことを一緒にやれるというか。それぞれ違うけれども、方向性は大体一緒だとか、そういうところの共感性があるから繋がってやっていけるのかなと思います。

鳴子の場合は、移住してくる人たちの間では共感し合えるところが多くて。過疎地の人口減少下だけでも、減っている中であえて来る人はより強い気持ちがあり、何かやりたい、役に立ちたいと思って来るんですよ。だから、人数は少なくとも主体的なんです。「誰かがやってくれるだろう」というのとは逆の意味

(*12) スパイク

- 何かを捕えるための触手のようなもの。

で、思いや行動を濃縮するフィルターが存在すると思っています。

— 移住してきた方は積極的だという話の一方で、現実的な話、元々鳴子に住まわれている方の受け入れ態勢や雰囲気はどうなんですか。

齋藤 それはどっちも歩み寄りだなと。僕は奥さんができて子供ができるまでは鳴子に縁もゆかりもなかったのに、他人がぼんとしてきた状況なんですけど、なるべく草刈りとか、桜の剪定をしたり、みんなでやる場面にちゃんと居て、参加することを心がけています。田舎で悠々と暮らしたいと考えれば、そういうところは面倒なので顔を出さない人もいますけど、僕は本当にここが好きで、みんなと暮らしていきたいので。

浩嗣 僕はここ（準喫茶カガモク）を建てる時に10ヶ月くらいかけて作業していたので、建てている間に「よそ者が毎朝、日の出から夕方までなんかやっているぞ」みたいな感じだったと思います。でも、そういうコツコツやっている姿を見せられたのが良かったのかなと。ここで手間暇かけてやっていくんだっ

ていう姿勢を示せることはできたのかなと思っています。

常識にとらわれない価値観

浩嗣 地域ではお金を介して豊かさを得るのとは別に、お金を介さずに豊かさを得ている感覚が強いですね。得ている豊かさの総量は鳴子に来て減ったという感覚はなくて、関係の間にお金が入らない分、都会以上のものを得ているのではとも思います。

— お金以外に得られるものとは何でしょうか。

浩嗣 ちょっと偉そうに話してしまうと、いかに都会での暮らしが常識にとらわれてしまっているのかということに気づいたんですね。常識にとられるというか、正確には不自然だなと。慣れてしまえばそれが普通なんだろうけど、いざそこから離れてみると、本当は鳴子の暮らしの方が自然だよなと感じることが多くて。

道 ここで暮らしていると、普通に毎日温泉入れますし。



fig.4-7 準喫茶カガモクでの取材の様子

浩嗣 そうなんです、元々人間には癒しっという発想がなかったと思うんです。自然に生きていると癒しは必要なくて、不自然に暮らしているから癒しが必要になる。

— 今となっては癒しのためにお金を払うっということは当たり前になっていますよね。お金を払っている人は「癒し」に贅沢感を持つけど、自然に暮らしていたら、日常の中で無意識に癒されているということですね。

浩嗣 そう。だから、私たちの暮らしでは特に癒しは必要じゃない。

老後について

— 老後の心配はないですか？

道 都会の人だと、あまり実感がないかもしれないですけど、一番心配なのは、車が運転できなくなった時に大きな変化があるんじゃないかということです。

— いろいろできるということの根底には車で移動できるという前提があって、それが生命線なのですね。

道 「車が運転できなくなったら、生活が大きく変わるんだろうな」「大変になるんだろうな」とは思いますけれど、山に行って山菜をとっているときに、「うあ、私もう、一生ここで楽しんで暮らせる」って思ったんです。「この楽しみがあれば、人生最高だ」って思った（笑）。山菜取りだったら歳をとってもできるし、その時にもものすごい幸せだって思っています。だから老後の心配も、まあ、何とかかなるかなと。

齋藤 山に入ると、何か出ているんですよ。

道 そう、ものすごい何かが分泌されている。

齋藤 道さんと一緒に山に入るんですけど、いつの間にかいなくなっていて、そのあと戻ってきた時の袋のかさ（重さ）がすごいですよ。狩猟採集民族に出会った気がしました。

浩嗣 老後の暮らしになる前に納得した暮らしができていれば、今を我慢して老後を豊かに暮らすよりも、多分後悔しないだろうなと。本当に歳をとったらそれこそ気にしなくなると思います。

行政との関係構築

— 行政の仕組みと市民の活動とがどのように関わるのかに関心があります。皆さんの仕事の中で、国から町の支所まで、行政との接点が様々あるかとは思いますが、どういった関係をとられているのでしょうか。

齋藤 金銭のやりとりという話でいくと、僕らは遠い行政（国や県）との関わりの方が強くて、国や県に事業を申請して、それが採択されたらやるというのは、今までもこれからも一定数あるかと思います。一方で、近くの行政（市や町）とはどうかというと、相談をして、アドバイスをもらいにいくような間柄だと思います。

例えば、大崎市の場合は、古川に本庁が、東鳴子に支所があります。この2つは本社と支社みたいな役割と考えていいと思います。何か国の事業をやろうとしている時に、「こういうことを考えてやろうとしているから知っておいてくださいね」と相談に行きます。

ただ、それ以上に、官民の関わりの中で何かやろうとした時に「この事業でこの場所使おうと思っているんだけど、大崎市的には、鳴子的には大丈夫ですか」というアドバイス

をもらいに行く間柄ですね。

— 皆さんは地域で活動している領域が、環境や観光、教育、エネルギーなど、公共セクターに近いですね。利益のための売り買いじゃないから、そういう関わりが特に多いのかなと思っています。行政との対話という点で感じていることはありますか。

齋藤 穴堰^(*13)の関係者の方々や世界農業遺産の方々には、いろいろ任せてもらっているという感覚です。「市内で案内できる人がいないから、お願いしたい」という話や、「こういう旅を企画したいと思っているんだけど、協力してもらえないか」という話があって、すごく良い意味でお互いを尊重できているのかなと。

県ともそんな感じで、さっきのオンラインでこけしの絵付けをしたという浩嗣さんの話では、宮城県の国際交流を所管している部署の方々が来てくれて、そこでも相談をして、互いにとって良い方向を考えることができたので、対話ができるようになってきていると思います。

— 行政にとってみると、ITを使いこなせない地域の人とインターネットを介してやり取りをするのは難しいというのはあると思うんです。そのような地域に皆さんのような「書類作成は仕事でやっていました」とか、「コンピューターを使って仕事をするのは当たり前」とか、「外国人相手でも大丈夫です」というスキル、マインドがある方々がいると、行政も関係を築きやすいのかなと思います。

浩嗣 行政に関わって地域づくりをする上で思うことがあります。都会にいと「地域づくりは行政がやるもので、自分たちでやるものじゃない」という思い込みがあると思いますが、こっちだと「自分達で地域をなんとかしたい」と行政と市民が同じ目的を持つことができます。そこで協働しやすいというのはあるかと思っています。このように同じ方向に向かっているからこそ、行政ができない仕事があれば、それを受け持つということも発生します。

— 行政サービスを享受する側だと思っている人との主体性の差がそこにはありますね。

浩嗣 自分もそういう発想は後から出てきま

した。都会にいた時はそういう発想は全くなくて、自分が住む地域の状況をどうしようかなんて、考えていなかったです。

今後の展望

— まだやっていなくて、やってみたいことはありますか？

齋藤 僕はカレーですね。でも、それはこういう風に食べられる場所を構えるわけではなく、宿屋に連泊していて「2日目も焼き魚なのか」という方のためのカレーを提供するというようなイメージです。鳴子で消費されなくても良いと思っているので、製造所みたいな感じですかね。山で遊んでいる時に温めて食べることができたり。で、それを周りの皆さんから集めた材料で作っていかうと。

— 食に関してのアプローチでも、レストランをやりたいのとは全然違いますよね。何か色々な接続をして、パスをつないで、少し違うことをしたいというか。

齋藤 そうですね。その手段としてカレー。カレーは嫌いな人があまりいないじゃないで

(*13) 穴堰

- 南原穴堰。大崎市鳴子温泉地域西部の南原集落にある灌漑用水。江戸時代(1644～1647年)に、用水の確保が困難な高台に水を引くため総延長1,880mの水路が手掘りで造られた。以来、地元住人らによって維持管理がなされ、現在も約13haの地域の水田を潤している。



fig.4-8 山の中を流れる緩やかな水路

すか。まあ、僕自身がめっちゃ好きなので（笑）。

— 浩嗣さんはどうですか？

浩嗣 子供の教育関係というか、子供が遊んで学べる環境、自然学校みたいなものをもう少し充実させたいです。今は不登校の子も多いので、そういう子が、毎日遊んで学べるような環境を作りたいですね。その経験から、将来もここで暮らしたいと思ってくれば、自然と地域問題も解決すると思います。

石巻の中学校の教頭先生で、鳴子の自然が大好きになった方がいまして、以前カレーの会の時に、自分は鳴子でこういうことをしたいというプレゼンをしてくれて。定年退職したらこっちに住んで一緒にやりたいと言ってくれているので楽しみにしています。

道 そうだね、自然学校の校長先生をね。

浩嗣 それが本当に自分のやりたいことでもあるし、本気で地域課題の解決に繋がると思っています。

道 私は空き家の問題です。今、鳴子で家を探している人がそこそこいるのですが、なかなかマッチングしない。空き家がいっぱいあるのに、そのまま住むには汚いとか、貸すのはいいが売りたいとかいろいろな事情があって上手くいっていない。そこを何とかしたくて。

夫が家を作れるので、綺麗にリフォームして少し付加価値を持たせられたらなあ。もしかしたら、こけしだらけの家になっちゃうかもしれないですけど（笑）。地元材をいっぱい使うとか、そういう付加価値を持った楽しい家をたくさんつくる。建築家や不動産屋さんも関わってくればと考えています。

道 その時にね、サスティナヴィレッジでやっているようなエネルギー事業を、この町中にもぼんぼんと増やして、地域の資源でエネルギーを賄う地域にしたい。それがちょっと頑張ったらできそうっていうのが楽しいですよ。

浩嗣 人口が少ないからこそ、少人数でも町を動かせるので。

< 2022年5月28日準喫茶カガモクにて >

取材協力：鳴子温泉もりたびの会

加賀道さん（中央）

加賀浩嗣さん（右）

齋藤理さん（左）

所在地：宮城県大崎市鳴子温泉川渡 49



インタビューを終えて

「インタビュー中にぼんやりと頭に浮かんで、すぐに消えてしまったフレーズがあった。後日、本稿と同じ名前の（表記は違うが）某漫画雑誌を読んでいる時に思い出したのだが、そのフレーズは『友情、努力、勝利』である。

『地方にわざわざ移住してくる人は、本気でその地域をどうにかしようとしている』と言って、同じ志を持つ仲間を少しずつ増やしていく様は、まるで王道漫画の主人公のようであった。そんな仲間と共に、本気で、鳴子を盛り上げる。その道中に彼らはいらぬのだろうか。もし彼らが漫画の主人公ならば、これからどんな逆境に直面しても、必ず乗り越えるだろうし、実際にそんな気がする。だから、あのフレーズが思い浮かんだのだろうし、ならば、是非ともその成り行きを見届けたいものである。」

と、熱に浮かされるくらいに熱いインタビューだったと思う。

彼らに出会った人々は、その前向きさと個々の能力の高さに圧倒され、「彼らが凄いかからこの暮らしが実現しているのだ」と半ば諦めの念を抱くかもしれない。しかしそれでは本章を締めくくることはできない。

私は、鳴子という地に居ながら、不思議と「都会的要素」を感じていた。地方暮らしを全面的に肯定し行動してきた彼らだが、都会との繋がりを細くとも持ち続け、完全に絶つことをしていないのは興味深かった。都会から地方移住というと、別の場所へ思い切りジャンプする勇気が必要に思える。しかし彼らは、それらの間に立ったまま、重心だけを少しずつ地方へずらしていくような方法をとっていて、地方移住が想像するほど極端で手に届かないものではないことを教えてくれた気がする。これからの時代、地方と都会は二項対立で語るものではなく、彼らのように両要素を好きな配分で取り込む“あいだ”の暮らしが当たり前になるのかもしれない。

<伊藤 雄飛>

<佐々木 央>

#コラム

私の母はオフィスワーカー時々リモートワーカー

文 壹岐めぐみ

私の母は、一ヶ月のうちの二週間をオフィスがある東京で仕事をし、残りの二週間を我が家がある仙台でリモートワークをしている。

母の仕事は薬事申請である。輸入した医薬品や医療機器などを日本で販売・使用するにあたり、規制当局に提出する申請書類の作成を行っている。その仕事の一つには、対象の製品の安全性情報やデータを各国の規制当局や大学から、インターネットを使ってかき集め、日本の規制当局に提出するという作業もある。医療品・医療機器が世に出るには、非臨床というステージがあり、物理や化学、生物などの領域に踏み込んでくるため、常に勉強が必要で、業務時間内で図書館へ通うこともしばしばある。このことから分かるように、わざわざ会社に通動して行う作業は少ない。最近では薬事業務のリモート化が進んでいる会社も多く、一週間に一度の出勤や完全リモートの企業もある。コロナが原因で、薬事業界の仕事のスタイルが完全に変わったそうである。

さて、母のリモートワークだが、次のようにして始まる。まず仙台へ向かう前日、会社のパソコンを起動したままとし、ディスプレイの電源のみ切っておく。それはGoogle Chrome リモートで母の個人パソコンを会社のパソコンにアクセスさせ、会社のパソコンを使用できるようにするためである。母は仙台に移動する前には、一旦東京のアパートに戻り、余裕があれば一緒に暮らす妹の作り置きを作り、真夜中五時間ほど車を走らせ、仙台にやってくる。そして次の日には朝から母のリモートワークが始まる。Google Chrome リモートを使用して、デスクトップで会社と自分のPCをつなげ、朝九時にメールで出社したことを告げる。仕事の相棒であるTさんと電話で今日行う業務について話し合い、十二時まで仕事をしたら一時間のお昼休みだ。食事を取り、庭の草むしりをしたり、犬と遊んだりしてのんびりと過ごす時もある。合間をみて、父方の祖母の病院の付き添いをしたりする。その後、午後の業務をこなすのだが、たまに大学の図書館で必要な知

識を補いに外へ出ていく。こうして、十八時にその日の業務を終える。母が仙台にいるときの週末は、大抵家の大掃除、大量のおかずの作り、買い物で、こうして母は仙台の家族のお世話・管理を済まし、また五時間車を走らせ東京へ帰っていく。

そんな母が、この行ったり来たり生活を始めたのには、家族への深い愛情と自分のこれまでの妻として・母としての人生とが深く関わっている。

母は、子供の頃は転勤族で各地を転々とし、中高大を東京で暮らし、その後日本を飛び出し留学。その留学先で父と出会い、結婚を機に父の故郷である仙台に移り住み、そこで三人の娘の子育てと仕事を約二十年間こなした。

しかし、母にとって仙台という地はあまり良い土地ではなかった。母は、仙台で様々な仕事に就いた。大学関係、留学会社、英語教師、食品開発などなど一つに定まらなかった。雇用の少ない田舎では、母親になってから入れる職場が少なく、さらに労働条件が悪く賃金が安い。もし日本に帰ってきてからすぐ東京で就職していればもっと楽しく、たくさん稼げるのにと思うことばかりだったと母は言う。二十年間も仙台で働き続けたのは、父が大好きだったからで、そばに居たいという愛ゆえだった。

娘たちが首都圏の大学を進学するころ、十五年一緒にいた犬が亡くなった。その時にはもうすでに仕事面で鬱気味だった母は、父への苛立ち半分、自分の母・妻としての人生ばかりで自分の人生がなかったことへの後悔がピークに達し、しばらく東京で働くことを決心したのだった。

母が東京で働き始めてから一年くらいで、コロナが流行した。その頃には、母の父への苛立ちはなくなり、むしろ離れたことによりその愛を再確認、思いも強くなった。コロナ禍で母の職場もリモートを強いたのだが、それは新たな働き方を母に示した結果となった。

母は、リモートワーク期間が終了し、みんな出勤するようになったころ、月に二回のリ

の理由は仙台に置いていった父の側に少しでも居たいから、でも東京の会社で働きたいし、東京の祖父母の介護もしたいからという純粋なものだった。会社の方はあまり快く思っていなかったが、母がそれ以前に仕事で能力を見せつけていたことから、渋々了承したのだった。

東京の祖父母はどちらも体力がある方で、水泳に行くのが趣味の元気な人たちだった。しかし、祖母が自宅のカーペットにつまづき肩を複雑骨折するという事件をきっかけに、もう祖父母と過ごす時間が少ないことを意識し始めたのであった。遠く仙台に居れば自分の両親の老いに気がつくことができなかつたと言う。こうして母は、仙台で愛する父の側にいながら、仙台の暮らしを管理しつつ、東京で祖父母の介護をしながら働くことを選択したのであった。

とても大変な生活だが、母曰く、今の生活が自分に合っていてとても充実しているという。何よりも愛する父の側に居られるようになったこと、東京の自分の祖父母と仙台の父の祖父母の世話ができるようになったこと、仙台と東京の両方の暮らしを支えられることにとても安心している。また、都会の流れる時間がとても早い世界と仙台の自然が豊かで流れる時間がゆったりした世界の二つを行ったり来たりすることで、自分の中で気持ちをリフレッシュできると喜んでいる。さらに東京の高い賃金でやりがいのある仕事ができることに満足している。

母は、妻であるということから自らのキャリアを投げ打って父といることを選択し、子育てが落ち着いてからも住宅ローンや教育費などを稼ぐ必要から、その場所にある仕事を探して無理に働いていた。しかし、テレワークという技術によって、自分に本当にあった職種を自分がやりたい場所で、やりたい時期にできるようになった。母は、リモートワークの推進が地方都市を生き返らせる唯一の方法で、女性の選択肢を広める唯一の方法である、と言っている。



第2部 開かれた庁舎を考える	71
4 自治体庁舎の市民交流空間	73
.1 導入：自治体庁舎が開かれつつある	74
.2 市民交流空間に求められている特徴とは - 技術提案書の分析を通して -	80
.3 7つの自治体庁舎に関するフィールドワーク	89
.4 自治体庁舎における市民交流空間に関する分析	119
.5 総括：市民交流空間を作った先の世界にジャンプする	133
5 人が集まる場としての庁舎建築の歴史的再考	137
#COLUMN2 大学生活をコロナ禍とともに2	144

contents

4

自治体庁舎の市民交流空間

文：秋永 凌 伊藤 雄飛 松實 秀磨

導入

自治体庁舎が開かれつつある

文：秋永 凌

1

自治体庁舎の今

自治体と聞いて何を思い浮かべるか？

直近で思い浮かぶのは、老朽化した庁舎の姿や職員の旧式な働き方だろうか。

太く無骨な鉄筋コンクリートの柱にくすんだ白色の壁で構成されたその躯体は、市民への開放性や親しみを謳っているとは思えない佇まいである。また、その空間においても、市民への窓口対応はおろか、職員が十二分にパフォーマンスを発揮できているとは思えない状況が散見される。

執務室に並ぶ錆びたスチールの袖机はおそらく、ノートPCを置いて作業をすることが中心の現代のデスクワークに対応していない旧式の規格寸法で、どこか窮屈さがある。窮屈さを演出しているのは机の規格の古さだけでなく、机のそこかしこに積み上げられた書類の山の不安定さや、後付けされた什器による雑然とした雰囲気も理由の一つであろう。加えて、部署共有の固定電話は有線形式であることで受話器を持つ職員の姿勢が制限され、まるでその席に縛り付けられているようにも見えてしまう。

加えて、お役所特有のお堅い組織文化や規律も、職員の活躍を制限することに拍車をかけており、自律的な働きかけや新たな発想を試みようにも周囲の理解や賛同を得られず、やりようのない思いを抱えながら提案が頓挫してしまったり職員も少なくないだろう。

そうした外的要因の不十分さを抱えているにも関わらず、自治体職員に求められる業務や責任は多大になっている。

今は昔、定時間際、職場の時計をみつめ、終業を知らせる鐘の音と共に一目散に走り出す。そんな半ば無責任な行政マンの職務態度が昭和の都市伝説として存在したが、令和の現在にそんなふるまいはありえないだろう。

事務的な仕事をしていればよかった時代は過ぎ去り現在はDXを推進して働き方を刷新するとか、地方に人を呼ぶとか、市民活動を支援するとか、職員自らが現場に赴き市民課題に向き合うとか、誰ひとり取り残さない世界を目指すとか、やることは尽きない。

しかし、幸いにも、八方ふさがりのこの状況を打破する可能性を秘めた事業がある。自治体庁舎の建て替え事業だ。

自治体庁舎の建て替え事業に秘められた可能性

昨今、新しい自治体庁舎が続々と完成している。高度経済成長期に続々と建てられた自治体庁舎の老朽化が主な背景ではあるのだが、これをきっかけに最新技術やその土地々々の個性を取り入れつつ、庁舎が魅力的に刷新されているケースは多い。何のきっかけもなしに日々の業務体制や習慣の改善を行う事は、多くの組織にとって困難な事であり、ましてや、縦割り文化の強い自治体組織では尚更であるので、庁舎の建て替えを行う自治体は、事業に関わる意見出しの機会にて様々な希望が飛び交っていく。

「ABWを実践してみよう」「フリーアドレスに挑戦してみよう」「テレワークも取り入れよう」「課長席を廃止しよ

う」「chatを活用してみよう」「オンライン会議をやってみよう」「フレックス制度を設けよう」「書類を削減しよう」「ワンストップ窓口サービスをできるようにしよう」「窓口の数を少なくしよう」「魅力的な市民交流空間を作ろう」……。

これらの希望はそれぞれに正解を出すことの難しさをはらんでおり、庁舎整備事業に携わる担当者は頭を悩ませるばかりだが、こうした希望の多さは見方を変えれば、自治体がアップデートできる可能性を秘めているとも言える。特に、「市民交流空間」に関しては、市民と行政をつなぐ役割を担う象徴的な空間となりえ、各自治体の活性化に貢献する重要な要素の1つとなりえる。

臍気に聞こえてくる「市民交流空間」の必要性

昨今の自治体庁舎整備事業の特徴として、市民交流空間の計画がある。ここ数年で新設された自治体庁舎に市民交流空間は必ずと言っていいほど設けられるし、市民交流空間に寄せられる期待も大きい。しかしながら、市民交流空間へ抱かれている期待とは裏腹に、市民交流空間が果たして上手く機能しているのか判然としない現状もある。

そもそも、市民交流空間とは一体なんなのか？名前の通り、市民“が”交流する空間なのか、それとも、市民“と”交流する空間なのか。市民は誰と交流するのか。交流とは一体何なのか……。

市民交流空間は執務室や会議室、市民窓口等の一般的な空間とは異なり、この数十年でその必要性や要件が議論され続けている状況で、実はその実態はいまだつかみどころがない。

「行政は市民の声に耳を傾けていかなければいけない・・・」
「市民と行政の双方が歩み寄る場所や機会が必要だ・・・」

こういった、どこからともなく聞こえてくる社会の声、情勢を反映しているのだろうが、行政から庁舎整備事業に関わる事業者へ展開される RFP(Request for Proposal, 提案依頼書)には、「市民交流空間」に関する要件が必ずと言っていいほど存在するものの、その要件はあやふやなケースが多い。

行政からの要件はあやふやな一方でしかし、市民の意見の把握や、市民と行政の交わるための場所の必要性は疑いなく存在している。なぜ、市民の声を聴こうとするのか。なぜ、市民と行政のための空間が必要なのか。そうした疑問に答えるには、高度経済成長期から現在までに至る自治体庁舎計画の変遷が鍵となる。

庁舎計画の過程が市民に開かれていった

ここ数年の間に新築された自治体の旧庁舎ができたおよそ 50～60 年前から現在まで、庁舎計画はどのように行われていたのか。

1980 年代以前の庁舎設計は、建設省内部、および特命方式での設計が多く、特命方式によって指名された建築家によって時代を代表する建築が生まれている。

しかし、特命方式は発注者と受注者の癒着が疑われやすく、その後は透明性を確保するために設計入札方式が採用されるようになった。そのため、この年代の傾向としては、特命方式および設計入札方式が多いことが挙げられる。ただし、情報が公開されているものは少なく、1980 年代以前の事例は選定方式が不明なものも多い。

1990 年代に入ると、自治体庁舎の市民交流空間が整備され始めると同時に、選定方式としてはプロポーザル方式が意識され始める。なぜなら、プロポーザル方式は設計入札方式と異なり、審査の透明性を確保した上で、建築物の質を担保することが可能であるからである。

2000 年代以降は、プロポーザル方式が設計者選定方式の主流となる。その背景にあるのは、行政に対する市民意識の変化である。各自治体は新庁舎建設計画にあたり、市民に対する情報公開や審査の透明性の確保、さらに、計画段階のワークショップの実施など、様々な形で市民参加を求められるようになった。

裏を返せば、これらが蔑ろにされていると市民が感じると、計画に対する彼らの反対意見が募ることとなる。だからこそ、行政側は計画段階の姿勢を通じて、市民に対していかに開かれているかを示すことに注力するようになる。

このようにして、自治体庁舎の計画は時代を追うごとに、その過程が市民に開かれていった。

庁舎空間が市民に開かれていった

庁舎の計画過程が開かれていくことと合わせて、庁舎空間も市民に開かれていった。

設計者選定方式としてプロポーザル方式が意識され始めた 1990 年代には、アトリウムと市民空間、行政窓口、執務室を連結させ、広場の周囲にカフェテリアやギャラリーなどの市民空間を計画した富山市庁舎 (fig.1-1) の事例や、市民空間と執務空間を連続させた大空間により市民と行政の日常的なふれあいを期待した掛川市庁舎 (fig.1-2) の事例等があり、庁舎空間の一部を市民へ開放しようとする試みが見られた。

2000 年代には、市民空間が庁舎全体と一体化し、他の機能を併せ持つものも出現し始めた。例えば、あきる野市庁舎 (fig.1-3) では、市民ホールとして利用可能な 6 層吹き抜けのアトリウムをリニアに挿入することで、市民空間と執務空間の仕切りを廃し、透明性の高い空間構成としている。また、神流町中里合同庁舎 (fig.1-4) では、市町村合併による機能変更を想定した計画がなされており、行政機能を集約した最上階以外を市民のあらゆるニーズに対応するスーパーユニバーサルスペースとしている。これは、2003～05 年にかけてピークを迎えた市町村合併による庁舎建築の機能変化を見越したが故の計画だろう。

2010 年代に入ると、スポーツジムの併設した沼田市庁舎 (fig.1-5)、地元球団のユニフォームの展示がある廿日市市大野支所 (fig.1-6)、普段は開放スペースとして移動販売

が行われつつも水害に備えたピロティ空間を設ける川口市庁舎 (fig.1-7) 等、市民空間の機能はさらに多様化し、あらゆる特徴をもって、庁舎空間が市民に開かれていった。

画像出典

fig.1-1 <https://www.nihonsekkei.co.jp/projects/2872/>

fig.1-2 <https://archirecords.com/blog-entry-178.html>

fig.1-3 <https://www.seikatsu-guide.com/info/13/13228/2/>

fig.1-4 <https://tsukamotokensetsu.co.jp/portfolio/> 神流町中里合同庁舎 /

fig.1-5 <https://imakoko-gunma.com/numata-newtownhall/>

fig.1-6 <https://www.okamura.co.jp/solutions/municipality/main/case/190104/>

fig.1-7 <https://cs.itoki.jp/case-studies/kawaguchi-city/>



fig.1-1 富山市庁舎



fig.1-2 掛川市庁舎



fig.1-3 あきる野市庁舎



fig.1-4 神流町中里合同庁舎



fig.1-5 沼田市庁舎



fig.1-6 廿日市市大野支所



fig.1-7 川口市庁舎

市民に“開かれる”というのは今に始まった事ではない

民主主義国家を標榜する我々にとって、市民の声を反映していくことや、市民と行政とが関わる機会・空間を設けるという考えは、至極当然のようにも思えるが、歴史的に見るとこうした観念が人口に膾炙するのはここ数十年の話に限った事ではなく、民意の反映の在り方に関して考察するには、もう少し時間をさかのぼる必要がある。

一市民が自由闊達に意見を交わしたり、公的権力に対して物申していく動きは、ドイツの哲学者ハーバーマスが著書『公共性の構造転換』にて示した「公共圏」に端を発する。

17世紀のイギリスでは、“コーヒーハウス”という社交場を兼ねた喫茶店で、人々は社会に対するあらゆる議論を行っていた。隣家のうわさ話や身の回りの出来事といった雑談はもとより、公権力に対する批判といった政治談議など、コーヒーハウスは世論を形作るための重要な空間となっていた。

ハーバーマスはこうした異なった階層の人々が対等に議論をしていたコーヒーハウスに「公共圏」、いわゆる公衆（市民）から公権力（行政）への批判の形があったと指摘している。

公共圏はしかしながら、19世紀以降の国家の台頭、テレビの公共放送による政府のプロパガンダ、インターネット内の無責任で一方的な意見の応酬といった時代の流れを受けて廃れているのが現状だ。加えて、資本主義社会であ

るいくつかの国においては、経済の仕組みや理屈が人々の行動や発言よりも優先されることも多く、公的機関への批判はおろか、対話による物事の決定プロセスも崩壊している。

対等な立場での対話から合意を生み出すためには、かつてのコーヒーハウスのような存在（公共圏）が必要だとハーバーマスは主張している。加えて、資本主義経済システムは、市民の平等な発言の機会の制約の要因である他に、競争原理に基づく地方自治の衰退も引き起こしている可能性もある。

いずれにせよ、現代の日本に生きる我々にとって、経済システムによって引き起こされた諸課題を解決するのは、コーヒーハウスで行われていたような市民が自由に意見を発する機会の創出や、「市民交流空間」という名のコーヒーハウスの存在そのものなのかもしれない。

最近の庁舎計画の流れと民意の反映の如何

市民が行政に対して意見を発信していく機会創出に関しては、先述したようなここ数十年の庁舎計画への市民参加をはじめとする様々なインターフェース、要するに、「市民と行政の接点」が設けられつつあると言える。庁舎窓口への直接の申し出をはじめ、HPへの投稿欄や、SNSアプリケーション、電話、メール等々。加えて、昨今の庁舎計画に関しては、新庁舎計画が公表されてから竣工するまでにおよそ10年という長い歳月を経るケースもあり、こ

れは庁舎規模や周辺の立地状況など様々な要因も関係しているが、市民からの意見を募ったり、計画内容に関する市民への説明など、民意の反映手続きを重んじている影響も大きいと思われる。

市民との対話の必要性という観点から新庁舎が出来上がる過程を示すと、「基本構想」「基本計画」「基本設計」「実施設計」といった4つの手順がある。

「基本構想」では、庁舎の現状と課題、新庁舎の目指すべき方向性、建設地候補の検討などが行われる。この段階では自治体ごとの違いはあまり見られず、現庁舎の老朽化や執務室の不全さという建て替えの理由や、昨今では、環境への配慮、市民協働、防災拠点といった項目も検討されている。

「基本計画」では、これらの内容をやや具体化させ、事業費やスケジュールが概ね決定されて、基本設計の前提条件を定めていく。この段階で、庁内の様々な調査や、市民へのヒアリングやワークショップ、関係者への説明会などを行っていき、市民とのやり取りが特に重要となってくる。

そして「基本設計」では具体的な図面が描かれ、設計者をはじめとする専門業者間のやり取りが主となるが、場合によってはここでも市民からの影響が及ぶ可能性もある。

庁舎計画は市民を巻き込んで、慎重に執り行われていると言える。

一方で、民意の反映が起こした悲劇もある。2015年頃、世界的な建築家であったザハ・ハディド氏による東京オリンピックの競技場が、国内世論の激しい批判にさらされて

頓挫したことがあった。当時の市民の大多数にとっては正当な理屈が交わされていたのかもしれないが、協議も終わった今となつては、「建築が暗殺された」と言われるほどに、悲劇的な事象であるし、そもそも当時から世論が扇動されていることに警鐘を鳴らしていた専門家も少なくない。魅力的な建築になる可能性を秘めていたにも関わらず、民意の反映が逆に悪い結果を引き起こしてしまった事例であった。

こうした失敗はハーバーマスの理屈で言えば、“コミュニケーション”がなされていなかったから、というただそれだけにすぎないのかもしれないが、「公共性」が廃れている状況においてはいずれにせよ、丁寧かつ慎重な対話が必要であるし、その対話の実現のためにも長期的な庁舎計画が執り行われているのかもしれない。

捉えどころのない「市民交流空間」

自治体庁舎の計画において、丁寧な対話によって実現していくものの象徴であり、かつ市民活動を後押ししていく重要なファクターとなるのが市民交流空間だ。しかし、その実態はあやふやで、「市民に開かれた・・・」とか「市民に親しみのある・・・」といった文言以上に、「市民交流空間」を定義する共通観念が存在していないことが多い。

もちろん、先述したように、スポーツジムやカフェが併設していたり、魅力的な展示空間となっていたり、災害に備える事を想定していたりと、興味を抱かせる特徴的な「市

民交流空間」を設えた自治体もある。しかし、新設された多くの「市民交流空間」は、可動式什器が小綺麗に並んでいるもののあまり使われず、まるで置物のようで、様々な利用ができるようなレイアウト変更を想定したものの動かされた気配は薄く、果たして“交流”という呼称をつけていいものか疑わしい空間となっているのも事実である。

こうした実情を踏まえ、

「市民交流空間には何が求められているのか」

「市民交流空間はどのように活用されているのか」

「魅力的な市民交流空間となったいきさつとは」

といった「市民交流空間」に関する実態を解き明かしていくことが、本部の主題である。この後の2～4章にて、順次考察していく。

市民交流空間に求められている特徴とは - 技術提案書の分析を通して -

文：松寛 秀磨

|||||||

昨今、庁舎設計手法の主流となっているプロポーザル方式では、設計者が自治体からの RFP(Request for Proposal, 提案依頼書)を元に、基本計画等のその自治体に関するありとあらゆる情報を参考にしながら、その要求(Request)に応え、「技術提案書」というものを提出する。その「技術提案書」にはもちろん、市民交流空間に関する提案もある。先述したように、RFPにおける市民交流空間の要件はあやふやなケースが多いが、技術提案書には設計者の考えが詰まった市民交流空間に求められている要素が盛り込まれていると考えられる。

本章では、この技術提案書にある内容を収集・分析していくことで市民交流空間の特徴を明らかにしていく。

.2

庁舎にはどのような場所が求められているのか？

窓口と待合。この2つの機能さえあれば事足りるというのが、役所の一般的なイメージではないだろうか。特別な用事でなければ、「役所に行く」＝「窓口で用件を伝え、何の変哲もない待合で腰を下ろし暇な時間を過ごした後、呼び出されて再び窓口で挨拶し、用事が済めば足早に退散する」といったものだ。

ところが近年、そうした役所のイメージは、前章で述べたような「市民交流空間」の計画が主流となることで、飛び越えられようとしている。既に役所という場所の存在が、ガラッと変わった自治体もあるようだ。

一体、その「市民交流空間」とはどのようなものか。果たして、市民や行政はそこに何を求めて、設計者は何を指すのか。本章では、完成した庁舎を眺める前に、計画段階でのイメージを探り、庁舎に求められる「市民交流空間“像”」の特徴とは何かを考えていく。

空間の理念を表した技術提案書

技術提案書とは、行政が示す4つほどのテーマに沿って、大まかな設計案や運営方法などを記載したものだ。コンセプトやダイアグラム、設計図面、透視図などがレイアウトされる。これらは、市民の意見を含んだ行政の要求に対する、設計者の最初の回答として提示される。

募集要項によると、文章が主役とされ、図はそれを補完するものとして扱っている場合が多い。そのため、自治体によって程度は異なるが、透視図の詳細な表現が制限される。設計者はその制限の中で、できるだけ印象的な絵を用いて説明しようとする。よって技術提案書の透視図をみることで、市民交流空間に対する社会的な要求を、直感的かつ理念的に表したイメージとして捉えることができるのではないかと考えた。

本稿ではこの技術提案書の表現特性に焦点を当てていく。



fig.2-1 技術提案書の例
(長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)

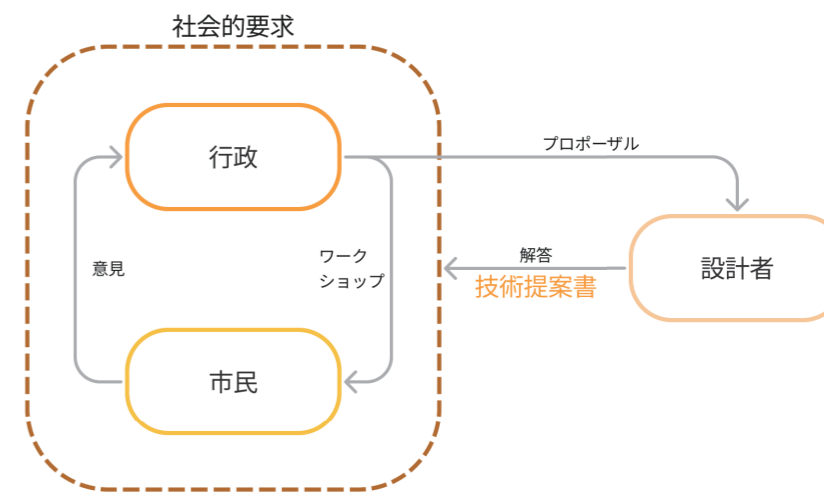


fig.2-2 技術提案書の意味

分析対象のプロポーザル

本稿では、fig.2-3 に示した全国 50 事例を対象として取り上げる。これらは 2010 年代から 2021 年までに行われたプロポーザル方式の事例の一部である。

対象の条件として、オンラインで一般公開されているもの(2021 年 12 月時点)、最終審査で最優秀とされたもの、そして市民交流空間の整備が明記されているものという 3 つを設定して収集した。

庁舎の設計が決まるまで

調査項目は技術提案書の図と言葉。具体的には、市民交流空間を描いた透視図と、それに付随する説明文(キャプション)を取り上げる。そのため、単なる窓口や執務空間が描かれたものは除外している。キャプションの範囲は fig.2-4 の通りである。

透視図は、3 次元的なイメージを直感的に理解するだけでなく、モノや人物の様子を工夫することで、場の使い方や雰囲気を伝えようとする。しかしながら、言葉が主体とされる技術提案書における透視図は、緻密な表現が許されない。設計者はその制限の中で空間のイメージを伝えようとするため、透視図には逆説的に提案の本質が表れていると考え、透視図が主役、それを補完する言葉という、本来とは逆の捉え方をもって分析を始めることとした。

分析方法の大きな流れとして、透視図と言葉でそれぞれ類型化を行い、最後に両者の組み合わせから見えてくる関係性をもとに考察を行う。

50 事例の技術提案書から透視図を収集すると、171 枚となった。これに付随する文章であるキャプションと合わせて調査、分析を進めていく。

都道府県	市町村	選定結果公表	都道府県	市町村	選定結果公表	都道府県	市町村	選定結果公表			
1	長野県	軽井沢町	2021年10月	18	高知県	本山町	2019年10月	35	山口県	宇部市	2016年12月
2	神奈川県	厚木市	2021年6月	19	滋賀県	守山市	2019年9月	36	埼玉県	越谷市	2016年12月
3	大阪府	富田林市	2021年3月	20	宮崎県	日南市	2019年7月	37	岐阜県	各務原市	2016年11月
4	福島県	塙町	2021年3月	21	長崎県	大村市	2018年12月	38	神奈川県	川崎市	2016年9月
5	北海道	紋別市	2021年3月	22	京都府	八幡市	2018年7月	39	東京都	清瀬市	2016年8月
6	東京都	国分寺市	2021年2月	23	茨城県	大子町	2018年6月	40	沖縄県	石垣市	2016年7月
7	宮城県	仙台市	2020年12月	24	栃木県	小山市	2018年5月	41	石川県	能登町	2016年6月
8	長崎県	佐々町	2020年9月	25	静岡県	下田市	2018年3月	42	新潟県	柏崎市	2016年6月
9	鹿児島県	伊佐市	2020年7月	26	岐阜県	羽島市	2018年2月	43	埼玉県	深谷市	2016年6月
10	兵庫県	明石市	2020年7月	27	栃木県	鹿沼市	2018年1月	44	新潟県	魚沼市	2016年3月
11	福島県	会津若松市	2020年7月	28	長野県	上田市	2017年12月	45	神奈川県	開成町	2015年11月
12	北海道	奈井江町	2020年6月	29	山形県	河北町	2017年12月	46	宮城県	南三陸町	2015年1月
13	北海道	小清水町	2020年3月	30	福島県	桑折町	2017年10月	47	北海道	北広島市	2013年12月
14	山形県	高島町	2020年2月	31	青森県	平川市	2017年10月	48	福島県	須賀川市	2012年10月
15	北海道	新得町	2020年2月	32	福島県	大熊町	2017年6月	49	群馬県	富岡市	2012年9月
16	京都府	井出町	2020年1月	33	島根県	隠岐の島町	2017年2月	50	兵庫県	太子町	2012年8月
17	大阪府	岸和田市	2020年1月	34	兵庫県	高砂市	2017年1月				

fig.2-3 対象事例

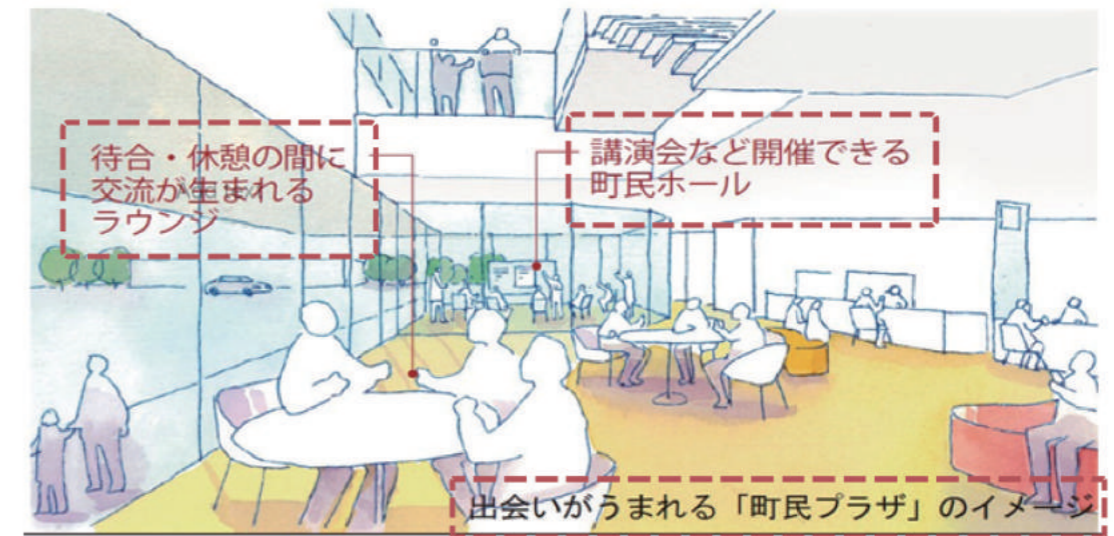


fig.2-4 キャプションの範囲
(北海道奈井江町、提供/日建設計)

透視図の類型－構図の特徴から

技術提案書の透視図にはどのようなものがあるか。タッチを見ると、さらっとしたものが多いが、時には水彩画のような表現や、影やテクスチャを工夫して写実的に仕上げたものなどがある。構図を見ると、ワイドな画角で出来るだけ多くの情報を入れようとしているものがあるほか、外向きの視点が多いような印象を受ける。人を見ると、こちらも出来るだけ多くの人物を集め、中でも子供が目立つようになっていたり、立ち話が大量発生していたりして、賑わいのイメージが強調されているようだ。ある意味、非日常的な場面が展開されている。

こうした観察をしていく中で、構図と添景という2つの視点から透視図を類型化しようと考えた。

構図について。内外の前述の観察された特徴から、「構図決定要素」という6つの項目について調査する。(fig.2-5)

まず大きな分類として「内観と外観」を分ける。「視線方向」は見上げ・水平・俯瞰の3つに分類し、内観について「抜け(水平・垂直)」、外観について「視点」を調査する。内観の抜けは、内部空間の一体感や連続性の指標とし、外観の視点は、注目される計画の規模の指標とする。また、内外の連続性と開放性の指標として、外部が画像全体に対してどのくらいの割合で描かれているかという「開口率」を、画像編集ソフトを用いて算出する。加えて、柱や人物を透過させる表現が多く見られたため、「特殊透過表現」としてその有無を調査し、空間の広さを強調する指標として扱った。

構図要素	説明
内外	内観か外観かを調べる
視線方向	見上げ・水平・俯瞰の視線方向を調べる
特殊透過表現	本来は透過しない柱などを調べ、空間の広さを強調する指標とする
抜け(水平・垂直)	内観について、空間の広さや一体感の表現の指標とする
開口率	内観について、内外の連続性と開放性の指標とする
視点	外観について、注目される計画の規模の指標とする

fig.2-5 構図決定要素



fig.2-6 構図決定要素の抽出例
内観・水平視線・水平抜け・透過無し
(長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)

透視図の類型 – 添景の特徴から

添景について、構図と同様に6つの「添景決定要素」を定義する。(fig.2-7)

まずは人物に注目する。画像の全体的な、近い視点で人数が数えられるものと、遠い視点で行為や個人の判別が難しいものがあり、これらを「人物の可算・不可算」として2つに分ける。不可算の図では、人々を集団として認知させるものが多い。

続いて、どのような人物が描かれているかを調査するため、2つの項目を設定する。1つは「移動率」と名付けたもので、移動している人物添景の割合を調べ、導線などの流動的な空間であるのか、または場所に固定された滞留的な空間であるのかを判断する指標とする。もう1つは「子供率」で、これも同様に子供の人物添景の割合を調べ、描かれる世代の幅を表す指標とした。

更に、人以外の添景について3項目を設定する。「掲示」は展示物や案内など、市民交流空間に付加された掲示物の有無を調べ、計画の詳細さの指標とした。「植栽」の有無は緑化や動きのあるもの、「遠景」は見通しを意識しているかの指標として設定した。

添景要素	説明
人数の可算・不可算	人物添景が集団または個別で描かれているかを調べる。
移動率	移動している人物添景の割合を調べ、流動的・固定的な行為の表現の指標とする
子供率	子供の人物添景の割合を調べ、描かれる世代の幅の指標とする
掲示(文字有・無)	展示物や案内などの掲示を調べ、計画の詳細さの指標とする
植栽	植栽の有無を調べ、緑化や動きのあるものの指標とする
背景の遠景	背景に山並みや都市が描かれているかを調べ、見通しの指標とする

fig.2-7 添景決定要素



fig.2-8 添景決定要素の抽出例
 移動率 0.13・子供率 0.13・掲示無し・植栽あり・遠景あり
 (長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)

構図と添景の類型化

これらの調査によって、構図と添景についての透視図ごとのタグ付けが完了したため、それぞれを類型化していく。分類は、調査項目の選択肢を数値化し、階層クラスター分析によってグループを作るという方法で行った。階層クラスター分析は、最も似ている組み合わせから順番にまとまりを作っていくもので、グループ数の調整が簡単であることからこの方法を採用している。その結果から、13の「構図型」と15の「添景型」を定義した(fig.2-9、fig.2-10)。

「構図型」を見ると、まず外観がA～Eの5種類で計73枚、内観がF～Mの8種類で計98枚となった。グループに分かれる条件で、開口率が寄与する型は枚数としても少なかった。「添景型」を決めた条件では、子供率が寄与する型が無かった。子供の添景を使うという点で、あまり差異は無いようだ。

14の透視図型

構図型	条件	個数
A 外観部分型	外観・水平視線・計画部分	17
B 外観全体型	外観・水平視線・計画全体	23
C 外観見上げ型	外観・見上げ視線	5
D 外観透過型	外観・水平視線・透過有り	13
E 外観俯瞰型	外観・俯瞰	15
F 内観単純型	内観・水平視線	34
G 内観抜け多用型	内観・水平視線・水平垂直抜け	13
H 内観俯瞰型	内観・俯瞰視線・抜け	11
I 内観透過連続型	内観・水平視線・透過有り・開口率4~7割	5
J 内観俯瞰連続型	内観・俯瞰視線・水平垂直抜け・開口率5~8割	2
K 内観連続型	内観・水平視線・開口率3~6割	7
L 内観抜け非連続型	内観・水平視線・透過有り・水平垂直抜け・開口率3割以下	14
M 内観透過非連続型	内観・水平視線・透過有り・開口率3割以下	12

fig.2-9 構図型

添景型	条件	個数
1 滞留植栽近景型	移動率5割以下・植栽あり・遠景なし	18
2 流動植栽近景型	移動率5割以上・植栽あり・遠景なし	18
3 簡易近景型	掲示なし・植栽なし・遠景なし	15
4 滞留簡易近景型	移動率1割以下・掲示なし・遠景なし	13
5 滞留植栽遠景型	移動率5割以下・植栽あり・遠景あり	16
6 流動植栽遠景型	移動率6割以上・植栽あり・遠景あり	8
7 滞留詳細遠景型	移動率5割以下・掲示あり・遠景あり	7
8 簡易遠景型	掲示なし・植栽なし・遠景あり	9
9 滞留詳細近景型	移動率5割以下・掲示あり・遠景なし	18
10 滞留詳細型	移動率5割以下・文字掲示あり・遠景なし	8
11 詳細植栽遠景型	文字掲示あり・植栽あり・遠景あり	3
12 詳細遠景型	文字掲示あり・植栽あり・遠景なし	6
13 集団植栽近景型	人物不可算・植栽あり・遠景なし	15
14 集団近景型	人物不可算・植栽なし・遠景なし	4
15 集団植栽遠景型	人物不可算・植栽あり・遠景あり	13

fig.2-10 添景型

この2つの型を組み合わせ、数の多いものを抽出し、透視図全体の類型化を行う。その結果をfig.2-11に示した。色が濃くなっている組み合わせは、構図と添景、それぞれの特徴を掛け合わせたうえで、プロポーザルにおいて頻出の透視図パターンだと捉えることができる。

これらを14の<透視図型>と呼び、それぞれ構図と添景の特徴から空間の性質を定義した(fig.2-12)。この組み合わせは、対象とした透視図全体の41%を占めている。

まず外観(構図型A~E)に注目すると、14の<透視図型>のうち8個が該当している。内観に比べて枚数が少ないが、<透視図型>の数が逆転しており、つまり、添景のパターンとヒットするものが多く、図としての表現パターンが少ないということが分かる。

内観(構図型F~M)を見ると、ほとんどが構図型Fの単純なものだが、それと合った添景型は移動率の低いもののみであった。よって、市民が滞留できる内部空間が最も多く描かれるということが示された。

次頁に透視図型の一例を掲載した。(fig.2-13~2-16)

	構図型													計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	
1	4	3	0	1	1	4	2	0	0	0	1	2	0	18
2	3	5	3	6	0	0	0	0	0	0	0	1	0	18
3	1	0	1	0	0	7	0	1	0	0	0	3	2	15
4	0	0	0	0	0	6	1	2	0	0	2	0	2	13
5	4	4	0	1	0	4	0	0	1	0	1	0	1	16
6	2	4	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	8
7	0	0	0	0	1	0	2	1	0	0	0	2	1	7
8	2	0	0	1	0	2	1	0	0	0	1	1	1	9
9	0	0	0	0	0	5	4	3	1	0	1	1	3	18
10	0	0	0	0	0	2	0	2	0	0	0	3	1	8
11	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
12	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	1	1	0	6
13	1	4	1	1	3	1	2	1	1	0	0	0	0	15
14	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	4
15	0	2	0	0	9	0	0	1	0	1	0	0	0	13
計	17	23	5	13	15	34	13	11	5	2	7	14	12	171

fig.2-11 構図と添景を掛け合わせる

透視図型	説明
A1 軒下滞留図	市民が休息する植栽のある軒下空間
A5 軒下展望図	山や都市の風景が見える見晴らしの良い軒下や広場
B2 緑化広場図	市民が往来する庁舎前の緑化広場やアプローチ
B5 滞留広場図	市民が滞留する庁舎前の見晴らしの良い緑化広場
B6 展望広場散策図	市民が往来する庁舎前の見晴らしの良い緑化広場やアプローチ
B13 全体立面図	市民の集いが鉛直方向に広がる庁舎の立面
D2 広域アプローチ図	市民が往来する広いアプローチ
E15 イベント広場図	イベントが行われる駐車場や広場
F1 内部滞留図	内部で植栽のある自由な滞留空間
F3 内部余白図	設置物が少ない屋内の空間
F4 多目的空間図	市民空間と兼用の議場や多目的室
F5 滞留展望図	見晴らしの良いラウンジやテラス
F9 内観詳細図	掲示の多い待合を延長したラウンジなど
G9 開放的待合図	水平・垂直両方向の抜けをもった開放的な待合とラウンジ

fig.2-12 14の透視図型の定義

市民交流空間を表す言葉

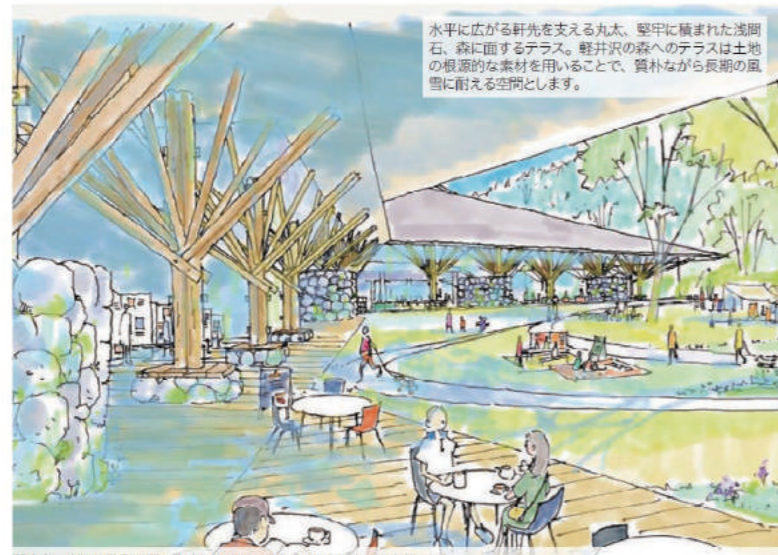


図1-3. もりの緑側空間：地域のアクティビティを生み出す「まちニワ」

fig.2-13 A1：軒下滞留図
(長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)



図2-1 開放された庁舎空間

fig.2-15 F1：内部滞在図
(長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)



fig.2-14 B2：緑化広場図
(茨城県大子町、提供/遠藤克彦建築研究所)



fig.2-16 F5：滞留展望図
(茨城県大子町、提供/遠藤克彦建築研究所)

図としての種類の次は、言葉の種類を行う。透視図は直感的に空間を理解できるが、それを説明する言葉にはどのような種類があるのだろうか。

透視図に付随している文章には、どのようなものがあるか。例を挙げると、長崎県佐々町の屋外広場の図について「子どもからお年寄りまで多世代に開かれたひろばとなるさざの丘」、新潟県柏崎市の市民ホールを描いた図では「市民活動の発表会は、屋外まで立ち見が出るほど大盛況」などがある。

言葉の種類化は、全 171 枚の透視図に付随する説明文から出現頻度の高い単語を抽出し、その中から市民交流空間にかかわりのある単語を選定した後、いくつかのタイプを定義して分類する方法で行う。

選定する単語には、例えば「広場」や「テラス」といった、市民交流空間それ自体の機能や目的を表したのものや、「賑わう」「親しみやすい」といった空間の印象、雰囲気を表したものなどがある。単語の集計には、web で公開されているテキストマイニングという手法を用いた。

どのような場所が求められているのか？

結果として、fig.2-17 に示した5つの<言語表現型>に分類した。「開放性」の表現には「開く」「吹き抜け」「つなぐ」など、庁舎が空間的・機能的に開かれていることを説明する言葉、「安らぎ」の表現には「緑」「憩い」「自然」といった、市民が憩う場所を示した言葉を選んだ。その他、「賑わい」の表現には「交流」「賑わい」「イベント」、「地域拠点」には「協働」「発信」「展示」、「空間の機能」の表現には「広場」「カフェ」「ポケットパーク」といった言葉を選び、計121種類の単語を振り分けた。

言語表現型	説明
1 「開放性」の表現	空間的・機能的な開放性、繋がりを表す
2 「安らぎ」の表現	精神的な充足と親しみやすさを表す
3 「賑わい」の表現	賑わいの創出を表す
4 「地域拠点」の表現	地域拠点としての役割を表す
5 「空間の機能」の表現	空間の機能性・多様性を表す

fig.2-17 言語表現型

ここまで、技術提案書の空間表現について、<透視図型>と<言語表現型>の2つの類型化を行った。最後に両者を組み合わせることで、図と言葉の関係性から市民交流空間の表現特性を探る。14の<透視図型>それぞれについて、使われていた<言語表現型>の割合を算出した (fig.2-18)。

グラフを見ると、まず外観と内観で2つのまとまりに分けることができる。

外観では「安らぎ」と「空間の機能」の割合が比較的高い。つまり、親しみやすさと機能の充実を重視した外部空間が多く提示されていると言える。 反対に、内観では「開放性」の割合が高く、F4「多目的空間図」を除けば、機能よりも空間の解放感が優位にあるものが多い。これは、使い方がはっきりしている空間よりも、自由に滞在できる連続性を持った内部空間がイメージされている、ということを表していると考えられる。

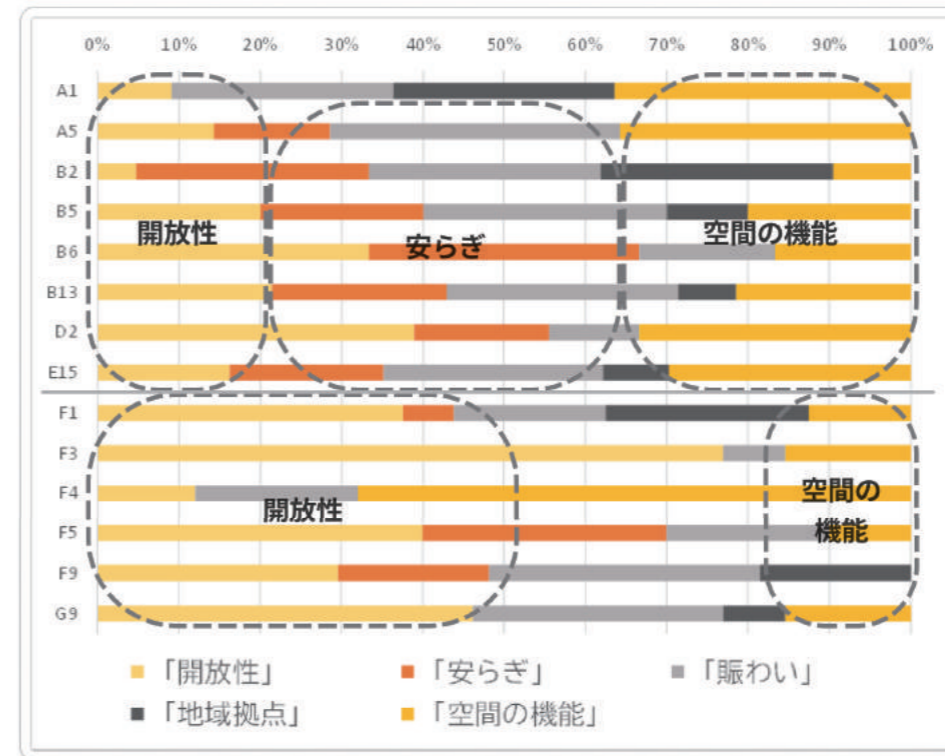


fig.2-18 透視図型ごとの言語表現型の割合

新しい庁舎の可能性

本稿では、市民交流空間が含まれる庁舎建設計画のうち、絵としてのイメージが最初に表れるプロポーザル案について、透視図のパターンと言葉の関係を探ってきた。その結果、広場をはじめとした外部空間の充実と、庁舎それ自体では完結しない内外の関係性が重要視されていることが分かった。これは、市民交流空間という自由度の高い空間が付加されることによって、多くの庁舎で特別に考慮されることが少なかったであろう、空間的、機能的な連続性が求められるようになった、とも言い換えられる。

庁舎に付随した広場を、地域内外の交流が生まれる拠点として計画し、実行した事例は既に多く存在している。次章で紹介する新発田市やいなべ市などがそれにあたる。これからの庁舎建築は、堅固な建築の中に留まらず、庁舎を媒体として地域性を発信するという、今までの役所の機能を拡幅していく方向に進んでいくのかもしれない。

庁舎を単体で計画するのではなく、周辺環境と一体的に考え、存在感のある街のシンボルとして建てる。市民交流空間という新しい場所を持つことで、市民が何気なく立ち寄る都市の中心として、庁舎の存在意義を変えていけるのではないだろうか。



fig.2-19 庁舎の玄関口として広場が描かれる
(茨城県大子町、提供/遠藤克彦建築研究所)

暮らし・つながりを支える佐々タウンホール

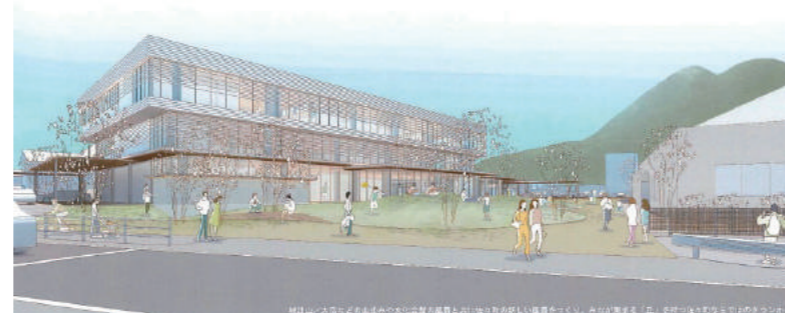


fig.2-20 市民が集まる丘のイメージ
(長崎県佐々町、提供/遠藤克彦建築研究所)



fig.2-21 内外が連続し、外へ意識が向けられる
(長野県軽井沢町、提供/山下・三浦慎建築設計室共同企業体)

画像出典

長野県軽井沢市 (fig.2-1, fig.2-6, fig.2-8, fig.2-13, fig.2-15, fig.2-21)

<https://www.town.karuzawa.lg.jp/www/contents/1620620161271/index.html>

北海道奈井江町 (fig.2-4)

http://www.town.naie.hokkaido.jp/town/seisaku/tyoushaseibi/sekkei_proposal/

茨城県大子町 (fig.2-14, fig.2-16, fig.2-19)

<https://www.town.daigo.ibaraki.jp/page/page003245.html>

長崎県佐々町 (fig.2-20)

<https://www.sazacho-nagasaki.jp/kiji0033113/index.html>

7つの市民交流空間に関する フィールドワーク

文：伊藤 雄飛 松實 秀磨

|||||||

前章にて、市民交流空間に求められている特徴を把握したが、実際に作られた市民交流空間はその要求通りとなっているのだろうか。

建築雑誌や各自治体のHP等で様々な「市民交流空間」を見てみると、申し訳なさそうにベンチが置いてある程度の簡素なものから、多様な用途を想定し工夫を凝らしたものまで、様々ある。今回は、その中でも特に、空間としての魅力だけでなく運用面に関する工夫もありそうな7つの自治体を選定し実地調査をおこなった。その中のいくつかの自治体では関係者へのヒアリングもおこない、今後市民交流空間を計画していくうえで活用すべき示唆に富んだ知見が得られた。

本章では、各市民交流空間ができたいきさつや固有のエピソードなどを紹介しつつ、ヒアリングの内容を基にした定性的な言説を展開したい。

.3

スギ材の香りと

-
白鷹町産のスギ材がふんだんに用いられた白鷹町まちづくり複合施設は、施設内に入った瞬間に感じられる町産スギ材の香りが印象的な建築である。

計画の主題として町産スギ材の利用が掲げられたこの施設では、内部の現しに余すところなく町産スギ材が利用されており、訪れた人々が親しみと温かみを感じられる空間が実現されている。

その一方で懸念されるのは、木造建築であるが故の耐火



fig.3-a2 建物正面



fig.3-a3 軒下動線



fig.3-a1 エントランスホール / 町民ラウンジ

性だが、3つの耐火構造棟を5つの木造棟で挟み込んだ計8棟からなる分棟形式により耐火規定をクリアしている。

環境・設備面においても、端材を燃料としたバイオマスボイラーが採用されており、町産スギ材を余すところなくするための工夫が随所になされている。

なぜ白鷹町産スギ材なのか？

-
白鷹町の新たなシンボルとして計画された本施設だが、計画の主題として“町産スギ材の利用”が掲げられるに至った背景には、台風により荒廃した山の整備、町産スギ材利用による町内への投資、施設のランドマーク化という3つの要因がある。

2017年の台風18号の被害を受け、山林が荒廃した状態にあった白鷹町では、新庁舎の計画に際して、町産スギ材を建材として利用することで荒廃した山林の整備を兼ねることを検討していた。

しかし、ここで町内に加工場がないという課題が浮上する。町産スギ材を建材として利用するためには、町外の加工場にて町産スギ材を加工する必要がある、町内にお金を落とすことができないというデメリットがあった。

そこで、本施設では、あえて無垢材のまま建材として利用している。無垢材を建材として利用すると相応の維持管理が必要となるが、そのメンテナンスを町内の工務店に委託することで、町内への投資とすることが計画されている。

このようにして実現した新庁舎は、木造ならではの温もりや柔らかさがあり、好評であるとのことだ。



fig.3-a5 スギ材が用いられた現し



fig.3-a4 大会議室



fig.3-a6 中会議室（議場）



fig.3-a7 町民ラウンジより外を見る



fig.3-a9 閲覧スペース（図書館）



fig.3-a8 学習コーナー（図書館）

町民と行政、双方の意見を汲み取ることの難しさ

“町産スギ材の利用”をテーマとした本計画では、町民にその魅力を知ってもらうべく、木材の試験伐採をテーマとした町民参加型のワークショップを実施している。

ヒアリングにて「竣工した新庁舎に対する町民のクレームが少ない」というエピソードがあったが、このワークショップをはじめとして、町民参加の機会が設けられたことにより、計画に町民が参加しやすくなったことがその要因であると考えられる。

このような経緯を経て、町民の意見が反映されたこの施設は、白鷹町の顔として町民が誇れる庁舎と言えよう。その一方で、町産スギ材利用へのこだわり、つまるところ町民の声を汲み取りすぎてしまったあまりに、職員の執務環境に対する配慮が欠けているのではないかという声もあった。町民と行政双方の意見を汲み取った空間を実現することの難しさが窺える。

“ふらっと立ち寄る”ことができる市民交流空間

本施設では、北側に町民図書館、南側に町役場、その接合部分にラウンジやミーティングスペースなどの市民交流空間が設けられている。

ラウンジは、学生の学習・飲食スペースとして利用される他、町内のサークルの打ち合わせや町民と職員の行政手続きの際にも利用されている。町民図書館内にも、学習室やフリースペースは存在しているが、ラウンジは飲食や雑談が可能なため、学生が溜まり場として利用する機会が多いようだ。

実際に訪れてみて、白鷹町まちづくり複合施設は、町民が“ふらっと立ち寄る”ことができる場所という印象を受けた。やはり、その大きな要因となっているのは、ラウンジやミーティングスペースなど、町民が気軽に集まり、雑談や飲食、打ち合わせなど様々な活動に勤しむことができる市民交流空間の存在である。

これから何か活動を始めようとする町民が気軽に集まり、仲間探しができるような、町民活動の起点となる空間である。



fig.3-a12 町民ラウンジ1



fig.3-a11 執務スペース周辺 (2F)



fig.3-a13 町民ラウンジ2

一方、その傍らで

-
本施設から 200m ほど離れた高台に位置するのは、荒砥地区コミュニティセンターである。

町民が“ふらっと立ち寄り”ことができる白鷹町まちづくり複合施設に対して、こちらは町民が“目的を持って集まる”場所であるといえるだろう。というのも、このコミュニティセンターの主な用途は、町内の高齢者を中心としたサークル活動であり、白鷹町まちづくり複合施設ができてからは、施設間での棲み分けがより明確になったとのこと。

特に印象的だったのは、コミュニティセンターにて町内のサークルの新陳代謝が起こっているという点である。

コミュニティセンターを利用するサークルの規模は 3～30 人と幅広く、活動内容もヨガ、習字、囲碁など多様なようだ。多様が故に、サークルの人数が足りず、廃止になってしまうこともままあるようだが、その穴を埋めるように新たなサークルが立ち上がる。高齢者サークルの新陳代謝という独特な生態系が構築されている様子が見てとれる。

町民が“ふらっと立ち寄り”白鷹町まちづくり複合施設、その傍らでも活発な町民活動が起こっている。



fig.3-a14 建物正面（荒砥地区コミュニティセンター）

“ふらっと立ち寄り”のか、“目的を持って集まる”のか

-
白鷹町まちづくり複合施設と荒砥地区コミュニティセンター、両施設とも“町民が集まる場所”という意味では近しいものの、町民が“ふらっと立ち寄り”のか、あるいは“目的を持って集まる”のか、微妙に役割が異なる 2つの施設が近郊に位置している。

だからこそ、町民は主体的に活動する際に、その起点づくりをするのか、もしくはその活動を深化させるのか、という具合に段階に応じた選択をすることができるのではないだろうか。



fig.3-a15 ホール（荒砥地区コミュニティセンター）

中心市街地に再び活気を

-
新発田駅前から続く中央商店街の一画、札の辻と呼ばれる十字路に新発田市役所は建てられた。札の辻は街の中心地で、片持ち屋根が続く中央商店街には、老舗の電器屋や洋菓子店などが軒を連ね、背が低く風情ある街並みをつくっている。ところが、車社会の進展とバイパス沿いへの大型店進出により、商店街の日常には寂しさが残ってしまった。この魅力的な中心街に再び活気を取り戻そうと計画されたのが、本節で紹介する新発田市役所だ。

新発田市役所は、「ヨリネスしばた」という愛称がつけられている。1階には玄関口となる「札の辻ラウンジ」と巨大な屋内広場の「札の辻広場」、4階には市民ホールにもなる議場とテラス、7階には展望室兼オープン席がある「飯豊ラウンジ」があり、それぞれ市民交流空間として開放されている。



fig.3-b2 商店街



fig.3-b1 札の辻より新発田市庁舎を見る



fig.3-b3 夜の新発田市庁舎

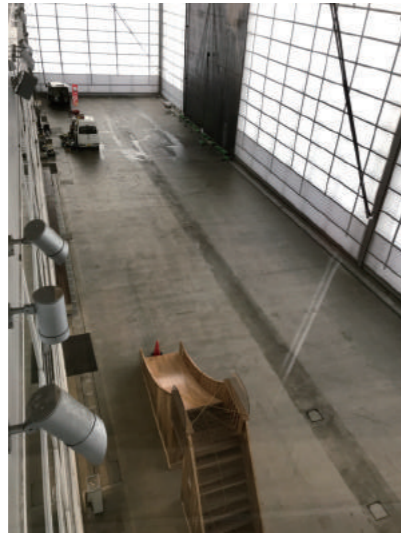


fig.3-b4 札の辻広場



fig.3-b6 フリースペース (3F)



fig.3-b5 移動販売のワゴンカー（札の辻広場にて）

街を繋げるイベント広場

-
新発田市役所の一番の特徴といえば、3層吹き抜けの巨大な「札の辻広場」である。辻の名を冠したこの広場は、面積 650㎡超の奥行きのある空間だが、屋外ではなく、開閉式のシャッターを備えた屋内の広場となっている。イベント等での利用料金は時間ではなく、面積によって決まるため、準備時間などを気にする必要がなく借りやすいそうだ。

「札の辻広場」の主な利用目的はイベントだ。2020年、2021年はコロナ禍によって人の集まるものは実施できなかったが、それ以前はほとんど毎週末イベントが行われていた。夏の大きなイベントではシャッターを開け放ち、駐車場から「札の辻広場」、「札の辻ラウンジ」、そして中央商店街が連続することで賑わいを創出している。

普段の使われ方は様々で、昼には移動販売のワゴンカーが入るほか、遊具を目当てに親子連れや保育園が散歩に訪れる。

コロナ禍に入ると、イベントの数は減ったものの、ワゴンカーや遊具の数が増えたという。また、無観客のイベントを配信するなど、本来の使い方が出来ない時期でも、街の中心としてその価値を高めている。

「開かれた」時間

営業時間は市役所機能と市民交流空間で異なっている。役所は通常 8 時 30 分～ 17 時 15 分であるのに対し、市民交流空間は 8 時 30 分～ 20 時と長く、さらには元旦を除いて年中開放しているというから驚きだ。

このような長い開放時間を実現している要因として考えられるのは、役所との間のはっきりとしたゾーニングとセキュリティラインの設定である。市民交流空間は全て、窓口や執務スペースといった役所ならではの空間から少し離れており、連結しているものの、都合に合わせて物理的に、また意識的に壁を引けるという良さがある。

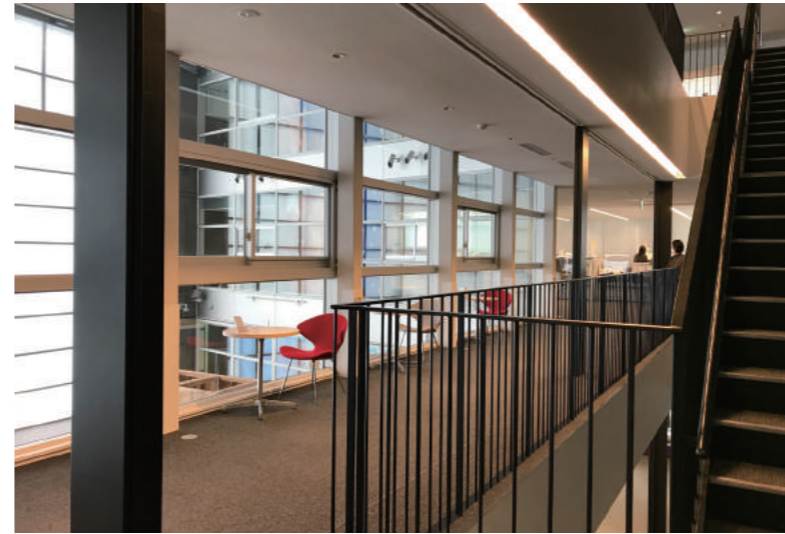


fig.3-b8 目的に応じた利用時間の制限



fig.3-b7 エントランス



fig.3-b9 市民ギャラリー・飯豊ラウンジ1



fig.3-b11 職員休憩室



fig.3-b10 市民ギャラリー・飯豊ラウンジ2



fig.3-b12 議場前のフリースペース

行政と市民の自然な棲み分け

-
新発田市役所には幾つもの机とイスが置かれている。「辻の札ラウンジ」や4階のテラス前、7階の「飯豊ラウンジ」などである。ここは、昼には職員のランチで満席となり、夕方には市民、特に高校生が集まる場所となっている。

市民に開放される空間といっても、市民利用の少ない昼の時間帯には、現場で働く職員が気兼ねなく使える。夕方になると、今度は周りから市民が集まってきて、仕事や勉強、仲間と談笑する場として機能する。時間帯によって異なる利用者が、それぞれの需要に合わせて使える幅が、空間的にも、時間的にも必要なのではないだろうか。

市民協働のためのスペース

-
長岡駅から連絡通路を歩いてアオーレ長岡に足を踏み入ると、一面に木パネルが散りばめられたナカドマが広がる。このナカドマは、館と衣が入れ替わったような構成で、施設内に外部空間を引き込んだ市民交流空間である。

巨大な市民交流空間を内包するアオーレ長岡は、今回の調査で訪れた庁舎の中では数少ないコンペティション形式で設計者選定が行われた庁舎である。このコンペティションの要項では、“市民協働のためのスペース”という注文が出されており、それを実現したアオーレ長岡は、一般的



fig.3-c2 アオーレ長岡



fig.3-c1 ナカドマ

な庁舎建築とは反対に、市民交流の場に行政施設が挿入されたような構成となっている。

2010年代に実現した市民交流空間の先駆的な存在とも言えるのではないだろうか。

中心市街の主要動線として

アオーレ長岡は、大手通をはじめとした長岡市の中心市街の活性化を目的に計画された。

旧庁舎（現在地より南に2kmの地点）など中心的な機能を担う行政施設が街中に存在しなかったこと、厚生会館の老朽化に伴う改修が必要であったことがこの計画の背景にある。

そのため、アオーレ長岡の敷地は、長岡駅と大手通の間に位置しており、長岡市の中心市街に訪れる際の主要動線の一部になっている。実際に中心市街に訪れた人は、長岡駅から連絡通路、アオーレ長岡のナカドマを経て、大手通りに出ることができる。

このようにして中心市街にアオーレ長岡を配した結果、周辺の空きテナントの減少や大手通の人通りの増加といったポジティブな影響が現れているようだ。

市民のニーズを確かめるべく

アオーレ長岡の計画におけるユニークな点は、計画段階にて街中公共施設の実証実験が行われたことである。

この実証実験は、自由に利用できる街中の空間に対する市民のニーズを確かめることを目的としており、その一環として、ながおか市民センターやフェニックス大手イース

トなどの公共施設が大手通りに計画されている。ながおか市民センター、フェニックス大手イーストともに、市民交流空間としての機能を兼ね備えており、ワーカー向けのコワーキングスペースや学生の学習スペースなどが設けられている。

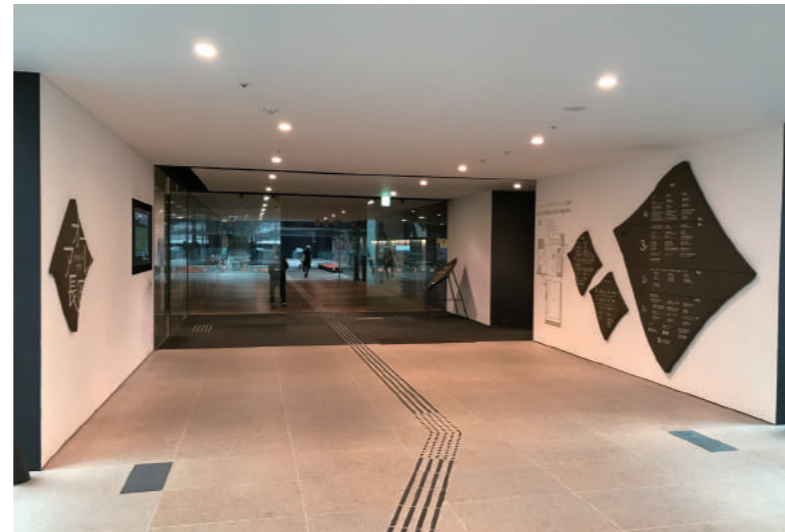


fig.3-c4 連絡通路よりアオーレ長岡へ



fig.3-c3 ながおか市民センター



fig.3-c5 フェニックス大手

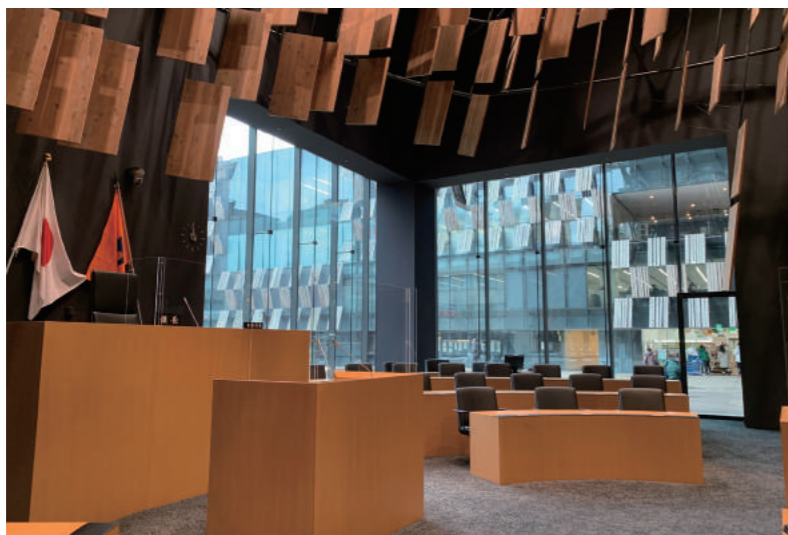


fig.3-c6 議場



fig.3-c8 テラス



fig.3-c7 ナカドマの一角

日常の一部として

-
訪庁当日は、ナカドマを中心にテラスや回廊を一通り巡った。ナカドマに泊まっているキッチンカーで昼食を購入する市民や行政職員、テラスで酒を酌み交わす市民の姿など、施設内には職員だけではなく、市民の姿も多く見られた。

また、ナカドマと連結する3Fのテラスや回廊では、日常的に、家族連れがレジャーシートを引いてピクニックを楽しんだり、近隣の幼稚園の園児が散歩をしたり、SNSに投稿する動画の撮影が行われたりと、日常の一部として様々な形で利用されているようだった。

建築的な透明性の表現

-
アオーレ長岡を訪れて印象的であったのは、施設内の随所で視線の抜けが意識されていた点である。

例えば、東棟（行政棟）とテラス間では、視線が抜けているものの市民と職員が互いに窮屈さを感じることもなく、むしろ職員としては市民との近さを感じられて良いとのことだった。同様に西棟1Fの議場も外部からの視線の通りが意識された構成となっており、施設内の随所で市民に対する行政への透明性が表現されている。

行政施設への NPO の介入

アオーレ長岡の特徴の一つとして挙げられるのは、空間の管理・運営を行政だけではなく、NPO も担っている点である。

実際に、行政機能の集中する東棟は行政が、西棟やナカドマ、アリーナなどの共用スペースは基本的に長岡市の NPO が管理している。そのため、市民と行政職員の領域が分離しており、行政の区域に市民が進入することがほとんどないようだ。

また、NPO の介入に伴い、空間利用における市民、NPO、行政の関係にも特徴がある。3 者の役割は、市民が企画と運営を、NPO が全体の管理をしつつ、企画のサポートを行い、行政が建物全体の管理を行うという形で分担されている。そのため、市内の音楽サークルの依頼を NPO が仲介することで、ナカドマでのランチコンサートなどが実現している。

市民と NPO が共創することで、行政に縛られることなく、ボトムアップ的にイベントが生み出されている様子が見てとれる。

さらに、アオーレ長岡の市民交流空間は、小規模な市民交流ホールから大規模なナカドマまで幅広いスケールで用意されている。特に、市民の利用が無料であること、イベントの企画・運営時には NPO からの手厚いサポートがあ

ることが大きな要因となり、市民ホールの稼働率は 80% という高い水準にある。

用意されている空間のバリエーションや NPO によるサポートなど、これから活動を始めようとする市民にとっては、これ以上ない環境である。



fig.3-c10 市民交流スペース



fig.3-c9 ナカドマに滞在するキッチンカー



fig.3-c11 西棟入口



fig.3-d1 駐車場付近（建物南側）



fig.3-d3 にぎわいの森2



fig.3-d2 にぎわいの森1

どちらかというと商業施設

-
美味しいと評判のパン屋に並ぶカップル、犬を連れて散歩をする若い女性、道端のベンチに腰掛け談笑する老夫婦、広場を元気に走り回る子供たち、平日の昼間にも関わらずたくさんの人々で賑わうここは、いなべ市役所のにぎわいの森である。

雑木林を整備して創出されたにぎわいの森は、6つのテナントと遊歩空間、イベント利用可能なピクニックエリアで構成されている。

パン屋、精肉店、洋菓子店と様々なテナントが立ち並ぶにぎわいの森を目にすると、行政施設ではなく商業施設にきているのではと錯覚してしまうほどだ。また、これらのテナントは、名古屋市をはじめとしたいなべ市外の人々によって運営、保守管理が行われている。あえて市外の人々をスタッフとして呼び込むことで市内に人を流入させることを狙いとしている。

そして、何より驚くべきは、平日の昼間にも関わらず、いなべ市内外から訪れた人々で賑わっているという事実。

なぜ、そのようなことが起こるのか。

この疑問を頭の片隅に、いなべ市の都市的なポテンシャルや、いなべ市役所の計画、空間的特性を見ていきたい。

その裏には GCI

にぎわいの森が生み出された背景にあるのは、GCI（グリーンクリエイティブいなべ）の存在である。

平成26年にいなべ市役所新庁舎が計画されると同時に設立されたのがGCIである。GCIはいなべ市のプロポーシオンをメインとして、イベントやワークショップ、ツアーを通じて町おこしに取り組む一般社団法人である。このGCIはいなべ市内の様々なイベントの運営に加えて、いなべ市庁舎内のにぎわいの森の運営にも強く関わっている。

いなべ市の町おこしにあたり、GCIは市内の特産品を集め、市民交流を促す“場所”が必要であると考え、にぎわいの森を設立した。にぎわいの森をハブとして、いなべ市に訪れる観光以上、移住未満の人々に訴えかけることで、いなべ市に人を流入させることを目標としている。



fig.3-d5 にぎわいの森4



fig.3-d4 にぎわいの森3



fig.3-d6 にぎわいの森5

東海圏の主要都市に

-
続いて、いなべ市の都市的なポテンシャルを見てみる。
いなべ市は名古屋から車で60分の圏内に位置する。将来的には、令和8年の東海環状自動車道の開通によって、岐阜県との交通の便がよくなることが予想されている。自動車道の開通は、にぎわいの森をハブとして、いなべ市に人を流入させるというGCIの狙いがより現実味を帯びる一つの要因となる。

将来的に交通網が発達することで、にぎわいの森は、東海圏一帯を巻き込む交流の場となり、ひいてはいなべ市が東海圏の主要都市の一つとなりうるのではないだろうか。



fig.3-d8 いなべ市庁舎遠景



fig.3-d7 ひさし



fig.3-d9 いなべ市庁舎内観1 (1F)



fig.3-d10 食堂に配されたパネル



fig.3-d11 シビックコア棟

小回りのきく市民交流空間

いなべ市役所は、行政棟、議会棟、保健センター棟、シビックコア棟の低層4棟とそれらをつなぐひさし、そしてにぎわいの森からなる。市民交流空間として利用されているのは、にぎわいの森に加え、シビックコア棟とひさしである。

唯一の屋内空間であるシビックコア棟には、食堂と5つの研修室が設けられている。食堂は、職員でも市民でも利用可能である。その一角には市内の特産品や飲食店をマッピングしたパネルが用意されており、いなべ市役所を起点にして、市内の活性化を図ろうとする姿勢が見て取れる。また、研修室は、開庁時間内は職員の打ち合わせスペースとして、閉庁時間にあたる平日の夜や土日祝日は市民に貸出されている。

行政棟、保健センター棟、シビックコア棟を結びつけるひさしは、いなべ市役所のヴィジュアル面でのシンボルである。ひさし下の広場では、毎週日曜日に市民が特産品を持ち込みマルシェを開催する他、災害時に炊き出しを行う防災広場としての役割も兼ね備えている。

行政と市民のちょうど良い距離感

シビックコア棟、ひさし、にぎわいの森といった市民交流空間と行政的な機能が完全に分離しているいなべ市役所だが、現在の行政と市民間の距離感は良いバランスにあるようだ。

庁舎内に市民交流空間があっても、そこに訪れる人は行政施設に対してポジティブな印象を持つ人に限られてしまう。だが、いなべ市役所の場合は、市民交流空間が行政棟から物理的に離れていることで、市民が行政の目線を気にせずに過ごすことができるし、職員にとっても案内をしやすいつのこだった。

いなべ市役所に賑わいが生まれる要因の一つとして、このような棲み分けの明確さが挙げられるのかもしれない。



fig.3-d13 大会議室（シビックコア棟）



fig.3-d12 食堂（シビックコア棟）



fig.3-d14 いなべ市庁舎内観2（2F）

街のシンボルとして

-
北方町役場新庁舎は、「大屋根の下に人々が集う開放的な公共空間」として、2016年に開庁された。住宅地に位置し、南側には巨大な団地がそびえている。庁舎を内から外へ開放しようという意図と関連して、正面の防災公園と一体的に機能する防災拠点としての意識も高い。

一般的な庁舎のイメージは、街路に対し垂直な壁面を表す箱型だが、北方町役場はそうした印象が全くない、ひとつの大屋根でまとめられた特殊な形態を持つ。台形の立面を形成するその大屋根によって、「町の回廊」と呼ばれる深い軒下空間をつくり、庁舎から屋外広場、正面の防災公園へとアクティビティが広がっていくという構想だ。

役場前の通りには、防災公園の他、生涯学習センターと図書館が並んでいる。歩道が整備され、周辺敷地の歩行者ネットワーク構築という計画も含まれている。

町のシンボルとなるべく、役場としては一風変わった外観を持つ北方町役場には、実際にどのような工夫が凝らされているのだろうか。



fig.3-e2 防災公園



fig.3-e1 建物北側



fig.3-e3 生涯学習センターきらり

明るく小さな空間

大屋根といっても、随所に採光のための谷と隙間が設けられている。十分な採光によって明るい内部には、幾つかの小さな空間が散りばめられていた。

1階には「いこいの広場」「まなびの広場」「つどいの広場」と名付けられた3つの市民交流空間がある。「いこいの広場」はキッズスペースのある待合空間で、3層吹き抜けの下にある中心的な場所だ。「まなびの広場」は個室の印象で、地域の教室などが開かれるほか、普段は役場の会議室として使われているようであった。「つどいの広場」は窓口から分離された雰囲気があり、ガラス戸を開け放つことで屋外広場と連結させることができる。普段は市民主催のカフェがオープンしているようだが、訪れた日はコロナ禍の影響で休止中となっていた。イベント時には、ここから町の回廊、屋外広場、そして防災公園が一続きになり、賑わう様子が容易に想像された。

2階に上がると、執務スペースから吹き抜けを挟んだ反対側に、カウンター席やデスクが置かれた細長いラウンジがある。10席ほどだが、良い具合に隠れた空間で、仕事や勉強、談笑するにも適した場所だ。

2階と3階には、大屋根に穿たれた谷によって、6つのテラスが設けられている。正方形の少し広いもの、細長く狭いものなど、様々なかたちがある。住宅地や防災公園



fig.3-e5 3Fよりラウンジ、いこいの広場を見る

を一望できる気持ちの良い空間であるが、ここには特別、イスや机が置かれているわけではない。鍵が掛かっていたり、案内が無かったりと、こちらも隠れた場所となっているようだ。



fig.3-e4 まなびの広場



fig.3-e6 つどいの広場

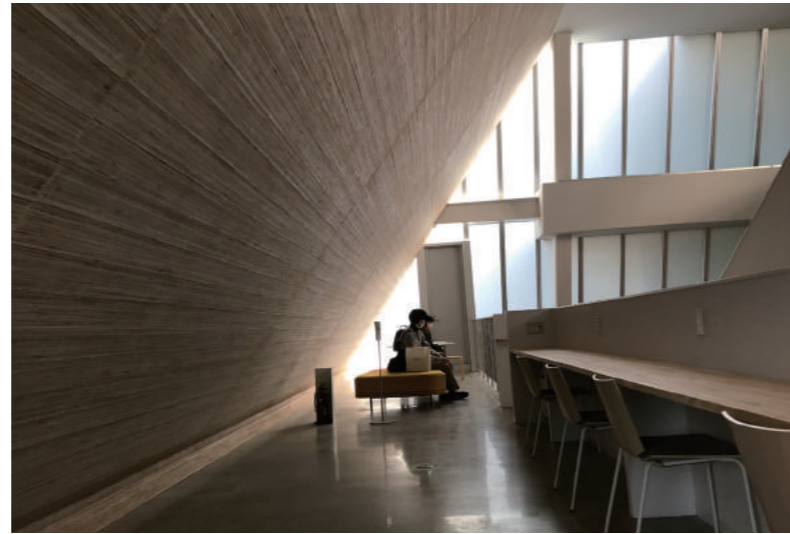


fig.3-e8 ラウンジ1 (2F)



fig.3-e7 谷テラス (2F 北側)



fig.3-e9 ラウンジ2 (2F)

落ち着く日常と、賑わう非日常

-
北方町役場には、屋内外に個性的で多様な空間が用意されている。中には隠れたような場所もあり、自分で発見する楽しさもある。一方で、イベント時や災害時にはフル稼働するポテンシャルを持ち合わせている。

普段は知る人ぞ知るスポットとして、イベント時には庁舎を起点に賑わう場所として機能する。日常と非日常にメリハリがあるというのも、庁舎の市民交流空間のひとつの在り方なのかもしれない。

大屋根とコンクリートの冷たさと

-
訪れた日は、3月にしては暖かな陽気であった。
「じゃあ、休憩がてら軒下の遊歩空間で時間を潰そう」と、私たちは大屋根の下でコンクリートのベンチに腰掛ける。その縁側のような空間の風通しの良さは存外に心地良くて、コンクリートの冷たさも相まって、ついつい長居してしまう。

そんな一幕が印象的であった岐南町役場は、「住民、議会、行政の三者が多様な関係を築き、普段から集い、語り、助け合い続けられる庁舎」という理念を掲げ、2015年に旧



fig.3-f2 岐南町役場



fig.3-f1 軒下空間（建物北側）

庁舎を建て替える形で開庁した。

敷地内には、庁舎を取り囲むように公民館、議堂、保健センターが配されており、それらは低層の大屋根で縫合されている。そして、その大屋根の外周に沿って、緩やかなカーブを描く遊歩空間が配された構成となっている。

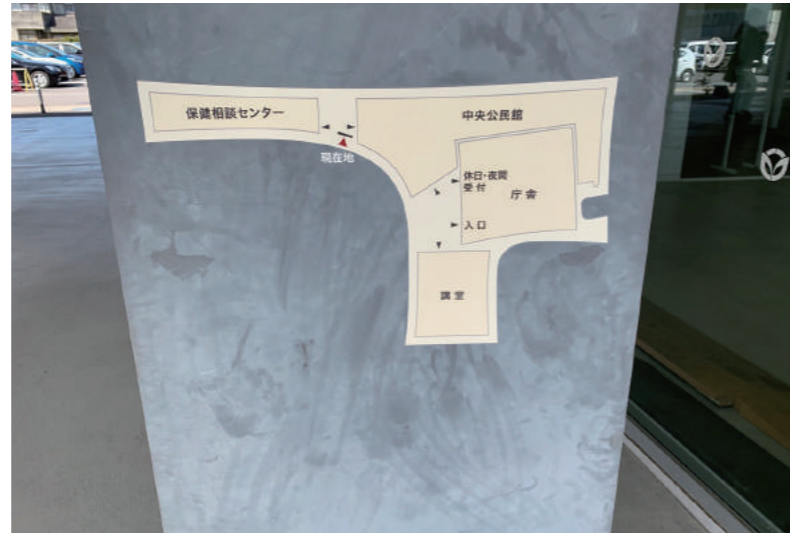


fig.3-f4 平面構成

一つ屋根の下で起こる役割分担

岐南町役場は、庁舎と公民館、議堂、保健センターが一体となった施設である。そのため、訪れた町民は、役場での行政手続き、公民館でのサークル活動など、公共施設に対する需要のほとんどをこの施設で賄うことができる。

これらの施設は空間的にだけでなく、機能的にも明確な役割分担がなされている。庁舎は行政機能、公民館や議堂、保健センターは町民活動のための市民交流空間としての機能、という具合である。

本節では、公民館を中心として、その市民交流空間としての機能に焦点を当てたい。



fig.3-f3 軒下空間（建物南西側）



fig.3-f5 中央公民館

目的の有無に応じて使い分けができる市民交流空間

岐南町役場の市民交流空間は、二つのタイプに分けることができる。

一つは、公民館の会議室や学習室といった予約制の空間。もう一つは、軒下空間や公民館のエントランスといった町民が自由に進入できる空間である。

では、町民はそれらの市民交流空間をどのように使い分けているのだろうか。結論として、町民は「目的の有無」に応じて空間を使い分けていると考えられる。

公民館でのイベント、サークル活動への参加など、町民が目的ありきで庁舎に訪れた場合は、公民館の各室を予約して利用する機会が多いようだ。

一方で、町民がこれといった目的もなく、庁舎に訪れた際に軒下や遊歩空間、エントランスは利用される。庁舎自体が高齢者や近隣の幼稚園の散歩コースになっており、ふらっと庁舎に立ち寄り軒下や遊歩空間、エントランスで休憩するといったシチュエーションが多いようだ。特に、公民館のエントランスでは、町内の作家の作品展示を行っており、町内に新たな交流を生むような企画も実施されている。ちなみに、調査当日は町内の綿作家の作品が展示されていた。

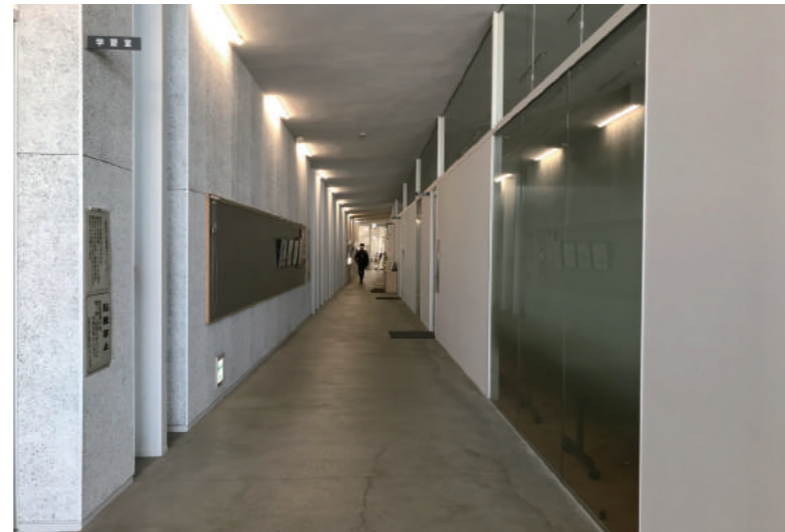


fig.3-f7 中央公民館内部



fig.3-f6 軒下空間（中央公民館・保健センター間）



fig.3-f8 議堂



fig.3-f9 エントランスホール（中央公民館）

大屋根の下に生まれる町民の“ハレの場”

町内における岐南町役場の強みは、車が主な移動手段である岐南町において、幹線道路沿いに位置し、交通の便に恵まれていること、デザイン性の高さ故に、町のシンボル

として町内外に広く認知されていることである。また、市民交流空間の強みは、町内の他の公民館よりも利用可能な部屋数、バリエーションに優れることが挙げられる。

そのため、文化祭や芸能祭など、町内外からさまざまな人が訪れる大きなイベント時に活躍するようだ。その際は、公民館の全室に加えて講堂を一体的に利用している（場合によっては軒下空間も利用するとのこと）。

町民の中には、文化祭や芸能祭での発表を目標に日々サークル活動に取り組む人も多く、彼らがその成果を発表する“ハレの場”として大きな役割を果たしているのではないだろうか。



fig.3-f10 岐南町役場内



fig.3-g1 岐阜市庁舎

街の結び目として

-
岐阜駅から岐阜市役所までは、金華橋通りという街の骨格をなす大通りで結ばれている。駅からバスで北に向かう10分ほどの道のり。岐阜市役所の建つあたりは「つかさのまち」と呼ばれ、北には長良川、東には岐阜城のそびえる金華山が近い。岐阜の街と自然、歴史の結節点とも言える場所だ。

「つかさのまち」には、2015年開館の「ぎふメディアコスモス」という図書館と、岐阜市役所2つの施設がある。ぎふメディアコスモスは県外から訪れる人も多い、人気のある図書館だ。両施設の間には「みんなの広場 カオカオ」と呼ばれるフラットな広場があり、イベント会場のほか、防災拠点としての機能も考えられている。

南北の都市軸を受け取る街の結び目で、賑わいを創出するために建てられた新庁舎は、実際にどのような役割を果たしているのだろうか。



fig.3-g2 テラスよりぎふメディアコスモスを見る

利用頻度の高い市民交流空間

庁舎の構成は、主に市民利用が多い低層部、執務室が集まる高層部となっており、市民交流空間は一箇所に固まることなく、随所に設けられている。

1階には広場に面した市民交流スペースやエントランスモール、2階には「市役所大食堂」と題された誰でも利用できるレストランがある。4階には「みどりの丘」と呼ばれる緑化テラスがあり、広場に面したファサードの屋外階段からもアクセスできる。高層部には奇数階に多目的スペース、15階と17階には2層吹抜の展望室があり、金華山や長良川に臨む什器が豊富な空間となっている。

1階の窓口の向かい側、動線空間ともなっているエントランスモールでは、写真や絵画など、市民団体の展示が行われる。予約が多く、途切れることがないほど利用されているという。訪れた日には写真展が行われていた。

また、同フロアの市民交流スペースには椅子と机のほかピアノが置いてあり、窓口のある中心のエリアから分離された空間となっている。日常的にフリースペースとして利用できるほか、こちらにも市民団体のブースが設置されるなど、市民が情報発信できる場として用意された空間が、1階に集められているという印象を受けた。

展示をしたい、しかし美術館など文化施設の1室を借りるには規模が小さく、ハードルが高いと感じる主催者も、

ふらっと訪れる市民も、手軽に楽しめる空間と仕組みがあり、そのことで利用頻度が高くなっているのではないだろうか。



fig.3-g4 市民交流スペースミニナト (1F)



fig.3-g3 テラス・みどりの丘 (4F)



fig.3-g5 展望スペースつかさデッキ (17F)

ぎふメディアコスモスの向かいで

ぎふメディアコスモスは、市民活動交流センターや市立図書館からなる複合施設。2階の図書館は、波打つ天井や傘のような採光装置、什器による巧みな空間の分節が印象的な場所で、観光で訪れる人も少なくないだろう。それだけではなく、1階には貸会議室や展示ギャラリーなど、市民交流空間が豊富という側面も持ち合わせており、予約が常に埋まっているほど人気だという。

一方で、観光と市民利用、2つの目的が重複したとき、300台程度の駐車場が溢れかえるという問題を抱えていた。そこで岐阜市役所は、新庁舎の傍らに381台の立体駐車場を新たに設けてキャパシティを増やし、この問題の解決を図った。ぎふメディアコスモスという強力な存在を活かすため、新庁舎は敢えてサポートする側に立ったのだ。食堂や展望室など、「つかさのまち」に無かった要素を加え、メディアコスモスを利用する上での新たな価値を付加したとも捉えられる。



fig.3-g7 ぎふメディアコスモス内部1



fig.3-g6 ぎふメディアコスモス



fig.3-g8 ぎふメディアコスモス内部2



fig.3-g9 みんなの広場カオカオ

支える役割を堅実に

-

岐阜市役所には、個室で行うクローズドな市民活動ではなく、広場やメディアコスモスと一体となった大きなイベントをしたい、という想いがある。まずは市役所としての役割を全うし、地域に新たな価値を与えつつも、市民交流空間には傾倒しない。そして、目の前に建つ大きな存在を支える役割を担うことで、市民交流を促進させる相乗効果を生み出す、名脇役としての姿があった。



fig.3-g10 エントランスホール (1F)



fig.3-g11 岐阜市街を見る

7つの自治体庁舎における 市民交流空間に関する分析

文：伊藤 雄飛

|||||||

理想的な市民交流空間を実現するには、人を引きつける形の魅力や機能性・開放性といった空間の良さだけでなく、空間を利用するための適切なルール設定や提供者（行政）の支援といった運営面の良さも必要だ。

空間と運営の両方が備わっていることは望ましいが、もちろん、コストや政治的な背景、その他庁舎機能との兼ね合い等から、十分な空間や運営体制が用意できない事もあると思われる。

本章では、空間と運営の2つの側面から7つの自治体の市民交流空間の分類を行って、市民の交流可能性を考察する。

本章の調査概要

7つの市民交流空間に対する2つの分析

前章では、7つの自治体庁舎に訪れて得られた情報を主観的に記した。

現地調査を振り返り、「市民に開かれた」庁舎を捉える上で、次の2つの視点が重要であると考えた。

- いずれの自治体でも、庁舎の周辺施設（主に行政施設）との関係性や都市動線など、都市計画的な側面が重要視されていること
- 「市民に開かれた」庁舎の市民交流空間を構成する要素として、空間的な要素と運営的な要素の2つがあること

そこで本章では、各庁舎の定量的な情報に基づき、この2つの視点に対応する形で、次の2つの分析を行う。

分析①

各自治体庁舎と都市の関係性

分析②

各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

分析①：各自治体庁舎と都市の関係性

4段階の都市スケール

初めに、各自治体の都市スケールを分類した。各自治体の人口、市域面積、人口密度は（fig.4-1）の通りである。さらに、普通地方公共団体の定義に基づき、各自治体の人口を基準として4段階にまとめてみると、今回訪れた自治体は、それぞれ次のような区分に当てはまることがわかった。（fig.4-2）

自治体	山形県白鷹町	新潟県新発田市	新潟県長岡市	三重県いなべ市	岐阜県北方町	岐阜県岐南町	岐阜県岐阜市
庁舎	白鷹町まちづくり複合施設	新発田市庁舎	アオーレ長岡	いなべ市役所	北方町役場	岐南町役場	岐阜市役所
都市人口 (人)	14,175	95,231	263,919	45,401	18,169	24,622	407,387
市域面積 (km ²)	157.71	533.1	891.06	219.83	5.18	7.91	203.6
人口密度 (人/km ²)	89.88	178.64	296.19	206.53	3,507.53	3,112.77	2,000.92
可住地面積 (km ²)	53.41	253.85	453.38	91.47	5.18	7.91	142.96
可住地人口密度 (人/km ²)	265.40	375.15	582.11	496.35	3507.53	3112.77	2849.66

fig.4-1 各自治体の都市スペック

区分	要件	該当する都市	
市町村	指定都市	人口50万人以上の市のうちから政令で指定	-
	中核都市	人口20万人以上の市の申出に基づき政令で指定	岐阜市
	施行時特例都市	地方自治法の一部を改正する法律による特例市制度の廃止（H27.4）の際、現に特例市である市	長岡市
		特例市制度：人口20万人以上の市の申出に基づき政令で指定	
	その他の市	人口5万人以上ほか	新発田市、いなべ市
町村	-	白鷹町、北方町、岐南町	

fig.4-2 4段階の都市スケール

分析①：各自治体庁舎と都市の関係性

分析項目として、周辺環境との連携強化、都市動線との一体化などの「都市における役割」、また、徒歩・自転車、自家用車、公共交通手段などの「庁舎へのアクセス手段」の2つを検討した。

ここでは、それらの項目に対して、現地調査やHP上で得た情報をもとに○△×の3段階で評価を行った。

最後に、各自治体の都市スケールと、「庁舎の都市における役割」、「庁舎へのアクセス手段」を照らし合わせた。(fig.4-3)

ポイントは都市における役割と移動手段

今回の事例では、人口5万人未満の町区分に白鷹町、北方町、岐南町が、人口5万人～20万人の市区分に新発田市、いなべ市が、人口20万人～50万人の中核市/施行時特例市区分に長岡市、岐阜市が該当している。

(1) 町区分の自治体（白鷹町、北方町、岐南町）

町区分に該当する白鷹町、北方町、岐南町では、庁舎周辺に位置する施設（主に行政施設）との連携強化、もしくは庁舎敷地内への行政施設の誘致が計画されており、庁舎周辺に機能を集中させている傾向にあるといえる。

その一つの要因と考えられるのは、町民にとって自家用車が庁舎への主な移動手段になっていることである。庁舎とその周辺に機能が集約されることで、行政手続きのために自家用車で庁舎に訪れた人は車の乗降を経ずに他の用事もそこで済ませることができる。

機能集約による影響の一側面として、訪れた町民を一時庁舎に引き止めるような効果が見られる。

(2) 市区分の自治体（新発田市、いなべ市）

市区分の新発田市、いなべ市では、庁舎及びその周辺に賑わいの場を創出することが計画されている。また、庁舎周辺に結び付きの強い行政施設が存在していないことも共通点として挙げられる。

新発田市の場合は、アイネスしばた、イクネスしばたといった行政施設が市内に点在してはいるものの、新発田市庁舎（ヨリネスしばた）との結びつきは弱い。いなべ市の場合は、周辺に行政施設が存在しない、という具合である。

そのため、新発田市庁舎では札の辻広場を中心にイベント時は商店街と一体化することで、いなべ市庁舎では敷地内のにぎわいの森との連携を図ることで、庁舎単体で市民交流の核としての役割を担っていると考えられる。

		中核都市/施行時特例都市		その他の市		町村		
		岐阜県岐阜市	新潟県長岡市	新潟県新発田市	三重県いなべ市	岐阜県岐南町	岐阜県北方町	山形県白鷹町
		岐阜市役所	アオーレ長岡	新発田市庁舎	いなべ市役所	岐南町役場	北方町役場	白鷹町まちづくり複合施設
都市における役割	周辺施設との連携強化	○	○	△	×	×	○	△
	庁舎を核とした市民交流空間の創出	△	○	○	○	△	△	△
	機能集約	△	△	△	△	○	△	○
	都市動線との一体化	○	○	△	×	△	×	×
庁舎へのアクセス手段	徒歩・自転車	○	○	△	×	△	△	△
	自家用車	○	○	○	○	○	○	○
	公共交通手段	○	○	△	△	△	○	△

fig.4-3 各自治体庁舎と都市の関係性

分析①：各自治体庁舎と都市の関係性

(3) 中核市・施行時特例市区分の自治体（長岡市、岐阜市）

中核市、施行時特例市区分にあたる長岡市、岐阜市では、既存庁舎の建て替えに合わせ、中心市街地に新庁舎が再配置されている。

その背景には、市内中心部の活性化を図るという狙いがあり、両庁舎とも市街地を徒歩で移動する際の主要動線の一部に組み込まれている。アオーレ長岡の場合は「長岡駅→アオーレ長岡（ナカドマ）→アーケード」、岐阜市役所の場合は「アーケード→岐阜市役所（エントラスホール）→岐阜メディアコスモス」という動線が特徴的である。

それ故に、両庁舎とも開庁時間外でも敷地内の一部に進入可能であるなど、空間の運用面でも都市計画に組み込まれている。

市区分の新発田市、いなべ市と比較すると、中心市街一帯を巻き込んだ都市計画的な側面が強いと考えられる。

引き寄せるのか、核となるのか、馴染むのか

ここでは、各庁舎の都市における役割と庁舎へのアクセス手段について、都市スケールを基にして比較を行った。

今回対象とした7つの庁舎に限るのであれば、次のようなことが言えるのではないだろうか。

マクロな視点から見ると、中核市、施行時特例市区分をはじめとして、都市のスケールが大きいほど、各項目の評価が良い傾向にある。大都市であるほど、都市内につながりを生み出す重要な施設として庁舎建築が計画されていることが窺える。

次に、ミクロな視点で見ると、スケールの小さい町区分の自治体の場合、庁舎の敷地内及び隣接地に機能が集約されている傾向にある。そして、1段階スケールが大きい市区分の自治体では、市民交流空間としての機能が強化され、庁舎単体で自立している。さらに、スケールの大きい中核市、施行時特例市区分の自治体であれば、市民交流空間が庁舎の敷地から市街地へ展延され、市街地と一体化した様子が見られる。

つまり、町全体を「引き寄せる」のか、あるいは市の「核となる」のか、はたまた大都市に「馴染む」のか、都市のスケールに応じた三者三様の傾向があるのではないだろうか。

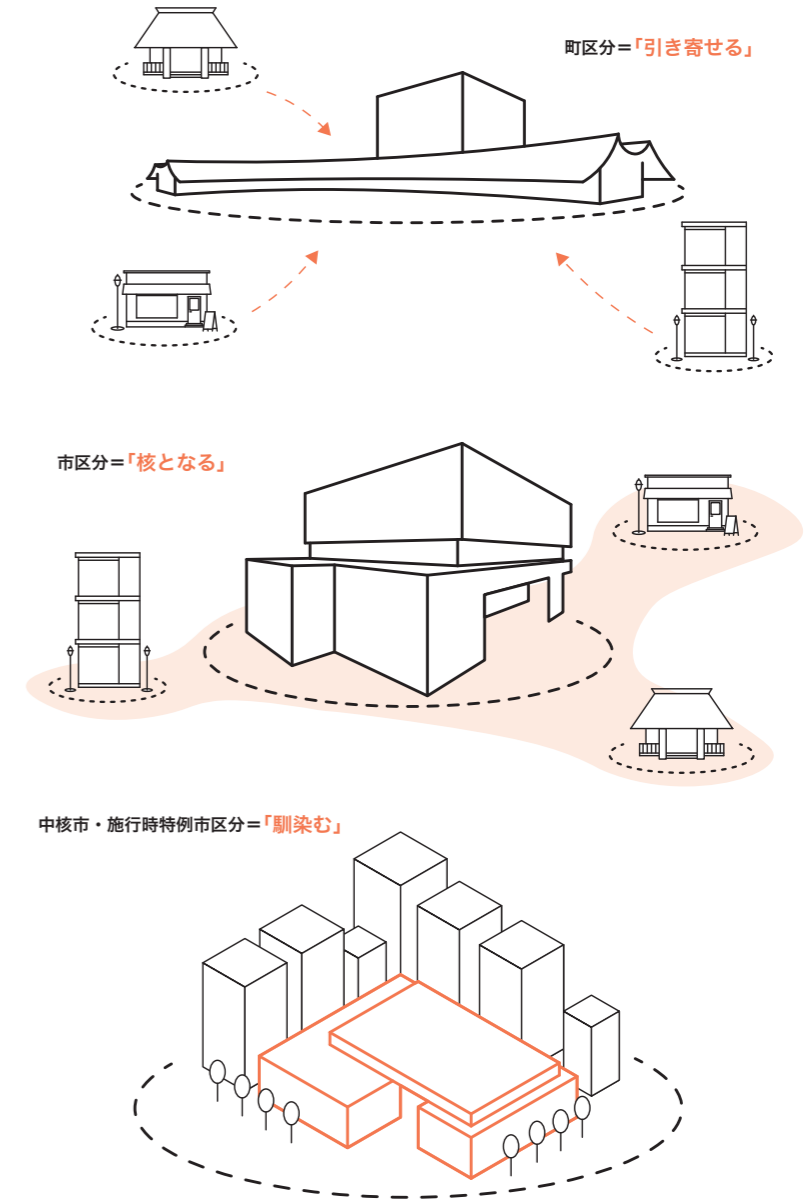


fig.4-4 都市スケールに応じた庁舎の傾向

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

市民交流空間の開かれ具合を表すパラメータ

次に、各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方について分析を行う。ここでは、市民交流空間の空間面と運営面に着目した。

だが、「市民に開かれた」空間の空間的、あるいは運営的な構成要素とはなんだろうか？

はじめに、空間的 / 運営的に開かれていると感じる要因として次の項目を検討した。

空間的に開かれていると感じる要因（4項目）

空間の分布

- 内部 / 中間領域 / 外部のいずれか

空間の開放性

- 部屋 / オープンスペースのいずれか

行政との隣接

- 行政機能を持つ空間と隣接するかどうか

空間の面積

- 床面積が他の市民交流空間より大きい小さいか

運営的に開かれていると感じる要因（5項目）

空間利用の仕方

- 個人利用に加え、団体での企画 / 利用が可能かどうか

空間への出入り

- 空間に進入する際に制限があるかどうか

管理・運営

- 行政 / 市民団体のいずれか

利用可能な時間帯

- 開庁時間外も利用可能かどうか

利用料金

- 利用料金がかかるかどうか

続いて、自治体庁舎の各市民交流空間を対象として、空間的な要因4項目と運営的な要因5項目の計9項目について、その「開かれ度合い」を5段階（閉鎖：-1.00～開放：+1.00）で評価した。

ここでは、空間的な要因4項目と運営的な要因5項目のそれぞれの平均値を「空間の開かれ度合い」、「運営の開かれ度合い」としている。

例えば、fig.4-5の場合、空間の分布、空間の開放性の2項目で+1.00、行政との隣接、空間の面積の2項目で±0.00と評価されており、この4項目の平均値から「空間の開かれ度合い」は+0.50となっている。同様にして、fig.4-6の場合、「運営の開かれ度合い」は+0.20と分かる。

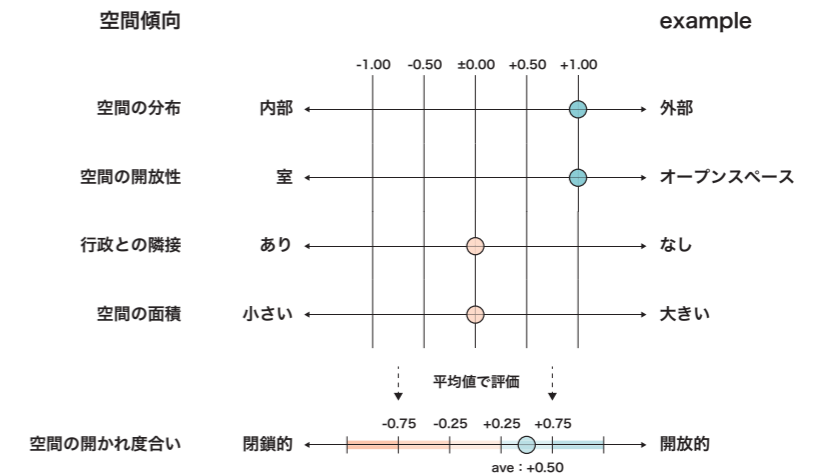


fig.4-5 「空間の開かれた度合い」の評価

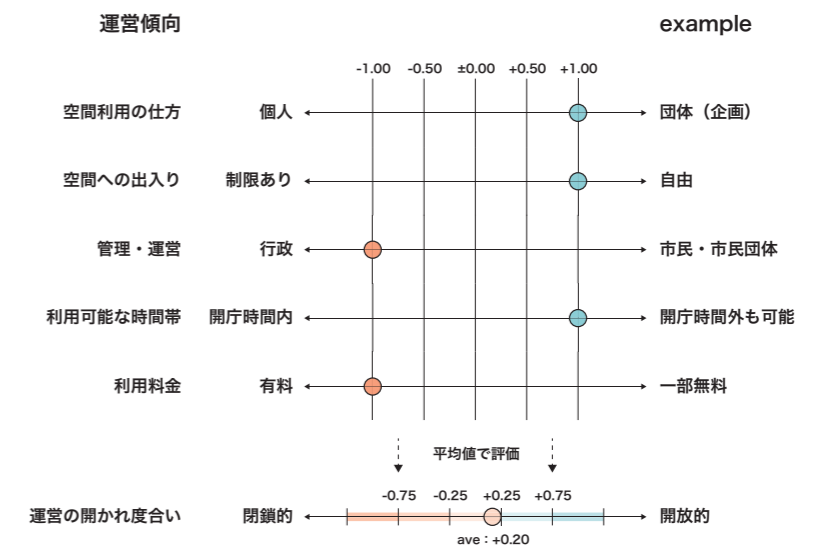


fig.4-6 「運営の開かれた度合い」の評価

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

実際に分析してみると

前述の操作を7つの自治体庁舎の市民交流空間に適用すると、fig.4-7、fig.4-8のような結果が得られた。

庁舎	空間	空間傾向	運営傾向	
白鷹まちづくり複合施設	a	ミーティングコーナー	-0.75	0.00
	b	町民ラウンジ・エントランスホール	0.25	0.40
	e	中会議室(議場)	-0.50	0.00
	c	一般閲覧スペース	0.00	0.00
	d	学習コーナー	0.00	0.00
	f	ホワイエ	-0.25	0.00
	g	和室	-0.75	0.00
	h	小会議室1・2 (防災センター)	-0.75	0.00
	i	大会議室	-0.25	0.00
新発田市庁舎	a	札の辻広場	0.75	0.00
	b	札の辻ラウンジ	0.50	0.40
	c	ロビー	0.00	0.00
	d	テラス	1.00	0.40
	e	市民ギャラリー・飯豊ラウンジ	-0.25	0.40
アオーレ長岡	a	シアター	-0.50	0.60
	b	ホワイエ	-0.25	1.00
	c	市民交流ホールA	-0.50	0.60
	d	市民交流ホールB	-0.50	0.60
	e	市民交流ホールC	-0.50	0.60
	f	ナカドマ	0.75	1.00
	g	市民交流ホールD	-1.00	0.60
	h	アリーナ	0.50	0.60
	i	多目的室A	-0.50	0.60
	j	多目的室B	-0.50	0.60
	k	多目的室C	-0.50	0.60
	l	会議室A	-0.50	0.60
	m	会議室B	-0.50	0.60
	n	会議室C	-0.50	0.60

fig.4-7 市民交流空間の評価 (白鷹町、新発田市、長岡市)

庁舎	空間	空間傾向	運営傾向		
いなべ市庁舎	a	食堂	-0.25	-0.40	
	b	研修室1	-0.25	0.40	
	c	研修室2	-0.75	0.00	
	d	研修室3	-0.75	0.00	
	e	研修室4	-0.75	0.00	
	f	研修室5	-0.75	0.00	
	g	ひさし	0.25	0.40	
	h	にぎわいの森	1.00	0.80	
北方町役場	a	まなびの広場	-0.75	-0.40	
	b	いこいの広場	-0.50	-0.40	
	c	つどいの広場	-0.50	-0.40	
	d	みんなの広場	1.00	0.40	
	e	町の回廊	1.00	0.00	
	f	谷テラス	-0.25	-0.40	
	g	ラウンジ	-0.25	-0.40	
	h	谷テラス	-0.25	-0.40	
岐南町役場	a	エントランスホール	0.50	0.60	
	b	学習室	-0.75	0.00	
	c	集会室1	-0.75	0.00	
	d	集会室2	-0.75	0.00	
	e	保育室	-0.75	0.00	
	f	実習室	-0.75	0.00	
	g	講義室	-0.75	0.00	
	h	会議室	-0.75	0.00	
	i	タタミ室	-0.75	0.00	
	j	講堂	0.00	0.00	
	k	屋根下広場	0.75	0.60	
	岐阜市庁舎	a	市民交流スペース ミンナト	0.00	0.40
		b	ホール	0.00	0.40
c		市役所大食堂	0.00	0.00	
d		市民多目的スペース	-0.25	0.00	
e		テラス	1.00	0.00	
g		みどりの丘	1.00	0.00	
h		展望スペース つかさデッキ	-0.50	0.00	
i		展望スペース つかさデッキ	-0.50	0.00	

fig.4-8 市民交流空間の評価 (いなべ市、北方町、岐南町、岐阜市)

そこで、x軸に「空間の開かれ度合い」、y軸に「運営の開かれ度合い」をとったxy平面上に、この結果をプロットすることで、各自治体庁舎の市民交流空間の開かれた度合いの分布を可視化した。同時に、分布の平均地点の算出も行った。(fig.4-9)

グラフ上の●は各市民交流空間の分布を、▲はそれらの分布の平均地点を表している。また、●内の数字は、特定の地点に該当する市民交流空間の数を表しており、それと●の大きさが対応関係にある。

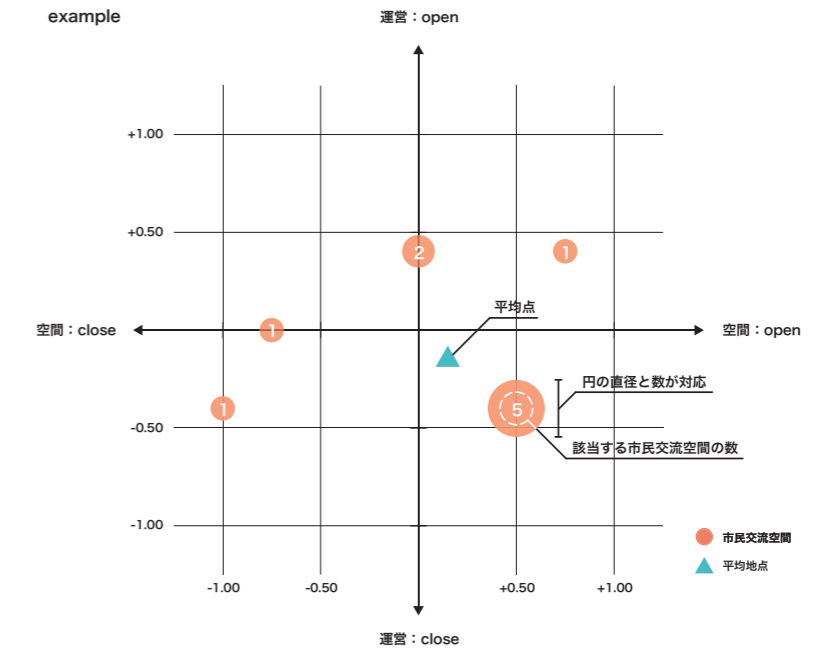


fig.4-9 市民交流空間の分布 (例)

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

各自治体庁舎の市民交流空間の分布

分析②では、算出した平均地点をもとにして、7つの自治体庁舎の市民交流空間の空間 / 運営の「開かれ度合い」の分析を行う。

本節では、各自治体庁舎の市民交流空間の分布と平均地点の傾向を見つつ、その特徴を実際の空間と紐付けて簡潔に記載する。

白鷹町まちづくり複合施設

空間面：－ 運営面：± 0

行政施設内に市民交流空間を内包した構成。そのため、開けた大空間が少なく、個室や行政機能と隣接する空間が多い。町民ラウンジやミーティングコーナーなど、個人～少人数での利用に適した空間が用意されている。一人で集中したい個人作業から複数人での打ち合わせまでミニマルなスケールに広く対応。

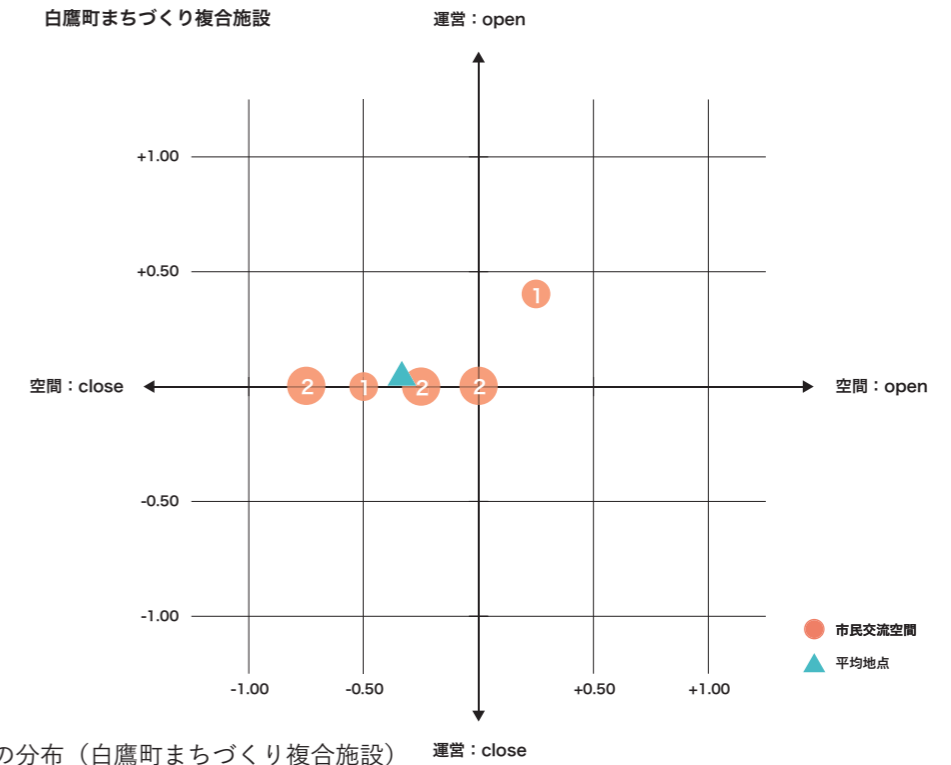


fig.4-10 市民交流空間の分布（白鷹町まちづくり複合施設）

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

新発田市庁舎

空間：+ 運営：+

シャッターを上げることで外部と一体的に利用可能な札の辻広場をはじめとして、イベント利用に適した大空間が主。庁舎内部も個室は少なく、壁のないオープンスペースが多い。そのため、訪れた市民は制限なく、自由に空間を出入りすることができる。

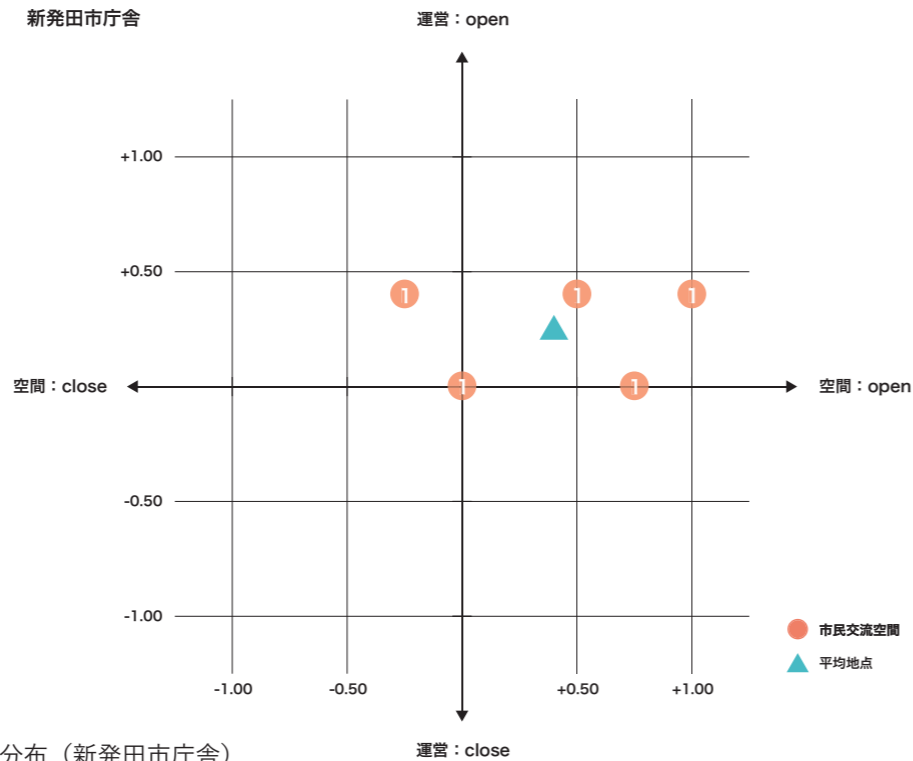


fig.4-11 市民交流空間の分布（新発田市庁舎）

アオーレ長岡

空間：- 運営：+

メインの市民交流空間であるナカドマやアリーナなどの開けた大空間に目が行きがちだが、実際に市民交流空間の母数の大半を占めるのは、市民交流ホールや多目的室、会議室といった個室の空間である。また、空間の運営を市民団体が行なっていることや市民の利用料金が基本無料であることがユニークな点である。

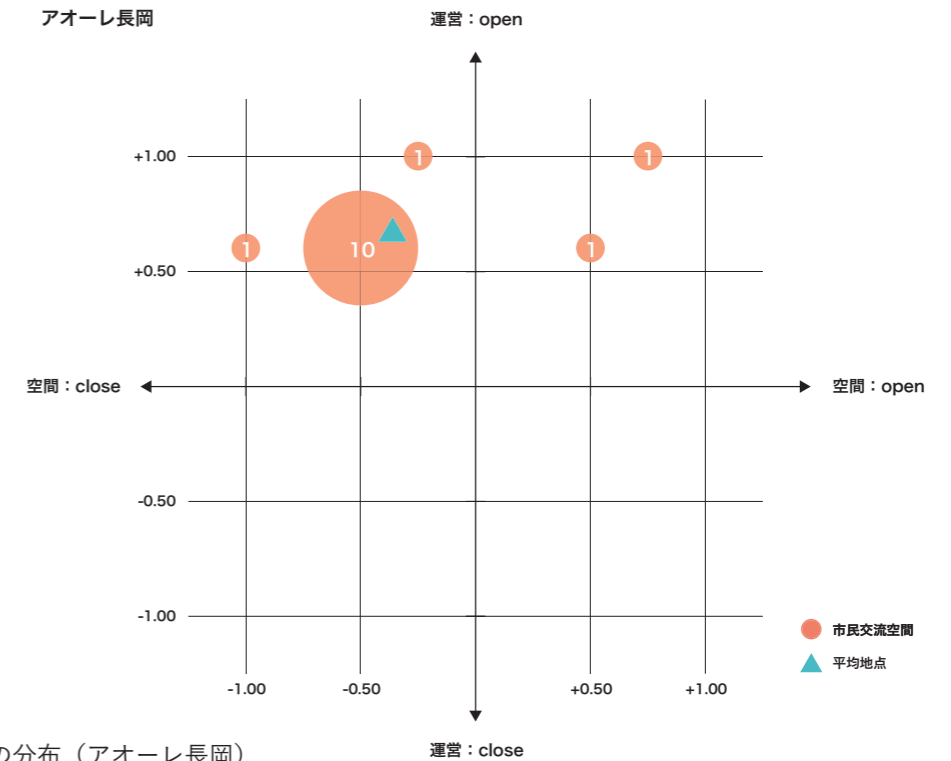


fig.4-12 市民交流空間の分布（アオーレ長岡）

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

いなべ市庁舎

空間：－ 運営：± 0

複数のテナントが集う商業施設のようなにぎわいの森、マルシェが実施されるひさし下の広場など、外部空間が印象的。一方、シビックコア棟の会議室では、行政の職員と市民が時間帯に応じて使い分けるなどフレキシブルな運用がなされている。

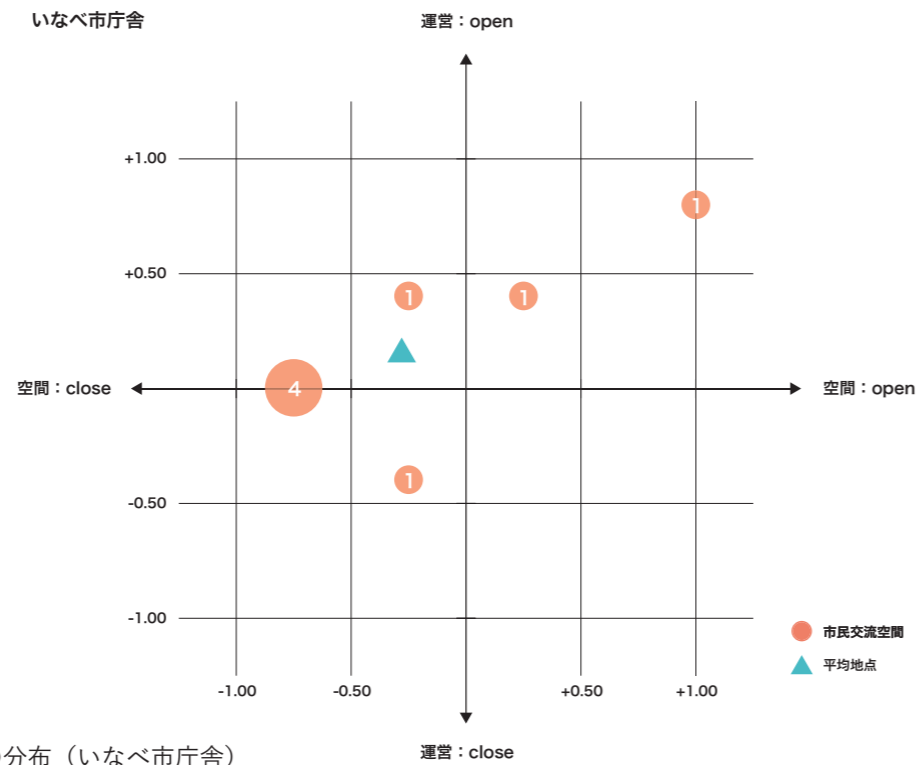


fig.4-13 市民交流空間の分布 (いなべ市庁舎)

北方町役場

空間：± 0 運営：－

4つの広場や大屋根に差し込まれた谷テラスなど内部と外部の中間領域となるような空間が多い。イベント時はそれらの空間を外部と一体的に活用することが計画されている。ただし、利用可能な時間帯は開庁時間内に限られるようだ。

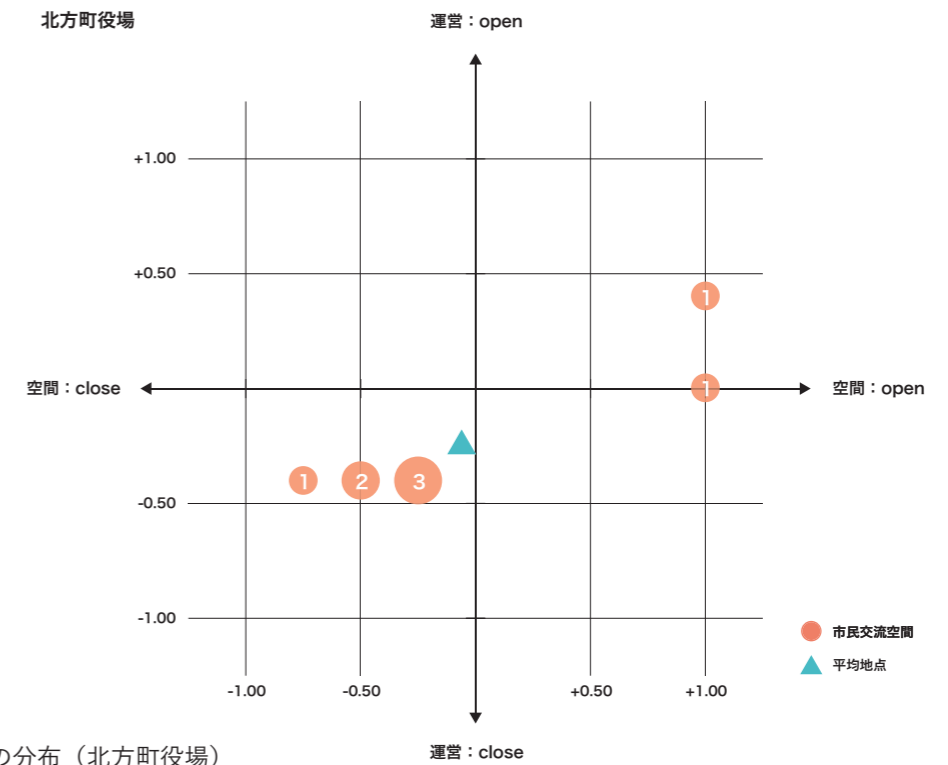


fig.4-14 市民交流空間の分布 (北方町役場)

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

岐南町役場

空間：－ 運営：± 0

屋根下広場が印象的な岐南町役場。その市民交流空間としての機能を担うのは公民館である。公民館内には、会議室や集会室など様々な用途に対応する個室が用意されており、市民に利用される機会は非常に多いようだ。そこで企画・制作された作品を展示するハレの場がエントランスホールである。

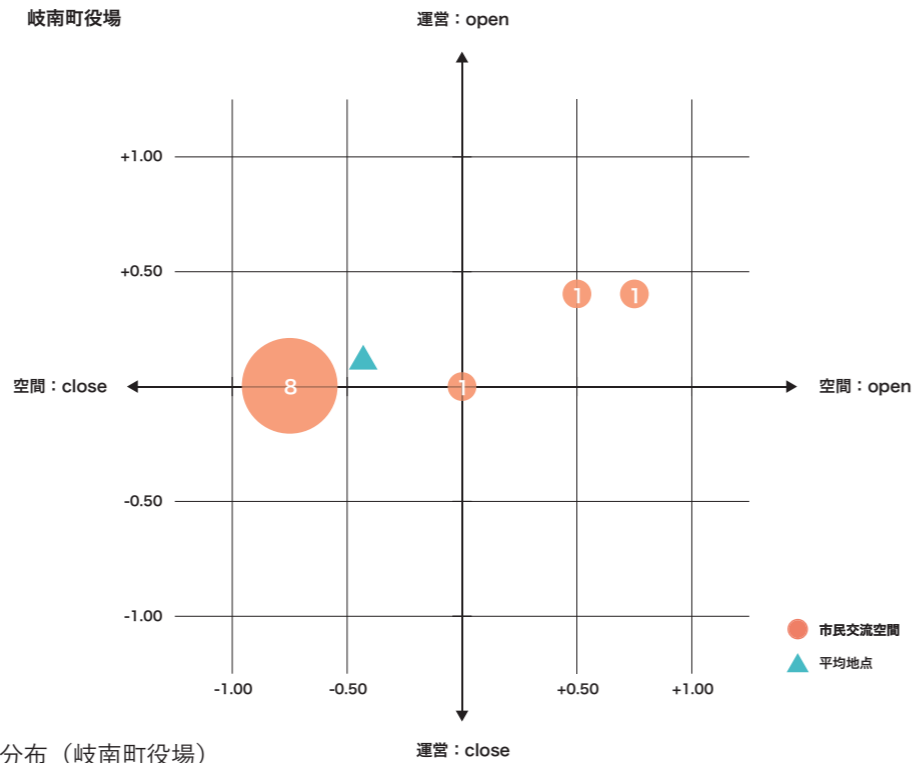


fig.4-15 市民交流空間の分布（岐南町役場）

岐阜市庁舎

空間：+ 運営：+

テラスやみどりの丘、市民交流スペースミンナトなど、外部空間に制限を設けないことで、市民が自由に出入りすることができる空間が実現されている。隣接する岐阜メディアコスモスやみんなの広場カオカオから庁舎内に市民を引き込む。

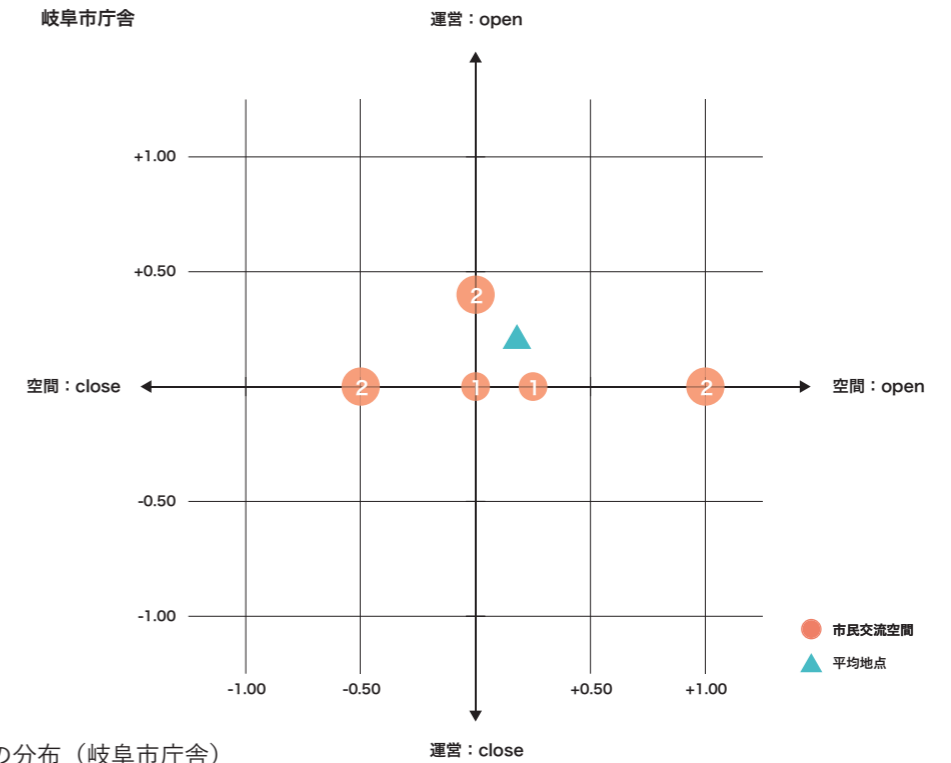


fig.4-16 市民交流空間の分布（岐阜市庁舎）

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

▲ D いなべ市庁舎



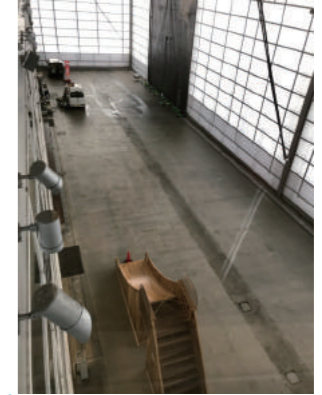
▲ C アオーレ長岡



▲ G 岐阜市庁舎



▲ B 新発田市庁舎



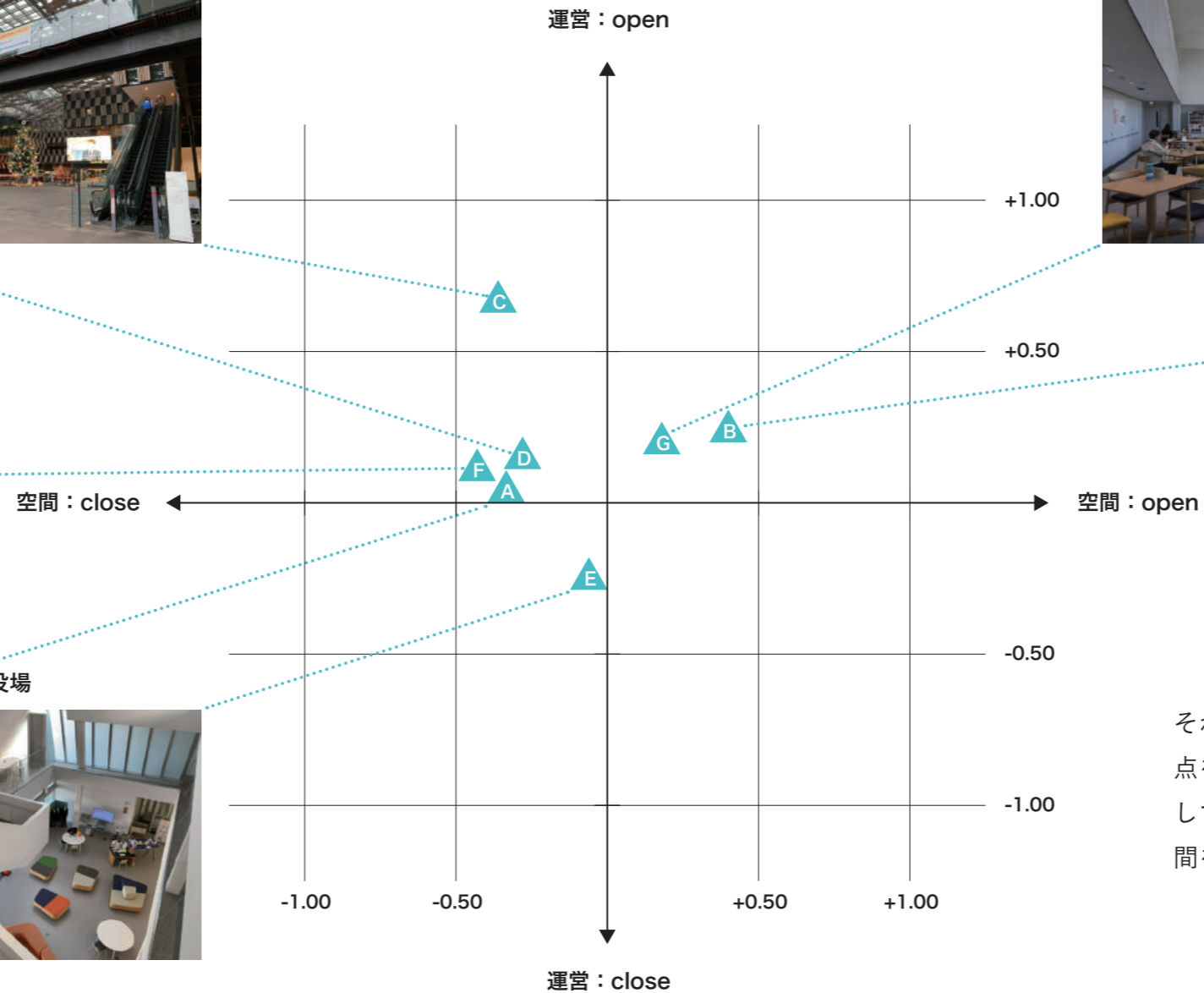
▲ F 岐南町役場



▲ A 白鷹町まちづくり複合施設



▲ E 北方町役場



市民交流空間の類型化

7つの自治体庁舎の市民交流空間について、それぞれの空間傾向、運営傾向の分布の平均地点を同一平面上にプロットした。(fig.4-17)そして、この平均地点を基準として、市民交流区間を次の4つのタイプに分類した。(fig.4-18)

fig.4-17 市民交流空間の分布 (平均地点)

分析②：各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化

第2象限

空間：閉鎖（-） 運営：開放（+）

e.g. ▲ 白鷹町まちづくり複合施設 ▲ アオーレ長岡 ▲ いなべ市庁舎 ▲ 岐南町役場

開けた大空間から市民が少人数で利用することができる個室まで、市民の多様なニーズに応えるべく、バリエーション豊かな市民交流空間が実現されている。特に、運営面での工夫に優れた自治体が多い。

時間制限を設けた柔軟な空間運用や市民交流空間の運営に対する市民団体の介入など、市民がより自由に空間を利用することができる土壌を整備している自治体も見られる。市民活動を全力でサポートする姿勢が市民交流空間の傾向に現れている。

第3象限

空間：閉鎖（-） 運営：閉鎖（-）

e.g. ▲ 北方町役場

内部空間、あるいは外部空間としても利用可能な中間領域的な空間が多く、用途に応じた使い分けという点では非常に自由度が高い。それ故に、空間の管理やセキュリティ面での難しさがある。

しかし、内部とも外部ともなりうる空間の対応力の高さには目を見張るものがあり、市民交流空間としてのポテンシャルは十分である。

第1象限

空間：開放（+） 運営：開放（+）

e.g. ▲ 新発田市庁舎 ▲ 岐阜市庁舎

内部外部問わず、開けた大空間が大半を占める。周辺施設との連携が重視されており、イベント時は敷地外と一体的に利用することが計画されている。

また、空間自体に進入制限が設けられている場合が少なく、訪れた市民は自由に空間を出入りすることができる。

庁舎と外部を接続し、市民を引き込むような市民交流空間が実現されている。

第4象限

空間：開放（+） 運営：閉鎖（-）

e.g. なし

今回の調査で対象とした庁舎には、該当するものは見られなかった。

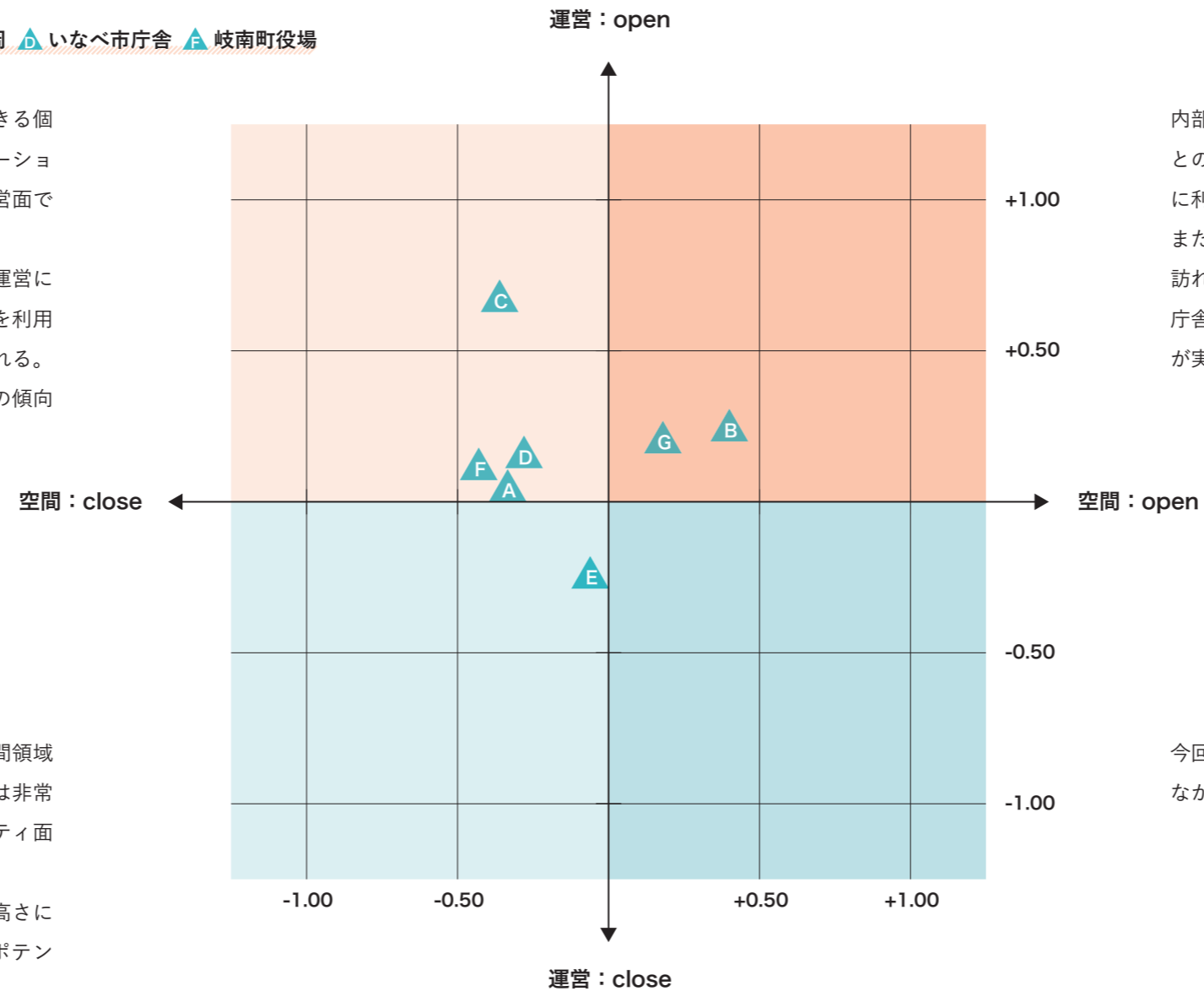


fig.4-18 各自治体庁舎の市民交流空間の傾向

「空間的な開かれた」よりも「運営的な開かれた」...？

分析②では、各自治体庁舎の市民交流空間について、空間／運営の「開かれ度合い」の分布の平均地点を基準として、市民交流区間を4つのタイプに分類した。

特に、今回対象とした7つの自治体庁舎は、建築雑誌や各自治体HP上で、市民交流空間にてユニークな試みがなされていると公表されている事例を選定している。

それらの傾向を見ると、各自治体庁舎は市民交流空間を空間的に開くこと以上に、運営的に開くことに注力しているくらいにあると言えるのではないだろうか。

7つの自治体庁舎のうち、北方町役場を除いた6つの自治体庁舎の市民交流空間が運営的に開いた傾向にある。この6つの自治体庁舎の市民交流空間の空間的な開かれ方は両極端であるようにも見えるのだが、実際は運営的に市民に開くことに注力した結果であるといえることができる。

例えば、空間傾向が開放に該当する庁舎（第1象限）は、外部的な大空間が多くを占めており、イベント時の敷地外部と一体化した運用や市民が自由に空間に出入りすることができる点に運営的な開放性が見られる。

一方で、空間傾向が閉鎖に該当する庁舎（第2象限）は、市民のニーズに応えるために空間のバリエーションが豊富なのだが、それ故に個室が多い傾向にある。しかしながら、空間利用時の市民団体のサポートや時間的な制限を設けたフレキシブルな運用など、運営面に関しては非常に開放的な傾向が見て取れる。

空間的な傾向としては、両極端であっても、それは市民が空間を利用しやすいように市民目線に立った運用を実現しているが故だろう。

他方で、唯一運営面で閉鎖的な傾向が見られるのが北方町役場である。

運営面では、空間が開放されている時間帯が開庁時間内に限られるなど、行政側の管理しやすさという点に主眼が置かれている。その要因として考えられるのは、外部にも内部にもなり得る中間領域的な市民交流空間が多い点である。空間傾向を見ても7つの庁舎の中で最も±0に近く、内外どちらにもなりうる空間が多く配されていることが窺える。そのような空間は、用途に応じた使い分けが可能であり、利用時の自由度が高いが、それ故に、セキュリティや管理の簡略化は重要な要素であるといえる。

つまり、自治体によって市民交流空間の空間的な開かれ方に差はあれど、それぞれの空間に適した形で運営的に開こうとしている点が共通しているのではないだろうか。

「開かれた」は、青写真から現実へ

第2章では、プロポーザル方式によって実現した庁舎を対象として、その技術提案書の分析を行い、市民が求める「開かれた」空間を明らかにした。そして、その類型として挙げたのが「庁舎と都市が一体化したような構成」と「広場のような外部空間」の2つである。

紙面上では、市民が求める「開かれた」空間が実現しているのだが、その実態は如何様なのか。

ここでそんな疑問が生まれた。

その疑問に対して、ユニークな試みがなされている市民交流空間を持つ自治体庁舎の事例を7つ取り上げ、2つの分析を行ったのが本章である。

分析①では、各自治体庁舎と都市の関係について分析を行った。

各自治体とも都市内における庁舎の役割に非常に意識的であり、特に大都市ほどその傾向が強いことが分かった。

2章にて、市民が求める「開かれた」空間の類型として「庁舎と都市が一体化したような構成」が挙げたが、紙面上だけではなく、実際に実現した庁舎にもその様相が色濃く反映されていることが確認できた。

分析②では、各自治体庁舎の市民交流空間の開かれ方の類型化を行った。

大きく言えることは、次の2点だろう。

一つは、各庁舎ともイベント利用ができるような広場的な空間は備えているが、意外にも個人で利用できる個室空間を重視している庁舎が多いことである。

もう一つは、自治体毎に市民交流空間の構成にばらつきはあれど、いずれの自治体も運営面の様々な工夫をもってして市民に開かれた空間を実現していることだ。

2章にて「広場のような外部空間」が求められていることが明らかになったが、それ以上に重要なのは、実現した空間の運用の仕方であると言えるのではないだろうか。

こと空間運用に関しては、建物のガワのように竣工した段階で完成するものではなく、後にそこで起こる市民の活動によって完成する。

ならば、市民交流空間は、空間を運用する行政側の努力次第でいかようにも開くことが可能であると言えるのではないだろうか。

空間を開かれたものにする鍵は、行政にある。

つまり「市民に開かれた」庁舎とは

つまり「市民に開かれた」庁舎とは、庁舎と都市の一体化や広場のような外部空間といった「計画・設計段階で都市・空間的に開かれていること」に加えて、市民団体の発足や時間制限を設けた柔軟な空間運用など、「その後の空間運営に対する行政の努力」が実った先にあるものなのではないだろうか。

総括

市民交流空間を作った先の世界にジャンプする

文：秋永 凌

.5

市民交流空間に求められていたもの

「開放性」「安らぎ」・・・。

市民交流空間を表す謳い文句はやはり、市民交流空間を築くための主要な要素であったことが改めて分かった。加えて、そうした抽象的な要件だけでなく、「空間の機能」という現実的なニーズもあった。空間の機能はその地域の状況によって様々ではあり、共通項を見出すことは難しいが、その地域の背景と求められる機能の関係は、今後の研究余地として残しておきたい。

今回の技術提案書の分析にて、あやふやであった市民交流空間の要件の一端を明らかにした。その成果によって、「RFP に市民交流空間の要件が詳細に示されていないくても、担当者と話をすれば何かわかるだろう・・・」と軽く受け流していた設計担当者と、「設計のプロならあやふやな要件を示しても何とかしてくれるだろう・・・」という自治体担当者が、互いにお見合い状態になるようなことは、今後避けられるかもしれない。

市民交流空間を活かしていくもの

市民交流空間に求められている要件が分かっても、市民交流空間を“作ること”に終始しては、より良い市民交流空間とならないのではないか、というのが今回の実地調査で得られた所感である。現地でお話を伺うと、空間を活かすための様々な工夫があることに気づかされた。

(1) 計画段階の市の課題の深堀

建物であれ、プロダクトであれ、システムであれ、モノを作る時には現状課題の把握は必須である。特に昨今は「デザインリサーチ」と呼ばれる、課題の深堀手法も一般化しつつあり、事前の課題把握に対する重要性は高い。

長岡市では、新庁舎の市民交流空間を計画する段階で、周辺の空きテナントを使って実証実験を行っており、その実験の結果から、市民交流空間の活用見込みを具体的に検討していった。そのおかげもあって、全国的にも稀有な空間構成にもかかわらず、開庁当初から現在に至るまで、市民活動は盛んに行われている。



fig.5-1 市街地に点在する行政施設（長岡市）

(2) 既存施設の活用

市の中心的な役割を果たすと言っても、新しい庁舎や市民交流空間それだけで、市の活性化に寄与できるわけではない。公民館や図書館など既存施設と折り合いをつけつつ、その良さも殺さずに、なおかつ、新しい空間ができる事による価値も併せて創出していくことが求められる。

岐阜市では、メディアコスモスという市民を引きつける岐阜市の中心施設があり、その“おこぼれ”をもらう事で、行政と市民の境界を保ちつつ、市民への開放性を醸したり、交流の促進を図っていった。

市の課題を広義に捉えれば、市民交流空間を作るというのは手段論に過ぎない。空間を作ることに固執するのではなく、既にあるリソースを活用することで、市を活性化するという本質的な目的にアプローチできるのだ。



fig.5-2 ぎふメディアコスモスより岐阜市庁舎を見る（岐阜市）

(3) 運営支援を担う組織の存在

外交において、二国間の協議が第三国で行われることは珍しくない。社員の意見より、外部のコンサルタントの意見にばかり耳を傾けてしまう企業役員は多い。子は鎧と言われ、子どもが夫婦間の関係を保ってくれたりする。第三者の存在は大きい。

いなべ市では、新庁舎の市民交流空間の計画と合わせてNPO法人を立ち上げた。NPO法人による仲介は、行政と市民の境界を緩やかにし、行政らしからぬ多様でスピーディな市民企画の実現や、民間商業施設のような集客力を発揮してきた。第三者の存在は大きい。



fig.5-3 平日でも市民で賑わうにぎわいの森の様子（いなべ市）

(4) 市の寛容さ

子供が集まって遊んでいいはずの公園で、誰かの迷惑になるからと、少しずつ規則や規制が増えていき、いつの間にかその公園に集まる子供はいなくなっていた。近所にそんな公園があったりしなかっただろうか。人が集まる場所にルールはつきものだが、人を集めるためには、心的余裕を保てる程度の自由がなくてはならない。

新発田市では、庁舎内に腰掛ける場所がそこかしこにある。それらは、市民はもちろんの事、職員が座ってもよく、長時間座ることが制限されることもない。唯一目についたのは、市民窓口の受付時間である8:30-17:15に、窓口近くの待合スペースで勉強を目的とした利用をすることを控えてもらう注意書き程度であった。

席に腰掛けている人の多くは、交流をしているわけではないのだが、日常的に人がいる雰囲気や、そこにいていいという心理的な安心感を作り出していくことは、おそらく、市民交流を促す重要な要件となるだろう。

市民を受け入れようとする新発田市の寛容さに、今後の市民交流の可能性を垣間見た。

現地への視察では、建築雑誌やHP等のメディアだけでは分からなかった、言葉にしにくい市民交流空間の魅力があった。そこには、空間を作ることにとまらぬ、様々なソフトの工夫が潜んでいたのだと分かった。

やった感を醸す、それらしく見せる、という上辺を取り繕った仕事のあり方は、市民交流空間の計画に限らず、社会のあらゆる場面において氾濫跋扈しているから、活かされていない市民交流空間だけをあげつらうのは避けたいが、空間というハードの整備ばかりに重きを置いてことを収めようとするのではなく、運営というソフト面の議論も欠かさず執り行って、活かされた市民交流空間が作られることに期待したい。

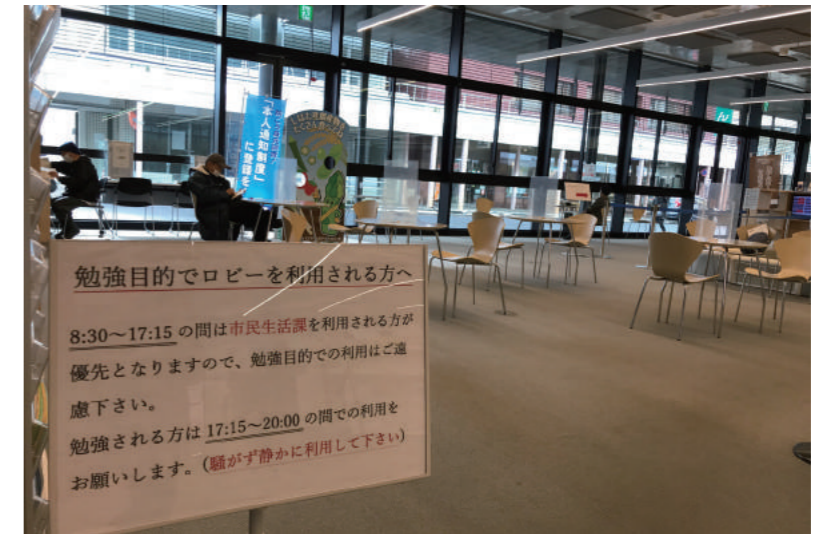


fig.5-4 特定用途に対する利用時間の制限（新発田市）

市民交流空間を作った先にあるもの

日本特有の世界観としてハレとケというものがある。儀礼や祭りなどの非日常をハレ、普段の日常生活をケとして捉えた概念である。

より良い市民交流空間が作られたその先には、このハレの場とケの場が作り出されているのではないだろうか。

現地へ赴いて、職員の方々に施設を案内して頂くと「ここでは毎週のように人が集まってイベントが行われる」「この空間はこんなイベントをするために特徴的な形をしている」「あそこで行われたイベントはとても良かった」という、イベントに関するお話が印象的であった。ヒアリングではイベントの事だけではなく、市民交流空間を作るいきさつ等様々なお話を交えてお聞きしたのだが、こと人を集めてのイベント、いわゆる非日常の催し事に関するお話には、一段と熱量があったように感じた。ハレの場に対する期待は大きかった。

徐に周囲を見渡すと、庁舎やその市民交流空間に“ふらっと”訪れている人がいて、何とも言えない良さを感じた。駅から続く雪道によって削られた体力を取り戻してくれる、ちょっとした椅子とテーブルが開放されていること。軒下空間にあるひんやりとしたコンクリートの座面に腰を下ろして、気持ちを整えられること。とりあえず勉強しに来たけど、今日は調子が上がらなくて、机に突っ伏して眠っ

てしまうこと。

他人や自分を納得させる理由等必要なく、ただそこに居て良いことが保証されることは、人に安心感を与えてくれる。

国や自治体には「誰も取りこぼさない」という責務があり、行政のセーフティネットがあるものの、資本主義・自由主義社会の競争原理においては、成果をあげられなければ生きにくくなる負の側面がある。そうした社会の歪は最近少しずつ、予期できないあらゆる形で表出し始めている。

意味もなくそこにいていい、好きなことを話していい、そんな安心感を与えてくれる空間や社会が、衰退しかけたこの国には必要で、市民交流空間はそうした役割を担える可能性があるのではないだろうか。ハレの場だけではなく、ケの場も欠かせない。

イベントに参加したいけど躊躇している市民がいる。

ひと時の居場所を求めつつも自制している市民がいる。

膝を屈めながら、あと一步を踏み出せず、行き場所に迷っている市民の手を引いて、地元が活性化している未来（ハレ）だとか、心置きなく暮らせる社会（ケ）であるといった、次の世界にジャンプさせてくれる役割を担うのが、これからの市民交流空間ではないだろうか。

参考文献

ユルゲン・ハーバーマス (1973)、[第2版]公共性の構造転換、未来社
中岡成文 (2003)、ハーバーマスーコミュニケーション行為、講談社
田中正人 / 香月孝史 (2019)、社会学用語図鑑、プレジデント社
日本建築学会 (2004)、日本建築学会編『まちづくり教科書 第4巻 公共建築の設計者選定』
日本建築学会 (2003)、日本建築学会編『公共建築の設計者選定方法の改善についての提言』

5

人が集まる場としての庁舎建築の歴史的再考

文：柳井 良文

1. 辞書的意味から考える庁舎の役割

庁舎とは何か。『建築大辞典』（第2版 普及版、彰国社、1993）で「庁舎」の項目を見ると、「government office building, municipal office building 国家機関または地方自治体がその事務を処理するために使用する建築物」とある。同様の説明が、同じく『建築大辞典』の「官庁建築」および「都道府県庁舎」の項目にも記されている。この意味に従うならば、国家機関または地方自治体が事務処理を効率良く行えることが、良い庁舎建築の条件と言えそうである。

次に『建築大辞典』の「市庁舎」の項目を見ると、「city hall 市（地方公共団体）の庁舎。市議会関係の部分と行政関係の部分に分かれる。中央官庁と異なり市民に直接サービスする仕事が多い」とある。この意味に従えば、単に市議会や行政の事務処理が効率的に行えることだけでなく、市民へのサービスがより充実していることが、より良い庁舎の条件と言えよう。先ほどの、業務効率が重視されるオフィスビルとしての庁舎建築とは違った解釈、異なる評価指標がここに浮上してくる。

国全体を管轄する国家機関から、都道府県、市（地方公共団体）へとスケールダウンすると共に、日々の業務における市民一人ひとりとの直接的な関わりの度合いが増え、そのための機能や空間がますます庁舎に期待されるようになる。このことが、「庁舎」の英訳として示されている government office building（官庁建築）や municipal office building（都道府県庁舎）と、「市庁舎」の英訳とし

て提示されている city hall との違いにも表れているのが興味深い。『建築大辞典』には「シティホール」の項目も別途あり、これには、「city hall ヨーロッパで古くから見られる市民活動の場。行政活動、文化活動、商業活動など都市に必要な活動が行われる。通常の市庁舎は行政の場という性格が強いのにに対し、市民参加のシンボルとして市民相互の交流を図る場というニュアンスがある」と書かれている。国家機関の官庁建築や都道府県の庁舎に期待される事務処理のための場という性質以上に、市庁舎には、市民が集まり交流する場としての性格が強く求められていると考えられる。この government/municipal office building と city hall との違いに、まずは注目したい。

当然のことながら、官庁建築や都道府県庁舎に、行政が市民と関わる場や市民が集う場としての性質が皆無であると述べたい訳ではなく、反対に、市庁舎において事務処理のための場が官庁建築や都道府県庁舎と比べて貧相であるという話でもない。どのレベルの庁舎についても、office building と city hall の両方の機能が求められつつ、その上で、どちらの機能がより強く期待されるか、という度合いの問題だろう。

本稿では、市民が集まり交流する場としての庁舎について、その成立の歴史を概観しつつ、近年の庁舎の設計提案において、市民交流のための空間を設けることが求められているトレンドについて再考したい。

2. 市民交流空間としての広場と庁舎の成立

ヨーロッパの歴史を振り返ると、市民が集う場と言えば、古代ギリシアの都市国家ポリス（polis）のアゴラ（agora）や古代ローマ都市のフォルム（forum）などの公共広場、およびそれを囲うようにして周囲に建てられる公共建築群がまずは想起される。「都市の中で市民が集まる場所としての広場が明確に確保されたのは、エジプトでも西アジアでもなく、ギリシアの都市であった」（註1）と指摘される通り、都市における市民交流の場の歴史は、紀元前の古代ギリシア時代に始まる。もっとも、ここで言う「市民」には奴隷や外国人は含まれないため、実際に市民交流に参加しうる層はポリスの住民の中でも一部に限られていたと思われる。現代社会の「市民交流空間」が、実態がどうあれ理念的には、広く一般に、誰にでも開かれた場を意味することとは大きく異なる。いずれにせよ、アテネを始めとする古代ギリシア都市の中心部で市民に開かれていた広場とその周囲の公共建築群では、「アゴラ」という語が元来「集会」を意味していたことが示すように、日常的に政治的な集会（市民総会）が行われたり、公開裁判が開かれたりした。さらには、市民が集まって哲学など学問を語り合うような知的交流の場となり、ここからソクラテスやプラトン、アリストテレスといった哲学者たちの議論が起こっていった。また、アゴラには市場が開かれて商業活動の場、経済活動の場が形成されたりもした。

古代ギリシア都市と同様に、古代ローマ都市において

3. 中世以降のヨーロッパにおける広場と庁舎

も、中心部にはフォルムと呼ばれる公共広場が設けられた。最も有名なのがやはり都市国家ローマのフォルムである。ローマの中心部、テヴェレ川東岸には、港のすぐ近くに家畜の牛を取り引きする市場が設けられ、ここにフォルム・ボアリウム（Forum Boarium）と呼ばれる広場が形成された。紀元前6世紀になると、フォルム・ボアリウムの北東にフォルム・ロマヌム（Forum Romanum）が新たに建設され、商店が立ち並ぶ市場として発達する。紀元前2世紀ごろからは、ユリウス・カエサルやトラヤヌス、コンスタンティヌスなどの歴代ローマ皇帝によって、新たなフォルムがローマ市内中心部に次々に建造されるようになり、それら広場の周囲を、政治的・経済的・宗教的に市民生活を支える種々の公共建築群が取り囲む構成が、さらに発展、拡張していくこととなる。

以上のように、古代ギリシア都市および古代ローマ都市に見られた〈広場+公共建築〉の組み合わせが、現代にまで脈々と続く、ヨーロッパの都市中心部を形成する基本的構成要素である。広場を取り囲む公共建築の方に目を向けると、アテネなどの古代ギリシア都市では、広場＝アゴラを囲うようにストア（stoa）と呼ばれる列柱廊が設けられていた。ストアは特定の機能に特化した閉じた空間ではなく、「前面が吹き放しの、単純で長い多目的ホール」(註2)のような施設であった。一方、古代ローマ都市では、フォルムの周辺に巡らされる列柱廊＝コロネード（colonnade）

は、より統一感をもち、壮麗な空間として発達する。さらに、フォルムの周囲に寄り付くように、役所や会議場、商業施設、神殿、記念門など、具体的な機能をもつ公共建築群が建てられるようになり、広場というオープンスペースとあわせて、市民社会の政治・経済・宗教その他の社会的活動の中心的な役割を担う場となる。なかでも、バシリカ（basilica）と呼ばれる裁判や商取引のための公共施設は、長方形平面をもつ建物であり、この平面構成が後の時代のキリスト教建築に継承され、バシリカ式教会堂あるいはバシリカ式聖堂と呼ばれる建築形式となる。

前述の通り、ヨーロッパの都市中心部を形成する〈広場+公共建築〉の組み合わせは、中世以降のヨーロッパ都市においても脈々と受け継がれる基本的空間構成である。ここで言う公共建築は市場、裁判所、宗教施設など多岐にわたるが、市庁舎が広場に隣接して設けられる事例もまた、さまざまな都市で見ることができる。〈広場+市庁舎〉という空間構成に着目することで、ヨーロッパ都市史の一側面を、庁舎との関係からたどっていけると考えられる。以下、具体的な事例とともに見ていきたい。

3.1. イタリア各都市における広場と庁舎

中世ゴシック期に入り、都市中心部の広場は、古代ローマ的な長方形平面に縛られない、自由な形態で造形されるようになる。この時代に〈広場＋市庁舎〉の構成が中心部に計画された都市として有名などころでは、イタリア中部トスカーナ地方のシエナが挙げられる。1995年に世界文化遺産に登録された「シエナ歴史地区」の中心部に位置するカンポ広場と市庁舎（プブリコ宮）は、13～14世紀にかけて建設された。このカンポ広場の平面形状は長方形ではなく半円形（扇形）である。扇形のちょうど要となる場所に、ゴシック様式で建てられた市庁舎が位置し、カンポ広場全体が、市庁舎に向かって緩やかに下る傾斜面となっている。「自然の地形を利用してつくられたこの広場は、市庁舎のファサードを舞台としたギリシアの半円形劇場の形態を模している」（註3）と指摘されるように、広場と市庁舎が一体となって計画された、ゴシック期都市計画の代表的事例である。

ゴシック期の〈広場＋市庁舎〉のもう一つの事例として、同じくトスカーナ地方に位置する丘上都市サン・ジミニャーノが挙げられる。都市の中心部には、いびつな四角形平面のドゥオモ広場と三角形の平面形状をもつチステルナ広場という二つの広場が、南北に近接するように形成されている。二つの広場を中心とする、サン・ジミニャーノの都市構造の原型は、10世紀末までには形成されていたと見られ、広場の周辺にはボルゴ（borgo）と呼ばれる新

興の居住区が発達していた。サン・ジミニャーノは12世紀にコムーネ（comune, 自治都市）となり、13世紀になると周囲の農地から都市内への人口流入により都市人口が急増し、14世紀に都市としての最盛期を迎えることとなる。「中央に井戸を持つチステルナ広場はカサ・トッレ〔塔状住宅〕とパラッツォに囲まれた市民の生活の中心であり、一方のドゥオモ広場は大聖堂および市庁舎が面する宗教と政治の権威の中心を形成し」（註4）、それぞれに性格の異なるこれら二つの広場が近接しながら、都市中心部の空間を形づくっていたのである。

トスカーナ州の州都フィレンツェにも、〈広場＋市庁舎〉の事例が見られる。古代ローマ時代の植民都市フロレンティアにさかのぼる古くからある都市で、さまざまな時代に市域の拡張や改造が重ねられながらも、基本的な都市構造はほとんど変えられずに長い間継承されてきた場所である。初期ルネサンス建築の代表例とされるサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂が、13世紀末から15世紀にかけて都市の宗教的中心として建設され、現在では世界遺産「フィレンツェ歴史地区」のシンボルとなっている。サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂とともに13世紀末から建設が開始され、フィレンツェ共和国の政治的中心となる建物として建てられたのが、パラッツォ・デッラ・シニョリーア（Palazzo della Signoria）と呼ばれるゴシック様式の庁舎（現パラッツォ・ヴェッキオ Palazzo Vecchio）で

ある。現在も、フィレンツェ市の市庁舎として使用されている。市庁舎の手前にL字型に広がるのがシニョリーア広場で、ここは古代ローマ時代にはフォルムだった場所である。広場の周囲には、ロジgia・ディ・ランツイ（Loggia dei Lanzi）と呼ばれる開廊（回廊）や、ウフィツィ美術館など、ルネサンス様式の建造物が立ち並び、開廊や広場各所に複数ある彫像やウフィツィ美術館にある絵画などと合わせて、ルネサンス期の建築や芸術が結集したような場を形成している。しかし本稿で着目したいのは、ルネサンス的要素が結集していることよりもむしろ、古代ローマ時代の市民交流空間（フォルム）だったこの場所に、フィレンツェ共和国時代の政庁舎が建てられ、そこが現在でもフィレンツェ市の市庁舎として使われているという、長い歴史の積み重ねである。市民が集まる場としてフォルムが形成され、その広場に接するように庁舎が建てられるという〈広場＋市庁舎〉の基本構成が、ここでも脈々と受け継がれている。

再びローマに戻ると、ルネサンス期にミケランジェロがカンピドリオの丘に設計したカンピドリオ広場が有名である。古代ローマ時代のカンピドリオの丘には、ユピテル神殿がつくられ、市民生活の中心であったフォルム・ロマヌムの世俗的空間と対になる形で、宗教的中心、聖地が置かれていた。この聖と俗の対からなる都市空間構成は、古代ギリシア時代のアテネにおけるアクロポリス（聖）とアゴ

ラ（俗）の関係と同様である。中世になり、カンピドリオの丘にはローマ市庁舎が建てられ、政治の中心がここに置かれることになる。そして16世紀半ば、教皇からの依頼でカンピドリオの丘に広場を構想することになったミケランジェロは、ローマ市庁舎と、市庁舎に向かって右手に位置するコンセルヴァトーリ宮との二つの既存建物の配置を生かして、広場の中心軸を設定した。「市庁舎を中央に定め、これを主軸としてコンセルヴァトーリ宮が反転したような構成で新宮パラッツォ・ヌオーヴォを計画し...さらに、これらの中心軸上に大階段を設けて市街と結んだ」（註5）のである。こうしてミケランジェロが「左右対称の見事な広場へと作り変えた」（註6）カンピドリオ広場の床には、バロックのモチーフを先取りするように、楕円形と放射状の幾何学模様が描かれていた。市庁舎を中心に軸線を通し、左右対称の広場を設けて、広場床には幾何学模様を構想したミケランジェロの仕事は、ルネサンス期の広場デザインの傑作とされるが、市庁舎前の広場がここまで整然と計画されると、人々が自由に行き交い、さまざまな交流が生まれ、雑然とした雰囲気が漂うとは考えにくい。かつて聖地だったカンピドリオ広場の空間には、俗的空間としての市民交流広場が生じることはなかったようである。

3.2. ヨーロッパ各都市における広場と庁舎

イタリア各都市の事例に限らず、ヨーロッパの他の都市でも〈広場＋市庁舎〉の基本的空間構成が見受けられる。フランスの首都パリでは、1357年にオテル・ド・ヴィル（市庁舎）が現在の場所に建てられて以来、現在に至るまで、同地が行政の中心地となっている。しかしその歴史は穏やかではない。ここには元々、オテル・ド・ヴィルが建設される1357年より前から広場があり、グレーヴ広場（砂浜広場、川岸広場などの意味）と呼ばれていた。グレーヴ広場がどんな場所だったかと言うと、罪人の公開処刑が行われてパリ市民が見物しに集まったり、労働者が職を求めて集まったりする場所だったようである。フランス語でストライキを意味するグレーヴ（grève）の語源が、このグレーヴ広場というのは有名な話である（註7）。また1871年、革命自治政府「パリ・コミューン」が蜂起してパリ市庁舎を占拠した際には、市庁舎前広場にはバリケードが築かれた。このように、歴史的に見ると大変に血なまぐさい、パリ市庁舎と市庁舎前広場であるが、現代では、ロベール・ドアノーの有名な写真「パリ市庁舎前のキス」（1950年）の撮影場所となったり、全身白のドレスコードで集まった7000～8000人もの群衆が突然ディナーパーティーを催す「ディネ・アン・ブラン」の会場となったり（2017年）、日本の建築家・田根剛によるインスタレーション作品「Furoshiki Paris」が置かれる場となったり（2018年）、さまざまな用途で市民に使用されている。

ベルギーの首都ブリュッセルでは、中心部にある市庁舎前広場、グラン・プラス（大広場）が1998年に世界文化遺産となっている。グラン・プラス一面に花が敷き詰められるイベント「フラワーカーペット」が特に有名であるが、広場の周囲を取り囲む市庁舎やメゾン・デュ・ロワ（王の家）、ギルドハウスも歴史的建造物群として多くの観光客を集めている。このうちブリュッセル市庁舎が建てられたのは15世紀前半で、建物は後期ゴシックのフランボワイヤン様式で建てられている。この15世紀という時代は「文化・芸術の面でブリュッセルが頂点を極めた時代であり、グラン・プラス Grand Place に建つ有名な市庁舎はこの時代のものである」（註8）と解説される。

オランダの首都アムステルダムの旧市街中心部には、王宮（Koninklijk Paleis Amsterdam）が置かれている。この王宮は、元はアムステルダム市庁舎として、政治経済の中心地であったダム広場に建てられた建物である。アムステルダムの都市の歴史は13世紀後半にさかのぼるが、本格的に市域が拡張したのは16世紀以降とされる。1648年、建築家ヤコブ・ファン・カンペンによる設計でアムステルダム市庁舎の建設は開始され、1655年に完成する。運河沿いで地盤が軟弱なため、13,659本もの木製の基礎杭で支えられたヨーロッパ最大の公共建築となる。このアムステルダム市庁舎は、ナポレオンの弟ルイ・ボナパルトがホラント王国の王位に就いた1808年から王宮として使用さ

れることとなるが、まもなくナポレオン皇帝が失脚し、王宮はアムステルダムに返還される。現在では、王室の公式行事に使用されている他は、年間を通して内部が一般に公開されている。

4. 庁舎における「市民交流空間」というトレンドの歴史的再考

ここまで見てきた通り、古代ギリシア・ローマ時代以降、ヨーロッパの都市空間の中心部には、市民が集い交流する場としての広場が設けられ、その広場の周囲にさまざまな公共施設が建設され、市民の社会的活動をさまざまな形で支えてきた。市庁舎もまたその公共建築群の一部である。つまり庁舎とはその出自からして、人々が集う場に、人々が集う場として建てられてきたビルディング・タイプである。

翻って現代の日本では、全国各都市で新たに計画される庁舎の設計提案において、「市民交流空間」を設けることが一種のトレンドとなっている。この場合、まず建物の構想ありきで設計がスタートし、その内部または外部空間の一区画に「市民交流空間」を挿入するという思考の順序になっている。だが、広場と市庁舎の成立過程からして、これは本末転倒と言わざるを得ない。庁舎建築の一部に「市民交流空間」を設けるのではなく、庁舎とは何よりもまず、市民交流空間としての役割を担うのである。

ここで冒頭に記した、行政機関の office building としての庁舎か、市民が集う city hall としての庁舎か、という意味の違いを思い起こしたい。庁舎を前者の意味でのみ考えている限り、そこに付加するようにして「市民交流空間」を構想する思考から抜け出すことはできない。一方、後者の意味に着目するならば、庁舎とはそもそも市民が集う場ということになり、取って付けたように「市民交流空

間」を考える必要など無いのである。いま行われるべきは、市民が集う city hall として庁舎を捉え直し、「市民交流空間」として庁舎を設計するという、至極当然のことである。

註釈

(註1) 『都市史図集』、p.242。

(註2) 『都市史図集』、p.243。

(註3) 『都市史図集』、p.238。

(註4) 『都市史図集』、p.239。[]内は引用者による。

(註5) 小野寺康『広場のデザイン』、pp.70-71。

(註6) 『都市史図集』、p.233。

(註7) 『プチ・ロワイヤル仏和辞典』(第4版、旺文社、2010)で grève の項目をひくと「グレーヴ広場に失業者が職を求めて集まったことからストライキの意味が生じた」と書かれている。

(註8) 『都市史図集』、p.255。

参考文献

『建築大辞典』第2版 普及版、彰国社、1993

都市史図集編集委員会(編)『都市史図集』、彰国社、1999

小野寺康『広場のデザイン—「にぎわい」の都市設計5原則』、彰国社、2014

#コラム2

大学生活をコロナ禍とともに2

文 本田佳野乃

我々が前代未聞のパンデミックに直面してから、約2年半が経とうとしている。私の思い描いていた大学生活は、コロナウィルスの蔓延によって一変したといっても過言ではない。きっと世界中の学生が、自身の夢見た学生生活とのギャップに悶々とした日々を過ごしていたことだろう。私もそのうちのひとりである。このコラムではそんな一大学生の私が経験した、コロナウィルスの影響と自身の学生生活を記述しようと思う。

まずは自己紹介から。私は2020年に京都府に生まれ、小学校からは東京都に住んでいた。東北大学に進学し、今は4年生。一人暮らし歴も4年目に突入している。年齢は21歳。趣味は映画館に映画を観に行くこと。外界から遮断された空間で、ひとり映画にのめり込むことができるあの空間体験が好きで、小学校の頃から休みの日はよく一人で映画を観に行っていた。現在はサークルや部活には所属していないが、2年生までは大学祭の実行委員会というものに所属していた。仲間達と協力して大きなイベントを運営するというのは私には初めての経験で、とても楽しく有意義な時間であったと感じている。今でも頻繁に連絡をとる友人はここで出会ったオンライン開催となってしまうことは言うまでもない。

さて、そんな私がコロナ禍に直面したのは大学1年生から2年生になるタイミングの春休みの出来事である。その頃私は、大学の語学研修プログラムで2週間程度スペインのマドリッドに渡航するため、その事前研修に勤しんでいた。新型コロナウイルスに関するニュースとしては、横浜港に帰港したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」号内でアウトブレイクが発生し世間を賑わせていた時期である。世界的に見れば、まだパンデミックというほどの流行ではなく、欧州での爆発的な感染拡大はもう少し後の話になる。むしろこの頃はクルーズ船の件もあり、世界的に見ても日本の方がよっぽど危険に晒されている国という立場であったように記憶してい

る。2020年2月初めにクルーズ船が話題に上りはじめ、2月の中旬にマドリッドに渡航する予定であった私は、本当に行けるかどうか不安な胸中であった。

プログラムは無事に執り行われることとなり、私は他の学生やスペイン語の先生とともにスペイン・マドリッドへと渡った。マドリッドでは午前中は現地の大学でスペイン語の授業を受け、午後には様々な観光スポットや美術館を巡り、現地の学生との交流を行った。そこでの出来事で一つ強く覚えていいるものがある。それはマスクをめぐるエピソードである。学生の一人が喉の調子が悪く、マスクをつけて授業を受けていた。それを見た先生は、マスクを外してほしいと言ったのである。研修に同行していた現地のコーディネーターもその学生にマスクを外すように言った。確かに欧米ではマスクをする文化がないことは知っていたが、外すように要求するほどとは思っていなかった。日本ではマスクを着用することに對して大きな違和感を持つことはないが、スペインではどうやら相手の感情を読み取るために重要な口元が隠されていると不気味に写るようだ。マスク不審者というイメージが強いらしい。マスクをする人にもここまであからさまなマイナスイメージを持っていることに対して、驚きが強かったのを覚えている。

その後スペインでは大きなトラブルもなく、私は無事に研修を終えて帰ってきた。この頃からだんだんと新型コロナウイルスの影響で世間の雲行きが怪しくなっていた。私がマドリッドから帰国して1ヶ月も経たないうちに、スペインでは感染者数が1000人を超え(その頃日本では1日の新規感染者数が50人に満たない程度だった)、その中でも最も感染の拡大が広がっていたマドリッド州では15日間保育園から大学まで一斉休校・休講とする措置がとられた。当時、現地で仲良くなった先生や学生がどのように過ごしているか気掛かりでならなかった。これだけ感染が広がったことにより、彼らのマスクに対するイメージも大きく変わったことであろう。

プログラムには、スペイン以外にもドイツやスイスに行くものもあり、そちらには友人が参加していた。私が参加したプログラムだけ他より少し時期がずれており2月中の渡航であったが、他は3月に渡航する予定であった。スペイン以外のプログラムは、コロナウィルスの蔓延により渡航が中止となってしまった。結果的には4つほどある語学研修プログラムのうち、実際に現地に足を運べたのは私たちだけとなってしまった。研修をとっても楽しみにしていた友人はひどく落ち込み、貴重な学習の機会を突然奪われたことに対してやるせない露わにしていた。私は運よくギリギリのタイミングで現地に足を運ぶことができたが、それが叶わない友人に対して「残念だったね」などと気軽に言葉をかけることはできなかった。

そんな春休みが明けると、それまでの大学生活とは全く違う日常を送ることとなった。授業は全てオンライン形式となり、毎年大々的に行われていた新入生の歓迎イベントなども自粛。大学祭の新歓も全てオンラインで行い、一人でずっと家にいる日々。実家での生活なら多少寂しさも紛らわされたのであろうが、一人暮らしだとそうもいかない。初めて実家に戻りたいと思うようになった。一時期は大好きな映画館も営業自粛となり、一人での時間の過ごし方を心得ていなかった私は、やりたいことと現実とのギャップに悶々とする日々であった。

2年生の後期からは設計課題も始まり、初めての設計もオンラインでの実施がメインとなった。どんなふうに進めればいいのか右も左もわからない中で、仲間とともに製図室で作業することは叶わず、それでも先生や先輩方に支えて頂きながらなんとか課題をこなしていった。学生である私も戸惑うことは多かったが、それよりも先生方の苦労の方がずっと大きかったのではないかと思う。誰にとっても初めてのことであったのだ。

現在は4年生となり研究室に配属され、授業の課題やゼミ、院試勉強、卒業研究に追われる日々である。突然のパンデミックから2年半という月日が流れ、この2年半の間に我々の生活スタイルは大きく変化した。大学に入学した当初は予想だになかった生活を

強いられた我々学生は、果たして思い描いた豊かな学びの場を手にすることはできたのだろうか。

コロナ禍によって奪われた機会や経験はやはり計り知れないものがあるだろう。しかしいつまでもそんな悲観的なことばかり言っていられない。失ったものもあれば、得られたものも沢山ある。コロナウィルスの蔓延により始めこそ不自由を強いられた我々ではあるが、物理的行動を制限された中でもできることはたくさんあることを知った。オンラインツールやさまざまなサービスが私たちの新しい生活を徐々に実りあるものへと変えていき、自分の行動次第でいくらでもチャンスを探めるようになった。どこにいても平等にチャンスが得られる。これに関してはコロナ前よりも今の方が優れているのではないだろうか。私たちの学びにも同じことが言えるだろう。自分から動けば世界中のチャンスが私たちのものになる。失ってばかりはいられないのだ。

ただし、マスクなしで馬鹿話をして、くだらないことで笑い合うような学生生活が恋しく思う。

総論 跳んだその先へ

文：濱地峰史

本書は、「Alternative Office Book」の五冊目、コロナ禍以降での二冊目に位置付けられる。コロナ禍での一冊目は「TOUCH」。防疫のために人に会うのが何よりもいけないこととなった世の中で、テレワークなどを駆使し、どうにかコミュニケーションを取りたい。皆に触れたい。そんな思いからタイトルが決定した。

本書のタイトルは「JUMP」。取り上げたテレワークによる価値観変化と庁舎における市民交流空間は、それぞれが今までにない大きな変化を迎えているトピックだ。その変化の渦中、個人に表れるのは、新しい考え方と、従来の考え方のせめぎ合いである。本書は、新しい価値観に書き換えるのか、古い価値観にとどまるのか迷っている人に、自分の思った方へ「跳べ！」と促すメディアとなる。

話し合いで共有した上記の意味に加え、私自身が新しく解釈できると思った「JUMP」がある。それは、我々は跳んだ直後で、今まさに宙に浮いた状態にいるというものだ。

コロナ禍でテレワークを半ば強制的にやることになったので、とりあえず生活のあり方を変えることになった。すなわち、跳んでみた。

・・・跳んだはいいが、はて、着地点はどこだ。

第1部 暮らしの中に浸透するテレワーク

1 人生の年表を楽しくする

靴下先生の生活は、テレワークがあればこんなこともできるのか、という可能性を我々に提示してくれる。ふらっと行ったベルリンに住み、日本に向けて漫画を描く。海外に居住をすることは我々にとってはいろいろな制約を超えなければいけない大きな決断だ。だが、靴下先生の話を知ると、それはとても魅力的に映る。ジャンプした先の着地点として、海外移住をしながらテレワークする生活もありだと考えが変わる。

2 テレワークによる価値観変化への議論と分析

インタビューと異なり、データに基づく研究、分析は至って緻密である。テレワークは皆の価値観変化に影響をおよぼしたか。空間的組織化論をもとに、所得機会、消費機会、共同生活機会の3つの観点から調査した。分析結果からは、テレワークによって幅広い層で所得機会の外に向いた大きな価値観変化が生じていることがわかった。

3 働く場所と生業

テレワークを駆使して、自然に恵まれた鳴子に居住地域で活動しながらも、都会の企業の業務もこなす。そんな新しい働き方を体現されている方々に取材した。大好きな地元に戻ったり、地域おこし協力隊の縁で出会った地域に住み、テレワークで様々な肩書をもって働く。そんな人生設計は、今後広まっていくのではないか。

第2部 開かれた庁舎を考える

4 自治体庁舎の市民交流空間

庁舎パートを振り返る。はじめに、庁舎の設計案選定の歴史を振り返りつつ、昨今市民に開かれつつある庁舎の実態を探った。これを踏まえ、4.2~4.4の調査をした。

4.2では、近年の市民交流空間の整備を掲げたプロポーザル案の分析を行った。プロポーザル案では、広場をはじめとした外部空間の充実と、内外の関係性が重視されていることがわかった。

4.3では、市民に開かれていることを特徴とする庁舎を訪れ、現地調査レポートを記述した。引き続き、4.4でそれらを分析したところ、市民に開かれた庁舎とは、空間がオープンだという意味合いよりも、運営面で市民と協働する取り組みがあるという意味合いが強いことがわかった。

最後に庁舎の未来像として、ハレとケの概念に即してイベントと日常を兼ね備えた空間を、概念的に提示した。

5 人が集まる場としての庁舎建築の歴史的再考

ヨーロッパの歴史的観点からみると、庁舎とはその出自からして、人々が集う場に、人々が集う場として建てられてきたビルディング・タイプである。行政機関の office building としての庁舎か、市民が集う city hall としての庁舎か。今の日本では、前者から後者への変化がなされる。

テレワークの普及によって我々が見出せる着地点の可能性は、2本のインタビューの中にあるはずだ。靴下先生、鳴子の方々はともに、コロナ禍以前からテレワークを自らの生活に大いに役立てており、それが新しい生活や仕事につながっている。テレワークが普及した今、そんな先駆的な働き方が意外と身近に感じられる人も増えてきているだろう。

価値観研究からは、テレワークの普及によって変化したこと、しなかったことが明らかになった。変化しないということは、比喻としては跳んだその場に着地するということである。テレワークが普及したからといって、私たちの暮らしがすべて変化するというわけではない。ただし、所得機会に現れた変化により、次の引越先は、コロナ禍以前には考えなかった場所が選択肢になるかもしれない。

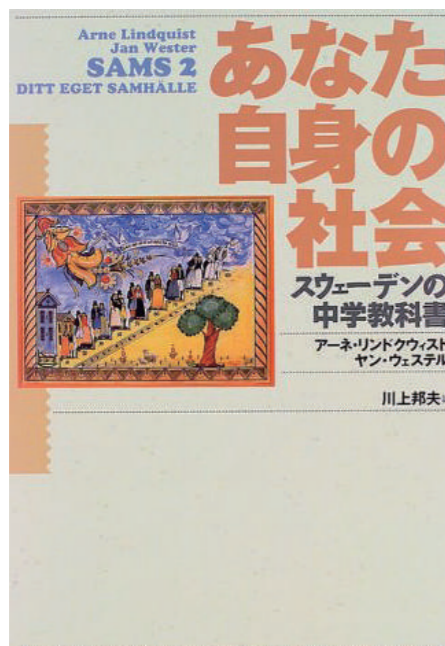
庁舎に関する研究は、今回のテーマ「JUMP」から考えると、どうしても唐突に感じられるだろう。ただ、人口、土地柄、財政、その他諸々を勘定したうえで、市民に開か

れた庁舎に変えていこうとする動きがどのように具現化しているか、そこで起きている変化は JUMP に値するののかという視点は、私たちにとってとても魅力的なものだったと思う。

行政が JUMP しようとしている。では、市民の側の私たちはどうするか。居住する地域の庁舎が市民に開かれたものを目指すのであれば、積極的にそれを利用してみる。そして都合がよければ、それを利用し続ける。今まで気にもかけなかった「庁舎をどう使い倒すか」という考え方に切り替える JUMP は私たちの側にも必要なだろう。

テレワークが普及した生活様式も、自ら市民に開こうと挑戦する庁舎も、価値観の大きな転換点においてまさに変化の瞬間にあるといえる。温故知新といった堅実な変化もあるかもしれないが、今は思い切って各々の価値観を一新することが大事なのではないか。私たち個人がこれら2つの変化をどう自身の生活に取り入れ、適応していくか。本書が、皆がそれを考える契機になれば光栄だ。

BOOK REVIEW



ヤンウェルテス、アーネ・リンドクウィスト著

『あなた自身の社会： スウェーデンの中学教科書』

川上邦夫訳

新評論、1997

スウェーデンの子供たちに、一市民として学ぶべき社会の姿を教えること。それこそが、この本の役割である。それを果たすために、法律的权利と義務、消費者としての基礎知識、行政と住民の役割などがわかりやすく記されている。次世代を担う若者に向けて「自分たちの社会」をどう継承していくのか。また、一市民が自分自身の暮らす社会にどう関わっていくのか。社会教育だけでなく、行政への市民参加についても考えさせられる一冊である。

〈門脇〉



行政組織とデザイナーは、**BNN**
どのように
連携できるのか？

従来の問題解決手法では対応できない社会課題=「厄介な問題」にのみ、
公共政策や行政サービスにより良い変化を生み出したデザイナーおよび公的機関関係者必読。
これからますます求められる行政×デザイナーの協働における傾向と対策を、
オランダにおけるさまざまな事例を紐解きながら解説。

アンドレ・シャミネー著

『行政とデザイン』

- 公共セクターに変化をもたらす
デザイン思考の使い方 -』

白川部君江訳

ビーエヌエヌ新社、2019

今後増えていくであろう行政組織とデザイナーのコラボレーション。両者がうまく協働できれば良い成果を得ることができるが、実際は考え方ややり方の違いによって問題が生じてしまう。そこで、本書ではオランダでの事例を紐解きながら、それぞれの考え方と作業の手法を、わかりやすい図にまとめて整理することで、両者の間にある隔たりを埋め、共創するための傾向と対策を提示する。行政とデザインの間にある問題だけではなく、様々な問題に対する自身の考えにも繋げ、共同作業において失敗を減らすための方法を学ぶことができるだろう。

〈武田〉

BOOK REVIEW



エリック・クリネンバーグ著

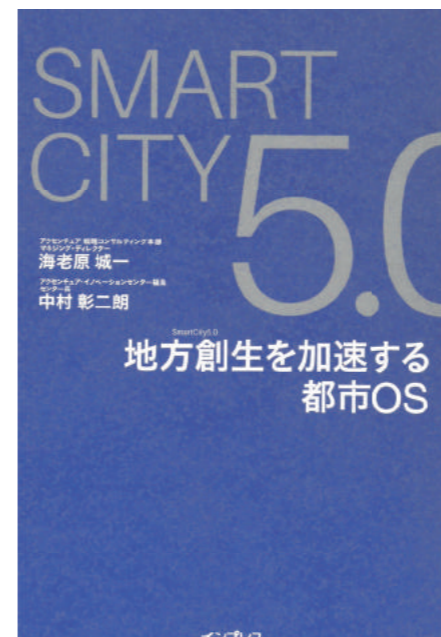
『集まる場所が必要だ 孤立を防ぎ、暮らしを守る 「開かれた場」の社会学』

藤原朝子訳

英治出版株式会社、2021

現代世界には、社会的孤立や犯罪、健康や教育、気候変動への対処における格差など、人命に直結する問題がある。その解決の糸口として、「社会インフラ」の重要性を本書は説く。「社会インフラ」とは、私たちの交流の形や、暮らしを左右する物理的な場所、人と人が対面で集まる場所のことである。人が集まることで生まれる接触や助け合い、協力が結果として誰かの命を救う。図書館を始め、託児所や学校、空き家、緑、大学、カフェ、公園、プール、理髪店、教会、警察署などさまざまな事例を実際にその場所にいる人へのインタビューを交えながら丁寧に解説・考察する。人を救えるのは、ハード・物理インフラや制度などではなく、人そのものであることをあらためて痛感させられる一冊である。

〈壹岐〉



アクセンチュア（海老原城一、中村彰二朗）著

『SmartCity5.0 地方創生を加速する都市 OS』

株式会社インプレス、2019

生まれてから教育課程を終えるまでを一つの街で過ごす若者は多いだろう。だが、いざ就職となると、彼らは生まれ育った街を離れてしまう。なぜなら、そこに働く場所がないから。

今の日本の地方都市のほとんどは、そのような“人に選ばれない街”である。現状から脱却するために地方都市はどう足掻くべきなのか。一つは、高付加価値産業の仕事を地方に生み出すこと。デジタルシフトによってスマートシティを実現した会津若松市に“人に選ばれる街”のヒントを見る。

〈伊藤〉

MOVIE REVIEW



フレデリック・ワイズマン監督

『ボストン市庁舎』

ドキュメンタリー、2020

出生・婚姻手続き、保健衛生、生活支援、消防等々、行政の仕事風景が274分というボリュームたっぷりに提供される。

映像は長尺である上に淡々と流れていくのだが、飽きもせず見ていられるのは、登場する職員の真摯さや市民課題の生々しさによるものだろうか。所属する国や自治体が異なる中で、行政の職員があんなにも真剣に、建設的に議論をしていたことに感銘を受けた。その姿が映画特有の脚色によるものばかりではないことを願いたい。

〈秋永〉

編集後記

東北大学大学院
工学研究科
都市・建築学専攻
本江正茂研究室

Motoe Masashige
Laboratory
Department of
Architecture and
Building Science,
Graduate School
of Engineering,
Tohoku University

門脇 俊亮

Shunsuke Kadowaki 学部4年

コロナウイルス蔓延によって、当たり前の生活が制限されるようになった昨今。しかし、この特異な状況はこれまでの当たり前を見直す機会をくれたとも言える。必ずしも学校で授業を受ける必要はないのではないか。通勤電車で揺られながら出社するより、自宅のパソコンで仕事の方が効率的ではないか。もっと自由に住む場所を変えてもいいのではないか。

こんな「当たり前の見直し」から、私たちはコロナ禍以前よりももっと自由な生活を選択できるようになったと感じる。そして遠くはない未来、コロナウイルスの感染者数が報じられなくなり、歴史としてこの事実を世間が認識し始めた際に、我々の生きる今がパラダイムシフトの時であったと改めて実感するのだろう。

武田 康希

Koki Takeda 学部4年

継続するコロナ禍の中で、オンラインでの講義が増え、時間や場所の制約から解き放たれたが、それと同時に対面でのコミュニケーションにはない難しさを痛感した。また、時間に余裕が生まれたことによって様々なことを考え、見つめなおすきっかけにもなり、自分の中での価値観が変わっていった。

このような特異な状況を経験し、その中で気づいたことやそれに対して深く考える経験が、これから待ち受ける様々な変化にも対応し、さらに次のステップへと跳躍する足掛かりになるだろう。

本田 佳野乃

Kayano Honda 学部4年

私は、今号にてコラム『大学生活をコロナ禍とともに』を執筆しました。初めてのコラム執筆にあたり私の学生生活を振り返ってみたところ、大学に入りたての頃の思い出も思い起こされてなんだか懐かしい気分になりました。自分が体験したエピソードを文章にして広く公開することは初めてだったのでうまく書けるか不安でしたが、コロナ禍で過ごす学生生活の歯痒さが少しでも伝わればいいなと思います。現在大学4年生で、研究室配属後初めて携わるプロジェクトだったため深く関わることはできませんでしたが、先輩方の研究活動の一端を見ることができて刺激的な経験でした。

編集後記

東北大学大学院
工学研究科
都市・建築学専攻
本江正茂研究室

Motoe Masashige
Laboratory
Department of
Architecture and
Building Science,
Graduate School
of Engineering,
Tohoku University

壹岐 めぐみ

Megumi Iki 修士1年

私は、飛び出すことが苦手な引っ込み思案だ。家から飛び出すこと、今ある心地よさから飛び出すこと、人の輪の中に飛び込むこと、新しい環境・社会に飛び込むこと。ふと飛びたいと思って膝を曲げて、いつまで経っても踏み出すには至らず。最終的にそこでエネルギーを消費し、めんどくさいが勝って、そうして、何も変わらず生きている。

この制作を通して、さまざまな「jump」を見ることができた。それは、割と気軽だったり、心の赴くままだったり、ずっと膝を曲げて止まって終わっている私にとって驚きだった。色んな生き方があるけど、そんなに重く考えなくてもいいかもと思った。

松實秀磨

Shuma Matsumi 修士1年

「JUMP」と聞いて、陸上競技の棒高跳びを思い浮かべた。経験がないのでよく分からないが、肝が据わっていないと難しい競技だということとは想像できる。高くそびえる常識を飛び越えて、革新を起こすには、相当の覚悟が必要だ。その覚悟を支えるには、高さを生むポールだけでなく、越えたあとを受け止めるマットも用意しなければいけない。人々が安心してJUMPできるような厚い基盤がある、それがひとつの理想なのだと考えた。

濱地 峰史

Takafumi Hamachi 修士1年

大学に行かずに授業は受けられるし、レポートの提出はメールも使わずにできるようになった。このように物事は効率化されているはずなのに、忙しい毎日だ。就活に話を限ると、「時間を費やした分だけ自分に合った企業が見つかるのではないか」そんな突き詰めたらきりが無い考えから、空いた時間を消費する。多分私は「入社しなければならない」という自身の制約がある限りこの思考を変えられないし、今はそれでいいと思っている。

靴下先生と鳴子の方々には、テレワークを用いた今までにない生活のあり方を提示していただいた。その生活に魅力を感じるのは、私が経験したことのない生活だからか。彼(彼女)らがとても魅力ある人だからか。

テレワークにより個々にもたらされた「効率化」と提示された「新しい生活のあり方」。私としては、断然後者の方が興味深い。

編集後記

東北大学大学院
工学研究科
都市・建築学専攻
本江正茂研究室

Motoe Masashige
Laboratory
Department of
Architecture and
Building Science,
Graduate School
of Engineering,
Tohoku University

伊藤 雄飛
Yuhi Ito 修士2年

「いざ跳ぶ！」というよりも「跳ぶことを強いられる」だったり、「最高到達点で有頂天になる」のではなく「どこに着地するのかを心配する」だったり、JUMPという言葉の印象に反して、できあがったものはどこか仄暗い。でもそういうものだ。

コロナ禍で跳ぶことを強いられた私たちは、ふと気づいたら、自分が意図しないような場所に着地していたりする。例えば、それは誰も知らないような秘境かもしれないし、逆にそれまでよりも数歩後退した場所かもしれない。

ちなみに私は断然後者。コロナ禍にて丁寧な生活を誓い、自宅でのドリップコーヒーに執心した私も、今では見る影もなくコンビニで淹れるアイスコーヒーにはまっていたりする。でもそれが意外と美味しい。丁寧な生活かはともかく。

結局のところ、跳んでしまったのだ。

ならば、その着地点を楽しむのも一興かもしれない。

佐々木 央
Yo Sasaki 修士2年

同じテーマに対して、ポジティブに捉えるか、ネガティブに捉えるか。今回の編集作業を振り返ると、そういう議論が多かったように思う。時代の最先端をゆく人々の動きや考えは見て取りやすい。しかし、「本当にそんな上手いことばかりか？」という疑いの念は常にあって、研究はあまり爽快に進まなかった。

このぐずぐずした感じは我々のチームに限ったことではないように思う。社会としてもこの2年間は、コロナに振り回されていた、或いはそれに対抗する日々で、いずれにせよ怒涛だった。それが少し落ち着いてきた今、行動ファーストだった動きに対して、根拠や理由を見出したくなって、立ち止まり振り返り疑い出したのかもしれない。

「オルタナティブ」「ジャンプ」というワードの裏にあるぐずぐず感、その2面性が今作の魅力だと思っている。

Alternative Office Book 05 「JUMP」

2022年7月31日 初版発行

編集責任者 本江 正茂

編集・構成 [東北大学]
門脇 俊亮
武田 康希
本田 佳野乃
壹岐 めぐみ
濱地 峰史 <編集長>
松實 秀磨
伊藤 雄飛
佐々木 央

柳井 良文

須藤 春香

[株式会社オカムラ]
池田 晃一
秋永 凌

発行者 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
本江正茂研究室
〒980-8579
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-06

株式会社オカムラ ワークデザイン研究所
〒220-0004
神奈川県横浜市西区北幸1-4-1
天理ビル19階

Copyright © 2022
by Motoe Laboratory, Tohoku University
and Okamura Corporation
All Rights Reserved

